

金沢城史料叢書32

金沢城庭園調査報告書

2018

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書32

金沢城庭園調査報告書

2018

石川県金沢城調査研究所

例 言

1. 本書は、石川県金沢市に所在する金沢城跡の庭園に関する確認調査報告書である。
2. 調査の範囲は、金沢城跡（県遺跡番号 130200、金沢市丸の内地内他）及び兼六園遺跡（県遺跡番号 130300、同兼六町地内）を対象とした。これらの一部は、史跡金沢城跡、県名勝尾山神社庭園（旧金谷御殿庭園）（同尾山町地内）、特別名勝兼六園、名勝成巽閣庭園等の指定地となっている。
3. 調査は平成 24～29 年度にかけて、金沢城調査研究事業に係る城郭庭園等の総合研究事業の一環として、石川県金沢城調査研究所が、文化庁の国庫補助を得て実施した。
4. 調査年度及び担当職員は次のとおりである。

平成 24（2012）年度

担当者 滝川重徳（主幹）、柿田祐司（調査研究専門員）、荒木麻理子（主任主事）、多間 聖（嘱託）

平成 25（2013）年度

担当者 滝川重徳（主幹）、荒木麻理子（所主査）、中泉絵美子（嘱託）、松井広信（嘱託）

平成 26（2014）年度

担当者 滝川重徳（主幹）、荒木麻理子（所主査）、中泉絵美子（嘱託）、松井広信（嘱託）

期 間（発掘調査） 平成 26 年 9 月 1 日～10 月 31 日

平成 27（2015）年度

担当者 滝川重徳（主幹）、荒木麻理子（調査研究専門員）、庄田孝輔（主任主事）、竹森杏奈（嘱託）

平成 28（2016）年度

担当者 滝川重徳（主幹）、庄田孝輔（主任主事）、知田真衣子（嘱託）

平成 29（2017）年度

担当者 滝川重徳（主幹）、道言瑞希（嘱託）

5. 出土品整理は、平成 27 年度に公益財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託して実施した。
6. 報告書の作成は、滝川重徳（主幹）、柿田祐司（主幹）、庄田孝輔（主任主事）、道言瑞希（嘱託）が担当した。なお第 5 章第 4 節は、酒寄淳史氏（金沢大学）より、第 6 章第 2 節は、飛田範夫氏（金沢城調査研究委員会委員）、栗野 隆氏（東京農業大学）、藤田若菜氏（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）より玉稿を賜った。また第 5 章第 5 節は、株式会社パレオ・ラボ（藤根 久・森 将志）による出土資料の分析報告である。執筆分担は目次に記した。
7. 調査に関する記録・遺物は、石川県金沢城調査研究所が保管している。
8. 調査・報告にあたり、以下の機関・個人の助言、協力を得た。

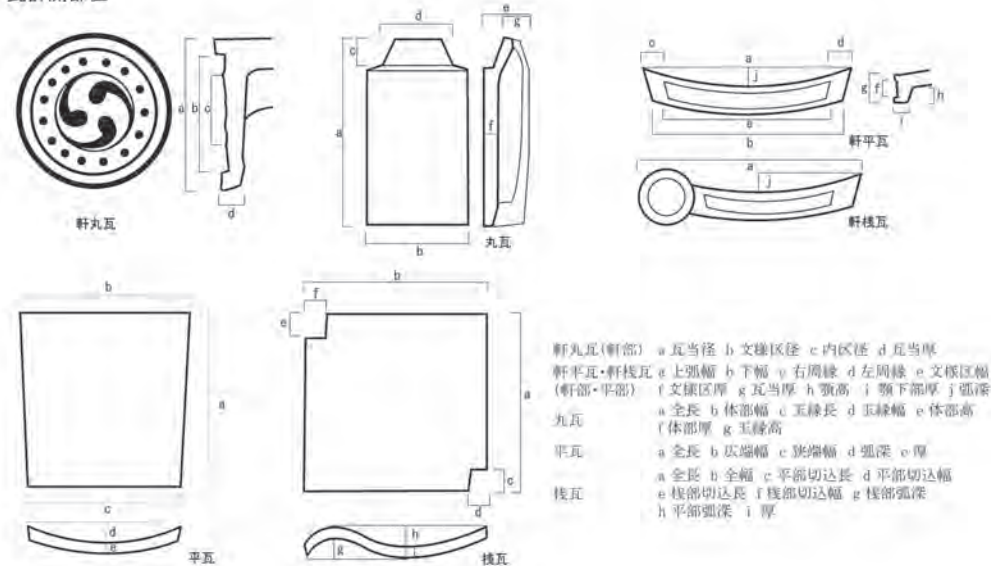
文化庁記念物課 赤穂市教育委員会 石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県立図書館
石川県立歴史博物館 越前市教育委員会 宗教法人尾山神社 加賀市教育委員会 金沢市
金沢市埋蔵文化財センター 金沢市立玉川図書館 金沢大学附属図書館 京都大学附属図書館
群馬県立文書館 小松市史編纂事務局 滋賀県立安土城考古博物館 公益財団法人静嘉堂文庫
青硯文庫 公益財団法人成巽閣 東京大学総合図書館 徳島市教育委員会 徳島市立德島城博物館
富山県立図書館 富山市郷土博物館 名古屋城総合事務所 彦根市教育委員会
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 公益財団法人前田育徳会 真柄建設株式会社 松井建設株式会社
公益財団法人三井文庫 養翠園 公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
和歌山市まちづくり局まちおこし部和歌山城整備企画課

穴太政洋 栗野 隆 池田仁子 石井嘉之助 石黒信二 市川浩文 市澤泰峰 大串龍一 大友佐俊
小野健吉 金田明大 北垣聰一郎 北野博司 久保智康 酒寄淳史 佐々木達夫 千田嘉博 中田宗伯
成瀬晃司 西井龍儀 西形達明 野垣好史 飛田範夫 藤田若菜 古池 博 古川知明 堀内秀樹
真柄敏郎 三尾次郎 三宅良明 宮里 学 森島康雄 山森 隆 横山隆昭 吉岡康暢（敬称略）

凡例

1. 本書の水平基準は海拔高を表し、東京湾平均海面標高（T.P.）である。
2. 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
3. 測量図中、上端・下端間のケバ種や線種、太さについて、本書では下記の線種表のとおりである。
4. 遺物名は次の略号を使用した。
P：陶磁器 T：瓦 M：金属製品 S：石製品
5. 遺物実測図図版・遺物写真図版の遺物番号は、明朝体が実測番号、ゴシック体が本書報告番号を示す。
6. 遺物番号は、本文・観察表・遺物実測図図版・写真図版において共通する。
7. 遺構・遺物実測図等の縮尺に関しては各図中に示した。
8. 引用・参考文献は、原則として一括して最後に掲載したが、第6章第2節は項毎に記載した。
9. 文献・絵図史料の取り扱い等については第4章第1節に記載した。

瓦計測部位



軒丸瓦(軒部) a 瓦当径 b 文様区径 c 内区径 d 瓦当厚
 軒平瓦・軒棧瓦 e 上弧幅 b 下幅 v 右周縁 d 左周縁 e 文様区幅
 (軒部・平部) f 文様区厚 g 瓦当厚 h 頸高 i 頸下部厚 j 弧深
 丸瓦 a 全長 b 体部幅 c 玉縁長 d 玉縁幅 e 体部高
 f 体部厚 g 玉縁高
 平瓦 a 全長 b 灰端幅 c 跡端幅 d 弧深 e 厚
 棧瓦 a 全長 b 全幅 c 平部切込長 d 平部切込幅
 e 棧部切込長 f 棧部切込幅 g 棧部弧深
 h 平部弧深 i 厚

磁器胎土表記

平滑性	光沢	器壁の空洞
1 極めて平滑	A 強い	a 目立たない
2 平滑	B 弱い	b 目立つ
3 凹凸目立つ		

陶器胎土表記

硬さ	平滑性	砂粒	器壁の空洞
I 硬質	1 極めて平滑	A 希少	a 目立たない
II 軟質	2 平滑	B 細砂含む	b 目立つ
	3 凹凸目立つ	C 粗砂以上含む	

燻瓦胎土表記

胎質	粘土の調合	砂粒の量
A 硬質、緻密	1 断面縞状	礫、粗砂、細砂を微量、少量、多量で表記
B 軟質、空隙多い	2 断面縞状でない	例：礫微、粗砂多、細砂少
C 軟質、緻密、含有物なし		

土師器胎土分類

特徴	特徴
A 中砂多い、粗砂・極粗砂・海綿骨片目立つ	E
B 砂粒比較的少なく、均質（細分の余地大きい）	
C 砂粒ごく少ない、均質	
D 細砂多い、均質（粉質）	

[石川県金沢城調査研究所2014d]

遺構図線種表

	ケバ種	上端線/下端線
トレンチ		崖ケバ 実線
近代以後		短・短ケバ 実線
近世以前		長・短ケバ 実線
遺構(未完掘)		長・短ケバ 一点鎖線
遺構(掘出のみ)		長・短ケバ (下端線なし)
(壁のみで確認された遺構)		長・短ケバ (下端線なし)
遺構(傾斜変換線)		長・短ケバ (下端線なし)
遺構以外(土質境)		実線・ケバなし
石(埋没部分)		一点鎖線

目 次

第1章 経緯と経過	(滝川)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過		2
第2章 位置と環境		5
第1節 金沢城と周辺の歴史的環境	(柿田)	5
第2節 金沢城の沿革		10
第3節 既往の調査成果	(滝川)	12
第3章 調査の方法	(滝川)	19
第1節 調査の対象		19
第2節 調査の方法		19
第4章 金沢城庭園の実態調査		21
第1節 概要	(滝川)	21
第2節 本丸・東ノ丸		23
第3節 二ノ丸	(庄田・滝川)	45
第4節 玉泉院丸	(滝川)	85
第5節 金谷出丸		127
第6節 蓮池庭		191
第7節 竹沢庭		261
第8節 その他		317
第5章 東ノ丸庭園遺構埋蔵文化財確認調査		319
第1節 調査の概要	(滝川)	319
第2節 発掘調査		323
第3節 ボーリング調査		377
第4節 石材鑑定	(酒寄)	409
第5節 珪藻・花粉分析	(藤根・森)	413
第6章 総括		423
第1節 金沢城庭園の特徴	(滝川)	423
第2節 関連調査研究		449
1. 加賀藩の支藩などの庭園	(飛田)	449
2. 加賀藩前田家、富山藩前田家、大聖寺藩前田家の江戸藩邸庭園	(栗野)	457
3. 戦国城下町一乗谷の館・屋敷における作庭	(藤田)	465
引用・参考文献		471
報告書抄録		476

図版目次

図版番号	図名	頁
第1図	本丸北部2008-1地点の調査	2
第2図	玉泉院丸庭園第1地点の調査	2
第3図	平成25年度調査(成巽閣石垣)	3
第4図	平成26年度調査(兼六園・竹沢庭)	3
第5図	平成26年度調査(東ノ丸)	4
第6図	平成27年度調査(兼六園・蓮池庭)	4
第7図	平成28年度調査(金谷出丸)	4
第8図	金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡	6
第9図	「御城中老分基絵図」	9
第10図	「加州金沢之城図」	10
第11図	金沢城跡発掘調査位置図(～平成29年度)	13
第12図	金沢城跡埋蔵文化財確認調査地点位置図	14
第13図	本丸とその周辺の確認調査	17
第14図	金沢城庭園の位置	19
第15図	文献史料写真	20
第16図	本丸・東ノ丸の位置	23
第17図	本丸北部の現況	23
第18図	本丸・東ノ丸全体図	24
第19図	本丸・東ノ丸 絵図1	28
第20図	本丸・東ノ丸 絵図2	29
第21図	本丸北部調査区・絵図照合図	31
第22図	2008-1・2007-1・2004-4・2006-5地点 調査地点南壁(弾薬庫南側斜面)略断面図	32
第23図	2007-1地点 調査地点西壁断面図・景石S01付近東西断面模式図	34
第24図	2008-2地点 調査地点北壁(弾薬庫北側斜面)・西壁断面図	35
第25図	本丸北部庭園遺構写真1	37
第26図	本丸北部庭園遺構写真2	38
第27図	2008-1SX01(本丸北部池遺構)出土石造物等	39
第28図	本丸・東ノ丸Ⅱ期遺構等配置図	41
第29図	本丸・東ノ丸Ⅲ期庭園構成要素等配置図	41
第30図	本丸・東ノ丸Ⅳ期庭園構成要素等配置図	43
第31図	東ノ丸に残る景石	44
第32図	二ノ丸の位置	45
第33図	二ノ丸の現況	45
第34図	二ノ丸全体図	46
第35図	二ノ丸殿舎配置(Ⅳ2期)	49
第36図	各時期の二ノ丸御殿	50
第37図	二ノ丸 絵図1	58
第38図	二ノ丸 絵図2	59
第39図	二ノ丸 絵図3	60
第40図	二ノ丸 絵図4	61
第41図	二ノ丸 絵図5	62
第42図	二ノ丸 絵図6	63
第43図	雑土蔵下石垣 数寄屋敷東・北石垣写真	65
第44図	数寄屋敷東石垣面の遺構痕跡	67
第45図	数寄屋敷東石垣石種・二ノ丸居間先付近写真	68
第46図	二ノ丸Ⅱ4期庭園構成要素等配置図	69
第47図	二ノ丸Ⅲ期庭園構成要素等配置図	71
第48図	二ノ丸Ⅳ1期庭園構成要素等配置図	74
第49図	二ノ丸Ⅳ2期庭園構成要素等配置図	75
第50図	二ノ丸Ⅳ2期庭園 御庭籠	75
第51図	二ノ丸Ⅳ2期庭園 御庭籠・唐傘亭・御腰掛	76
第52図	滝山・塚	77
第53図	泉水と飛石	77
第54図	二ノ丸Ⅳ2期泉水の変遷1	77
第55図	二ノ丸Ⅳ2期泉水の変遷2	78
第56図	二ノ丸Ⅳ3期庭園構成要素等配置図	79
第57図	泉水と飛石	80
第58図	熨斗立・二枚開の意匠	80
第59図	二ノ丸Ⅳ4期庭園構成要素等配置図	81
第60図	「二ノ御丸御広式御居間遠望図」	82
第61図	「二ノ御丸御好屋口より専光寺浜眺望図」	82
第62図	視点の向き	82
第63図	二ノ丸Ⅴ期庭園構成要素等配置図	83
第64図	二ノ丸庭園の変遷	84
第65図	玉泉院丸の位置	85
第66図	玉泉院丸の現況	85
第67図	玉泉院丸全体図	85
第68図	玉泉院丸 絵図1	92
第69図	玉泉院丸 絵図2	93
第70図	玉泉院丸 絵図3	94
第71図	玉泉院丸調査地点・主要石垣位置図	96
第72図	玉泉院丸東側斜面の石垣	97
第73図	数寄屋門下泉水縁石垣北櫓台西面下部	97
第74図	色紙短冊積石垣・周辺石垣立面図・断面図	99
第75図	色紙短冊積石垣周辺写真	100
第76図	奥納戸土蔵下・本丸附段西側下段石垣立面図・断面図・写真	101
第77図	色紙短冊積石垣下滝壺平面図・写真	102
第78図	第4・5地点全体図(色紙短冊積石垣・滝石組・池護岸石組)	103
第79図	滝石組等写真	104
第80図	第1地点(池北部)北壁土層大別層	107
第81図	第3地点(池西部)写真・断面図	108
第82図	第3地点石垣(池西部護岸石垣)詳細図	109
第83図	出島・木樋・飛石写真	110
第84図	玉泉院丸庭園出土石造物	111
第85図	玉泉院丸庭園・南石垣出土人形・玩具	112
第86図	玉泉院丸における池底推定等高線(古相)	113
第87図	玉泉院丸Ⅲ1期庭園構成要素等配置図	115
第88図	玉泉院丸Ⅲ2期庭園構成要素等配置図	117
第89図	玉泉院丸Ⅳ期庭園構成要素等配置図	118
第90図	数寄屋門台・数寄屋門下泉水縁石垣立面図・断面図・写真	119
第91図	玉泉院丸Ⅴ期庭園構成要素等配置図	120
第92図	玉泉院丸Ⅵ期庭園構成要素等配置図1	121
第93図	玉泉院丸Ⅵ期庭園構成要素等配置図2	122
第94図	玉泉院丸庭園の変遷	124
第95図	玉泉院丸庭園給水経路	126
第96図	金谷出丸の位置	127
第97図	金谷出丸の現況	127
第98図	金谷出丸全体図	128
第99図	金谷出丸殿舎配置(V3期)	132
第100図	各時期の金谷出丸	133
第101図	金谷出丸 絵図1	143
第102図	金谷出丸 絵図2	144
第103図	金谷出丸 絵図3	145
第104図	金谷出丸 絵図4	146
第105図	金谷出丸 絵図5	147
第106図	金谷出丸 絵図6	148
第107図	金谷出丸 絵図7	149
第108図	金谷出丸 絵図8	150
第109図	金谷出丸庭園(尾山神社庭園・旧金谷御殿庭園)平面図	152
第110図	庭園部断面図 南側石垣平面図・写真	153
第111図	南側石垣写真	154
第112図	南側石垣・辰巳用水石管写真	155
第113図	滝・滝口平面図・略測図・写真	157
第114図	滝写真	158
第115図	滝・流れ写真	159
第116図	池平面図・写真	161
第117図	中島・橋写真	162
第118図	橋写真	163
第119図	橋写真	164
第120図	池西岸・鳥兜島石組 岩石種構成分布図	165
第121図	石組・景石・築山・園路・石造物写真	167
第122図	金谷出丸の発掘調査	168
第123図	金谷出丸Ⅱ期庭園構成要素等配置図	170
第124図	金谷出丸Ⅱ期の「亭」	171
第125図	金谷出丸Ⅲ2期庭園構成要素等配置図	172
第126図	金谷出丸Ⅴ1期庭園構成要素等配置図	173
第127図	金谷出丸Ⅴ3期庭園構成要素等配置図	175
第128図	金谷出丸Ⅴ4期庭園構成要素等配置図	177
第129図	金谷出丸Ⅵ1期庭園構成要素等配置図	178
第130図	金谷出丸Ⅵ2期庭園構成要素等配置図	179
第131図	金谷出丸Ⅵ期庭園「御囲」周辺	180
第132図	金谷出丸Ⅵ3期庭園構成要素等配置図	181
第133図	絵図に描かれた滝・石燈籠	182
第134図	金谷出丸Ⅵ4期庭園構成要素等配置図	183
第135図	金谷出丸Ⅶ期庭園構成要素等配置図	185
第136図	金谷出丸庭園南辺区画線の変化	187

第137図	金谷出丸庭園の変遷 1	189	第204図	橋取付部・雪見橋・雁行橋(亀甲橋)写真	289
第138図	金谷出丸庭園の変遷 2	190	第205図	雁行橋(亀甲橋)写真・平面図 七福神山写真	290
第139図	蓮池庭の位置	191	第206図	七福神山写真・絵画 栄螺山写真・絵図・平面図	291
第140図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭)全体図	192	第207図	栄螺山石垣写真・断面略図	293
第141図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭)全体断面図	193	第208図	栄螺山写真・地層推定断面図	294
第142図	蓮池庭の現況	196	第209図	山崎山写真	295
第143図	蓮池庭全体図	197	第210図	山崎山石組 岩石種構成分布略図	296
第144図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 1	207	第211図	金城霊沢・鳳凰山写真	297
第145図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 2	208	第212図	竹沢調練場土塁・巽御殿(成巽閣)・竹沢鎮守(金沢神社)写真	298
第146図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 3	209	第213図	竹沢庭Ⅱ期庭園構成要素等配置図	300
第147図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 4	210	第214図	竹沢庭Ⅲ 1 期庭園構成要素等配置図 1	302
第148図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 5	211	第215図	竹沢庭Ⅲ 1 期庭園構成要素等配置図 2	304
第149図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 6	212	第216図	「兼六園(園)」の文字記載	304
第150図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 7	213	第217図	竹沢庭Ⅲ 2 期庭園構成要素等配置図 1	305
第151図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 8	214	第218図	竹沢庭Ⅲ 2 期庭園構成要素等配置図 2	306
第152図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 9	215	第219図	竹沢庭Ⅲ 3 期庭園構成要素等配置図	307
第153図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 10	216	第220図	根上松	307
第154図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 11	217	第221図	井戸	307
第155図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 12	218	第222図	竹沢庭Ⅲ 4 期庭園構成要素等配置図	308
第156図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 絵図 13	219	第223図	竹沢庭Ⅳ期庭園構成要素等配置図 1	310
第157図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 全体遺構現況図(平面)	222	第224図	蓮池門に掲げられた兼六園の扁額	310
第158図	兼六園(蓮池庭・竹沢庭) 現況全体図・絵図照合図	223	第225図	竹沢庭Ⅳ期庭園構成要素等配置図 2	311
第159図	蓮池庭遺構現況図(北部)	224	第226図	主な構成要素の来歴(竹沢庭)	313
第160図	蓮池庭遺構現況図(南部)	225	第227図	学校鎮守から鶴鶴島への変遷過程	314
第161図	蓮池庭現況・絵図照合図(北部)	226	第228図	竹沢庭の変遷(御殿建物・泉水)	315
第162図	蓮池庭現況・絵図照合図(南部)	227	第229図	丹後屋敷	317
第163図	北辺石垣・西辺水路護岸・蓮池門・瓢池排水路写真	229	第230図	堂形の遺構・絵図	318
第164図	瓢池排水路写真 西辺塀基礎写真・略測図	230	第231図	東ノ丸調査区 発掘調査地点・ボーリング地点位置図	321
第165図	瓢池南西辰巳用水石水管・西辺水路護岸・南辺川口門・高之亭西側塀基礎・園路等写真	231	第232図	東ノ丸調査区・絵図照合図	322
第166図	園路・流れ・噴水写真	233	第233図	2014-1地点 調査地点平面図	326
第167図	翠滝写真	235	第234図	2014-1地点 調査地点平面図・垂直写真	327
第168図	翠滝上流護岸石(推定橋板材)写真・絵図・計測図	236	第235図	2014-1地点 調査地点北部平面図	328
第169図	瓢池・中島・夕顔亭写真	237	第236図	2014-1地点 調査地点南部平面図	329
第170図	黄門橋写真・橋台石計測図	239	第237図	2014-1地点 北部東壁断面図	330
第171図	日暮橋写真・計測図 獅子巖写真	241	第238図	2014-1地点 南部北壁断面図	331
第172図	新清水写真・絵図	243	第239図	2014-1地点 ST3平面図・断面図	332
第173図	馬場跡写真 兼六園(江戸町跡推定地)写真・平面図	244	第240図	2014-1地点 出土遺物実測図 陶磁器	333
第174図	蓮池庭Ⅱ期庭園構成要素等配置図	245	第241図	2014-1地点 出土遺物実測図 瓦・瓦拓本(瓦当・刻印)・金属製品・石製品	334
第175図	蓮池庭Ⅲ期庭園構成要素等配置図	247	第242図	2014-1地点 遺構写真 1	338
第176図	蓮池庭Ⅳ期庭園構成要素等配置図	249	第243図	2014-1地点 遺構写真 2	339
第177図	蓮池庭Ⅴ期庭園構成要素等配置図	253	第244図	2014-1地点 遺構写真 3	340
第178図	蓮池庭Ⅵ 1 期庭園構成要素等配置図	253	第245図	2014-1地点 遺構写真 4	341
第179図	蓮池庭Ⅵ 2 期庭園構成要素等配置図	254	第246図	2014-1地点 出土遺物写真 1 陶磁器	342
第180図	蓮池庭Ⅵ 3 期庭園構成要素等配置図	254	第247図	2014-1地点 出土遺物写真 2 瓦・金属製品・石製品	343
第181図	蓮池庭Ⅵ 4 期庭園構成要素等配置図	255	第248図	2014-2地点・2005-7地点 調査地点平面図	349
第182図	蓮池庭Ⅶ期庭園構成要素等配置図	256	第249図	2014-2地点・2005-7地点 調査地点平面図・垂直写真	350
第183図	主な構成要素の来歴(蓮池庭)	257	第250図	2014-2地点・2005-7地点 検出面色分け図	351
第184図	竹沢庭の位置	261	第251図	2014-2地点・2005-7地点 調査地点北部平面図	352
第185図	竹沢庭全体図	262	第252図	2014-2地点・2005-7地点 調査地点南部平面図	353
第186図	竹沢庭の現況	263	第253図	2014-2地点・2005-7地点 調査地点南部平面図	354
第187図	竹沢庭遺構現況図(西部)	266		Ⅲ層上面の状況	354
第188図	竹沢庭遺構現況図(北東部)	267	第254図	2014-2地点・2005-7地点 東壁土層断面図	355
第189図	竹沢庭遺構現況図(南東部)	268	第255図	2014-2地点・2005-7地点 西壁土層断面図	356
第190図	竹沢庭現況・絵図照合図(西部)	269	第256図	2014-2地点 南壁・中央断割西壁土層断面図	357
第191図	竹沢庭現況・絵図照合図(北東部)	270	第257図	2014-2地点・2005-7地点 景石平面図・立面図 1	358
第192図	竹沢庭現況・絵図照合図(南東部)	271	第258図	2014-2地点・2005-7地点 景石平面図・立面図 2	359
第193図	北辺石垣写真	272	第259図	2014-2地点 出土遺物実測図 陶磁器・瓦 1	360
第194図	北辺石垣・石樋写真	273	第260図	2014-2地点 出土遺物実測図 瓦 2	361
第195図	坂口外門・土塀基礎写真	275	第261図	2014-2地点 出土遺物実測図 瓦 3・金属製品・石製品	362
第196図	北辺段状遺構略測図・写真	277	第262図	平瓦器厚分布図	366
第197図	北辺段状遺構・辰巳長屋・南東部石積・西辺塀基礎・園路写真	278	第263図	2014-2地点 遺構写真 1	367
第198図	曲水写真・絵画	279	第264図	2014-2地点 遺構写真 2	368
第199図	曲水写真・絵図 鶴鶴島写真	281	第265図	2014-2地点 遺構写真 3	369
第200図	水道(辰巳用水)関連遺構写真・略測図	283	第266図	2014-2地点 遺構写真 4	370
第201図	水道(辰巳用水)関連遺構写真	284	第267図	2014-2地点 遺構写真 5	371
第202図	水道(辰巳用水)関連遺構絵図 水路写真 霞ヶ池平面図	286	第268図	2014-2地点 遺構写真 6	372
第203図	霞ヶ池写真	287	第269図	2014-2地点 遺構写真 7	373
			第270図	2014-2地点 出土遺物写真 1 陶磁器・瓦 1	374

第271図	2014-2地点 出土遺物写真2 瓦2	375
第272図	2014-2地点 出土遺物写真3 瓦3・金属製品・石製品	376
第273図	東ノ丸池遺構周辺 平面概要図	384
第274図	東ノ丸池遺構周辺 柱状断面配列図	385
第275図	東ノ丸南部地山推定等高線・柱状断面配列図	386
第276図	ボーリング作業風景写真	387
第277図	ボーリングコア詳細柱状図1 (H22-6地点)	388
第278図	ボーリングコア詳細柱状図2 (H22-7地点)	389
第279図	ボーリングコア詳細柱状図3 (H22-8地点)	390
第280図	ボーリングコア詳細柱状図4 (H24-10地点)	391
第281図	ボーリングコア詳細柱状図5 (H24-11地点)	392
第282図	ボーリングコア詳細柱状図6 (H24-12地点)	393
第283図	ボーリングコア詳細柱状図7 (H25-1地点)	394
第284図	ボーリングコア詳細柱状図8 (H25-2地点)	395
第285図	ボーリングコア詳細柱状図9 (H25-3地点)	396
第286図	ボーリングコア詳細柱状図10 (H25-4地点)	397
第287図	ボーリングコア詳細柱状図11 (H25-5地点)	398
第288図	ボーリングコア詳細柱状図12 (H25-6地点)	399
第289図	ボーリングコア詳細柱状図13 (H25-7地点)	400
第290図	ボーリングコア詳細柱状図14 (H25-8地点)	401
第291図	ボーリングコア詳細柱状図15 (H25-9地点)	402
第292図	ボーリングコア詳細柱状図16 (H25-10地点)	403
第293図	ボーリングコア詳細柱状図17 (H25-11地点)	404
第294図	ボーリングコア詳細柱状図18 (H28-1地点)	405
第295図	ボーリングコア詳細柱状図19 (H28-2地点)	406
第296図	ボーリングコア詳細柱状図20 (H28-3地点)	407
第297図	ボーリングコア詳細柱状図21 (H28-4地点)	408
第298図	試料一覧	410
第299図	試料の検出状況(2014-2地点景石)	411
第300図	岩石薄片の偏光顕微鏡像	412
第301図	堆積物中の珪藻化石分布図(すべての分類群を表示)	416
第302図	堆積物中の珪藻化石	417
第303図	堆積物中の珪藻化石	419
第304図	2007-1SX02III2層から出土した花粉化石	421
第305図	2007-1SX02 試料採取箇所付近	422
第306図	石の利用(石垣・景石)	429
第307図	石の利用(景石・石橋等)	430
第308図	辰巳用水木桶・石樋	434
第309図	辰巳用水経路概略図	434
第310図	辰巳用水経路の変遷	435
第311図	金沢城庭園・御殿空間の位置関係と変遷1	444
第312図	金沢城庭園・御殿空間の位置関係と変遷2	445
第313図	金沢城庭園の変遷	446
第314図	「磯部村御庭園の真景図」(模写図)	449
第315図	「旧富山城御殿之図」(『前田氏家乗』付図)	450
第316図	「千歳御殿平面図」	450
第317図	「越中国富山城主前田利同城囲之図」	451
第318図	「越中之国富山桜木町一覽」	451
第319図	「創建時大聖寺藩邸図」	452
第320図	再建時「大聖寺藩邸図」	452
第321図	「七日市県元県庁図」	453
第322図	富山藩上屋敷の庭園と不忍池との位置関係	459
第323図	富山藩中屋敷と大聖寺藩中屋敷の庭園	460
第324図	富山藩下屋敷の庭園	460
第325図	大聖寺藩下屋敷の庭園	460
第326図	「江戸藩邸絵図(1)江戸本郷邸間取図」(文政10年以降)の一部	461
第327図	「育徳園」侯爵前田利為所蔵	461
第328図	加賀藩中屋敷の庭園	462
第329図	「江戸下屋敷絵図」(下屋敷御林大綱之絵図)(文政7年(1824))	462
第330図	朝倉館跡庭園と建物配置	467
第331図	公方様御元服付而御成	468
第332図	井戸遺構より出土の付札	468
第333図	朝倉宗家に関わる館・寺院の滝石組	469
第334図	一乗谷出土の hands 鉢	469
第335図	玉泉園現存の hands 鉢	469

表目次	頁	
第1表	周辺の近世遺跡地名表	7
第2表	金沢城の沿革	11
第3表	金沢城跡発掘調査一覽(1)	15
第4表	金沢城跡発掘調査一覽(2)	16
第5表	本丸・東ノ丸関連年表	25
第6表	本丸・東ノ丸庭園関連埋蔵文化財調査一覽	27
第7表	本丸・東ノ丸庭園関連文献史料	27
第8表	本丸・東ノ丸庭園関連絵図史料	27
第9表	本丸北部調査区主要遺構計測表	44
第10表	二ノ丸関連年表	47
第11表	二ノ丸庭園関連文献史料1	52
第12表	二ノ丸庭園関連文献史料2	53
第13表	二ノ丸庭園関連文献史料3	54
第14表	二ノ丸庭園関連文献史料4	55
第15表	二ノ丸庭園関連文献史料5	56
第16表	二ノ丸庭園関連絵図史料1	56
第17表	二ノ丸庭園関連絵図史料2	57
第18表	庭園の利用回数(安永2年8月~3年2月)	71
第19表	庭園関連記事	72
第20表	玉泉院丸関連年表	87
第21表	玉泉院丸庭園関連埋蔵文化財調査一覽	88
第22表	玉泉院丸庭園関連文献史料1	89
第23表	玉泉院丸庭園関連文献史料2	90
第24表	玉泉院丸庭園関連絵図史料	91
第25表	金谷出丸関連年表	130
第26表	金谷出丸庭園関連文献史料1	135
第27表	金谷出丸庭園関連文献史料2	136
第28表	金谷出丸庭園関連文献史料3	137
第29表	金谷出丸庭園関連文献史料4	138
第30表	金谷出丸庭園関連文献史料5	139
第31表	金谷出丸庭園関連文献史料6	140
第32表	金谷出丸庭園関連絵図史料1	141
第33表	金谷出丸庭園関連絵図史料2	142
第34表	池西岸・鳥兜島石組 岩石種構成・計測表	165
第35表	蓮池庭・竹沢庭関連年表	194
第36表	蓮池庭・竹沢庭関連文献史料1	199
第37表	蓮池庭・竹沢庭関連文献史料2	200
第38表	蓮池庭・竹沢庭関連文献史料3	201
第39表	蓮池庭・竹沢庭関連文献史料4	202
第40表	蓮池庭・竹沢庭関連文献史料5	203
第41表	蓮池庭・竹沢庭関連文献史料6	204
第42表	蓮池庭・竹沢庭関連絵図史料1	205
第43表	蓮池庭・竹沢庭関連絵図史料2	206
第44表	兼六園(蓮池庭・竹沢庭)主要構成要素名称	220
第45表	蓮池庭・竹沢庭の主な利用状況	259
第46表	山崎山石組 岩石種構成・計測表	296
第47表	2014-1地点 出土遺物観察表 陶磁器	335
第48表	2014-1地点 出土遺物観察表 瓦1	336
第49表	2014-1地点 出土遺物観察表 瓦2	337
第50表	2014-1地点 出土遺物観察表 金属製品・石製品	337
第51表	2014-2地点 出土遺物観察表 陶磁器	363
第52表	2014-2地点 出土遺物観察表 瓦1	363
第53表	2014-2地点 出土遺物観察表 瓦2	364
第54表	2014-2地点 出土遺物観察表 瓦3	365
第55表	2014-2地点 出土遺物観察表 金属製品・石製品	365
第56表	丸瓦切り離し痕集計表	366
第57表	ボーリング地点一覽表	383
第58表	珪藻分析を行った試料	413
第59表	堆積物中の珪藻化石産出表	414
第60表	珪藻分析を行った試料	418
第61表	堆積物中の珪藻化石産出表	419
第62表	産出花粉孢子一覽表	420
第63表	富山藩・大聖寺藩・加賀藩の大名藩邸立地	458
第64表	加賀藩前田家下屋敷庭園の地割と構成要素	462
第65表	「下屋敷御林大綱之絵図」にみる庭園の姿、景色の表現、様子	463
第66表	一乗谷文化関連年表	466

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

1. 金沢城跡埋蔵文化財確認調査の推移

近世において加賀藩前田家の居城であった金沢城は、明治期に入り兵部省（後陸軍省）の管轄となり、第二次大戦後は国立金沢大学のキャンパスとして利用されてきたが、大学の郊外移転を受け、平成8年（1996）3月、石川県は国から用地を取得し、城跡を都市公園として利用するべく公園整備事業を進めることとなった。

平成9年度（1997）には、整備事業の柱となる城郭建造物の復元に着手し、石垣解体・積み直し等を含む大がかりな調査・整備を経て、平成13年（2001）9月、金沢城公園二ノ丸における内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等の復元事業が竣工した。

この動きの中で、今後の金沢城跡の保存・活用を図る上で専門的な調査研究機関の必要性が認識され、復元整備事業が最終段階に至った平成13年7月、県教育委員会の文化財課の中に、金沢城研究調査室が設置されることとなった。調査室では平成14年度（2002）から、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の4つの分野より、学術的価値の確立を通じ保存と活用に資することを目的に調査研究事業に着手した。

調査研究を進めるにあたり、金沢城跡の変遷と構造の解明という全体課題を設定したが、とりわけ寛永8年（1631）の大火以前の状況については、絵図・文献・建造物による情報が乏しいことから、埋蔵文化財分野においては、初期金沢城の構造追求を当面の課題とした。これに基づき、平成14年度（2002）から国庫補助を得て、初期の中核であった本丸とその周辺を対象に、埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。

この間、平成19年（2007）4月には、金沢城研究調査室は、石川県金沢城調査研究所に改組された。また平成20年（2008）6月17日、金沢城跡は国の史跡指定を受けた。

本丸一帯を対象とした確認調査については、平成20年度まで発掘調査を継続し、その後もボーリング調査を実施する中で、平成19年度及び平成25年度に調査報告書を刊行し、とりまとめを行った[石川県金沢城調査研究所2008d・2014d]。

調査成果におけるとくに重要な所見として、史料にみえる元和6年（1620）の本丸火災と翌年の普請をめぐり、発掘調査でその前後の実態を確認したことが挙げられる。元和6年以前の本丸は、自然地形を生かし、周囲に深い堀、高い石垣を配備した堅固な防御性が目立っていたが、元和7年（1621）の普請ではこれを大きく改め、本丸周囲の堀を埋め立て、本丸と周辺の郭を拡張していることが明らかとなった。ここに戦国期・織豊期を通じ発達してきた城郭構造が変質する転換点を認め、今後の課題として、変質後＝近世城郭としての金沢城の構造を積極的に捉え直す視座の構築を挙げた。

2. 城郭庭園等の総合研究事業

埋蔵文化財分野では、以上のように初期金沢城の構造解明から次の目標への移行を図ることとしたが、これは金沢城調査研究事業の第2期事業計画（H24～H33）の一環をなすものであった。第2期事業計画では、金沢城の学術的価値と特徴の深化、及び史跡の本質的価値の保存・継承を目標に掲げ、基礎的調査の充実・発展とともに、分野を超えた総合研究の進展に向けた取り組みを進めることとした。この枠組みにおいて、上記の課題を踏まえた調査研究対象として、城郭に関連する庭園に注目した。庭園は、御殿等とともに、近世城郭の構造とその変容の意義を捉え直すのに有効な素材であり、

近世城郭の多様性を体現する構成要素と目される。また遺構だけでなく文献・絵図史料も多く、庭園遺構の実態を把握するためにはその検討が不可欠であり、総合研究にふさわしい対象と言えた。

すでに本丸・東ノ丸の発掘調査において、従来ほとんど知見のなかった初期の庭園遺構を部分的ではあるが確認していた（第1図）。また土木部が主管する都市公園整備事業においても、近代以後、その景観を失った城内の庭園、玉泉院丸庭園の復元整備事業が着手されたところであり（平成20年度確認調査開始、第2図）、金沢城に関連する庭園に係り総体として取り組む機運が生じつつあった。加えて金沢においては大名庭園の典型として名高い兼六園が所在する。近年になって文献史による実証的な研究が進められ、一定の指針となった。

以上から、本丸の確認調査成果の取りまとめと並行させつつ、平成24年度から、庭園について総合的に検討することにより、金沢城の特質を一層明確にし、併せて城郭の構成要素としての庭園の意義の解明に資することを目的に、「城郭庭園等の総合研究」に取り組むこととした。

「城郭庭園」の用語については明確な定義はなく、一般に城郭に内包される位置にある庭園を指すことが多いようである。本事業においてもとくに一定の様式等を念頭に置かず、城郭との関連が深く、その構成要素たる性質が窺える庭園を対象とし、城内に位置する本丸・東ノ丸、二ノ丸、玉泉院丸、金谷出丸等と、城域に隣接する兼六園（蓮池庭・竹沢庭）等について検討することとした。以上の取り組みは、平成29年度をもって一旦取りまとめるとともに、並行して同年度から庭園の構成要素である切石積石垣を対象とした確認調査に着手した。



第1図 本丸北部 2008-1 地点の調査



第2図 玉泉院丸庭園第1地点の調査

第2節 調査の経過

1. 体制

金沢城の調査研究事業については、総合的、専門的視点からの指導を受けるため、金沢城調査研究委員会を設置している。また分野ごとに、調査研究への参画及び専門的な見地からの指導・助言を得るため金沢城調査研究専門委員会を設置している。本事業については、調査研究委員会の総括的指導の下、主に埋蔵文化財専門委員会より指導・助言を得た。調査研究委員会・専門委員会の構成は下記の通りである。

金沢城調査研究委員会

平井 聖（委員長、建築） 嶋崎 丞（美術工芸） 中村 利則（建築）

飛田 範夫（庭園） 吉岡 康暢（考古） 脇田 修（文献）

金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会

吉岡 康暢（委員長） 久保 智康 千田 嘉博 森島 康雄

また、飛田範夫調査研究委員会委員を始めとする庭園史の専門家や発掘庭園の調査担当者に対し、調査研究に係る検討会や現地調査等の参加を依頼し、指導・助言等を得た。

飛田 範夫（金沢城調査研究委員会委員） 栗野 隆（東京農業大学准教授）

中田 宗伯（兵庫県赤穂市教育委員会） 藤田 若菜（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

「城郭庭園等の総合研究に係る調査研究検討会」

平成 24 年度 平成 24 年 11 月 2 日

平成 25 年度 平成 25 年 8 月 29 日

平成 26 年度 平成 26 年 8 月 19 日

平成 27 年度 平成 27 年 8 月 24 日・平成 28 年 3 月 10 日

平成 28 年度 平成 28 年 9 月 1 日・平成 29 年 3 月 11 日

平成 29 年度 平成 29 年 8 月 22 日

2. 年次経過

本事業を進めるにあたり、期間・経費等の多くを占めたのは東ノ丸庭園遺構の調査であり、平成 24・25・28 年度にボーリング調査、平成 26 年度に発掘調査、平成 27 年度に出土品整理を実施した。この間の詳細については第 5 章で記述した。

また、現存する金谷出丸（尾山神社）庭園・兼六園を中心に、現況遺構調査を継続的に実施するとともに、本丸・二ノ丸・玉泉院丸も含め、金沢城庭園に関する文献・絵図等関連史料調査を随時実施した（第 3～7 図）。

平成 24 年度 予算額 4,059 千円

事業の方針・詳細内容・体制・計画等について検討・策定するとともに、金谷出丸における絵図資料等の基礎分析、東ノ丸（池跡推定地）等のボーリング調査等を実施した。なおボーリング調査の成果は初期金沢城の構造解明とも関連しており、主な部分については〔石川県金沢城調査研究所 2014d〕において報告した。

平成 25 年度 予算額 5,146 千円

東ノ丸（池跡推定地）のボーリング調査、二ノ丸・金谷出丸（尾山神社）庭園・兼六園の現況遺構・関連史料調査等を実施した。

金谷出丸では、滝周辺の概況調査、尾山神社所蔵史料の調査を行った。兼六園では、成巽閣の石垣等を観察した他、主に蓮池庭一带において、現況遺構と絵図の照合等を行った。

なお、上記作業と並行して、平成 17 年度から 24 年度までの初期金沢城の調査に係る報告書を刊行した。

平成 26 年度 予算額 4,282 千円



第 3 図 平成 25 年度調査（成巽閣石垣）



第 4 図 平成 26 年度調査（兼六園・竹沢庭）

東ノ丸庭園遺構の発掘調査、兼六園の現況遺構・関連史料調査、普請作事関連史料の検索等を実施した。兼六園では、主に蓮池庭縁辺から竹沢庭北辺・山崎山周辺において、現況遺構と絵図の照合等を行った。

東ノ丸庭園遺構の発掘調査

調査期間：平成26年9月1日～10月31日

調査面積：50㎡

平成27年度 予算額 1,420千円

兼六園の現況遺構調査、東ノ丸庭園遺構（平成26年度調査）の出土品整理等を実施するとともに、調査成果のとりまとめに係り、報告内容の構成等を検討した。

兼六園では、引き続き現況遺構と絵図の照合を行うとともに、主要遺構の一部について詳細観察調査を行った。

出土品整理については、洗浄・選別は直営で行い、記名・分類・接合・実測・トレースの大部分は（公財）石川県埋蔵文化財センターに委託して実施した。

（公財）石川県埋蔵文化財センター委託分

記名・分類（6箱）、記名・分類・接合（10箱）

実測・トレース（62点）

平成28年度 予算額 2,739千円

東ノ丸庭園遺構のボーリング調査、金谷出丸（尾山神社）庭園・兼六園の現況遺構調査、報告書の原稿作成等を行った。また本丸・玉泉院丸庭園等、既往の調査成果を改めて検討した。

金谷出丸では滝周辺・池西岸等において、景石・石組等の観察・計測等を行った。兼六園では、主要遺構の一部について詳細観察調査等を行った。

平成29年度 予算額 4,878千円

兼六園・尾山神社（金谷御殿）庭園の現地補足調査を実施するとともに、報告書を作成・刊行した。また同年度から、切石積石垣の確認調査に着手した。

この他、名古屋城二之丸庭園（25・27・28年度）、玄宮楽々園（25・28年度）、旧徳島城表御殿庭園（26年度）、和歌山城二之丸・西之丸庭園、養翠園（26年度）、旧赤穂城庭園（27年度）、府中城跡（29年度）等、発掘調査等が実施されている城郭庭園を中心に事例調査を行い、事業を進めるにあたり参考とした。



第5図 平成26年度調査（東ノ丸）



第6図 平成27年度調査（兼六園・蓮池庭）



第7図 平成28年度調査（金谷出丸）

第2章 位置と環境

第1節 金沢城と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約10 m、最高所である本丸で30 m以上を測る。本丸からは、低地の金沢平野のみならず小立野台地方面へも眺望がきく。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく〔藤 1999〕、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

城下町は、金沢城を中心に小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内惣構堀、外惣構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

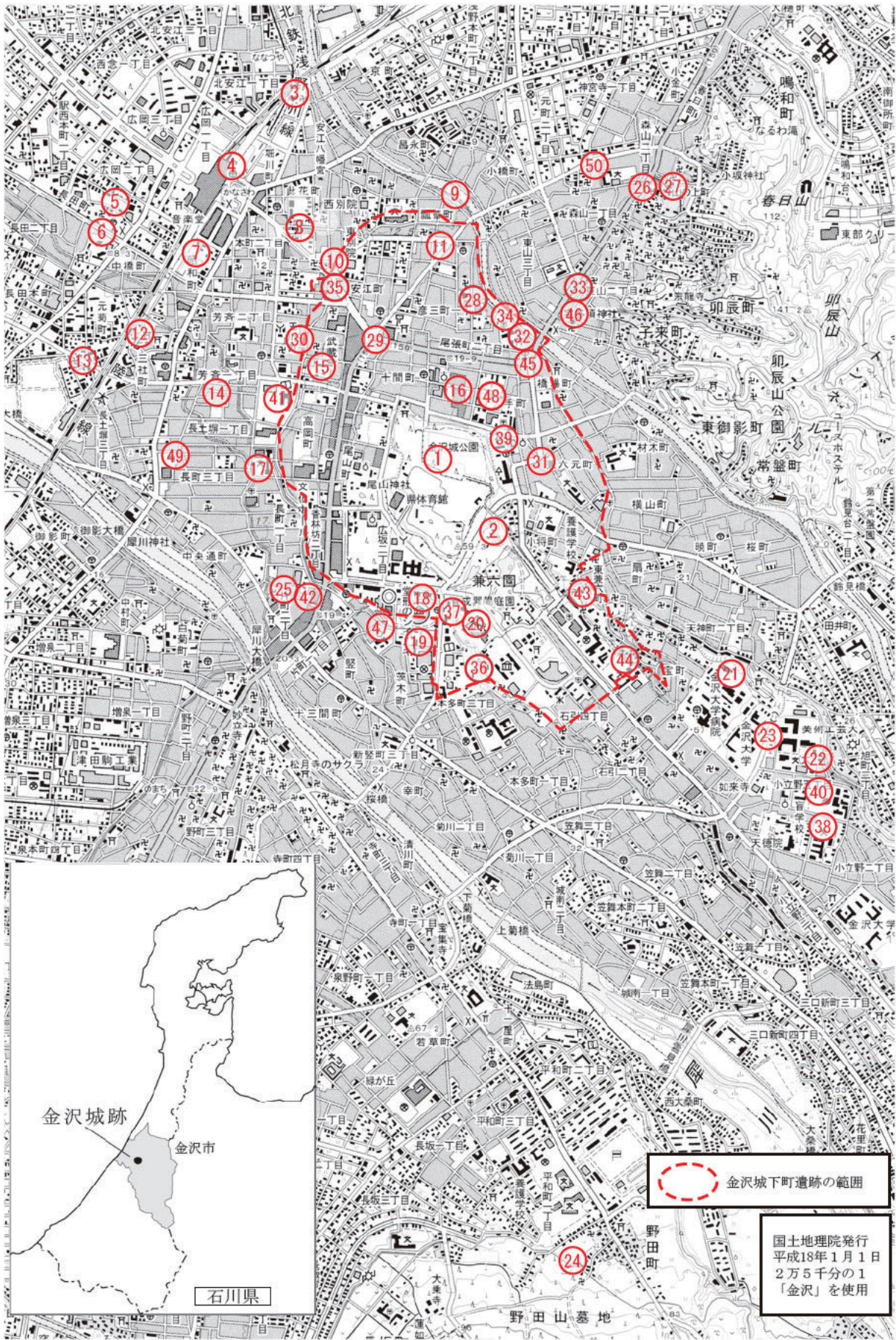
金沢城跡周辺は、絵図等の資料から近世以降の市街化が確認できるものの、それ以前の様相については文献等からの推定にとどまっていたが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002e〕、広坂1丁目遺跡〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b・2005b・2006b・2007c・2009b〕、丸の内7番地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2014a・2015a〕の発掘調査、惣構堀復元整備に伴う確認調査〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c〕や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成23年4月1日には、第8図の赤破線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知されている。

旧石器時代の遺跡は、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内7番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。

縄文時代の遺跡は、丸の内7番地点で草創期の有舌尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されるとともに、前田氏（長種系）屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下町の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏（長種系）屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂1丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002d、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003b〕で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡〔金沢市埋蔵文化財センター1999〕や彦三町一丁目地点〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007a〕では中期の遺構が、広坂1丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で遺構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で7世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面硯、帯金具、奈良三彩等が確認されている。県庁跡地（堂形）〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2010・2012、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2014c〕でも7世紀後半から10世紀初頭の遺物が出土し、竪穴建物、掘立柱建物等の遺構が確認されている。広坂1丁目遺跡では7世紀初



第8図 金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺の近世遺跡地名表

No	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	(別掲)	城郭	(別掲)	(別掲)
2	兼六園	(別掲)	庭園	(別掲)	(別掲)
3	木ノ新保遺跡(久昌寺遺跡)	H8(1996)・H9(1997)	寺院(墓地)	近世墓292基	増山1997、金沢市埋蔵文化財センター2004c
4	木ノ新保遺跡	H5(1993) H6(1994)・H7(1995)	寺院?(墓地)→足軽組地→下級武家地、町人地、百姓地	近世墓、水利施設(管井戸・竹樋)、溝(堰・しがらみ)、建物跡(土蔵基礎、木柱)	(財)石川県埋蔵文化財センター2002b 金沢市埋蔵文化財センター2005c
5	醒ヶ井遺跡	H7(1995)～H10(1998)	百姓地→下級武家地	前田氏(直之系)下屋敷水路、水利施設(竹樋・溜升)	金沢市埋蔵文化財センター2001c 谷口・増山2004
6	長田町遺跡	H6(1994)	下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
7	昭和町遺跡	H5(1993)～H7(1995)	町人地・下級武家地	延宝5年(1677)火災資料出土、近世穀月用水	金沢市埋蔵文化財センター2001b・2003a・2004a
8	本町一丁目遺跡	H2(1990)・H6(1994)・ H9(1997)・H15(2003)	町人地	廃棄土坑、墨書木製品多数、焼成遺構、鍛冶関連遺物(鑪羽口、椀形鉄滓)	金沢市教育委員会1995・1997b 金沢市埋蔵文化財センター2003c・2006c
9	瓢箪町遺跡	S61(1986)	上級武家地	前田氏(主膳系)上屋敷 整地層から遺物多数出土	金沢市教育委員会1991
10	安江町遺跡	H3(1991)～H5(1993)	町人地・中級武家地	板塀跡(布堀土坑)、墨書木製品多数、「乾山」路向付出土	金沢市教育委員会1997a
11	金沢城下町遺跡(彦三町地点)	H11(1999)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター2002
12	三社町遺跡	H3(1991)・H9(1997)	百姓地→町人地	道路・側溝、肥溜め群、操人形かしら	(財)石川県埋蔵文化財センター2001b・2007
13	元菊町遺跡	S62(1987)・H1(1989)	百姓地→町人地		石川県埋蔵文化財センター1990 (公財)石川県埋蔵文化財センター2014d
14	穴水町遺跡	H8(1996)	下級武家地	長氏下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター1998
15	金沢城下町遺跡(高岡町地点)	H8(1996)・H10(1998)～ H11(1999)・H9(1997)	上級町人地、水溜	礎石建物、楠棺墓、廃棄土坑、瓦溜り(鬼瓦を棧瓦で囲む)、石灯籠基壇、椀形鉄滓	金沢市埋蔵文化財センター2001a・2003b (財)石川県埋蔵文化財センター2002d
16	金沢城下町遺跡(前田氏(長種系)屋敷跡地点)	H8(1996)・H27(2015)	町人地→上級武家地	寛永以前の町屋遺構	(財)石川県埋蔵文化財センター2002e 金沢市埋蔵文化財センター2016a
17	長町遺跡	H8(1996)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
18	広坂1丁目遺跡	H8(1996)～H12(2000) H14(2002)・H17(2005)	中～上級武家地	寛永の大火火災資料、大型土坑(廃棄土坑、地下室、池等)、乗焼窯道具、惣構跡、紀年銘木製品等の基準資料検出	金沢市埋蔵文化財センター2004b・2005b・ 2006b・2007c・2009b
19	下本多町遺跡	H4(1992)	下級武家地→上級武家地	宝暦の大火による火災資料	金沢市埋蔵文化財センター1999
20	金沢城下町遺跡(本多氏屋敷跡地区)	S55(1980)・H21(2009)・ H22(2010)・H26(2014)・ H27(2015)・H28(2016)・ H29(2017)	上級武家地、武家地	溝、階段(地下室?)、本多家上屋敷、塀基礎石積、門跡、石垣、道跡	石川県埋蔵文化財センター1992 金沢市埋蔵文化財センター2012a・2015a・2016 (公財)石川県埋蔵文化財センター2016
21	金沢大学宝町遺跡(医学部附属病院地点)他16地点	H9(1997)～H14(2002) H23(2011)	下～中級武家地等	地下室多数	金沢大学埋蔵文化財調査センター2000～2003
22	金沢大学宝町遺跡(医学部保健学科地区)	H10(1998)・H11(1999) H13(2001)	下～中級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター2000～2003
23	経王寺遺跡	H9(1997)・H10(1998)	寺院(墓地)・中級武家地	近世初期の灰塚、池状遺構、塀跡	(財)石川県埋蔵文化財センター2002c
24	野田山墓地	H12(2000)～H14(2002) H16(2004)～H19(2007) H20(2008)～H24(2012)	墓地	藩主家の墓所を中核とした近世墓地	金沢市埋蔵文化財センター2003d・2008b・ 2012c・2012e・2013c
25	片町二丁目遺跡	H15(2003)・H23(2011)	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2005a
26	妙国寺門前遺跡	H15(2003)	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2006a
27	三宝寺前遺跡	H16(2004)	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2005d
28	金沢城下町遺跡(彦三町一丁目地点)	H16(2004)	武家地	廃棄土坑	金沢市埋蔵文化財センター2007a
29	金沢城下町遺跡(下堤・青草町地点)	H17(2005)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2007b
30	金沢城下町遺跡(金沢城西外惣構跡武蔵町地点)	H17(2005)・H21(2009)	惣構	築造当初の堀、堀の改変状況 土居盛土	金沢市埋蔵文化財センター2008a・2011c
31	金沢城下町遺跡(兼六元町地点 兼六元町5番地点 兼六元町7番地点)	H17(2005)・H23(2011)	武家地	溝、石列、井戸、土坑、石組溝	金沢市埋蔵文化財センター2007a・2012e
32	金沢城下町遺跡(金沢城東内惣構跡 枯木橋北地点)	H18(2006)	惣構	堀の改変状況確認	金沢市埋蔵文化財センター2008a
33	東山一丁目遺跡	H20(2008)	町人地	鍛冶関連遺構・遺物(炉跡、鑪羽口、椀形鉄滓等)	金沢市埋蔵文化財センター2010b
34	金沢城下町遺跡(金沢城西内惣構跡 主計町地点)	H20(2008)	惣構	素掘の堀、室町～戦国期の鍛冶関連遺物	金沢市埋蔵文化財センター2011b
35	金沢城下町遺跡(金沢城西外惣構跡 升形地点)	H20(2008)～H22(2010)	惣構	堀、升形遺構、建物跡	金沢市埋蔵文化財センター2012d・2013b
36	金沢城下町遺跡(本多町三丁目地点)	H22(2010)	武家地	道路、水路(辰巳用水分流)	金沢市埋蔵文化財センター2012b
37	金沢城下町遺跡(西外惣構跡本多町三丁目地点)	H21(2009)	惣構(西外惣構起点付近)	堀、土居基部	金沢市埋蔵文化財センター2012a
38	小立野四丁目遺跡(旧天徳院加賀藩主前田家墓所)	H22(2010)	寺院、墓地	堀	金沢市埋蔵文化財センター2013a
39	金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)	H21(2009)～H23(2011)	武家地(公事場、屋敷)	庭園遺構(石組池状遺構、景石等)	(公財)石川県埋蔵文化財センター2014a・2015a
40	小立野ユミノマチ遺跡	H22(2010)～H24(2012)	武家地	階段付大型土坑	(公財)石川県埋蔵文化財センター2014b・2015b
41	長家上屋敷跡	H24(2012)～H25(2013)	上級武家地	長氏上屋敷 柱穴	金沢市埋蔵文化財センター2015b
42	片町二丁目遺跡(5番地点)	H23(2011)	武家地	地下室、井戸、建物跡(石列基壇、礎石)、水路、土坑	金沢市埋蔵文化財センター2014b
43	金沢城下町遺跡(東兼六町5番地区)	H25(2013)～H27(2015)	墓地	土坑(甕棺墓、木棺墓等)、石列、墓石区画	(公財)石川県埋蔵文化財センター2017
44	金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点)	H25(2013)・H26(2014)・ H27(2015)	武家地	前田氏(長種系)・大音氏下屋敷 土坑(粘土採掘跡、地下室) 井戸	金沢市埋蔵文化財センター2014a・2015a・2016
45	金沢城下町遺跡(金沢城東内惣構跡 枯木橋南地点)	H24(2012)	惣構	堀	金沢市埋蔵文化財センター2014c
46	東山南水溜跡	H21(2009)	水溜跡		金沢市埋蔵文化財センター2010a
47	柿木島遺跡	H28(2016)・H29(2017)	武家地	曲水遺構、建物跡(土台、礎石)、区画溝、方形石組遺構、石列、池跡、土坑、石組井戸	
48	金沢城下町遺跡(津田玄蕃屋敷地点)	H29(2017)	武家地(人持組津田玄蕃邸跡)	土坑	
49	長町三丁目遺跡	H29(2017)	武家地		
50	森山二丁目遺跡	H29(2017)	武家地(足軽屋敷)	道路、石敷遺構、ゴミ穴	

*金沢市埋蔵文化財センター：2001年は金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)、2002年以降は金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)

(財)石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター(2013年度から公益財団法人)

め頃から 11 世紀の遺物が確認されるとともに、藤原宮式、平城宮式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、竪穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内7番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂1丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13世紀後半頃～14世紀代に盛期を持つ居館、室町末～17世紀初頭は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、西側の県庁跡地（堂形）では、16世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土塁が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内7番地点では遺構は不明であるが13世紀頃から17世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では16世紀第3四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では薬研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献史料からは14世紀には現在の久保市乙剣宮付近に「山崎窪市」が成立し、天文15年（1546）には現在の城地に金沢御堂（金沢坊舎）が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂（金沢坊舎）は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれていない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は50か所を数えるが（第8図・第1表）、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c、木越2013〕。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永8年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにはほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂1丁目遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内7番地点がある。広坂1丁目遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡地点は、寛永16年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内7番地点では、16世紀後半～17世紀初頭の町屋→17世紀初頭～寛永8年大火頃の町屋→大火以降から万治2年の武家屋敷→万治2年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡〔金沢市・金沢市教育委員会1997a〕は中級藩士・町人居住地对象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡〔金沢市教育委員会1995〕は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究さ

れている。木ノ新保（久昌寺含む）・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004c〕では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002b〕では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容をうかがうことができ、三社町遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2007〕でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡〔石川県金沢城調査研究所2008e・2013c〕は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の9割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかにされた。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d・2008b・2012c〕。辰巳用水〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009a〕は寛永9年（1632）に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管（木樋、石樋）が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。



第9図 「御城中壘分碁絵図」〔横山隆昭氏蔵〕（加筆） 文政13年（1830）

第2節 金沢城の沿革

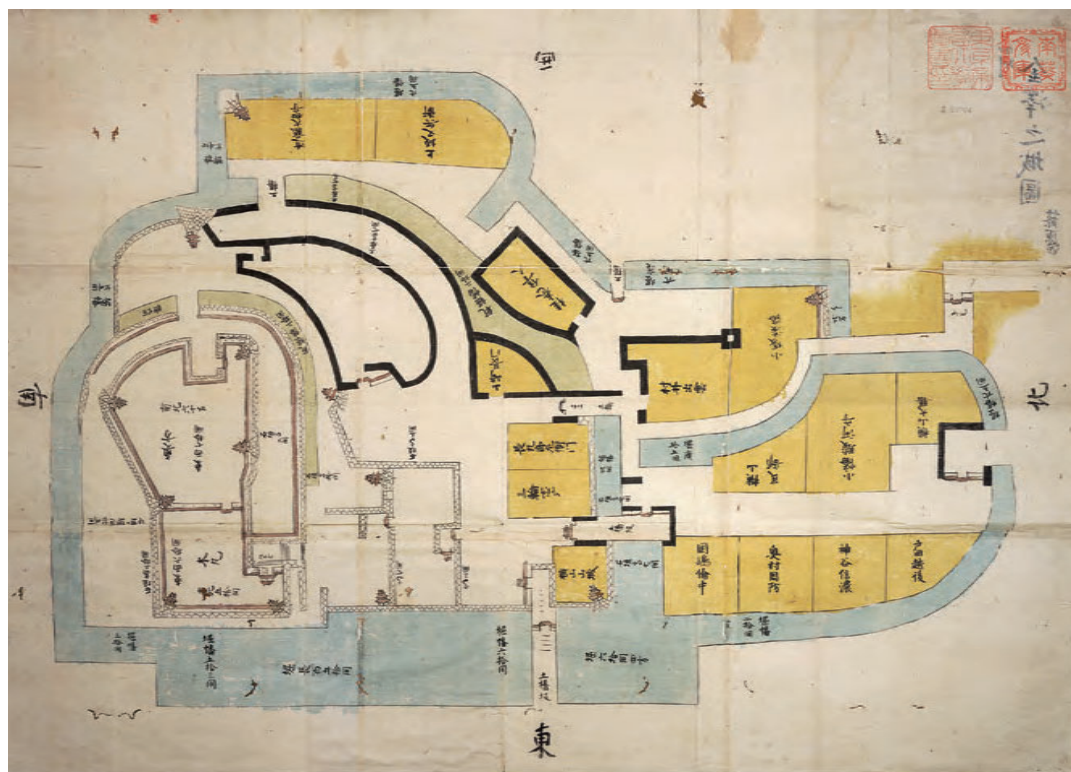
金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』[石川県金沢城調査研究所 2008d] が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第2表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を4期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した4つの時期については、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永8年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。一方、宝暦9年（1759）の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに10～30年の長期を要した。

廃藩後では、明治14年（1881）に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



第10図 「加州金沢之城図」[東京大学総合図書館蔵] 近世初期

第2表 金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出来事
前	天文15年	1546	本願寺別院として金沢御坊（金沢坊舎）を設置、金沢城の前身
初期金沢城	天正8年	1580	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	1583	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後金沢城として前田家が14代にわたり統治
	天正14年	1586	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、城内の案内をされたとの記述（『北信愛覚書』）
	天正15年	1587	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	1592	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長7年	1602	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和6年	1620	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永8年	1631	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し城内も延焼 【寛永の大火】 大火後の石垣構築・修築では現在の縄張りに近い状態に
	寛永9年	1632	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	1634	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年	1640	
	〃		20年間藩主不在、城内が荒廃
	万治3年	1660	
	寛文元年	1661	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内のみならず城下町整備や新田開発など文化振興に寄与
	寛文2年	1662	
寛文11年	1671	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か鉛瓦が普及	
宝暦の大火後	宝暦9年	1759	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害 【宝暦の大火】
	宝暦10年	1760	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、5万両を借り修築
	宝暦11年	1761	河北門石垣を修築
	宝暦12年	1762	橋爪門を再建
	宝暦13年	1763	五十間長屋石垣を修築、10代藩主重教二ノ丸御殿に入る
	明和2年	1765	石川門石垣を修築
	安永元年	1772	河北門を再建
	天明8年	1788	五十間長屋や石川門などを再建 橋爪門続櫓台修理
	文化5年	1808	二ノ丸火災
	文化6年	1809	橋爪門を再建、12代藩主斉広二ノ丸御殿に移徙
	寛政11年	1799	
	安政2年	1855	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
安政5年	1858		
近代以降	明治4年	1871	兵部省（のち陸軍省）の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治9年	1876	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	1881	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	1882	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	1907	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2/3が取り壊され、現在残るように段を設けて改修
	昭和24年	1949	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成7年	1995	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成8年	1996	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成20年	2008	国史跡に指定
	平成27年	2015	暫定整備のもと玉泉院丸庭園復元

第3節 既往の調査成果

1. 金沢城の発掘調査（第11・12図、第3・4表）

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和50～61年には金沢大学が主体となり、大学施設設置工事に伴う調査を実施している。

平成4～6年には県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。平成8年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことに始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成9～13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降は（財）石川県埋蔵文化財センター）が二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査が実施された。

平成13年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が開設され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の4分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成14年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出など多くの成果がある。

平成15年度以降は公園整備事業に係る調査が再開され、いもり堀・河北門・玉泉院丸・橋爪門で復元整備にかかる確認調査が実施された。このほか、都心軸整備推進事業として（財）石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査している。

2. 本丸周辺の調査（第12・13図）

ここでは第5章で記述する東ノ丸庭園遺構に関連する調査として、平成14年度から実施した本丸周辺の埋蔵文化財確認調査について、主な成果の概要を記述する。なお本丸北部で検出された庭園遺構自体については第4章第3節で取り上げる。

東ノ丸唐門（平成14・15年度調査〔石川県金沢城調査研究所2008d〕）

東ノ丸唐門前付近では、調査着手前より東ノ丸・本丸の北側を画する石垣に、隅角部状の目地が観察され、通路に変遷があったことが推測されていた。発掘調査の結果、通路の変遷は三段階にわたることが判明した。第1段階は石垣に見られた隅角部に連なり、やや南西に振った状態で直進的に本丸へ進入する形が推定された。第2段階はこの出入り口を石垣で塞ぎ、長大な石段（雁木坂）を設け、東に折れて進入する形となった。第3段階は第2段階のプランを継承するが、側壁を撤去するなど周辺の石垣を一新し、通路空間を拡張する一方、幅の広い石段の使用は唐門前の一部に留めている。石垣等の特徴や、第2段階の石段上で焼土面を検出したこと等を踏まえ、文献史料とも照合し、第1段階を文禄・慶長期から元和6年（1620）、第2段階を元和7年（1621）から寛永8年（1631）、第3段階を寛永8年（1631）以後に比定した。

本丸附段（平成15・16年度調査〔石川県金沢城調査研究所2008d〕）

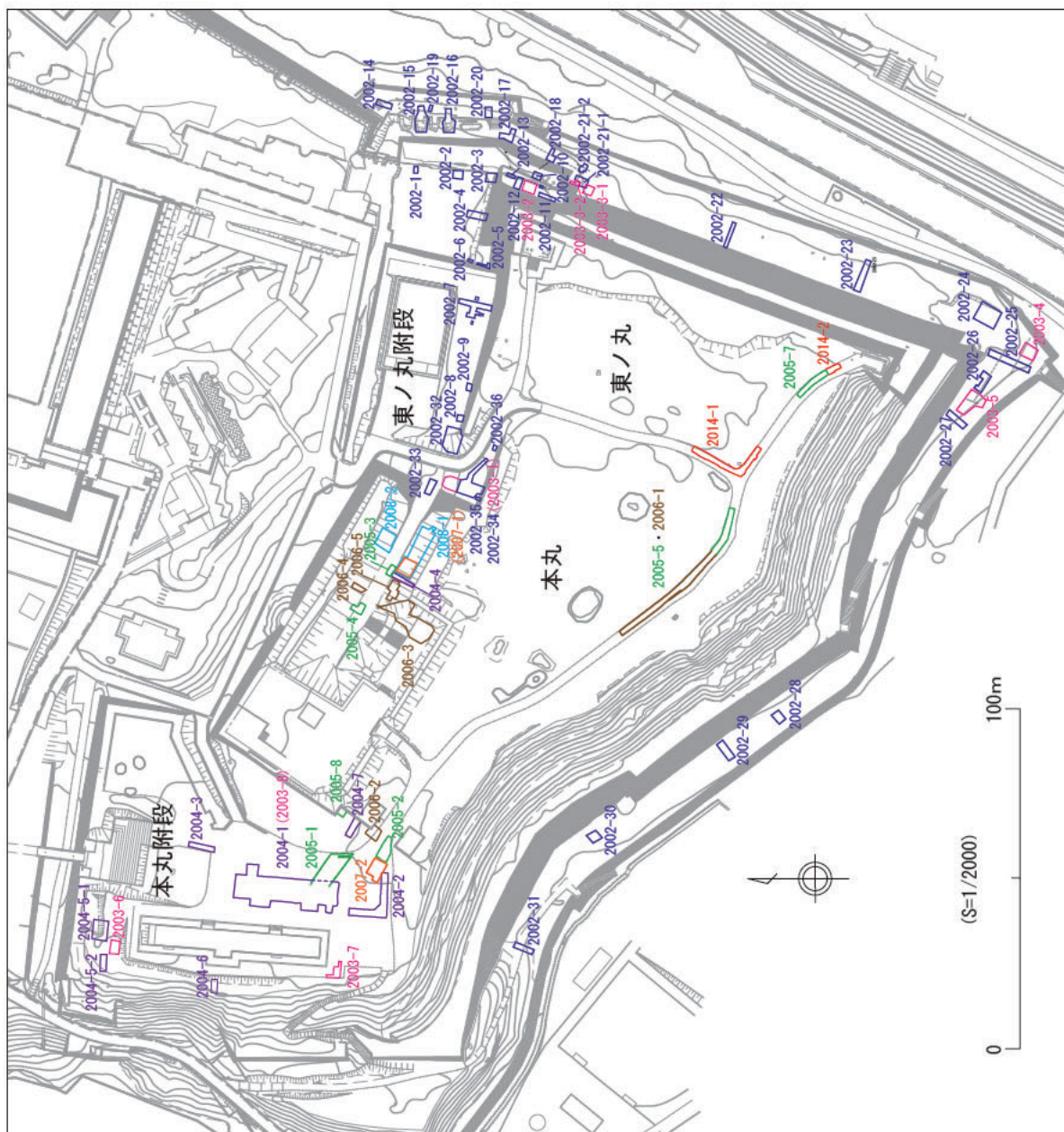
本丸附段は本丸の西に隣接する郭で、寛永8年（1631）以前に遡る遺構面を三面確認した。初期遺構面Ⅱは地山を基盤とするが、溝状の遺構（2004-1SX03）がある他不明な点が多い。初期遺構面Ⅰ（古）は造成土を基盤とするもので、食物残渣を廃棄した土坑や地下室状遺構等が高い密度で営まれている。初期遺構面Ⅰ（新）では塀による区画がなされ、本丸寄りには池・水溜の可能性のある遺構（2004-1SK11）等、その外側には鍛冶等金属加工に関連する遺構が認められた。焼土面の状況や出土した土師器皿等の年代観から、遺構面Ⅰ（古）は慶長～元和頃、遺構面Ⅰ（新）は寛永8年（1631）の大火までと



- 史跡指定範囲 (H20. 6. 17)
- 金沢城跡埋蔵文化財確認調査 (H14~20, 26, 29)
- 文化財保存修理に係る埋蔵文化財調査 (H19~23)
- 金沢城公園整備に係る埋蔵文化財調査 (H15~29)
- 都心地区整備に係る埋蔵文化財調査 (H15, 16, 19, 20, 24)
- その他の埋蔵文化財調査

0 100m

第 11 図 金沢城跡発掘調査位置図(～平成 29 年度)



第12図 金沢城跡埋蔵文化財確認調査地点位置図

- H14 (2002) (No.37)
- H15 (2003) (No.38)
- H16 (2004) (No.40)
- H17 (2005) (No.42)
- H18 (2006) (No.44)
- H19 (2007) (No.48)
- H20 (2008) (No.53)
- H26 (2014) (No.73)

第3表 金沢城跡発掘調査一覧(1)

No	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	四脚門・礎石建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
2	本丸階段	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査		井上1969・吉岡1985・増山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	川原石石積	井上1969・吉岡1985・増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	能舞台跡・台所跡・極楽橋付近建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	県教委・金大	校舎増築	殿舎跡・排水施設・用水路	県教委1970・吉岡1985・増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	県教委・金大	学術調査	三階櫓・三十間長屋跡	県教委1970・吉岡1985・増山1999
7	四十間長屋	昭和50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋礎石・櫓石垣	上野1976・吉岡1985・増山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査	明治14年焼失の御殿跡	佐々木1981・吉岡1985・増山1999
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大型礎石	佐々木1980・吉岡1985・増山1999
10	藤右衛門丸北側法面裾部	昭和56(1981)	金大考古学研究室	擁壁設置	石垣列・瓦	貞末ほか1986・増山1999
11	黒門横北側懸崖部	昭和61(1986)	金大考古学研究室	境界崖部崩落防止工事	石垣列・切石側溝、瓦	貞末ほか1989
12	兼六園(江戸町推定地)	平成元年(1989)	県埋文センター	店舗改築	17世紀初期の遺構面(礎石建物等)	県埋文センター1992
13	石川門前土橋(石川橋)	平成4-6(1992-94)	県埋文センター	道路整備	土橋の形成過程 16世紀後半頃の鍛冶場遺構等	県埋文センター1997・1998
14	車橋	平成6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター1996
15	内堀第1次・菱櫓	平成9(1997)	県埋文センター	公園整備(復元整備)	堀・橋脚(埋置された刀・鏡・銭)・菱櫓礎石等	金沢城調査研究所2011c・2012a
16	本丸階段	平成10・12(1998・2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	階段跡	滝川1999・湊屋・土田ほか2001
17	三ノ丸第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	鉄砲所跡(鍛冶場遺構)、鉄砲部品	金沢城研究調査室2006a
18	いもり堀第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	天正～元和頃の堀・土橋、元和以後の堀・櫓台	三浦1999
19	五十間長屋	平成10-11(1998-99)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	石垣内部構造 櫓・長屋礎石、17世紀初頭の遺構面	金沢城調査研究所2011c・2012a
20	内堀第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	西半北側石垣の構造把握	金沢城調査研究所2011c・2012a
21	新丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	近代に埋没した堀の範囲確定	金沢城調査研究所2016c
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	礎石建物(番所跡)、石組井戸	(財)県埋文センター2002a
23	鶴ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	木樋・石樋(辰巳用水)	金沢城調査研究所2016c
24	新丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	16世紀後半から末期頃の遺構面	(財)県埋文センター2002a
25	橋爪門外橋脚基礎	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	橋脚基礎の構造把握	金沢城調査研究所2011c・2012a
26	二ノ丸園路	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	礎石、石組遺構	金沢城調査研究所2016c
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(設備設置)	土坑	金沢城調査研究所2011c・2012a
28	鶴ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	16世紀末期頃の遺構面	金沢城調査研究所2015b
29	いもり堀第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	慶長後半から元和年間の石垣	湊屋・土田2001
30	北ノ丸第1次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園地整備)	火葬遺構、空堀跡、石瓦等	湊屋・土田2001
31	いもり堀第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	元和以前の堀・土橋・土俵護岸 金箔瓦	湊屋・土田ほか2001
32	三ノ丸第4次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	河北門石垣台・礎石、16世紀後半～末期頃の遺構面	金沢城調査研究所2011b
33	新丸第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	尾坂門石段、16世紀後半～末期頃の遺構面 36と合わせて尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016c
34	風呂屋口門等	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	石段、石組溝 数寄屋敷調査区として報告	金沢城調査研究所2016c
35	橋爪門桁形	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	土坑、ビット	金沢城調査研究所2015b
36	尾坂門	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(植栽)	石組溝、路面 33と合わせ尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016c
37	本丸周辺	平成14(2002)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸虎口変遷の把握	金沢城調査研究所2008a
38	本丸周辺	平成15(2003)	金沢城研究調査室	学術調査	三十間長屋統櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究所2008a
39	いもり堀	平成15(2003)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	鯉喉櫓台の検出	金沢城研究調査室2004a
40	本丸周辺	平成16(2004)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永大火以前の2面の遺構面	金沢城調査研究所2008a
41	いもり堀	平成16(2004)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	築城当初の堀の規模を確認	金沢城研究調査室2004a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸三階櫓石垣	金沢城調査研究所2014c
43	玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	近代の改修、石垣上部の二重堀の基礎構造の把握	金沢城調査研究所2010a
44	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城調査研究所2014c
45	玉泉院丸(南西石垣)	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	部分修理の把握、初期金沢城石垣	金沢城調査研究所2010a

第4表 金沢城跡発掘調査一覧(2)

No	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
46	河北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	残存状況、規模、改修、創建時期の把握	金沢城調査研究所2011b
47	いもり堀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	南岸の位置確認	金沢城研究調査室2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永8年大火以前の大規模遺構	金沢城調査研究所2014c
49	石川門(右方太鼓塀)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014b
50	玉泉院丸(南西石垣)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	金沢城調査研究所2010a
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	枡形門創建前(慶長後期以前)の遺構確認	金沢城調査研究所2011b
52	いもり堀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	南岸の位置確認	金沢城調査研究所2008d
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永8年大火以前の大規模遺構	金沢城調査研究所2014c
54	石川門(右方太鼓塀)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014b
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石垣解体調査(ニラミ櫓台、一ノ門類当)	金沢城調査研究所2011b
56	いもり堀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	堀の南岸 辰巳用水石管、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所2009b
57	玉泉院丸(泉水)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	泉水北部の遺構確認	金沢城調査研究所2015c
58	玉泉院丸(いもり坂石垣)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	石垣変形箇所の基底部試掘	金沢城調査研究所2009b
59	兼六園榮螺山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所2012
60	いもり堀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	鯉喉櫓台石垣東部の残存状況確認、一部解体	金沢城調査研究所2010d
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	泉水中央部、北部の遺構確認(中島、出島、景石等)	金沢城調査研究所2015c
62	兼六園榮螺山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所2012
63	石川門(左方太鼓塀)	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014b
64	橋爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠	金沢城調査研究所2015b
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	泉水北東部の遺構確認(護岸石組・景石等)	金沢城調査研究所2010c・2011d・2015c
66	兼六園榮螺山	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣・石造物の解体調査	管理事務所・調査研究所2012
67	石川門(左方太鼓塀)	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014b
68	橋爪門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠、近世初期遺構	金沢城調査研究所2015b
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認・復元整備)	色紙短冊積石垣下の遺構確認	金沢城調査研究所2011e・2012b
70	橋爪門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石組暗渠、石垣台、枡形路面	金沢城調査研究所2015b
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	色紙短冊積石垣周辺と滝石組上部の遺構確認	金沢城調査研究所2012d・2013b
72	玉泉院丸(南石垣)	平成25(2013)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築・復元整備)	石垣の解体調査、近世初期の土塁確認	公園緑地課・調査研究所2017
73	東ノ丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	学術調査	東ノ丸庭園の遺構確認	金沢城調査研究所2015d
74	玉泉院丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2015d
75	玉泉院丸	平成27(2015)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所2015e・2016e
76	金谷丸	平成27(2015)	金沢市埋文センター	建物新築	扉または欄干、瓦廃棄土坑、石組遺構	金沢市埋文センター2016
77	玉泉院丸	平成28(2016)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2016d・2017c
78	玉泉院丸	平成29(2017)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	
79	数寄屋敷敷北	平成29(2017)	金沢城調査研究所	学術調査	埋没している初期の切石積石垣の出現期の実態を検討	
A	県庁跡地(堂形)	平成15(2003)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	焼米(堂形米蔵関連遺物)、近世初期以前土塁遺構	(財)県埋文センター2010
B	県庁跡地(堂形)	平成16(2004)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	足軽番所、堂形馬場	(財)県埋文センター2010
C	県庁跡地(堂形)	平成19(2007)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	古代～近世の遺構面	(財)県埋文センター2012
D	県庁跡地(堂形)	平成20(2008)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	堂形建物、石垣、堀跡、古代～中世の遺構面	(財)県埋文センター2012
E	県庁跡地(堂形)	平成24(2012)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	石列、石組遺構	(公財)県埋文センター2014c

県教委：石川県教育委員会 県埋文センター：石川県立埋蔵文化財センター (財)県埋文センター：石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター(2013年度から公益財団法人)
 金沢城研究調査室：石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 金沢城調査研究所：石川県金沢城調査研究所
 管理事務所・調査研究所：石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 公園緑地課・調査研究所：石川県土木部公園緑地課 石川県金沢城調査研究所
 金沢市埋文センター：金沢市埋蔵文化財センター

考えられる。これら遺構の濃密な展開から、本丸附段はこの当時本丸の奥側あるいは裏手であったと位置付けられる。またこの状況は、本丸大手が東ノ丸唐門側であったことも示唆している。

本丸西堀（平成 16～19 年度調査 [石川県金沢城調査研究所 2014d]）

本丸西堀は、本丸と本丸附段の境に位置する。文献・絵図資料に見られない遺構で、発掘調査によりその存在が初めて明らかになった。全容は不明であるが、鉄門前付近では幅約 20 m を測る。またボーリング調査によると、本丸西面石垣下部検出面からの深さは 10 m 以上を測る。堀の東岸（本丸側）は石垣編年 1 期（文禄年間（1592～1596）頃）の自然石積石垣で構成されている。一方西岸（本丸附段側）は検出した部分では土羽となっている。出土遺物や文献史料から、元和 6 年（1620）の火災を契機とする、翌元和 7 年（1621）の本丸拡張・造成の一環として埋め立てられたとみられる。本丸前面の堀切の埋め立ては、金沢城の転換期を象徴するものと言える。

本丸南東部（平成 17・18 年度調査 [石川県金沢城調査研究所 2014d]）

本調査区では、本丸の中心的な建物であった三階櫓台とこれに続く三十間長屋台の石垣を検出したが、いずれも 17 世紀後半に修築されたものであった（三十間長屋台は 19 世紀代の修築も認められた）。三階櫓台の南東廻りには堀が巡っており、宝暦 9 年（1759）の大火後に埋め立てられたとみられるが、文献・絵図史料には見られない新知見である。三十間長屋台は、寛永 8 年（1631）の大火に係る整地層の上部に構築されており、整地層の下で礎石建物の一部を確認した。建物の地盤は標高 57.9 m を測り、東ノ丸南部の当該推定地盤より高い。寛永大火以前の建物として希少な事例であり、付近一帯に同期の遺構が良好に遺存していることも推測される。同時に元和期以降、寛永初期までの造成が著しく、これ以前の様相は窺い難い面も認められた。



①東ノ丸唐門前（2002-34・2003-1地点）



②本丸附段（2003-8・2004-1地点）



③本丸西堀（2005-1地点）



④本丸南東部（2006-1地点）

第 13 図 本丸とその周辺の確認調査

3. 金沢城に関連する庭園の調査等

金沢城の庭園に関する調査等のうち、埋蔵文化財調査については、小規模なものや部分的なもの、明確な庭園関連遺構が検出されなかった場合等も含めると、対象とした各庭園全てで実施されており、第4・5章で改めて取り上げる。ここでは現存する兼六園を中心とした調査研究の一端を略述する。

兼六園は廃藩以前からすでに一般への開放が行われていたが、明治6年(1873)の太政官の布達に応じ、翌7年には公園として新たに発足することとなった。以後、明治10年代から末頃までは、園内に茶店が立ち並び、現在とも大きく異なる景観が展開した。

このように兼六園が変貌する中で、森田平次(柿園)は明治25年(1892)に著した『金沢古蹟志』において、近世後期における考証(富田景周「蓮池考」『加賀藩史料7』所収等)を踏まえ、兼六園の起源等について史料を引用しつつ考察を加え、また琴柱燈籠、黄門橋、獅子石、栄螺山等の見所を取り上げて紹介した。なお本書では霞ヶ池を兼六園大堀、翠滝を蓮池大瀧とする等、独特の呼称も見受けられる。明治27年(1894)には小川稔(孜成)の『兼六園公園誌』、平岩晋(雪湖)の『金城勝覧図志』が刊行された。ともに挿絵入りの案内書であり、とくに前者は兼六園に関する詩歌等も掲載され、兼六園各所の名称と併せ、後続する関係書籍への影響も大きかった。大正9年(1920)に刊行された『稿本金沢市史 市街編第四』における兼六園の記述は、これらを継承し、充実した内容となっている。

戦後において特筆すべき総合研究の成果として『兼六園全史』がある[兼六園全史編纂委員会・石川県公園事務所1976]。ここでは歴史・造園に係る所見の他、庭園の水利を担った辰巳用水、建造物、民俗・伝承、兼六園を取り上げた文芸、生物と土質といった環境、観光、管理の状況等に至るまで、兼六園を取り巻く多くの分野における研究成果が報告された。兼六園の来歴については、特に従前の見解を大きく出るものではないが[長山2006b]、辰巳用水の構造や、兼六園の諸亭等、失われたものも含め、建造物・遺構についての所見が豊富に盛り込まれている。

兼六園は大正11年(1922)に名勝に指定されていたが、昭和60年(1985)にはさらに特別名勝に指定された。この後平成9年には『特別名勝兼六園—その歴史と文化—』[橋本確文堂企画出版室1997]が刊行された。『兼六園全史』と同じく、各種の研究分野から兼六園に迫ったもので、兼六園の来歴において延宝4年(1676)の築造を論じたもの(下郷稔氏)、数寄屋建築の系譜をたどったもの(中村利則氏)等、多彩な論稿を所収している。また『兼六園全史』ではまとめて触れられなかった石燈籠・石塔等について、一章を割いて紹介している。

以上のように、総合的な研究が進展する一方、兼六園の具体的な利用の実態等は、あまり明確にされてこなかった。長山直治氏は、従前の研究が『加賀藩史料』からの引用に多くを拠っていることに対し、藩士の日記等の原史料を読み解くことで、不明であった点、誤って伝わっていた点の多くを実証的に解明・修正した[長山2006a・2006b]。大名庭園については、造形上の関心による研究蓄積は古くから重ねられているが、成立や変遷、利用状況について、史料に基づき実証的に接近する取り組みは比較的近年の傾向であり、その結果として、鑑賞の対象だけではない、庭園の様々な側面が明らかになってきた([後楽園史編纂委員会2001]・[神原2003]・[内田2006]等)。

なお兼六園を巡っては市民の関心も高く、とりわけ「金沢城・兼六園研究会」の活動は注目される。学習会等を通じ研究活動を行い、研究発表文集「きくざくら」を刊行するとともに、各種団体に対する兼六園の案内や、大名庭園民間交流協議会において各地域との交流を図るなど、その活動内容は多岐にわたっている。

第3章 調査の方法

第1節 調査の対象

本事業は金沢城の庭園を調査対象とし、個別には本丸、東ノ丸、二ノ丸、玉泉院丸、金谷出丸、兼六園（蓮池庭・竹沢庭）の各庭園が主たるものである。この他実態は判然としないが、丹後屋敷・堂形に関する庭園関連資料を取り上げた（第14図）。これらについては第4章・第5章で報告する。

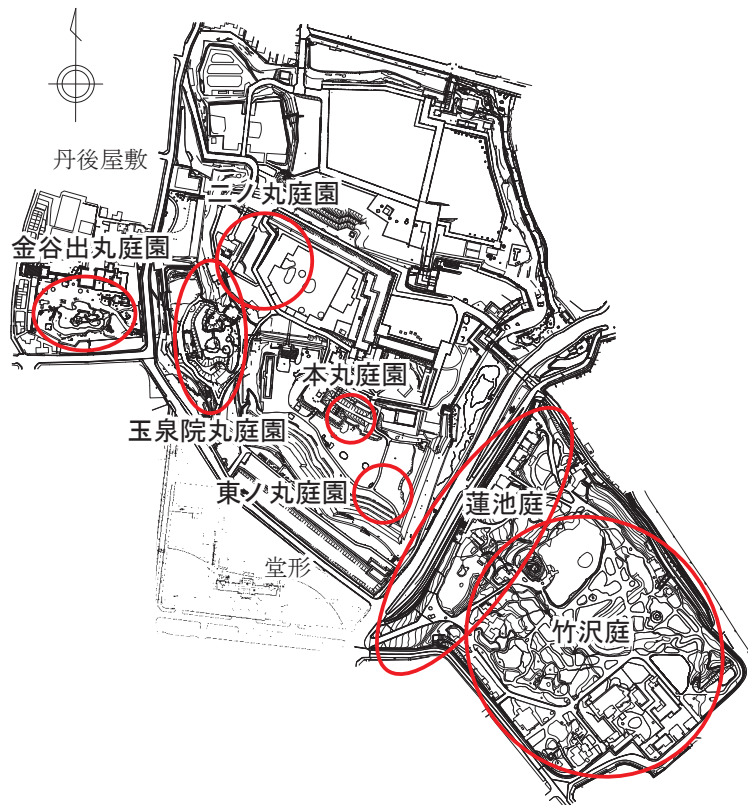
なお、本丸と東ノ丸の庭園は、それぞれ独立した別の庭園であり、調査も庭園ごとに実施している（本丸の発掘調査は平成16～20年度実施、25年度報告）が、文献・絵図史料の状況や変遷の共通性等、一体的に検討すべきところが多く、次章では併せて1節としている。また兼六園については、成立の古い北西側の蓮池庭と、19世紀以後に御殿から庭園への変遷をたどった南東側の竹沢庭で構成されており、来歴の異なる両庭園が、藩末期になって一体化した経緯があり、節を分けて報告した。

庭園の構成要素については、全体の概略把握に努めたが、とくに地割・地業と密接に関わる泉水・筑山・石組・石垣等を重点的に取り上げた。その一方、建造物の構造や植栽の状況等に関しては、先行研究に譲るところがほとんどとなっている。

第2節 調査の方法

1. 遺構調査

遺構調査については、発掘調査、ボーリング調査、現況調査の三種の方法を用いた。本事業で実施した発掘調査・ボーリング調査は、東ノ丸庭園遺構の埋蔵文化財確認調査に係るもので、詳細内容は第5章で記述した。現況調査は、ここでは地表上に露呈している部分を対象にした調査を指し、二



第14図 金沢城庭園の位置 (S=1/10,000)

ノ丸・金谷出丸・蓮池庭・竹沢庭等で実施した。地表上における概括的な遺存状況・配置状況の把握を第一とし、必要に応じ絵図との照合を図り、適宜写真撮影等を行った。また特徴的な箇所の詳細観察、計測・略測図の作成、景石等岩石種の判別・集計等を行った。この他、主に本丸・二ノ丸・玉泉院丸の庭園に係り、既往の発掘調査・ボーリング調査成果についても検討し、要点をまとめた。

2. 文献・絵図史料調査

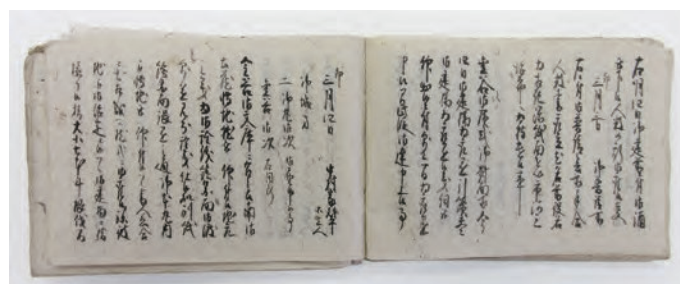
文献史料の調査については、金沢城調査研究事業の一環として、普請・作事関係を中心に収集・解読してきたものを中核とし（第15図）、その他『加賀藩史料』等の刊行物を対象に、金沢城の庭園に関連する記事を検索・検討した。また兼六園については、[長山 2006b] に引用されている史料に多くを拠っている。

絵図資料については、平成14年度以来、金沢城調査研究の基礎資料として、また情報発信のデータベースとして活用するため、各機関に分散して所蔵されている金沢城絵図や城下絵図等の写真撮影とデジタル化を進めている。今回の調査においては絵図の高精細デジタルデータを多く活用した。このことにより、現況との照合や絵図間の比較、細部の読み取りが容易となった。これらの収集資料から、庭園に関連する絵図を抽出し、内容を検討した。

文献・絵図史料には、庭園造営の経緯や体制、景観とその変遷、利用状況等の情報が含まれる。これらを併せて検討することで、遺構の特徴・性格がより明確となり、遺構から得た所見を補足し、総合的に庭園の様相を理解することが可能となる。以上の観点から本事業では、遺構調査を基軸としつつ、文献・絵図史料調査も一体的で不可欠なものとして扱った。



①「世子御座所普請方御用主附一件」[金沢市立玉川図書館蔵]



②「金谷御殿御普請諸事留」[金沢市立玉川図書館蔵]

第15図 文献史料写真

第4章 金沢城庭園の実態調査

第1節 概要

1. 本章の構成

(1) 全体構成

本章では、主な金沢城庭園について、個別に報告を行う。第2節から第7節までは、庭園の成立時期に基づき、本丸・東ノ丸（第2節）、二ノ丸（第3節）、玉泉院丸（第4節）、金谷出丸（第5節）、蓮池庭（第6節）、竹沢庭（第7節）の順で説明する。なお、埋蔵文化財調査（発掘・ボーリング）を主体とした東ノ丸の遺構確認調査の詳細については、別途第5章で扱う。また第8節では、実態が判然としないものの、庭園に関する資料が認められる丹後屋敷・堂形について言及する。

(2) 第2節～第7節の構成

主要な庭園をそれぞれ取り扱う第2節～第7節は、以下の1～5項で構成する。

1. 概要 各庭園が立地する区域の地形的特徴・現況、沿革を説明する。このうち沿革では、庭園を包含する郭について、主要建物の変遷を主な指標に時期区分を行った。この時期区分は、以下の節の各項における記述の基準となるものであるが、庭園作庭以前については一括する場合がある等、本報告の目的に沿った設定としている。

2. 庭園に関する資料 遺構資料、文献史料、絵図史料の概要について説明する。遺構については、本項では発掘調査の経歴や現況遺構の遺存傾向等を記述し、調査の詳細内容は3項で報告する。文献については、庭園に関する記載がある主要な史料を紹介するとともに、重要な部分を抄出し表にまとめた。絵図については、庭園が描写されている史料を中心に、題目・所蔵・年代・特徴等を一覧表に記載し、主なものの写真を掲載した。文献・絵図史料の調査成果は主に4項で報告する。

3. 庭園遺構の状況 庭園の構成要素ごとに、遺存の状況や特徴を記述する。構成要素は、概ね地割・区画、給水・泉水、築山・園路、添景物（石造物）等に分類するが、各庭園固有の状況に応じて取り扱うこととする。また本丸・東ノ丸、玉泉院丸は発掘遺構、二ノ丸、金谷出丸、蓮池庭、竹沢庭は現況遺構が中心で、それぞれの分量に偏りがあることもあり、大別せず記述しているが、二ノ丸や金谷出丸では、発掘調査の小項を設けて説明している。

4. 各時期の様相 1項で設定した時期区分に基づき、時期ごとに庭園の特徴を説明する。ここでは、資料（史料）毎に大別せず、文献史料・絵図史料の調査成果に、前項で説明した遺構に関する所見を組み合わせ、一体的に記述する。庭園の特徴に関する記載の内容においては、成立・契機、造営体制、構成要素、利用状況といった項目を念頭に置いている。ただし資料（史料）の状態や、時期のもつ特質から、これら項目全てに言及できなかったわけではない。また本項では、主として絵図（トレース）を基本図として、構成要素の配置等を示すこととし、図解説明を心掛けた。

5. 小結 各節共通の項目として、各庭園の変遷過程についてとりまとめる。この他、庭園ごとの特徴や課題について、個別に整理する。

2. 史料の引用等

(1) 史料の引用

文献・絵図史料の引用については、主に各節の庭園関連文献史料・同絵図史料表に基づき提示した。文献（抄出）史料・絵図史料とも、本報告用の番号を付している。番号は節ごとに通し番号とした。節及び文献・絵図の区別を示すため、節番号に加え、文献を1、絵図を2としてコード化した（例：

第2節本丸・東ノ丸庭園…文献史料 21-01～、絵図史料 22-01～、等)。

このうち文献史料表において、収載刊行物の記載がないものは、原史料から翻刻した。また石川県金沢城調査研究所以外の刊行物により活字化されているものについても、改めて原史料を確認した場合は番号の後ろに*印を付した。印のないものは収載刊行物から引用した。

報告書・研究論文等の参考文献は、巻末にまとめ、引用は編著者(五十音順)+刊行年で示した。なお、編纂物や戦前の刊行物等については書名で示したことがある。

『加賀藩史料』前田育徳会(前田家編輯方)編 昭和4～18・33年刊、昭和45・55・56年刊(復刻版・清文堂出版)

『金沢古蹟志』森田柿園著(明治24年) 昭和9年刊(金沢文化協会)、昭和51年刊(復刻版・歴史図書社)

『太梁公日記』前田育徳会尊経閣文庫編 平成16年刊～(続群書類従完成会・八木書店) 等

また年表(1項)・文献史料表(2項)では、所蔵機関・刊行機関・刊行物書名等の一部について下記の通り略称を用いた場合がある。

石川県立図書館：県図 金沢市立玉川図書館：玉図 金沢大学附属図書館：金附図 石川県教育委員会：石県教

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室：石金調 石川県金沢城調査研究所：石金研

加賀藩史料：加史 太梁公日記：太梁 等

(2) 絵図のトレース

各節4項を中心に、絵図のトレース製図を多く掲げた。これは表現の簡略化・平準化や、線描の明確化、現況図等との合成図作成を目的とし、原図の情報を必要に応じて抽出し説明の基本図としたもので、本報告での利用に沿った形で調整している。原図と一致していない部分も多く、他にも課題を残しているが、上記目的に係る利点を優先することとした。以下に主な留意点を記す。

・製図に際しては現況図と比較し、凡その縮尺を示した。

・建物図における部屋割(間取)は線・彩色のみで示し、柱の表現は原則省略した。

・絵図には間取等の数値を始め、文字情報が多く記載されているが、製図においては必要に応じて選別した。左記の通り原図そのままの表記は明朝体の太字で示した。その他原図に記載がないが、その他史料等から特定できる場所・建物等はゴシック体で示した。

・彩色は原則として、建物全体を示す場合は黄色、細別の場合は畳間を黄色、板間を茶色、土間・石畳等を灰色で示したが、原図の表現に拠ったところも多く、必ずしも統一していない。なお建物について、原図に彩色がない場合、薄い黄色で表示した。

・図は現況との対比を優先し、おおよそ上部を北とするように調整しており、原図の視点と異なる場合がある。なお兼六園(蓮池庭・竹沢庭)等は、矩形の敷地が北西-南東方向に軸を向けており、紙面に合わせたため北は図上では左上となっている。

・二ノ丸IV期の基本図作成にあたっては、御殿建物の変化傾向を把握することも兼ね、現況地形との整合性が高い「御城中壺分基絵図」(第17表・第40図32-14)を基準として、各小期の絵図を照合し、間取等を修正する等、内容の変化を反映させる方法をとった。ただしとくに変化が著しいIV4期の「二ノ丸御殿図」(第17表・第42図32-24)については、外郭線のみを表示した場合を除き、Ⅲ期以前と同じく、おおよそのスケールを合わせてそのまま製図した。この他、原図を現況図に合わせて修正する等、調整の度合いが大きい場合は、その旨を図面に記載した。

(3) 景石等

各節第3項等で取り上げる景石(庭石)等、庭園関連の石材には、戸室石(金沢市南部産、角閃石安山岩、石垣材の主体)、福浦石(能登・志賀町荒木海岸付近産、安山岩)、滝坂石(金沢市南部産、スコリア凝灰岩)、滝石(能登・羽咋市滝・柴垣海岸付近産、花崗岩・花崗閃緑岩)、坪野石(金沢市南部産、溶結凝灰岩)、板石(推定能登海岸部産、安山岩)、金屋石(富山県砺波市庄川町付近産、緑色凝灰岩、辰巳用水石樋)等がある。特徴の詳細や利用傾向等に関しては、第6章第1節で記述する。

第2節 本丸・東ノ丸

1. 概要

(1) 本丸・東ノ丸の位置と地形的特徴 (第16・18図)

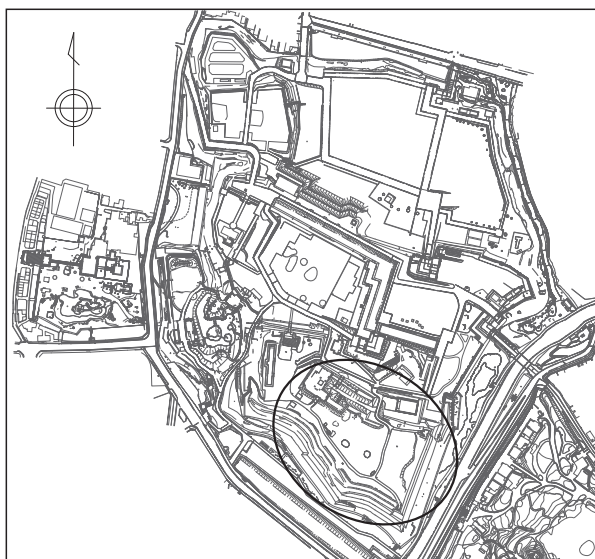
本丸は城郭の南部中央に位置し (第16図)、北西-南東方向に軸をとる長軸約130m、短軸70~100m (現況、近代削平) の略矩形を呈する (第18図)。第2章で言及した通り、金沢城の地形は小立野台地先端部を基盤としているが、本丸は東側に隣接する東ノ丸とともにその根元側を占め、城内で最も高い区域である (標高59~60m前後)。台地先端側 (北西側) の本丸附段とは2~3mの段差であるが、北側段丘崖下との鶴ノ丸とは15m、南側の御花畑とは25m程の比高差がある。東ノ丸は南北に長く、南辺がやや長い台形状の平面形であり、南北約95m (現況、近代削平)、東西約50~70mを測る。東側には大規模な堀切 (蓮池 (百間) 堀) があり、小立野台地本体と分離している状況にある。ただしここにはもともと南から北に開口する谷筋があり、堀切掘削以前から台地本体側からそのまま連続していなかった可能性がある。

平成14年度以降実施した本丸周辺の確認調査 (発掘・ボーリング) により、本丸南側は盛土が薄く、自然地盤 (小立野段丘面) の整形に拠っているが、北側の約90m×40mを測る突出部は、最大厚さ15~17mに及ぶ盛土で造成されていることが判明した [石川県金沢城調査研究所2014d]。

(2) 現況 (第17・18図)

本丸・東ノ丸は、現況では大部分が藪・森林となっている。旧陸軍期以降、大規模な建物が継続的に建設されることがなく、とくに金沢大学期において、植物園として草木の保護が図られたことに起因する。

明治40年 (1907) には、本丸南部大鎬一帯の石垣が崩壊し、修復のため本丸・東ノ丸南面石垣の上部を撤去し、階段状に整形するという大規模な改変が行われた。このため現在の郭南辺は、近世期より幅約15m程度内側に入り込んでいる。同じく旧陸軍期には、本丸北部の一画が掘り窪められ、弾薬庫が造営されている (第17図)。また北東の丑寅櫓台、東辺の中櫓台を除き、郭内の櫓・土蔵等の基礎は撤去され、地表上には認められない。本丸と東ノ丸の間には堀があった (本丸東堀と呼称する) が、これも近代には埋め立てられている。この堀については、後述するとおり、泉水とする史料が存在する。



第16図 本丸・東ノ丸の位置 (S=1/10,000)



第17図 本丸北部の現況 西から

(3) 本丸・東ノ丸の沿革 (第5表)

第5表は、本丸・東ノ丸における普請・作事の記録を中心とした年表である。本丸・東ノ丸が城の中核部であった寛永8年(1631)以前の文献・絵図史料は極めて少ない。ここでは文献・絵図史料の他、周囲の石垣や確認調査で検出した遺構に関する所見〔石川県金沢城調査研究所 2008d・2014d〕を基に沿革について記述し、あわせて時期区分を提示する。

I期 (～1592)

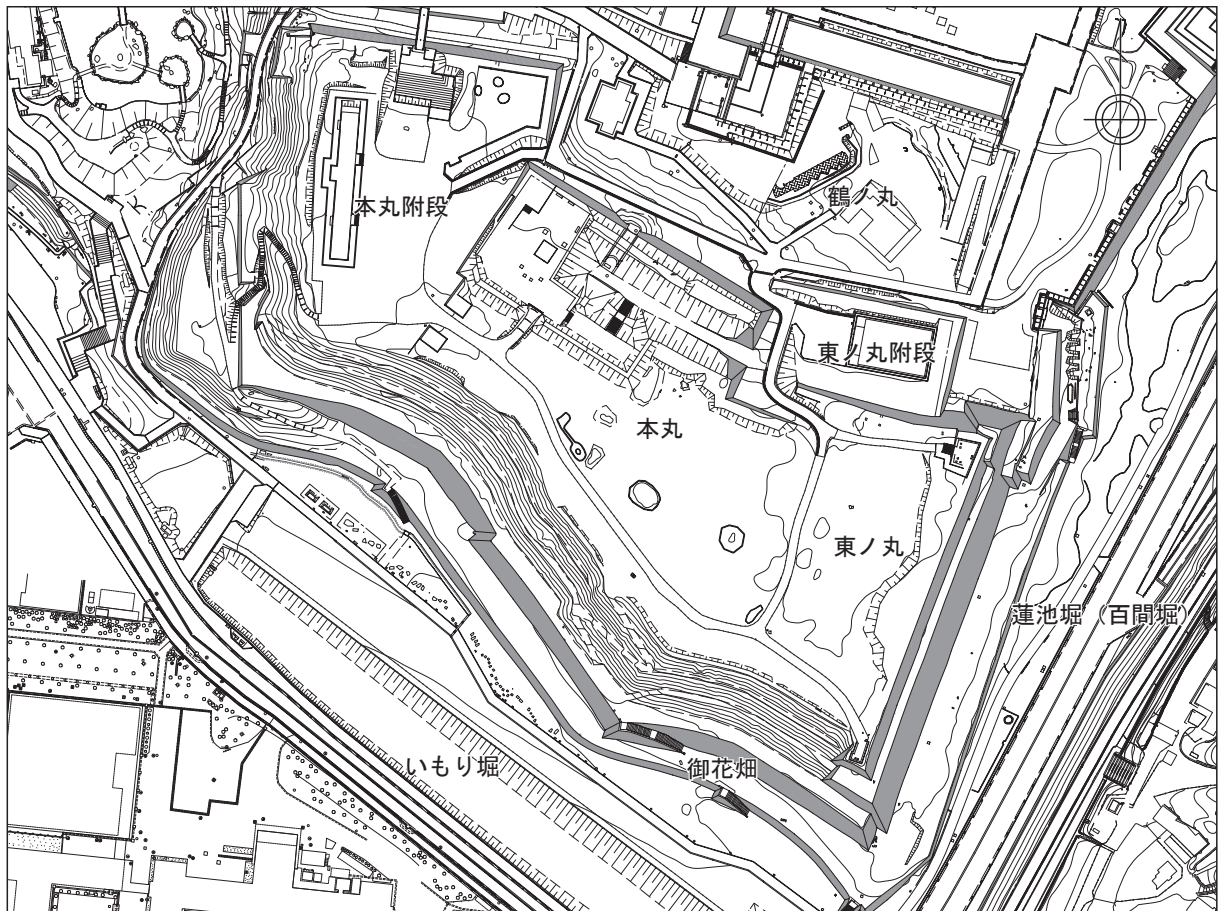
前田利家入城以前については、先行する城主である佐久間盛政による普請の可能性等が推測されるが、17世紀後半成立の「関谷政春古兵談」(石川県立図書館蔵等、『加賀藩史料1』)には、前田氏入城後も金沢御坊(尾山御堂)の殿舎がそのまま使われていたとの記述がある等、不明な点が多い。また遺構についても未確認である。

天正14年(1586)に天守が造営されたことは文献史料から明確で〔見瀬 2000〕、石垣台等に対する一定の普請も伴っていたことが想定される。ただし具体的な位置は判明していない。

II期 (1592～1620)

文禄元年(1592)、東ノ丸(本丸東部)に高さ10mを越える石垣が築造された。一次史料を欠くが、17世紀末成立の「三壺聞書」(石川県立図書館森田文庫)〔石川県金沢城調査研究所 2017b〕に記述があり、現存する石垣の特徴からみても年代に大過ないものと考えられる。また本丸西側にも堀切があり、東側(本丸側)にはほぼ同様の特徴を持つ石垣が備わっていた。この頃以降、大規模な石垣普請が行われるようになったと考えられる。

慶長7年(1602)には天守が焼失し、替わって三階櫓が造営されたが、その位置は本丸と東ノ丸のほぼ中間である。三階櫓の位置以外、郭内の主要建物配置は不明であるが、大手と考えられる出入口



第18図 本丸・東ノ丸全体図

第5表 本丸・東ノ丸関連年表

年号	西暦	事項	時期	史料
天正 14	1586	前田利家、越前国敦賀の高島屋伝右衛門らに対し、金沢城天守建造のための鉄輸送を命じる 「小宮山文書<前田利家朱印状>」(県歴博)[新修七尾市史3]	I 期	
天正 15	1587	南部氏重臣北信愛、金沢城を訪れ、数寄屋や天守等で饗応を受ける 「北信愛覚書」(盛岡市中央公民館等)[瀬戸 2000 * 「北松斎手扣」を底本に翻刻]		21-01
文禄 元	1592	東ノ丸石垣が築造される 「三壺聞書」(県図森田文庫)[石金研 2017b] 他 [加史 2]	II 期	
慶長 7	1602	本丸天守が焼失し、替わって三階櫓が建てられる 「三壺聞書」 他 [加史 2]		
元和 6	1620	本丸表奥方が焼失する 「孝亮宿弥記<前田利常書状(元和六年書状案)>」、「三壺聞書」 他 [加史 2]		
元和 7	1621	本丸を拡張し御殿を再建する 「古ヨリ公儀江被上候御城絵図御国絵図改申品々之帳<酒井忠世ほか老中奉書写/本多正純・土井利勝添状写>」(玉図加越能文庫)[石金調 2003b]	III 期	
寛永 7	1630	小堀遠州配下の庭師賢庭、加賀に下向 「本光国師日記」(金地院)[本光国師日記 5]		21-02
		本丸に露地(庭)・数寄屋を作る 「三壺聞書」		21-03
寛永 8	1631	寛永の大火により本丸御殿焼失、二ノ丸を造成し新たに御殿を造営する 「国初遺文<前田利常書状×酒井忠世他3名連署状>」(加越能文庫)、「三壺聞書」 他 [加史 2]	IV 期	
宝暦 9	1759	宝暦の大火により本丸・東ノ丸の櫓群等も焼失する 「宝暦九年金沢火事之一巻」 他 [加史 8]	V 期	
文化 14	1817	東ノ丸庭園跡地の状況が記載される 「御城高石垣之事等」(玉図後藤文庫)[日本海文化研究室 1976]		21-04 ~ 06

が東ノ丸側にあり、地盤は西側が高いことから、およそ東側が「表」、西側は「奥」と想定される。

慶長 15 年(1610)、加賀前田氏は尾張名古屋城公儀普請を命じられ、今に石垣を残しているが、金沢城において特徴を同じくする石垣が本丸・東ノ丸南面等で見られる。これら慶長後期の石垣は、最も高い箇所でも 20 m を越えて築造された。この頃が織豊系城郭として最も整備された段階と考えられる。

Ⅲ期 (1621～1631)

元和 6 年(1620)、本丸が火災に見舞われたことを契機に、翌元和 7 年(1621)に大規模な修築が行われた。これについては当時の城主(藩主)であった前田利常の普請願いに対する許可を与えた幕府老中奉書(「古ヨリ公儀江被上候御城絵図御国絵図改申品々之帳」所収「酒井忠世ほか老中奉書写」「本多正純・土井利勝添状写」、金沢市立玉川図書館加越能文庫[石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2003b])が伝わる。これには本丸が狭いため、「西北之丸」を取り込みたいとの要望が記されている。先述したように、本丸の北側突出部が盛土で造成されており、また出土遺物から 1620 年前後の施工に矛盾しないことが判明した。史料にみえる「西北之丸」は直接的にはこの部分を指すと考えられる。ただし確認調査の結果から、この時の修築はより広く、本丸北部の東に一段下がって接続する東ノ丸附段の造成、また反対側の本丸西堀の埋め立て、さらに本丸南側の堀の付け替え等、本丸周囲および城郭外周にわたる規模だったと考えられる。

この修築の意義については、とりわけ本丸西堀の埋め立てによく示されている。本丸直近の防衛線を埋め立て、御殿域を拡張している点に、最も防御に適した箇所に城の中枢を置く意義の低下が看取される。Ⅲ期は、城郭の発展方向からすれば、大きな転換期の一つであった。

Ⅳ期 (1631～1759)

寛永 8 年(1631)、城下に生じた火災は金沢城にも延焼した(寛永の大火)。これを契機に二ノ丸を盛土造成により拡張し、本丸から御殿を移すこととなった。本丸では郭周囲の土蔵・番所の他、郭周囲の櫓・門・三階櫓や広間を有する建物が再建されたが空地が目立ち、象徴的な意味はとにかく、実質的な中枢機能はほぼ失った。ただし寛永 20 年(1643)の 4 代藩主前田光高の告諭(「前田貞醇家蔵文書」『加賀藩史料 3』)にあるように、戦時の体制下において防御の拠点とする意識はしばらく維持されていたようである。なお本丸北面等の石垣、本丸附段における長大な石段を伴う出入口等、大規模普請も行われているが、総体としてⅢ期の修築を越えるものではない。

V期（1759～1871）

宝暦9年（1759）に生じた火災（宝暦の大火）で本丸の建物は全焼した。土蔵・番所を除き、櫓群や広間を伴う建物は再建されず、門も簡略な構造となり、本丸は一層の形骸化が進んだと言える。

藩政末期になると、金谷出丸から南土蔵が移される等、新たな動きが見られる。

以上の通り、本丸・東ノ丸については、本書が対象とする庭園の在り方に即して言えば、中枢機能を有していた寛永8年（1631）までが重要となるが、一部の絵図・文献には寛永以後にも「泉水」の記載があり留意される。

2. 庭園に関する資料

（1）遺構（第6表）

本丸北部では、平成16・18～20年度に実施した遺構確認調査により、池遺構2008-1SX01、その関連遺構と推定される2008-2SX01、2008-1SX01の後継である水溜状遺構2007-1SX02を検出した（第6表）。ただしこれらの遺構は旧陸軍弾薬庫の造営により損壊を受けており、弾薬庫法面において土層断面として確認した。2008-1SX01・2008-2SX01はⅢ期、2007-1SX02はⅣ期の遺構である〔石川県金沢城調査研究所2014d〕。

東ノ丸南部では、平成17・26年度に実施した発掘調査や、平成24・25・28年度等を実施したボーリング調査により、Ⅲ期以前の池遺構が確認された（本書第5章）。その跡地は近世を通じ窪地となっていたが、近代にほとんどが埋め立てられた。現状では、東辺の土塁状高まりの一部が築山の名残である可能性があり、周辺がわずかに低くなっている。また景石（福浦石）とみられる石材も存在するが（第31図）、原位置を保持しているかどうかは判然とせず、現地表から庭園の存在は窺い難い。

（2）文献（第7表）

本丸・東ノ丸における庭園に関する文献史料は極めて少ない（第7表）。近世初期（Ⅰ～Ⅲ期）の状況を記すものは3件で、一次史料もしくはそれに準ずるものは21-01・02のみであるが、本丸・東ノ丸を対象とすることも明示されておらず、推測によっている。

「北信愛覚書」（第7表21-01）は天正15年（1587）、陸奥の大名南部氏の重臣で、使者として金沢を訪れた北信愛が、慶長17（1612）年に当時の事績を著した覚書で、原本は昭和20年に戦災で焼失したが、複数の伝本がある。厳密に一次史料と言えないが、瀬戸薫氏の研究によれば、記載内容は別史料ともよく整合しており、信憑性は高い〔瀬戸2000〕。信愛は51日を要して金沢へ到着したのち、創建間もない天守にも案内される等、金沢城主前田利家の歓待を受けた。このうち茶の接待に係り、「御すき屋のろじ（露地）」の状況について短い言及がある。他に庭園に関わる記述は認められない。

近世後期（Ⅴ期）の「御城高石垣之事等」（〔日本海文化研究室1976〕では「高石垣等之事」とする）（21-04～06）は、本丸東堀を泉水として記述する。また東ノ丸南部については、築山の跡や景石が残るとしており（21-04）、庭園廃絶後の状況を示す。

（3）絵図（第8表、第19・20図）

近世初期（Ⅱ・Ⅲ期）の情報を反映した絵図としては、「加州金沢之城図」（第8表・第19図22-01）があるが、庭園については記載されていない。

近世前期（Ⅳ期）の絵図では「金沢城絵図」（22-02）等同種の絵柄をもつ4点において、本丸北西部～東ノ丸にかけて3箇所泉水の記述・描写がある。このうちの一つは本丸東堀で、上記のとおり文献史料においても泉水と記載されている事例がある。本丸北西部の泉水は、確認調査で検出した2007-1SX02に相当するものと考えられる。東ノ丸南部の泉水については、22-02によれば築山とセットで描かれている。また「金沢城東之御丸・御本丸絵図」（第20図22-03）等には、庭園に関する文字記載はないが、東ノ丸南部に広範囲にわたる土羽表現が見られる。近世後期（Ⅴ期）の絵図では「金

第6表 本丸・東ノ丸庭園関連埋蔵文化財調査一覧

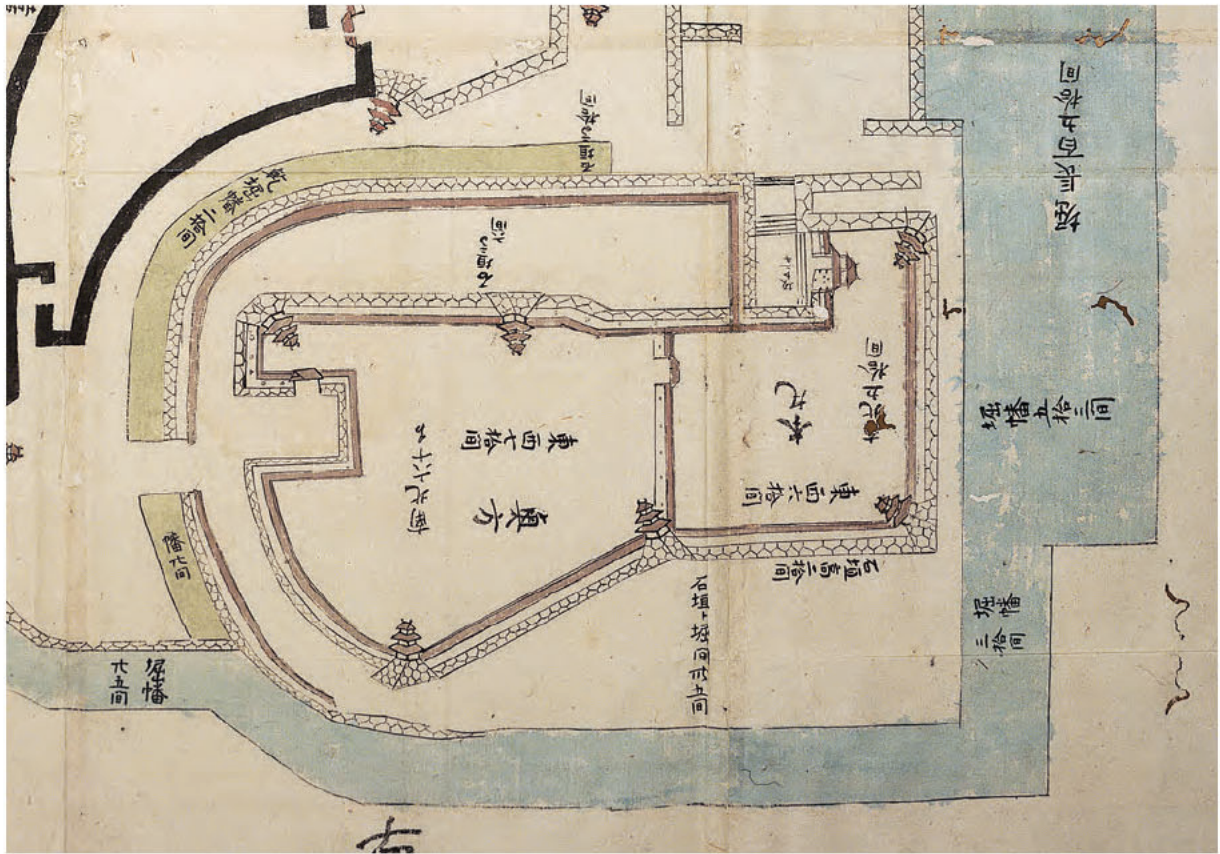
年度	調査形態	調査区	調査地点	遺構
H16(2004)	発掘調査	本丸北部	2004-4	池遺構(2008-1SX01)・水溜状遺構(2007-1SX02)中部
H17(2005)	発掘調査	東ノ丸	2005-7	池遺構(2005-7SX01)南東部
H18(2006)	発掘調査	本丸北部	2006-5	池遺構(2008-1SX01)・水溜状遺構(2007-1SX02)西部
H19(2007)	発掘調査	本丸北部	2007-1	池遺構(2008-1SX01)・水溜状遺構(2007-1SX02)中～東部、 関連遺構(2008-2SX01)
H20(2008)	発掘調査	本丸北部	2007-1 2008-1,2	
H22(2010)	ボーリング調査	東ノ丸	H22-6～8	池遺構北側
H24(2012)	ボーリング調査	東ノ丸	H24-10～12	池遺構周辺
H25(2013)	ボーリング調査	東ノ丸	H25-1～11	池遺構周辺・本丸東堀・東ノ丸東辺
H26(2014)	発掘調査	東ノ丸	2014-1,2	池遺構北西・南東部
H28(2016)	ボーリング調査	東ノ丸	H28-1～4	池遺構周辺

第7表 本丸・東ノ丸庭園関連文献史料

No	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
21-01	天正 15(1587) 4.9	(数寄) (略)又其後、御すき振舞、明日六ツ時と蒙仰二依 (露地) テ、明ル六ツニ罷出、御すき屋のろじのてい、 (交) (飛) 松・杉・竹ヲ植ませて、ろしのとひ石・ (腰懸) (手水) (潜) こしかけ・ちやうつ・水くゝりのてい、なに、 (畳) たとへん事もなし、すきの御座ハ三ちやう敷、 (押) (床) [字] (北欄) おし入のとこ、かけ学ハほつかんの筆、 (奈良風炉) (鶏) (釜) 花いけ在、ならふろことひの子のかま、(略)	北信愛覚書(「北松齋手扣」を底本とし「北松齋覚書」等により校訂)	盛岡市中央公民館(「北松齋手扣」「北松齋覚書」)	瀬戸 2000 P51
21-02	寛永 7 (1630) 4.11	小遠州卯月五日之返書来。泉水之儀。賢庭加州へ下候間。上次第申付候由申来。	本光国師日記	金地院	本光国師日記5
21-03	寛永 7 (1630)	玉泉院様丸御普請之事 (略)此百人者と申者去ル寛永七年ニ御本丸の御露地ニ御数寄屋被仰付、其時御鉄炮之者ノ内を器量能若者共百人すくり、諸ノ足軽役御赦免被成、佃源太郎を頭に被仰付、御前ニて御直に被召仕、(略)	三壺聞書	石川県立図書館 森田文庫	石川県金沢城調査研究所 2017b P137
21-04*	文化 14(1817)	一、東御丸之内築山有之候躰于今石共有之候、(略)	御城高石垣之事等 (御城中御門々名目并御長屋間数等之事)	金沢市立玉川図書館 後藤文庫	日本海文化研究室 1976 P328
21-05*	文化 14(1817)	一、東之御丸御泉水之中シツクイにて堅たるもの也、水抜ヲ付置候者掃除之時之為也、天明年中迄御泉水之上ニ橋有之候、くさり候上不被 仰付候、此橋ハ何ぞ之時入はしや、大獅子御土蔵跡脇ニ築山之跡有之、石も有之候、昔ハ高ク候哉、当時ハ少高ク候、(略)	御城高石垣之事等 (御城中御門々名目并御長屋間数等之事)	金沢市立玉川図書館 後藤文庫	日本海文化研究室 1976 P333
21-06*	文化 14(1817)	一、東之御丸御泉水之水前段ニ調置候通ニ候、同所土御番所前ニ水溜有之、大キニ埋リ居候得共御泉水ノ樋ニ而右水溜ノ御石垣樋江落チ夫ノ欄下樋より落ル相違無之と相見江候、但絵図別ニ有、	御城高石垣之事等 (御城中御門々名目并御長屋間数等之事)	金沢市立玉川図書館 後藤文庫	日本海文化研究室 1976 P337

第8表 本丸・東ノ丸庭園関連絵図史料

図	No	題名	所蔵	請求番号等	作成年次	景観時期等
19	22-01	加州金沢之城図	東京大学総合図書館 南葵文庫	W-20-967		Ⅲ? 寛永 8 年 (1631) 以前の内容含む
19	22-02	金沢城絵図	石川県立歴史博物館 竹下家文書			Ⅳ 金沢城全域図 元禄元年 (1688) 以後 D類
20	22-03	金沢城東之御丸・御本丸絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-26	宝暦 5 年 (1755)	Ⅳ 部分図
20	22-04	金沢城本丸・東丸之図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-27		Ⅴ 部分図 文化 3～天保元年 (1806～30) 頃



加州金沢之城図[東京大学総合図書館蔵] 22-01 III?



金沢城絵図[石川県立歴史博物館蔵] 22-02 IV

第19図 本丸・東ノ丸 絵図1



金沢城東之御丸・御本丸絵図[金沢市立玉川図書館蔵] 22-03 IV



金沢城本丸・東丸之図[金沢市立玉川図書館蔵] 22-04 V

第20図 本丸・東ノ丸 絵図2

沢城本丸・東丸之図」(22-04)にU字状を呈する土羽表現が認められる。

3. 庭園遺構の状況

(1) 本丸

位置と範囲 (第21図)

庭園関連の遺構が検出された箇所は本丸北部で、旧陸軍期弾薬庫東部に位置する。調査地点は2004-4・2006-5・2007-1・2008-1・2008-2地点で、すべて弾薬庫法面上に設定した。なお2008-2地点をのぞく4地点は隣接しており調査の結果一体化している。

遺構の地盤

調査地点一帯は、本来段丘崖の北側にあたり、大規模な盛土造成によって郭が形成された。とくにⅢ期の段階において、本丸南側＝台地本脈と同じ高さに達し、本丸平坦面が拡張された。池遺構2008-1SX01、その関連遺構(排水路)に推定される2008-2SX01は、このⅢ期造成土(2008-2地点ではⅣ層、それ以外はⅧ層)を地盤とする。また水溜状遺構2007-1SX02は、2008-1SX01の埋め立て過程で形成された。

遺構各説

以下の説明は、[石川県金沢城調査研究所2014d]の該当箇所の記述を基とした。

2008-1SX01 (第22・23・25～27図)

[形状・規模]

形状(断面形状)は、緩やかに開く逆台形状を呈する(第22図)。検出最大長(上面東西長)は約22.8mを測る。遺構外基盤面の標高は西側(Ⅶa1・Ⅶa9層等、先行する遺構埋土)で約57.3m、東側(Ⅷ1層)で約56.85mと高低差がある。底面(底部構築造成土上面)は、中央部がやや高く(標高54.78m)、周囲、特に西側がやや低い(54.71m)が、概ね平坦である。遺構掘込面から底面までの深さは約2.1mから2.6m、底面下位掘方までは最大2.7mを測る。

[構築状況]

近世初期の造成土(Ⅷ層、Ⅲ期造成土)とⅧ層上に構築された先行遺構(2006-5SX04・05、2008-1SX06、Ⅶ層)を掘り込んでいる。

逆台形状を呈する遺構掘方の底部は、法面際を除き概ね平坦であるが、その平坦部において東西端部がわずかに低く掘り下げられており、低い部分に厚さ3～7cm程度の黄褐色粘質土(Ⅵb3層、底部構築造成土)が敷かれる。中央部は基盤層(Ⅷ層)上面がそのまま底面となっている。法面際は底面より最大で20cm程掘り下げられ、黄褐色粘質土(Ⅵb3層)・暗褐色粘砂質土(Ⅵa1層)等の充填を受けつつ景石が配置されている。また西側法面の中位から下位にかけて厚さ2～5cm程度の灰白色粘砂質土(Ⅵb1層)が貼られている。

[機能時・廃絶状況]

構築時底面上には東側に褐灰色砂質土(Ⅴ1層)、西側にオリーブ褐色砂(Ⅴ2層)が堆積している。粒子は極めて細かく、土壌分析では川砂とされている。なお粘土質の水性堆積土は見られない。

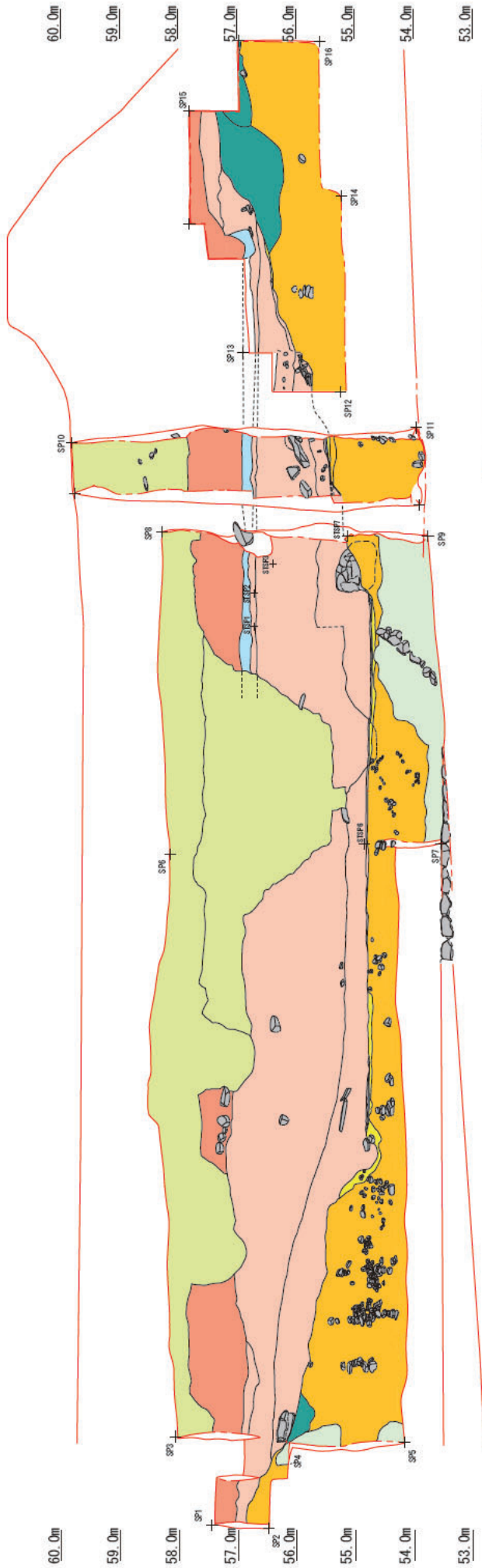
構築時の底面・法面及び流入砂質土上面の一部は赤化し、焼土層(Ⅳe2層)・炭層(Ⅳe1層)にも覆われ、強い熱を受けたことを示す。後述する通り、寛永8年(1631)の大火によると考えられる。

Ⅳ層は掘り込み全体を埋め立てた造成土である(第22・23図)。このうち下層(Ⅳd層)については、Ⅳd1層が何らかの面を構成していると考えられること、Ⅳd15層が「州浜」状に見えること等から、修築を意図した底面の嵩上げである可能性がある。ただし修築があったとしても短期間、あるいは未完成であったと考えられ、火災に遭った後比較的速やかに上層まで埋め立てられたと考えられる。



第 21 図 本丸北部調査区・絵図照合図

(下図)：「金沢城本丸・東丸之図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕22-04〕
〔石川県金沢城調査研究所 2014d〕 第 49 図より転載、一部改変



- | | | | |
|--|-------------------------|--|---------------------------|
| Ia層 | 近代以後造成土等 (表土等) | V層 | 近世初期遺構 (2008-1SX01) 堆積土 |
| Ib・c層 | 近代以後造成土・近世末～近代遺構埋土 | VI層 | 近世初期遺構 (2008-1SX01) 構築造成土 |
| II層 | 近世後期造成土・遺構埋立土 | VII層 | 2008-1SX01に先行する遺構の埋土 |
| III層 | 近世前期遺構 (2007-1SX02) 堆積土 | VIII層 | 近世初期造成土 |
| IV層 | 近世前期造成土・遺構埋立土 | | |



赤丸箇所「御泉水」：2007-1SX02に対応と推定
 (「金沢城絵図」〔石川県立歴史博物館蔵〕22-02)



第22図 2008-1・2007-1・2004-4・2006-5地点 調査地点南壁 (弾薬庫南側斜面) 略断面図
 [石川県金沢城調査研究所 2014c] 第62図より転載・一部改変 (絵図変更)

[景石] (第 23 図)

原位置を保っていた景石 (S01) は、西側法面裾 (2007-1 地点サブトレンチ) の 1 基のみである。長軸約 92cm、幅 58cm 以上、高さ 63cm を測る平石で、黒味があった安山岩 (斜方輝石 - オージェイト - 安山岩、福浦石) である。

掘方は、平面は景石よりやや広がる程度 (長軸 98cm 以上、幅 64cm 以上) で、法面側の深さ 50cm 前後、底面側の深さ 10cm を測る。掘方と景石との間は暗褐色粘砂質土 (VIa1 層) と花崗岩剥片等の根固め石で充填されている。法面裾・底面際という設置位置から、護岸石としての機能も考えられる。

反対側の東側法面裾 (2008-1 地点) においては、景石自体は遺存していなかったが、その抜取痕及び掘方 (景石 S02) を確認した。またこの他景石の抜取痕と見られる遺構を 3 基検出した。

[出土遺物] (第 27 図)

本遺構出土遺物の特徴として、多種多様な岩石片がある。岩石種名が明らかなものとして、①溶結凝灰岩 (坪野石)、②黒雲母 - 花崗岩、黒雲母 - 花崗閃緑岩、角閃石 - 黒雲母 - 花崗閃緑岩 (滝石)、③細粒砂岩、④斜方輝石 - オージェイト - 安山岩、⑤含かんらん石 - 角閃石 - 斜方輝石 - オージェイト - 安山岩等がある。

①は円柱形や方形の石造物の破片 (第 27 図 S001・S004)、②③④は景石等の破片 (② S009、③ S007)、⑤は板石状を呈するもの (第 26 図①) が主体である。いずれも石造物や景石等、庭園での使用に関連する石材と判断され、使用事例は玉泉院丸庭園等、城内でも限定されている。このうち①の円柱形の石材は、灯籠の竿、あるいは石橋の橋脚の一部等の可能性が考えられる。また⑤の板石は、玉泉院丸庭園での検出例では、園路の敷石 (飛石) として利用されている。

ほとんどが埋立土 (IVc・d 層) からの出土で、景石 S01 を例外として原位置を保っていない。この他少量ではあるが、同じく IVc・d 層から 17 世紀初期のものと見られる陶磁器・瓦が出土している。

[遺構の性格]

本遺構は大規模な窪み (掘り込み) で、底面と法面との境に景石と見られる大型の自然石が配置されている点、さらに原位置を保っていないが、玉泉院丸庭園等使用事例の限定される多種類の岩石片・石造物片が出土している点などから、庭園に伴う池 (園池) と判断される。東西法面裾の景石 (東側は掘方のみ遺存) は護岸石とも考えられ、法面の傾斜角も景石の高さ前後において変換しているため、汀線はこの辺りに想定され、その場合水深は 50cm 程度となる。

ただし、埋土には水性堆積層が認められず、湛水していた明確な証拠は認められない。また底面・法面には、強い熱を受け赤化した箇所が多く、この上位には黒色粘質土 (炭) 層 (IV e1 層) が薄く堆積しており、水の無い状態で火災に遭遇したと考えるのが妥当である。

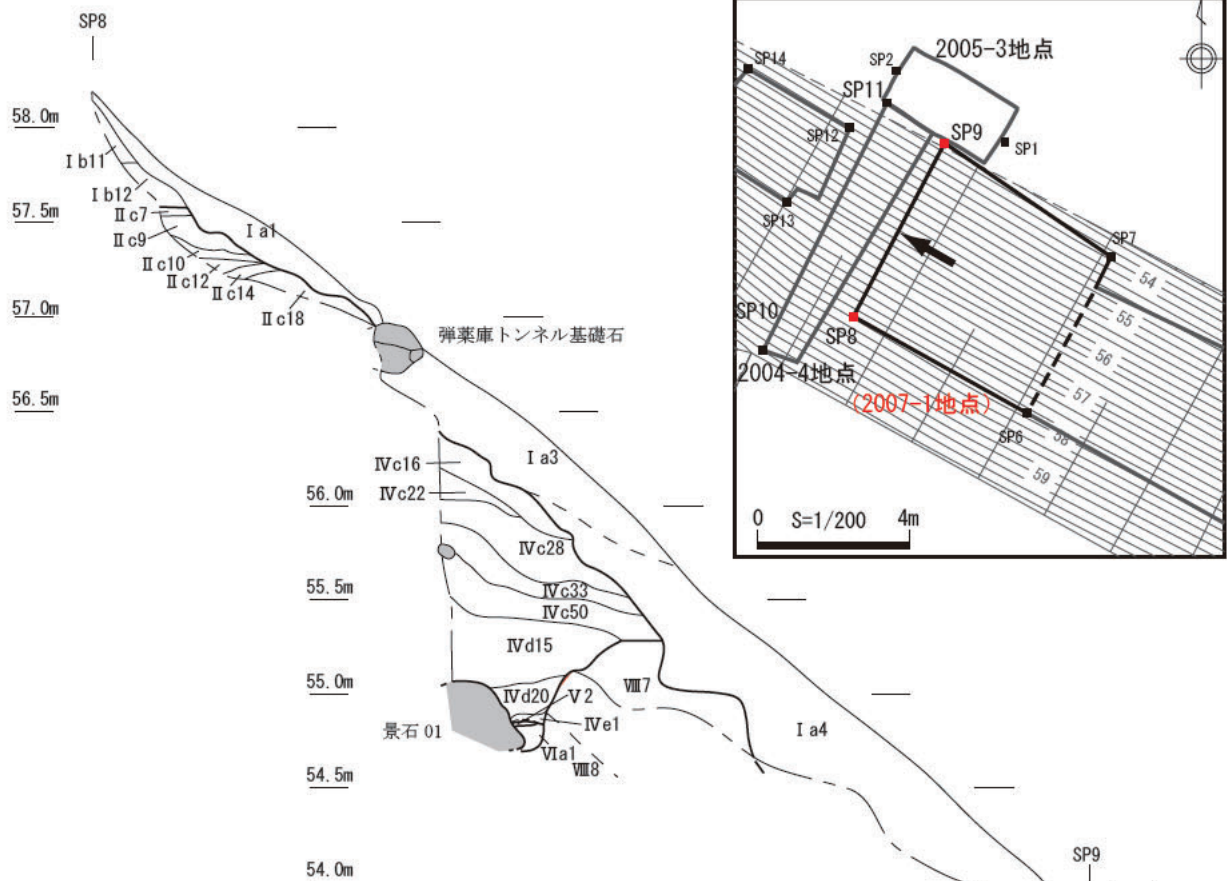
[遺構の年代]

本遺構の基盤面が元和 7 年 (1621) の造成であることから、構築はこれ以後であり、更に先行する遺構を切っていることからすれば、造成直後よりある程度年数の下った頃が想定される。

本遺構の上位にある 2007-1SX02 が宝暦 9 年 (1759) 大火で廃絶している一方、本遺構自体も強い熱を受けている。出土遺物の年代観も考え合わせると、本遺構が被った火災は寛永 8 年 (1631) の大火とするのが妥当である。寛永 8 年の大火後、御殿は本丸から二ノ丸へ移されている。本遺構についても、比較的短期間のうちに埋め立てられたと推測される。

2008-2SX01 (第 24・26 図)

2008-2 地点西端で検出した。(Ⅲ期造成度、当該地点では IV 層) を基盤とする遺構である。遺構の西側は調査地点外に延びており、全容は不明であるが、長さ (幅) 1.35m 以上を測る。確認された東側掘方は垂直に近く、壁際が底面中央側より低く掘り込まれている。標高は、掘込面 56.4 m、底面東側最深部 54.62 m、底面中央側 55.09 m である。深さは東側壁沿いで 1.78 m、中央側 (調査地点



- I a : 近代以後造成土等 (表土等)
 I a 1 10YR2/3 黒褐色粘～砂質土 (表土)
 I a 3 10YR3/4 暗褐色粘質土 (径10cm程度の礫や板石が多く混じる、弾薬庫トンネル基礎埋土層)
 I a 4 10YR3/4 暗褐色粘質土 (弾薬庫トンネル基礎埋土、下部は公園整備時安定処理)

- I b : 近代以後造成土 (弾薬庫造成土)
 I b11 2.5Y5/6 黄褐色粘質土 (締まり悪く緩んだ状態、焼土塊多く混じる)
 I b12 2.5Y5/6 黄褐色粘質土 (I b11層よりも暗い色調、焼土塊多く混じる、礫少ない)

- II c : 近世後期造成土・遺構埋土 (宝暦9年 (1759) 大火片付層)
 II c 7 10YR4/4 褐色粘～砂質土 (焼土・焼土塊多く混じり赤味帯びる、砂質傾向強い)
 II c 9 10YR4/6 褐色粘質土 (円礫・焼土塊多く混じる、赤味帯びるが一部黄色土混じる)
 II c10 7.5YR4/4 褐色粘～砂質土 (焼土・焼土塊多く混じり赤味帯びる)
 II c12 10YR4/4 褐色粘～砂質土 (焼土・炭多く混じり赤味帯びる)
 II c14 10YR4/4 褐色粘～砂質土 (焼土塊極めて多く混じる)
 II c18 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土

- IV c : 2008-1SX01埋土土上層
 IV c16 10YR4/3 褐色粘～砂質土 (IV c15層より砂質強く、粘り少ない)
 IV c22 10YR4/3 にぶい黄褐色粘～砂質土 (砂質土が多く、粘り少ない、混入物も少ない)
 IV c28 10YR4/4 褐色粘～砂質土 (明黄褐色粘土ブロック多く混じる)
 IV c33 10YR3/4 暗褐色粘質土 (大型の礫 (花崗岩、板石等) 混じる、黄褐色・暗褐色粘土塊多く混じる)
 IV c50 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘～砂質土 (粘性弱い)

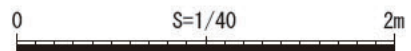
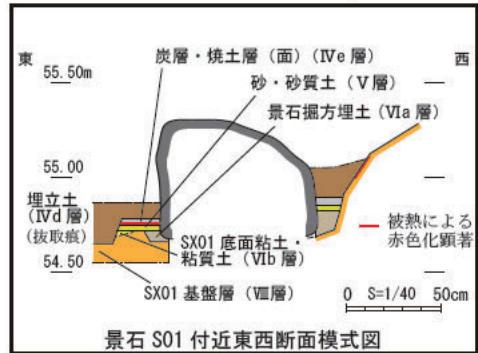
- IV d : 2008-1SX01埋土土下層
 IV d15 7.5YR4/6 褐～暗褐色粘質土・砂質土 (円礫・板石層主体、景石付近は円礫層主体 (粒径上部1cm前後、中部3～5cm、下部10～20cm主体))
 IV d20 2.5Y5/6 黄褐色粘質土 (炭若干混る)

- IV e : 2008-1SX01底面付近黒色土 (炭層)・焼土層
 IV e 1 2.5Y2/1 黒色粘質土 (非常に粒子が細かい炭層、糞灰状の繊維が見られる、本層直下は被熱によって赤色化し、石材薄片が散在する)
 (IV e 1・V 2層に覆われた景石表面は平滑だが、それより上部の面は荒れている)

- V : 2008-1SX01堆積土
 V 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂 (上面が被熱で赤色化)

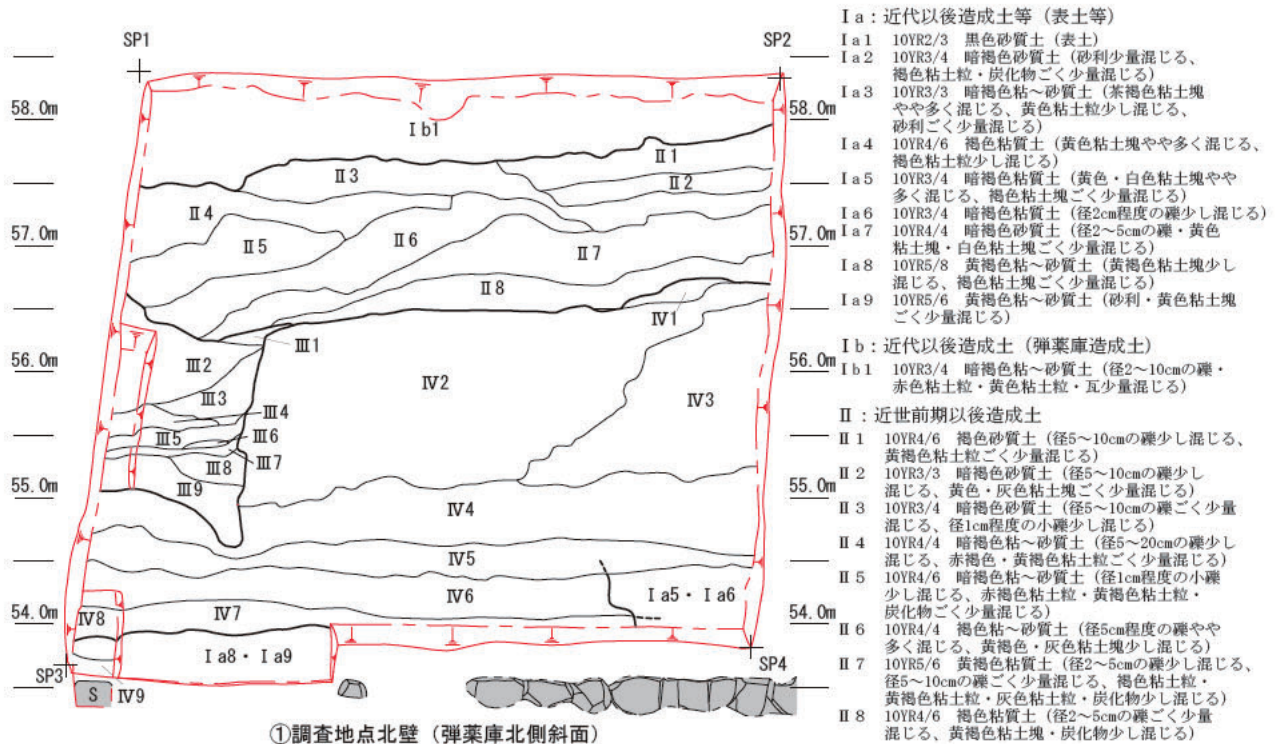
- VI a : 2008-1SX01構築造成土 (景石掘方埋土)
 VI a 1 10YR3/3 暗褐色粘～砂質土 (砂粒混じり、粘り少ない、炭化物やや多く混る、根固岩石片入る)

- VII : 近世初期造成土
 VII 7 10YR6/8 明黄褐色粘質土 (径2～3cmの礫多く混じる、粘性強く締まる、景石掘方掘削面一部被熱により赤化)
 VII 8 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (炭若干混じる)



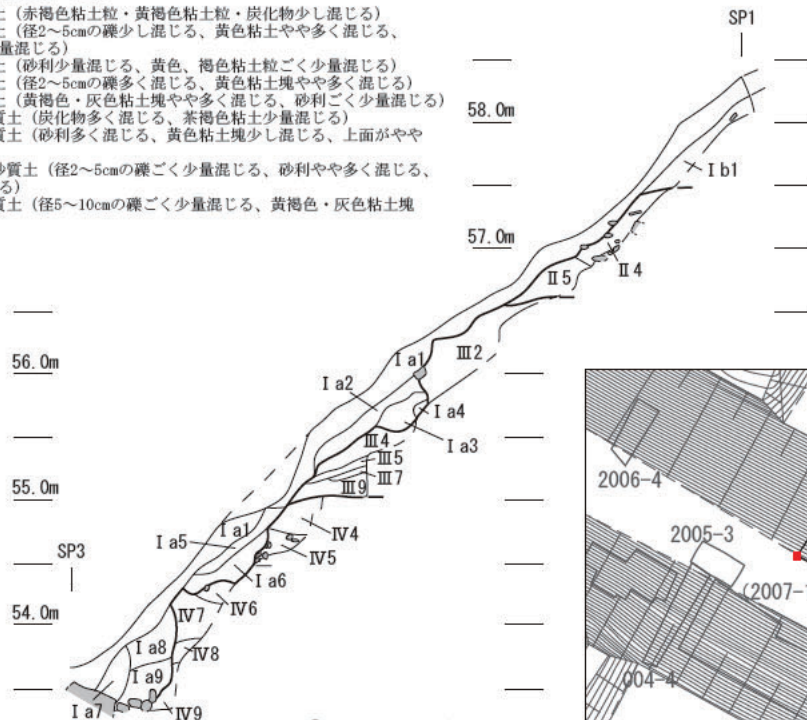
第23図 2007-1地点 調査地点西壁断面図・景石 S01 付近東西断面模式図

[石川県金沢城調査研究所 2014d] 第61,64図より転載・合成

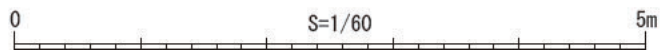
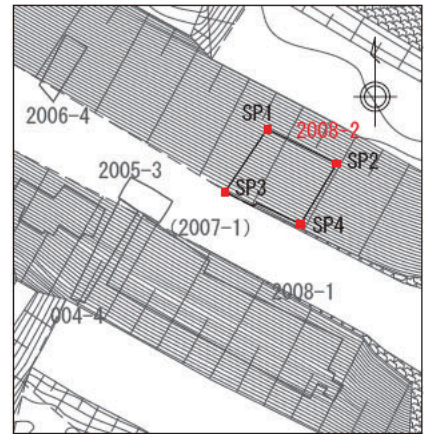


①調査地点北壁 (弾薬庫北側斜面)

- III: 近世初期遺構 (2008-2SX01) 埋土
- III 1 10YR4/3 暗褐色粘質土 (赤褐色粘土粒・黄褐色粘土粒・炭化物少し混じる)
 - III 2 10YR3/4 暗褐色粘質土 (径2～5cmの礫少し混じる、黄色粘土やや多く混じる、赤色粒・炭化物ごく少量混じる)
 - III 3 10YR4/4 暗褐色砂質土 (砂利少量混じる、黄色・褐色粘土粒ごく少量混じる)
 - III 4 10YR3/4 暗褐色粘質土 (径2～5cmの礫多く混じる、黄色粘土塊やや多く混じる)
 - III 5 10YR3/4 暗褐色粘質土 (黄褐色・灰色粘土塊やや多く混じる、砂利ごく少量混じる)
 - III 6 10YR2/2 黒色粘～砂質土 (炭化物多く混じる、茶褐色粘土少量混じる)
 - III 7 10YR5/8 黄色粘～砂質土 (砂利多く混じる、黄色粘土塊少し混じる、上面がやや赤褐色がかる)
 - III 8 10YR3/3 暗褐色粘～砂質土 (径2～5cmの礫ごく少量混じる、砂利やや多く混じる、黄褐色粘土塊少し混じる)
 - III 9 10YR4/4 褐色粘～砂質土 (径5～10cmの礫ごく少量混じる、黄褐色・灰色粘土塊少し混じる)



②調査地点西壁



第24図 2008-2地点 調査地点北壁 (弾薬庫北側斜面)・西壁断面図

[石川県金沢城調査研究所 2014d] 第67図より転載

西辺)で1.31 mを測る。

埋土については、上部に斜めに落ち込む層が見られるが、概ね水平気味に堆積する。暗褐色粘質土が主体で、黒色土・黄色土が部分的に認められる。出土遺物には17世紀初頭頃の陶磁器、板石が認められる。

本遺構はⅢ期造成土から掘り込まれている点や、板石が出土している点等から、弾薬庫南側の法面で検出した2008-1SX01とほぼ同時期に存続した可能性が考えられる。断面形状がかなり異なり、また底面(中央部側)の標高が本遺構の方が高いこと等、同一遺構の一部とは考え難いが、排水路等付属施設である可能性については検討に値する。

2007-1SX02 (第22・23・26図④)

2007-1 地点・2004-4 地点・2006-5 地点で検出した。

[形状・規模]

幅に対して浅いが、ほぼ垂直に立ち上がる断面形状を呈する(第22図)。東側は後世の遺構によって損壊を受けており、遺存部分の幅は7.48 m(復元最大約11.5 m)である。高さは上部造成土(Ⅳa2層)から底面(底打ち粘土=Ⅳb6・Ⅳb7層上面)まで75cmを測る。上部造成土の標高は57.55 m、底面の標高は56.8 mである。

[構築状況]

下層の池遺構(2008-1SX01)を埋め立てる過程で構築されている。池遺構を高さ2/3程度まで埋め立てた時点で、埋立土上面を平坦に均し、その上に灰白～褐灰色粘土を主体とする土(Ⅳb4～Ⅳb7層、厚さ13cm前後)を敷いて底面とする。底面は検出できた範囲ではほぼ東西・南北ともに水平に整えられている。西壁面(側面)の位置は2008-1SX01法面上面(西側)から1.14 m内側とし、この間について、下部埋立土と類似の土(Ⅳb2・Ⅳb3層)で埋めつつ、これを裏込め土とし、一番内側に明黄褐色粘質土(Ⅳb1層)を垂直気味に積み壁面本体としている。

[機能時・廃絶状況]

底面を形成するⅣb層の上位には、暗灰褐～灰黄褐色系統の腐植質土を主体とする堆積層(Ⅲ層)が認められる。Ⅲ層の上位は、暗赤褐色・暗褐色・褐色・にぶい黄褐色土が互層状に堆積する(Ⅱc層)。全体に焼土・溶解した鉛瓦(礫等に付着)・腰瓦等が多く混じっており、火災後の片付けを示す土層と判断される(第22・23図)。なお廃棄土層Ⅱc層は、本遺構外側(西側)基盤面上位にも及び、本遺構は郭全体の嵩上げ造成により埋め込まれた状態となっている。

[出土遺物]

Ⅲ層・Ⅱc層から瓦を中心とした遺物が出土している。Ⅱc層では、溶解した鉛が付着した腰瓦の他、18世紀中葉頃の京・信楽系陶器小片等が見られ、宝暦9年(1759)の大火に伴う片付けを示唆している。

[遺構の性格]

平坦で均質性の高い粘土・粘質土を底面に貼っていることから、本遺構は水を溜める機能を有していたと考えられるが、底面上位の堆積土については、土壌分析の結果珪藻の十分な活動が認められなかった(第5章第5節2)。常時は湛水していなかったのかも知れない。護岸については、壁面を構成する粘質土下部がややえぐれていることから、当初は何らかの施設(板列等)があったのかも知れないが明確ではない。

本遺構と概ね合致する位置に、方形の区画を描き「御泉水」と記載する絵図が知られており(第22図)、庭園に付随する園池とも受け取れる。しかし景石(破片)等庭園に係る遺構・遺物が確認されていない点を含め、本地点下部の池状遺構(2008-1SX01)・玉泉院丸庭園の池等とは差異が目立つことから、水溜としての機能を優先的に想定したい。



①2008-1・2007-1地点 全景 (2008-1SX01東・中部) 北西から



②2004-4地点 全景
(2008-1SX01中部)



③2006-5地点 全景 (2008-1SX01西部)

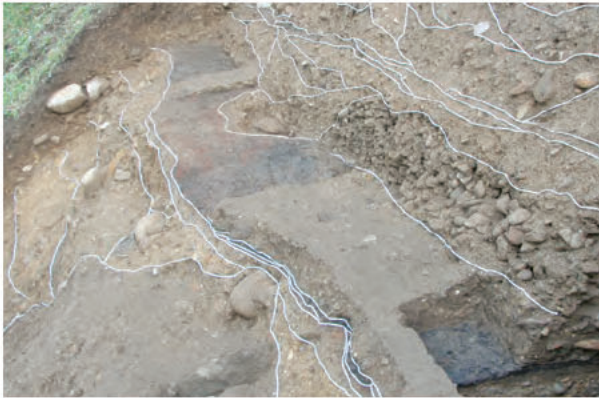
第 25 図 本丸北部庭園遺構写真 1



①2008-1地点 2008-1SX01 底面東端



②2007-1地点 景石S01



③2007-1地点 2008-1SX01 底面 西から

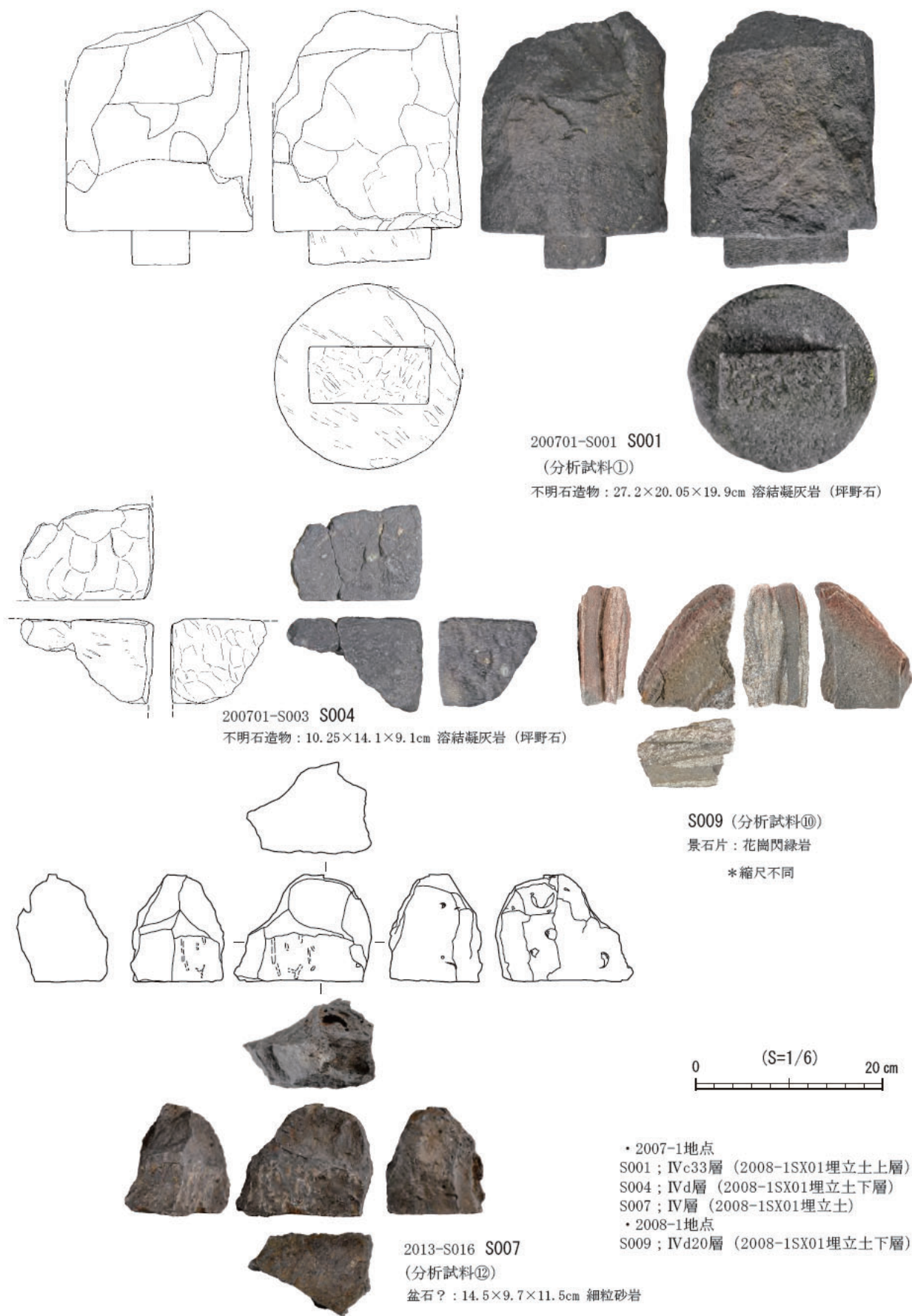


④2006-5地点 2007-1SX02 西半



⑤2008-2地点 全景 (調査地点北壁)

第 26 図 本丸北部庭園遺構写真 2



[石川県金沢城調査研究所 2014d] 第 123・124 図、写真図版 77・78 より転載・加筆

第 27 図 2008-1SX01 (本丸北部池遺構) 出土石造物等

(2) 東ノ丸

東ノ丸の庭園遺構については、本書第5章で詳細に触れているので、ここでは概略のみ記述する。

東ノ丸南部において、発掘調査・ボーリング調査により池遺構が検出されている。東西長軸 50 m 前後、南北幅約 30 m の規模が推定される。南東部では東ノ丸東辺の土塁状高まりを利用する形でやや高い斜面が造成され、景石が配置されていた。本丸の庭園と同じく、板石が大量に出土しており、周囲にはこの石材を用いた園路が巡っていたと思われる。

築造時期は、慶長7年(1602)頃から元和6年(1620)頃までの間と推定され、廃絶は寛永8年(1631)の大火が契機になったと判断される。また廃絶後も近世を通じ窪地として名残を留めていた。

この他、本丸との境をなす本丸東堀について、ボーリング調査の結果から、中央以南に比べ北端部が浅いことが判明した(第5章第3節)。北端部には折れがあって木橋が架かり、本丸東堀を泉水と記した文献・絵図があることと関連して、水溜・池といった機能も想定される。

4. 各時期の様相

I 期

本期の庭園様相に関する資料は、「北信愛覚書」(第7表 21-01)に見える「御すき(数寄)屋のろじ(露地)」の記載のみが知られている。天正15年(1587)4月9日、南部家の使者である北信愛は金沢城内の御数寄屋で茶の接待を受けた[瀬戸 2000]。信愛は付随する「ろじ(露地)」について、松・杉・竹といった植栽、飛石・腰懸・手水・水潜り等の景物を挙げて賞賛している。後代の加賀藩の史料では、「露地」を広く庭の意味で用いる事例があるが、ここでは記述の内容から、茶室・茶屋に付属する茶庭のことと判断される。

北信愛は、この他にも、観能、茶道具拝見、鷹狩・網漁・馬場・天守の見物等多くの饗応を受けているが、当該露地以外、庭園に関する記述はない。当時の城内に、茶庭以外の庭園が存在したかどうかは不明であるが、遠来の客をもてなすことを第一義としたものは備わっていなかった可能性がある。なおここで記されている御数寄屋・露地が、城内のどこにあったのかは明記されておらず、前後の脈絡からも特定は難しいが、城主の居宅エリアと目される本丸付近にあった可能性が考えられる。

II 期 (第 28 図)

第 28 ~ 30 図は、平成 14 年度からの確認調査等で得た所見の他、現況地形や絵図の描写を勘案し作成した、II・III・IV 期の本丸一帯の遺構等の配置図である。このうち、II・III 期は同時代の精度の高い絵図が欠けており、推定部分が多くなっている。

II 期(第 28 図)においては、庭園に関する資料は判然としない。東ノ丸南部の庭園遺構の造営年代は、2014-2 地点の調査により慶長7年(1602)の本丸火災を遡らないと推定しており、この点で本期に属する可能性もあるが(A)、積極的な根拠は得られていない。

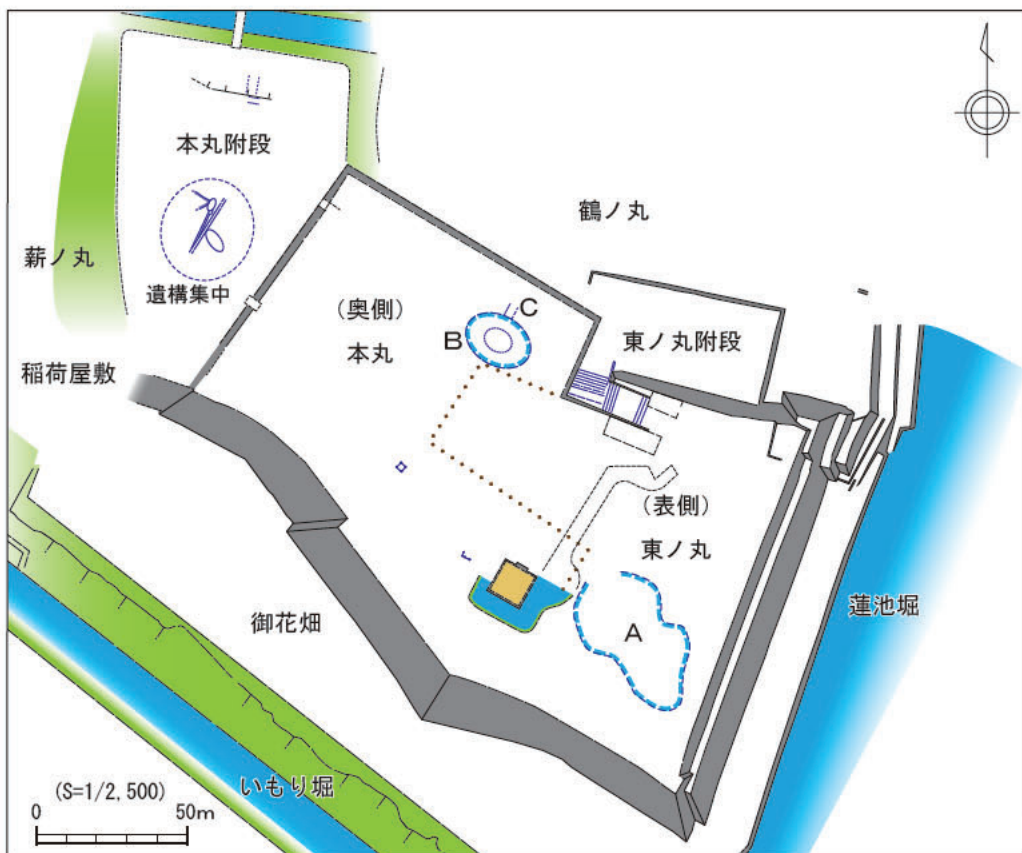
III 期 (第 29 図)

本期は本丸北部が造成により拡張された時期で、この造成面に池(2008-1SX01)が構築される(B)。平面形は不明であるが、東西立ち上がりの間は約 23 m を測り、ある程度の規模を有していた。東ノ丸南部についても、全容は明確ではないが、長径約 50 m 前後、短径約 30 m 前後の池が存在した(A)。

このように III 期においては池庭が主体となっているが、常に水が張られていたとの根拠は得られていない。ただし本丸北部では、2008-1SX01 に隣接し、排水溝の可能性のある遺構 2008-2SX01 (C) が存在していること等から、必要に応じて水が汲み入れられた可能性がある。池やその関連遺構以外については、多量の板石の出土から、園路が巡っていたことが想定できる他、東ノ丸においては池の東側に、郭東辺石垣背後の土塁状高まりを利用し、築山を設けていたとみられる。池の埋土の状況から、南側にも築山があった可能性があるが、明確ではない。



第 28 図 本丸・東ノ丸Ⅱ期遺構等配置図



第 29 図 本丸・東ノ丸Ⅲ期庭園構成要素等配置図

*第 28～30 図
 現況地形・検出遺構・絵図（「金沢城中地割絵図」「金沢城本丸・東丸之図 (22-04)」[金沢市立玉川図書館蔵]、
 「金沢城絵図 (22-02)」[石川県立歴史博物館蔵]）等を調整・勘案して作成
 堀は空堀の可能性も含め水色で表現

建物については、三階櫓や発掘で検出された礎石建物の一部が知られるのみであり、配置や構成も判然としないが、むしろ庭園の位置から考えて、本丸では庭園の南西側、東ノ丸では庭園の北側に、主要な建物が存在したと思われる。また郭の出入り口の位置と周辺の状況、地盤の標高分布から、およそ本丸西側が「奥」側、本丸東側～東ノ丸が「表」側と推測される〔石川県金沢城調査研究所2014d〕。この観点からすれば、本丸北西部の池遺構2008-1SX01は「奥」に、東ノ丸南部庭園遺構は「表」に属すると見做される。

文献史料では、本期の庭園に係るものが2点あり、互いに関連している可能性がある。ひとつは「本光国師日記」寛永7年4月11日の条（第7表21-02）で、京都南禅寺の金地院崇伝が小堀政一（遠州）に庭園修築を依頼したところ、配下の庭師である「賢庭」が加賀に下向しており、戻り次第対応するとの返答を得たという内容で、〔下郷1997〕〔長山2006〕等では次に紹介する史料21-03との対比から、賢庭の向かった先は金沢城本丸であるとの見解を示している。

史料21-03は、「三壺聞書」に見える一件で、寛永11年（1634）の玉泉院丸庭園築造に藩主の直属として活躍した「百人組」の起源が、寛永7年（1630）の「御本丸の御露地に御数寄屋被仰付」という出来事を背景としていたことが記されている。ここでの「露地」は、この前後で触れられている玉泉院丸築庭について「御露地出来」等と表現していることから、茶庭に限定せず庭一般のことを指すと思われる。また百人組の存在からみても、寛永7年（1630）に数寄屋のみならず露地＝庭園自体が造営されたとみるのが妥当のようである。

本史料には京都の庭師である賢庭に係る記述はないものの、先の一件と一体の事柄である可能性があり、いずれにしろ寛永8年（1631）の前年に、庭普請があったと考えられる。遺構との関わりでは、庭園遺構2008-1SX01との対比が留意される。2008-1SX01は、第Ⅲ期の遺構であることは確実であるが、先行する遺構を切って構築されているので、第Ⅲ期当初から存在したとは考え難い。また火災を受けた段階で部分的に未完成であった可能性も一応は考えられることもあり、寛永7年（1630）の庭普請史料との整合性は検討に値する。

Ⅳ期（第30図）

寛永8年（1631）の大火で、本丸北部の2008-1SX01は被災し、底面や法面の一部に強い被熱痕が残り、炭化物層も形成されたが、池内部・底面付近は整った印象であり、おそらくある程度の片付けが行われたと推定される。また埋め立てを受ける前に、景石が幾つか抜き取られたと思しい。

埋立土下層の段階は、若干嵩上げの上、改修を意図した作業である可能性もあるが明確にできない。あまり間を置かず施されたと考えられる埋立土上層と一体的に2007-1SX02が築造される。遺構としては断面のみで検出したため、底面・壁面を粘土・粘質土で固めた浅い凹型の形状であることは判明したが、平面形状の詳細は不明である。

「金沢城絵図」（第8表・第19図22-02）には、「御泉水」と記載された、南側の一辺に階段をそなえた方形区画（第30図B）が描かれていて、2007-1SX02と合致するものと判断される。前項で指摘した通り、絵図の描写・遺構の特徴ともに、鑑賞を主体とした池とは見做し難いが、寛永8年（1631）の大火後の絵図には、「広間」等と記載された、御殿の一部分だけを独立させたような建物（C）が認められ、互いに関連をもって造営された可能性がある。

東ノ丸南部の池もまた埋め立てられたが、前述の通り痕跡が窪地となっていた（第30図A）。絵図22-02では、「泉水」としてなお機能しているように描かれているが、「金沢城東之御丸・御本丸絵図」（第20図22-03）では略方形の区画程度として描く。なお22-02では、東ノ丸南部の他に、本丸との境をなす堀（本丸東堀）をも「泉水」と記載する。この堀の北端部は複雑な平面形を呈し、木橋が架かる等の特徴があった（第30図D）。また前述したように、堀中央部以南に比べ、底面のレベルが浅い。このように北端部に関しては、庭園に通じる要素が窺えるが、不明な部分も多い。



第30図 本丸・東ノ丸IV期庭園構成要素等配置図

V期

宝暦9年(1759)の大火後、本丸北部の2007-1SX02は焼土が多く混じった土等で埋め立てられ、かつての庭園の系譜を引く構造物は廃絶した。本丸全体においても建物は全て焼失し、わずかに番所や三十間長屋(文化3年・1806)が再建された。このように本丸北部においては、近世後期に至って庭園の名残・痕跡も失われることとなった。

東ノ丸では、南部の池遺構は窪地のまま推移しているようである。「御城高石垣之事等」(第7表21-04・21-05)では、当時の庭園跡地の様子を記述し、築山の痕跡や景石とみられる石材に言及している。なお東ノ丸については「泉水」との文言もあるが(21-05・21-06)、木橋が安永年間(1772～81)まで架かっていたが腐朽したことを記しているのも、本丸東堀を指していると考えられる(21-05)。ここでは「泉水」の底面が漆喰打ちであり(21-05)、排水は東ノ丸北面の石樋に至る(21-06)との認識を示しているが、実態を把握しているのか、考証なのか判然としない。また「泉水」と記述しているとは言え、庭園の構成要素として扱えるかどうかは検討の余地がある。

5. 小結

本丸・東ノ丸の庭園については絵図・文献史料に乏しく、ほとんど不明であったが、平成17年度からの埋蔵文化財確認調査によって、Ⅲ期以後の実態の一端が明らかになった。

(1) 変遷過程

変遷については、まずⅠ期(天正期)の露地=茶庭から、Ⅲ期(元和・寛永期)の池庭への変化傾向が想定される。ただし前者が真に本丸もしくは東ノ丸に存在したのか、またⅡ期の庭園が不明であること等課題も多い。

第9表 本丸北部調査区主要遺構計測表

+ : 残存値 () : 復元値

遺構名	全長(幅)	深さ		掘込面・底面標高	長(幅)
2008-1SX01	22.8 m	2.1 ~ 2.6 m	東側法面	56.85 m	6.6 m
			西側法面	57.3 m	7.2 m
			底面	54.71 ~ 54.78 m	9.0 m
2007-1SX02	7.48+ m	0.55 m		57.55 m / 56.8 m	
2008-2SX01	1.35+ m	1.31 ~ 1.78 m		56.4 m / 54.62 ~ 55.09 m	

[石川県金沢城調査研究所 2014d] 第8表より抄出・転載

Ⅲ期の池庭は、本丸・東ノ丸それぞれに存在した。前者が御殿奥側、後者が表側に伴うと推定される。二つの庭園はともに、寛永8年(1631)大火後、あまり間を置かず廃絶に至った。本丸から二ノ丸へ御殿が移った後に、庭園が単独で残ることがなかったということであり、それだけ御殿と庭園は一体的で、むしろ御殿とともに庭園の移設が図られたとも言える。ただし二ノ丸御殿の場合、表側に池庭を伴うことはなかった。なお、本丸・東ノ丸庭園には、寛永9年(1632)に開設された辰巳用水のような給水施設が配備されていなかったと考えられ、この点も存続しなかったことと関連するのかもしれない。



第31図 東ノ丸に残る景石 北西から

池庭廃絶後の状況は、本丸と東ノ丸とで異なる。本丸北部ではほぼ平坦に均され、平面形状としては痕跡を留めなくなったが、埋め立てと一体的に水溜状の遺構 2007-1SX02 が築造されている。なお本丸北部東辺は、Ⅲ期に比べやや西側に狭められていることが確認調査により判明しており [石川県金沢城調査研究所 2008d]、石垣の様式からみても、付近一帯は全体的な普請が行われていた。御殿表側の一部を抽出した形の建物「広間」を中心に、西側(本丸附段側)を正面とし、象徴的な空間として改めて整備され、池庭部分の平坦化や 2007-1SX02 の構築もその一環であったと推定される。2007-1SX02 は、底面の状況等から、実質的に水溜としての機能を有していたとみられるが、再生した本丸西部・北部自体の性格からすれば、庭園跡の象徴としての意味合いも持っていた可能性も考えられる。しかし宝暦9年(1759)の大火後は、広間ともども廃絶し、番所・倉庫等が置かれるのみの空間となった。

東ノ丸では、埋め立ては行われたものの、池跡は窪地として痕跡を留めていた。本丸西部・北部とは異なり、寛永大火後は当初から土蔵等が立ち並ぶ空間として再生したとみられ、その点では、辰巳櫓等を失った宝暦9年(1759)の大火以後も変わらなかったが、庭園跡地としての認識は不明瞭ながら後代まで残ったようである。なお、Ⅳ期以後の本丸東堀について「泉水」とする史料があり、確かに北端部の平面形や底面のレベル等、通常の堀とは異なる状況がみられるが、南部の池跡との関連を含め、詳細は不明な所が多い。

(2) 構成要素の特徴－石材－

本丸・東ノ丸の庭園の構成要素のうち、景石については、戸室石(角閃石安山岩)、福浦石とみられる安山岩、板状節理の発達した安山岩、滝石(花崗岩・花崗閃緑岩)等が利用されていた。また本丸では、石造構築物の部材として、坪野石(溶結凝灰岩)も用いられていた。これらは玉泉院丸庭園にもみられるもので、近世初期の景石の組み合わせが、金沢城庭園の特徴として継承されていることが明らかとなった。

第3節 二ノ丸

1. 概要

(1) 二ノ丸の位置と地形的特徴 (第32・34図)

二ノ丸は金沢城の中央西寄りに位置する (第 32 図)。主要部は、標高 49～50 mを測る平坦面で、西側に数寄屋屋敷 (標高約 46 m) が付属する (第 34 図)。金沢城は小立野台地先端部の段丘面を整地して現在の郭面を造成しているが、二ノ丸は主に東側に盛土を行い、平坦面を形成していると考えられる [石川県金沢城調査研究所 2015c]。

二ノ丸は、主要部が東西 200 m、南北 140 m程の長方形、数寄屋屋敷が南北 80 m、東西 50 m程の三角形状を呈している。北側、東側は内堀を介して三ノ丸に、南東側は鶴ノ丸に面しており、これらの郭より 5 m程度高い。南西側は玉泉院丸に、西側は外堀 (いもり堀北端) を介して松原屋敷に面し、それぞれより 16 m・25 m程度高い。南側については内堀 (空堀) を挟んで本丸附段に面するが、これより 5 m程度低い位置にある。

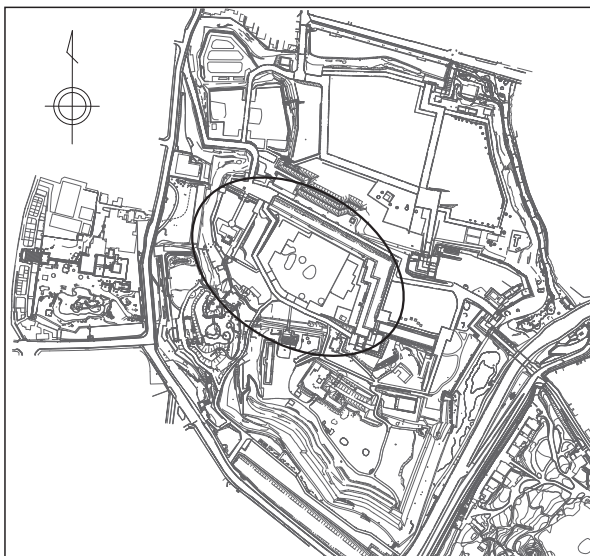
(2) 現況 (第33・34図)

明治初年から昭和 20 年 (1945) までは、陸軍の拠点であり、二ノ丸主要部には陸軍第九師団司令部庁舎、数寄屋屋敷には歩兵第六旅団司令部の庁舎が建てられた。昭和 24 年 (1949) に開学した金沢大学のキャンパスとなった後は、順次、近代的な校舎に建て替えられ、東側の五十間長屋横に図書館、北側の内堀に沿って法文学部の校舎が建設された。おおよそ殿舎の主要部から外れた位置に校舎が建っていた。数寄屋屋敷の歩兵第六旅団司令部の庁舎はそのまま利用された。

金沢大学は平成 5 年 (1993) に金沢市郊外の角間地区へ移転し、平成 8 年 (1996) に跡地を県が取得し、都市公園として整備することになった。二ノ丸においては、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等が復元整備され、橋爪門、裏口門、いもり坂、風呂屋口門、切手門、数寄屋門を結ぶ園路が整備された。また、二ノ丸の殿舎があった場所は、広場として整備され、表玄関周辺は絵図を元に、建物の外郭状に舗装されている。また、平成 27 年 (2015) には、橋爪門と升形が復元されている (第 33 図)。

(3) 二ノ丸の沿革 (第10表)

二ノ丸の沿革については、[木越 2004]、[石川県金沢城調査研究所 2008d・2009b] 等に詳しく、ここではそれらに寄りつつ、主に殿舎の構成変化に着目して、二ノ丸全体の時期区分を設定する。



第 32 図 二ノ丸の位置 (S=1/10,000)



第 33 図 二ノ丸の現況 東から

I 期（～1631）

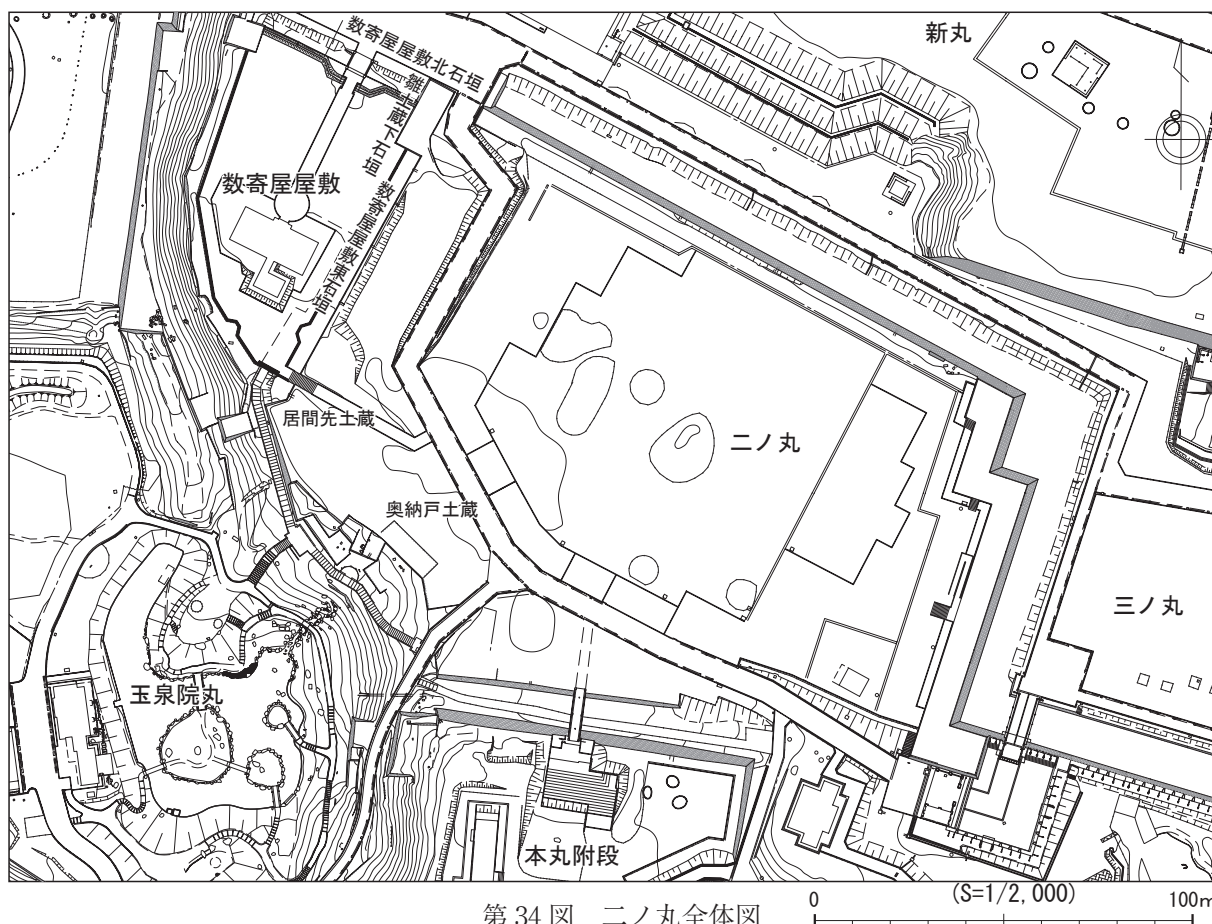
寛永8年（1631）の二ノ丸御殿造営以前を一括する。初期金沢城の二ノ丸には、家臣の屋敷地があったとされる。また、慶長20年（1615）には江戸より帰国した芳春院の屋敷が建てられ、寛永8年3月10日には、二ノ丸で能興行があり、能舞台があったとされる（「三壺聞書」石川県立図書館森田文庫〔石川県金沢城調査研究所 2017b〕）が、詳細は不明である。

II 期（1631～1759）

寛永8年（1631）に二ノ丸御殿が造営され、宝暦9年（1759）の大火で焼失するまでの時期。寛永8年4月14日に金沢城下で発生した火災により本丸をはじめ城の中心部が焼失した。この火災後、二ノ丸の拡張が行われ、二ノ丸・三ノ丸を画する内堀が整備され、二ノ丸御殿が造営された。その後、御殿は藩主の代替り時などに増改築が行われた。

寛永8年に二ノ丸御殿は造営されたが、造営時の3代藩主前田利常や4代藩主前田光高の時期の御殿の様子を具体的に伝える史料は伝わっていない。寛文元年（1661）に5代藩主綱紀は初入国するが、前年の万治3年（1660）に二ノ丸御殿の普請が行われており、これは御新宅を造営するなど規模の大きいものであった（「御横目書付留帳」金沢市立玉川図書館加越能文庫）。現存する最古の絵図は、この時以後のもので、絵図に元禄年中迄の写しであること、居間廻、小書院の建替前であると記され、後述の元禄の普請前の絵図と考えられるものである（第16表・第37図 32-01）。

元禄7～8年（1694～95）、元禄9～10年（1696～97）にかけて、二ノ丸御殿の普請が行われ、居間廻や御広式を中心に造営された。また、この普請の時に数寄屋屋敷に部屋方が増築された。この普請の状況を示す絵図がある（第37図 32-02）。



第10表 二ノ丸関連年表

年号	西暦	事項	時期	史料
寛永 8	1631	二ノ丸に御殿が新たに造営される 「上樞家文書<寛永一二年御公儀従郡中江御取替指引帳>」(県図写真帳)、「国初遺文<酒井忠世他3名連署状>」(玉図加越能文庫)他[石県教1991a]	II 1期	
寛永 16	1639	二ノ丸に三間の厩が造営される 「夜話」(県図森田文庫)	II 2期	
万治 3	1660	二ノ丸御殿の作事が行われる 「御横目書付留帳」(加越能文庫)		
寛文 元	1661	5代藩主前田綱紀初めて金沢城に入る 「管網記<前田綱紀書状写>」(加越能文庫)他	II 3期	
貞享 3	1686	前田綱紀、金沢城内「御新宅」を絵図の通り修理するよう命じる 「前田貞親手記」(加越能文庫)		
元禄 9	1696	二ノ丸御殿の普請が行われる 「菅君雑録」(加越能文庫)他	II 4期	
享保 9	1724	6代藩主前田吉徳初めて金沢城に入る 「中川長定覚書」(加越能文庫)他		
享保 10	1725	勝丸(吉徳嫡男、後7代藩主宗辰)、金谷御殿御広敷より二ノ丸広式へ移徒する 「中川長定覚書」他		
享保 12	1727	二ノ丸居間廻の作事、居間先露地の普請が行われる 「中川長定覚書」他	II 4期	31-02 ~ 05
享保 19	1734	金谷御殿広式の普請が出来し、二ノ丸の広式より勝丸と生母が移徒する 「中川長定覚書」、「遠田日記」(加越能文庫)他		
宝暦 7	1757	10代藩主前田重教、藩主として初めて金沢城に入る 「御親翰写<前田重教書状写>」(加越能文庫)	III 1期	
宝暦 9	1759	宝暦の大火により、二ノ丸御殿全焼する 「宝暦九年金沢火事之一巻」[加史8]		
宝暦 11	1761	二ノ丸の殿閣再造に着手する 「筒井菖記<本保十太夫他連署状>」(加越能文庫)他		
宝暦 13	1763	前田重教、二ノ丸御新殿に入る 「政隣記<村井又兵衛書状>」(加越能文庫)他[加史8]		
明和 8	1771	11代藩主前田治脩、藩主として初めて金沢城に入る 「太梁公日記」(前田育徳会)[太梁1]他	III 2期	
安永 2	1773	金沢城二ノ丸御殿大式台・虎之間等、修営の工事に着手する 御居間先に塚、用之間横庭に庭籠と泉水、寝間の土縁側に鞠場が設けられる 「太梁公日記」[太梁3]他		
天明 元	1781	二ノ丸広式の修理が行なわれる 「政隣記」[加史9]	IV 1期	
天明 8	1788	居間廻、広式の修理が行われる 「文化消失以前二ノ丸之図」(加越能文庫)		
享和 2	1802	12代藩主前田斉広、藩主として初めて金沢城に入る 「政隣記」他[加史11] 金沢城二ノ丸御殿と金谷御殿の広式を交換する 「斉広様御伝略等之内書抜」[加史11]		
文化 5	1808	文化の大火により二ノ丸御殿焼失する 二ノ丸御殿造営工事に着手する 「政隣記」他[加史11]	IV 1期	31-20 ~ 27
文化 6	1809	前田斉広、二ノ丸御殿に移る(中奥付近のみ落成) 「政隣記」他[加史11]		
文化 7	1810	二ノ丸御殿の造営完了する 「御造営方日並記」(加越能文庫)[石金調2005b]他		
文政 元	1818	寝所、居間の改変が行われる 「清水又十郎相続以来二ノ丸造営其他主付御用の時拝領目録」(玉図清水文庫)	IV 2期	
文政 3	1820	勝千代(のちの13代藩主前田斉泰)、二ノ丸居間書院に移る 「官私随筆」(加越能文庫、玉図奥村文庫)「斉広様御伝略等之内書抜」他[加史12]		
文政 5	1822	12代藩主前田斉広が隠居し、竹沢御殿に移る 「官私随筆」他[加史13]	IV 3期	
文政 7	1824	13代藩主前田斉泰、藩主として初めて金沢城に入る 「官私随筆」他[加史13]		
弘化 4	1847	松之間の普請が成就し、斉泰の子、基五郎(後の12代大聖寺藩主前田利義)、豊之丞(13代大聖寺藩主前田利行)が移る 「官事拙筆」(玉図奥村文庫)	IV 4期	
嘉永 6	1853	二ノ丸御殿奥向き修築に伴い、御寝所前に新たな庭が築造される 御数寄屋先二枚開き前の御庭に腰掛が設けられる 「見聞袋群斗記」[加史藩末上]	IV 4期	31-37
安政 元	1854	真龍院が松ノ御殿(金谷)より二ノ丸へ移る 「御用方手留」(奥村文庫)[加史藩末上]		
安政 3	1856	真龍院の古稀の賀を行う 「見聞袋群斗記」[加史藩末上]		31-38
文久 元	1861	二ノ丸御殿御居間先に噴水が設けられる 「御用方手留」[加史藩末上]	IV 5期	31-39
文久 3	1863	前田斉泰正室溶姫、江戸より金沢へ移り、御守殿が造営される 真龍院は異御殿に移る 「御用方手留」他[加史藩末上]		
元治 元	1864	溶姫、金沢城より江戸に移る 「御用方手留」他[加史藩末下]		
慶応 2	1866	前田斉泰が隠居し、金谷御殿へ移り、14代藩主前田慶寧が二ノ丸御殿に入る 「諸事留牒」[加史藩末下]		
慶応 3	1867	御居間先に角場(射的場)が設けられる 「御家録方調書」[加史藩末下]		31-40
明治 元	1868	奥向と居間廻りの建て接ぎが行われ、翌2年には奥部分の普請が出来、庭も出来る 「成瀬正居日記」(金附図)		
明治 2	1869	前田慶寧、二ノ丸御殿から本多資松の屋敷に移る 「見聞袋群斗記」[加史藩末下]	V期	

享保11～13年(1726～28)頃に、6代藩主前田吉徳の初入国時に御居間廻の作事、御居間先御露地の普請が行われた(「護国公年表」「中川長定覚書」加越能文庫)。この時期の景観を描いた絵図は金沢城全域図が3種類(第37図32-03・第38図32-06他)、二ノ丸御殿図が2種類(第37図32-04他)ある。金沢城全域図の32-03と二ノ丸御殿図の御居間周辺に若干差異があり、藩主の入国前に補理や作事を行ったとする文献があり、御居間廻の部分的な普請・作事が行われていた。

以上のとおりⅡ期は4期に区分することができ、小期間の実年代は普請・作事記録に基づき、①寛永8年～万治3年(利常、光高期)、②万治3年～元禄9年(綱紀前期)、③元禄9年～享保12年(綱紀後期)、④享保12年～宝暦9年(吉徳～重教期)の各期である。

Ⅲ期(1759～1808)

宝暦9年(1759)の大火後から文化の大火で焼失するまでの期間。宝暦9年4月、城下で発生した火災により、金沢城も本丸、二ノ丸、三ノ丸などの主要部分が焼失した。二ノ丸御殿は宝暦13年(1763)までに裏式台、御居間廻り、御広式、部屋方が再建された。

安永2(1773)年、大式台・虎之間が造営され、11代藩主前田治脩により御居間先に泉水等が整備された(「太梁公日記」(公財)前田育徳会)。天明7年から8年にかけて、御居間辺、御対面所辺の住居替が行われ、二ノ丸西側に位置する菱櫓、五十間長屋、橋爪門が再建された(第38図32-07他)。

宝暦の大火からの再建は、何度にもわたって増築・改築が行われており、普請の経緯や構成に不明な点が多く、更なる細分の余地はあるが、安永2年の大式台・虎之間再建を区切りとして、①宝暦9年～安永2年(重教期)②安永2年～文化5年(治脩期・斉広期)と区分する。

Ⅳ期(1808～1869)

文化5年(1808)の大火から明治2年(1869)に最後の藩主14代前田慶寧が二ノ丸御殿を退出するまでの期間。文化の大火からの再建にあたっては、御造営方役所高島厚定の日記「御造営方日並記」(加越能文庫)[石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004b・2005b]に詳しい。また、文化再建中、再建直後の二ノ丸御殿を描く絵図が最も多い(第39図32-09他)。文化9年(1812)に二ノ丸御殿の造営は終了するが、その後も御広式二階部分の増築など御殿の改修は逐次行われた。

文政元年(1818)に御寝所補理、御居間御住居替が行われた(「清水又十郎相統以来二ノ丸造営其他主付御用の時拝領目録」金沢市立玉川図書館清水文庫)。この時期に御寝所付近に二階が設けられ、御風呂屋が数寄屋屋敷の方へ下りたものと推測される。文政3年(1820)に12代藩主前田斉広世子前田斉泰が二ノ丸御殿に相殿することになり(「斉広様御伝略等之内書抜」、「官私随筆」金沢市立玉川図書館奥村文庫・加越能文庫)、補理が行われているが(第39図32-10)、その痕跡は後出する絵図には確認できない。文政5年(1822)に12代藩主前田斉広は家督を前田斉泰に譲り、竹沢御殿に隠居し、文政7年(1824)に13代藩主前田斉泰が藩主として二ノ丸御殿に入る。この頃の二ノ丸御殿を描く絵図には、文政13年(1830)作成の金沢城全体を描く良質な史料がある(第40図32-14)。

弘化4年(1847)に斉泰の子、基五郎(後の12代大聖寺藩主前田利義)、豊之丞(13代大聖寺藩主前田利行)のために松之間を奥向に取り込む普請が行われた(「官事拙筆」奥村文庫・加越能文庫)。奥向の対面所から表向の松之間を結ぶ廊下ができ御殿空間の利用方法を変えるものであった。この頃の二ノ丸御殿は、嘉永3年(1850)に改正された金沢城全体を描く絵図(第41図32-20)と、同時期の二ノ丸御殿の屋根伏せ図付の詳細な間取図(第42図32-22)に描かれる。

嘉永6年(1853)に御広式・御奥御居間・部屋方が修築され、御寝所前に新たな庭が築造される(「見聞袋群斗記」)。御居間廻周辺の形状が大幅に変更となったことが絵図で確認できる(第42図32-23・24)。

文久3年(1863)、13代藩主前田斉泰正室浴姫が江戸より金沢へ移ることになり、御守殿が造営された。御居間廻の御居間等、表向の松之間、牡丹之間、御楽屋、御能舞台等を御広式に取り込み、

修繕が行われたものであった（「見聞袋群斗記草稿」加越能文庫）。慶応2年（1866）、13代藩主前田齊泰は世子前田慶寧に藩主の座を譲り、金谷出丸に隠居した。

以上のとおりⅣ期は5期に区分することができ、小期間の実年代は、普請・作事記録に基づき、①文化6年～文政元年（文化期）②文政元年～弘化4年（文政～弘化期）③弘化4年～嘉永6年（嘉永期）④嘉永6年～文久3年（安政～文久期）⑤文久3年～明治2年（文久～明治）の各期である。

V期（1869～1881）

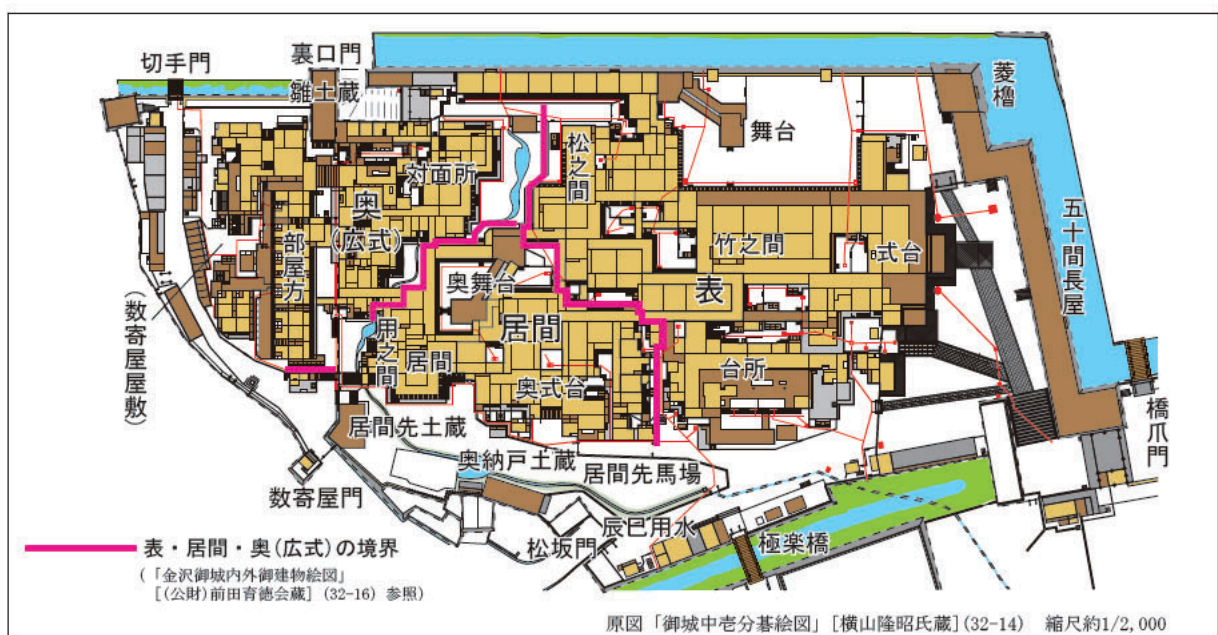
明治2年（1869）に最後の藩主14代前田慶寧が二ノ丸御殿を退出し、金沢藩管理の後、明治4年（1871）に兵部省（のち陸軍省）の所管となり、明治14年（1881）に二ノ丸御殿が焼失するまでの期間。明治3年（1870）年11月から竹之間を兵隊屯所にするための修理が開始され、順に改修・改造が行われた。ここでは、二ノ丸御殿が本来の役目を終えた期間として一括しているが、管理者・転用の状況によってはさらなる区分が可能であるかもしれない。明治5年（1872）の二ノ丸御殿を描いた絵図があり、兵舎に転用されつつある状況が確認できる（第42図32-27）。

二ノ丸御殿の構造

上記のように、二ノ丸には、Ⅱ期以降、藩主在国中の居宅であり、政務が執り行われた御殿が置かれた。第35図（原図「御城中壺分基絵図」32-14）は、Ⅳ2期、文政8～13年（1825～30）頃の内容を描いた絵図を原図とするものである。

二ノ丸の外周には門、櫓、土蔵が配置されていた。門は6か所あり、三ノ丸からの大手筋に位置する橋爪門、本丸附段と二ノ丸を結ぶ極楽橋詰に位置する御門、玉泉院丸から松坂を上った所に松坂門、同じく玉泉院丸から松坂を途中で分岐して数寄屋屋敷南側の出入口に数寄屋門、土橋門周辺の三ノ丸との出入口に裏口門、三ノ丸と数寄屋屋敷との出入口に切手門があった。なお、数寄屋屋敷に御広式が増築される前は、裏口門が切手門と呼称されていた。櫓、土蔵、長屋は、西側に菱櫓・五十間長屋、橋爪櫓、本丸附段側には長屋、玉泉院丸側に土蔵、北側に御楽屋長屋が配置されていた。前中期には、南側に馬場が設けられていた。

殿舎は二ノ丸の中央に位置し、その機能から「表向」「（御）居間廻」「奥向（広式、部屋方）」の三つに分けられる。「表向」は藩士の政務や儀礼の場であり、正門（橋爪門）側である東側に配置された。「居間廻」は藩主の執務場所や日常生活の場であり、中央の南側に配置された。「奥向」は子女の生活

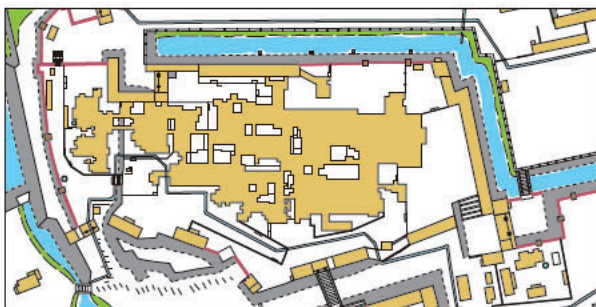


第35図 二ノ丸殿舎配置（Ⅳ2期）

した広式や奥女中の生活空間である部屋方であるが、これらは西側に配置された。元禄以降は、御部屋方は一段下がった数寄屋屋敷に配置されている。

本書で問題とする庭園は、以降の項で詳細に触れていくが、「居間廻」「奥向」の南側に設けられている。また、庭園の修築・管理等に三十人組が携わることが多いが、三十人組の詰所は、極楽橋手前の埋御門西側に位置する。天保～弘化年間に奥御納戸御土蔵が建てられたため、それ以降は埋御門東側に移転している。

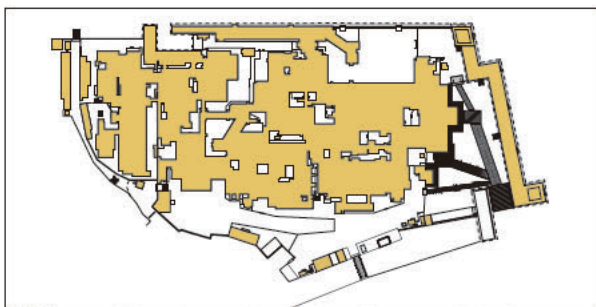
時期によって、御殿の平面形に変遷がみられ（第36図）、IV期の一時期には、「表向」「居間廻」の一部が「奥向」に取り込まれることがあるものの、「表向」「居間廻」「奥向」のおおよその位置に変動はない。二ノ丸御殿の殿舎の基本配置には通底していると言える。



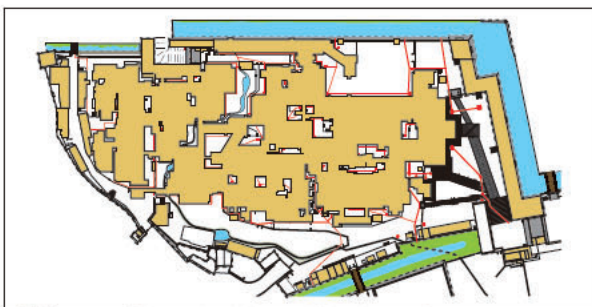
II 4 原図「金沢城図」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-03



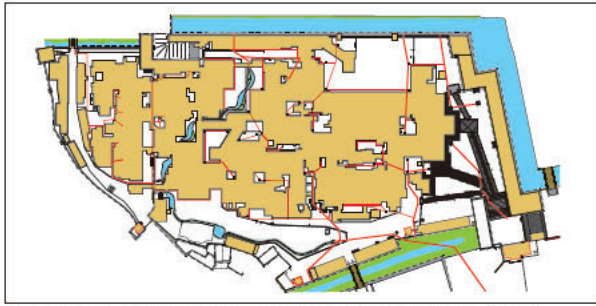
III 原図「二之丸御殿并御広式御絵図」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-07



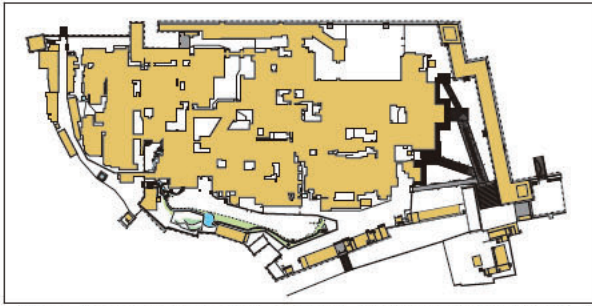
IV 1 原図「金沢城二ノ丸絵図面」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-09



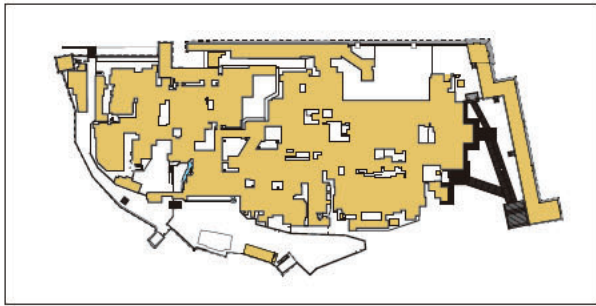
IV 2 原図「御城中老分基絵図」[横山隆昭氏蔵] 32-14



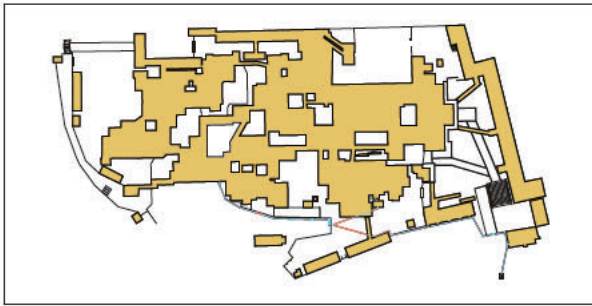
IV 3 原図「御城分間御絵図」[(公財)前田育徳会蔵] 32-20



IV 3 原図「金沢城二之御丸三步基図」B [石川県立図書館蔵] 32-22



IV 4 原図「二ノ丸御殿図」[青硯文庫蔵] 32-24



V 原図「金沢城廓内絵図面」[石川県立図書館蔵] 32-27

第36図 各時期の二ノ丸御殿（縮尺約1/4,000）

2. 庭園に関する資料

(1) 遺構

二ノ丸の庭園は、兵部省の管轄になってもしばらく維持されていたようであるが（本節4）、やがて廃絶したと思しく、現況では地表上に明瞭な地割は認められず、数寄屋屋敷東側の石垣・石樋等が関連遺構として残るのみとなっている。なお二ノ丸は昭和43・44・52年（1968・69・77）、平成11・13年（1999・2001）の各年度に発掘調査が行われている（第2章第3節）が、庭園に関連するとされる遺構は、昭和44年度の調査で検出された木樋のみである〔井上1969〕。ただしこれに関しては問題もあり、後述する。また平成24年度のボーリング調査では、絵図に描かれた二ノ丸居間先の池に相当する地点で、関連すると思われる土層が検出されている〔石川県金沢城調査研究所2015d〕。

(2) 文献（第11～15表）

藩主、藩士の日記や職務記録等の一次史料が主体であるが、一部編纂物所収の記事にも依拠している。近世前期（Ⅱ期）では、「中川長定覚書」（第11表31-02～05）があり、庭園関係施設等の造営の記事が確認できる。近世中期（Ⅲ期）では、11代藩主前田治脩の日記である「太梁公日記」（第12表31-07～第13表31-19）がある。明和8年（1771）4月から安永4年（1775）4月までの40冊が前田育徳会尊経閣文庫に所蔵されており、そのうち1～26冊（明和8年（1771）4月～安永3年（1774）2月）が翻刻、刊行されている。庭園に関する記事は、初入国時の明和8年8月～安永元年（1772）7月までは数件程度であるが、安永2年8月の入国以降は、泉水、鞠場、庭籠の普請、稽古、乗馬などの記事が多くみられる。

近世後期（Ⅳ期）の「御造営方日並記」（第13表31-20～27）は、文化5年（1808）の二ノ丸御殿焼失後、再建のために設置された御造営方役所の奉行高島厚定によって書かれた日記で、文化6年正月（第一冊）から文化7年6月（第十五冊）の記録が現存している。二ノ丸御殿再建にあたって、資材調達、職人動員の状況など御殿再建の過程や建物の飾り、内装、襖絵など内部構造を具体的に窺い知ることができる史料である。文化6年2月～10月にかけて、泉水や御露地に関する記事がみられる。その他、幕末期の「見聞袋群斗記」（第14表31-32・37・38）、「御用方手留」（奥村文庫・加越能文庫、第14表31-39、第15表31-41・43）などに庭園の築造に関する記述がみられる程度である。

使用に関する史料は前期のものはほとんど確認できず、Ⅲ期の「太梁公日記」には、藩主や家臣の武術の稽古、鳥の飼育に関する記事など、庭園の具体的な利用方法について、克明に描かれている。Ⅳ期では断片的に確認でき、12代藩主前田斉広が平民身分の高齢者を謁見した件（第13表31-29）、13代藩主前田斉泰の弟延之助が泉水で小舟を流して遊んだ件（第14表31-33）、斉泰が庭に新しく出来た腰掛で夕焼けを楽しんだ件（31-37）、真龍院の古稀の賀に送られた亀が御座之間の前之御庭御泉水中へ放され、真龍院が御慰に日々御覧になった件（31-38）、14代藩主前田慶寧が御居間先角場で稽古を行わせた件（第14表31-40）などが確認できる。

(3) 絵図（第16・17表、第37～42図）

近世前期（Ⅱ期）の庭園を描く絵図は2種類あるが、泉水を表現するのみである（第16表、第37・38図32-03～05）。近世中期（Ⅲ期）の庭園を描く絵図は1点あるが、泉水とともに区画線が引かれ、塀で仕切られた小庭園であることがわかる（第16表・第38図32-08）。近世後期（Ⅳ期）には、庭園本体を描く絵図は多く、中には構成要素が写実的に描かれるものもあるため、庭園景観の様相を具体的に知ることが可能である。また二ノ丸数寄屋屋敷の庭園景観を描いた絵画も2点知られている（第16～17表、第39～42図32-09～24、第60図32-25、第61図32-26）。

第11表 二ノ丸庭園関連文献史料 1

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
31-01	寛永15(1638) 12.7	(略) 一、こゝもと当年ハ一たん(一段)雪もなく、のとか 二候、一たんけんこ(堅固)にい申候、二の丸ノ わきニすきや(数寄屋)をいたし、此頃出来候 て、家中のもの共ニ、茶をふるまい(振舞)申事 候、 (略) 十二月七日 中納(前田利常) 筑殿(前田光高) 参	(寛永十五年) 十二月七日付前 田利常書状写 〔御歴代御書之 写ニ〕	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
31-02	享保 12(1727) 3.8	[三十人頭] 一、御居間前御露地御普請為御用村上源五太夫江相渡 候増役小者両川江懸渡候役小者引揚申ニ付、差支候 段御普請奉行中ノ先達而申越候得共、御露地御普請 急御用ニ付、御自分様分テ被仰渡、四五日相渡申管 之由申達置候処、御露地御普請未相済不申候哉、右 小者源五太夫方未相返不申候ニ付、重而御普請奉行 中ノ早速相帰候様申越候ニ付、紙面両通共懸御目申 候、源五太夫方御参議御座候而、様子被仰聞候様仕 度奉存候、以上、三月八日 中川式部(長定)様 〔割場奉行〕 〔割場奉行〕 永原小仲太・横地伊左衛門	中川長定覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
31-03	享保 12(1727) 3.11	御居間前御庭入口番人足輕四人、只今迄ハ御作事奉行 ノ請取指置候得共、右御普請御用相濟候ニ付、引揚可 [三十人頭] 申候条、右番人村上源五太夫断次第、只今迄之通四人 可被相渡候、以上、三月十一日 割場御奉行中 中川 式部(長定) (略)	中川長定覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
31-04	享保 12(1727) 3.11	一、御居間先ニ有之御鷹部屋、今般新ニ建申ニ付、此 [組外御番頭] 御鷹部屋ニ以前之通戸札押可然哉之旨、庄田兵庫 [御奥小將御番頭] (孝正)中村次右衛門(正基)等申聞候、如何可相心 候哉之旨、七口申聞候ニ付而、御帰城之上相伺可然 之旨式部(中川長定)申渡候	中川長定覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
31-05	享保 12(1727) 4.18	[金沢城代] 一、御居間之前江懸り申候水之儀ニ付而、伊予守(奥村 [算用場奉行] 有輝)・横山兵庫(長元)江段々様子相尋被申候処、 [元改作奉行] 菊田逸角差出候紙面、兵庫指出之由ニ而、伊予守為 見被申候、 辰巳水通之儀ハ元来御城中江参候水ニ而、今以水口 ノ水道筋悉皆御普請奉行支配ニ而御座候、然所微妙 院様御代右之水分子可被下候間、水道筋ニ新開可 仕旨被仰出其時分新開仕、高千石余致出来、 上野新村・涌波新村・三口新村三ヶ村之分、右新 開出来仕ニ付新村被仰付候、依之植付仕時分ハ右 村々ノ水口江人足指出才川を堰込申候、如斯之趣ニ 付先達而口上ニ申達候通、右堰入水多堰入候得者、 何程茂御城中江者水参申趣ニ付、支配之十村江茂詮議 仕候処、早速右堰取宜程ニ為堰込差つかへ不申様ニ 可仕旨申付、今日早々堰所等江茂罷越差つかへ不申 様ニ可仕旨申渡十村指候、尤右堰所之儀ハ御城中江 参候水、田地江取候水兩様不足仕義無之程ニ堰申管 ニ付此度不足分少々堰相増候而茂百姓難儀仕義ハ無 御座旨、右十村廻り口御扶持人も申聞候、以上、四 月十六日 横山兵庫様 菊田逸角	中川長定覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
31-06	享保 16(1731) 9.6	九月六日 左之通被仰付 御中間 割場附小者 久左衛門 右久左衛門、先頃御居間先御馬場ニテ御馬御覽之節、 御馬口捕罷出候処、小坊主を以右之者名・歳御尋 被遊、(略)	政隣記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	高木 2013 P394

第12表 二ノ丸庭園関連文献史料2

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
31-07	明和9(1772) 5.13	治六(元居、異風) 一、七時過、於居間先塚、広瀬次郎九郎ニ鉄炮申 付、見物ス、 五分玉 五間、七寸角、皆中、 玉数五、 壺奴玉 拾五間、角同断、皆中、 玉数同、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第一 P285
31-08	安永2(1773) 8.22	○七半時過於居間先庭、表履従共的申付ル、清左 衛門出、指引ス、 (略) 此節馬見所へ出、見物ス、六度目雨降出スに付、 相止させ候事、 (略)	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第四 P235_236
31-09	安永2(1773) 8.25	〔銃〕 ○卯中剋過於居間先庭鳥充打之、小兵衛出ル、(略) 右相濟、昨日出来十五間新塚に而廿五度の射申 候事、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第四 P240
31-10	安永2(1773) 8.25	玉水 玉笹 右馬於居間先庭那百助ニ為乗見ル、旅ツカレモ 無之候事、二枚開の口付無之、庭へ仲間共不入 (堀勝周、持筒大組頭・近習頭) 候事、孫左衛門・半兵衛出ル、依之用之間掾カ 〔開〕 ハ障子明候而見物ス、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第四 P241
31-11	安永2(1773) 9.21	(庭籠) ○用之間横庭ニニハコ申付候、尤泉水モ申付候間、 三十人頭へ申付候様、権左衛門へ申渡ス、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第四 P281
31-12	安永2(1773) 9.26	○今日の庭籠・泉取かゝる、 (鞠) (寝間) マリ場ハイヨ／＼ネマノ方ニ出来之趣也、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第四 P291_292
31-13	安永2(1773) 10.6	○庭籠泉水水入出来に付、梟・アヒル雌雄暫 (放) はなし見申処、一段宜相見へ候事、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第五 P16
31-14	安永2(1773) 10.9	「○今日庭籠植木共、朝巳剋比九半時前比迄か ゝり、小頭初、居間方とも何レもかゝり、植木 ともを夫々直させ、好ミ候、畢而手木共ニ 植させ候処、大躰ニ宜候、猶更明日為直候処 も有之候事、」	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第五 P24
31-15	安永2(1773) 10.10	○庭籠今日の取かゝり候事、 尤作事所之手合也、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第五 P25
31-16	安永2(1773) 10.15	コ ○庭出来に付、白鳥雌雄、 真かも同断、 右之外、小鳥、山から・あお・あつ・とう・ かしら・ひわ数羽放し候事、 今朝庭籠の内雪おひたしく這入ル、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第五 P35
31-17	安永2(1773) 11.9	(均) (擔) ○今日の鞠場地面ナラサセ候旨、且土ヲカタゲ (潜) 胎内ク、リハ往來いたしニク、之西ニ 〔夫〕 (在山、三十人頭) ノ口ニ枚開の歩入候旨、三太夫の朝流を以 言上之、其通ト申渡ス也、	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第五 P80
31-18	安永3(1774) 1.4	○於居間先馬場乗馬初毛附、 (略) 右乗候処、馬見所に而一覽之事、余乗候時ハ (佐野政清、組外並、御馬乗) 幸進馬ニ指添候様、昨日申渡ス、(略)	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第五 P185

第13表 二ノ丸庭園関連文献史料3

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
31-19	安永 3(1774) 1.19	(略) 過而居間十五日之通縮申付置、直ニ居間へゑい同 <small>(下宿若年寄)</small> 道、庭へ出シ為遊候事、富田も供する、中野ハ十四 日ニ上り、今以逗留ス、是又供する、居間ニ而まり <small>(網) (打)</small> 跽、的射候而見する、其上投アミモウチテ見スル也、 (略)	太梁公日記	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	太梁公日記 第五 P206_207
31-20	文化 6(1809) 2.4	一、大物松、竹ノ御間分之内六本、御泉水樋ニ取替、 御作事江相渡候事、	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2004b P151
31-21	文化 6(1809) 4.3	一、御居間先御露路手入御用、三拾人頭手合之御手 廻小頭等罷出ル事、	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2004b P196
31-22	文化 6(1809) 4.10	<small>(礎)</small> 一、御間惣盤坪野石ニ而、穴生手合ニ而出来相濟事、	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2004b P229
31-23	文化 6(1809) 6.5	一、御居間先御泉水埋樋升等、御造営方ニ而被仰付 <small>(明矩・御大工) (政良・造営奉行)</small> 候旨被 仰出、委曲井上庄右衛門江閨屋氏ハ被申 談候事、	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2004b P292
31-24	文化 6(1809) 6.14	一、御居間先御泉水懸樋懸り大工・日用、昨日居残 申分七半時過払、相替義無之旨、右金大夫申聞、 人高左之通、 (略)	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2004b P313
31-25	文化 6(1809) 6.21	一、三十人小頭吉嶋金六罷出、御露地御石引御用ニ 付、地車入用ニ付、御普請会所江相向候処、不残 御造営御用ニ而御作事所上り居申旨ニ付、老輔致 <small>(隨富・造営方内作事奉行)</small> 借用度旨ニ付、承届、熊谷少九郎江被相渡候様ニ 申談候事、	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2004b P333
31-26	文化 6(1809) 9.15	一、御寝所先御庭ニ而、御風呂屋入口之所ニ、三尺 ニ六尺之腰懸様之物、簾懸りニ而藁繩出来、勿論 <small>(明矩・御大工)</small> 御造営方ニ而可被仰付段、井上庄右衛門へ人見 <small>(忠貞・近習御用)</small> 吉左衛門申聞之旨、庄右衛門ハ申聞、絵図一枚 持参之事、	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2005b P69
31-27	文化 6(1809) 10.6	一、三拾五匁 老つ代 越前石水舟長二尺四寸五分、 幅一尺七寸、のみや喜兵衛御庭入用	御造営方日並記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金調 2005b P89
31-28	文化 11(1814) 11.23	二之御丸御居間先御亭鳥籠等 御普請御用相勤候ニ付文化十一年 戌十二月廿三日於御次拝領被仰付 御作事奉行中引請御用番小堀右衛門殿 被相渡候 御目録	清水又十郎相続 以来二ノ丸造営 其他主付御用の 時拝領目録	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	
31-29	文化 13(1816) 5.25	一、文化十三年五月廿五日、左之者共御居間先江罷 出、金二百疋充・御菓子被下、罷歸時分杖を被下候 旨。 最前相応之身元之者、当時野町借家暮 百二歳 中村屋 幸 助 堀川辺に罷在稼人 九十九歳 宮腰屋 忠右衛門	内外國事記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 12 P500
31-30	文化 13(1816) 7.14	(文化一三年) 七月十四日 一、此間閨屋中務等 御居間先、金谷外御庭等ニ而、 弓稽古被 仰付候義も可有之候間、御門々々弓矢 為持往來不指支様可申渡旨吉左衛門を以被 仰出 候付、常往來之儀も可申渡義ニ候哉与相尋候処、尤 常往來も可申渡義候旨申聞候ニ付、(略)	奥村栄通御城方 留帳	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	石金研 2016 P123
31-31	文政元 (1818) 12.15	御寝所御鋪理御居間御住居替御用主付相勤候ニ付文 政元年十二月廿五日被拝領仰付御用番野村隼人殿御 渡目録	清水又十郎相続 以来二ノ丸造営 其他主付御用の 時拝領目録	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	

第14表 二ノ丸庭園関連文献史料4

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
31-32	文政元(1818) 5.6	五月六日御行歩御出、国老長甲斐守屋敷江御立寄、御成御門より御入被遊候。右庭之泉水之内銅製之立鶴御意に叶、御所望御持帰御秘蔵、常に御居間先御泉水に御置御詠。御隠居金谷御殿江御引移之節も御持行、右御殿御泉水之内御置。又東京江御帰京之節も矢張根岸右御庭御置、御幼少より御持之御品之由御咄予奉拝聴。	見聞袋群斗記	(草稿 金沢市立 玉川図書館 加越能文庫)	加賀藩史料 12 P686_687
31-33	文政11～ 12(1828～29)	前田延之助行状 (略)御八・九歳之御頃なりけん、二之御丸御居間前之せまき御泉水に而、御なぐさみに小さき板舟二つ御楫、豆人形御乗御流し御あそびの内、(略)	賢良公子御夜話	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 14 P453
31-34*	弘化3(1846) 閏5.25	一、火矢方手合之大筒 御覧可被遊旨、此間被 仰出申置、今日火矢方小川群五郎・小川七郎左衛門持参いたし、御居間先御庭ニ而御覧被遊候付、御横目へ申談為相廻、群五郎等兩人、外二棟取火矢方御細工人兩人手伝ニ入、夫々相飾ル、但御庭二枚開より内ハ、三十人者八人計為出為持運候事、群五郎等為引候上 御覧被遊、相済、群五郎等相廻シ為相仕廻、相返候事、	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 15 P861_862
31-35	弘化4(1846) 9.19	一、御留守中ニ付、御居間先レ御寝所先梅之間御庭共、御差支無御座候ハ、御広式江御借用御取込ニ被成度旨 栄操院様被 仰出候旨、先日御広式頭申候候付、其段相伺置候所、(略)	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
31-36	嘉永2(1849) 3.17	一、漂流民四人、今日御居間先御庭へ入り、同所御縁に而咄承り候様被仰出、御算用場奉行江申談、今日昼頃四人共改作奉行木村権三郎召連罷出る。黒川元良・黒川良安も罷出る。御居間御三之間御縁に薄縁為敷、御障子御下段統へ入れ、御縁へ拙者共等罷出、漂流人御庭口より入れ、右薄縁之所へ出し、漂流之咄為致承り候。御障子越に而御間被遊候。当席并御近習頭中、伺候之人々罷出候様被申聞之事。(略)	諸事要用雑記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 藩末篇上巻 P114
31-37	嘉永6(1853) 7.13	正月廿六日二之御丸御広式・御奥御居間并部屋方御普請被仰出、右御用主附高木兵部・予と兩人被仰付、御作事方山本文左衛門主付なり。二月朔日より御取掛、同七月十三日御成就引渡相成。日々御普請所へ夕七時過より御出、兩人共御供に被召連、都而明日之仕事御指図有之なり。是迄部屋に井戸無之所、今度被仰付、御城中第一等之清水なり。御寝所前に新御庭出来、御泉水も出来、能き御都合に相成。新御庭と申して御数寄屋先二枚開き前に御庭出御腰掛も出来日々夕景御出御動坐之御為にも相成第一非常之節之空地も出来、御喜悅不斜。迎も御意に叶候様之御様子にて、日々夕景は右御庭御出有之なり。	見聞袋群斗記	(草稿 金沢市立 玉川図書館 加越能文庫)	加賀藩史料 藩末篇上巻 P516
31-38	安政3(1856) 6.4	六月六日(四日)真龍院様古稀之御賀を御祝被成進。(略)御祝儀には大坂塩鶴御取寄、亀は京都江被仰遣、生亀三つ御取寄御進物なり。鶴二羽其日御吸物相成、御祝亀は御座之間之前之御庭御泉水之中へ御放し、御慰に日々御覧之様被仰上。(略)	見聞袋群斗記	(草稿 金沢市立 玉川図書館 加越能文庫)	加賀藩史料 藩末篇上巻 P795_796
31-39	文久元(1861) 7.9	近頃御居間御縁先に御好に而出来、御手水鉢より水上り、左右江散候而、下には岩等御泉水も被仰付候由に付、相伺候処、拜見可仕旨御意に付、退候節則拜見、相済以同人御礼申上候事。(この噴水は辰巳用水を引きしもの)	御用方手留	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	加賀藩史料 藩末篇上巻 P1183
31-40	慶応3(1867) 2.14	二月十四日 一、御居間先角場出来に付、今十四日八時より御出、御側小將初足並等稽古被仰付、砲発等有之、且以来毎月二・七に右稽古被仰付旨被仰出。	御家録方調書		加賀藩史料 藩末篇下巻 P564_565

第15表 二ノ丸庭園関連文献史料5

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
31-41	慶応3(1867) 3.29	一、今昼於御居間先御大小将武芸御覽被遊候に付、望次第見物被仰付候旨、昨日被仰出候由に而、御用番より演述。且是以後も同様見物被仰付候由も被申聞。仍而今日者彈番・御家老中之内も見物有之由之事。	御用方手留	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	加賀藩史料 藩末篇下巻 P577
31-42	慶応3(1867) 8.25	八月廿五日 一、相公様御居間先御馬場に於て、播磨守所持之馬御覽。且御手乗拜見被仰付、播磨守・伊予守乗馬も御覽被遊、御菓子等頂戴被仰付。	御家録方調書		加賀藩史料 藩末篇下巻 P659
31-43	明治元(1868) 12.20	十二月廿日 一、今夕於御居間先御庭、英吉利馬御馬役保田仙五郎江乗馬被仰付候に付、各見物被仰付候に付、土佐守・河内守・播磨守・又兵衛、参政之人々も御庭江罷出、御前之御側に而見物。相濟、御居間之於御縁側、以山崎守衛各見物被仰付候御礼申上、席江引取候事。	御用方手留	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	加賀藩史料 藩末篇下巻 P956

第16表 二ノ丸庭園関連絵図史料1

図	No.	題名	所蔵	請求番号等	作成年次	景観時期等
37	32-01	金沢城二之丸座敷之図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-28		Ⅱ 2 二ノ丸御殿全体図 元禄9年(1697)以前
37	32-02	金沢城座敷之図二之丸	石川県立歴史博物館 大鋸コレクション	大鋸コレク ション⑥		Ⅱ 3 二ノ丸御殿全体図 元禄9～10年(1697-98)の改修後
37	32-03	金沢城図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大 1125		Ⅱ 4 金沢城全域図 18世紀前半
37	32-04	金府城二ノ丸	(公財)静嘉堂文庫	(池上家文 書)1-癸		Ⅱ 4 二ノ丸御殿部分図 宝暦9年(1759)大火以前
38	32-05	二ノ丸絵図	金沢大学附属図書館		文化13年(1816) 正月写	Ⅱ 4 二ノ丸御殿部分図 宝暦9年(1759)大火以前
38	32-06	金沢城御殿絵図	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-34		Ⅱ 4 金沢城全域図 寛延3年(1750)頃
38	32-07	二之丸御殿并御広式御絵図	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-35	寛政5年(1793)	Ⅲ 2 二ノ丸御殿全体図
38	32-08	石川門から二ノ丸まで水廻樋之図	石川県立歴史博物館 村松コレクション	村松コレク ションB		Ⅲ 2 石川門～二ノ丸の水道経路 文化3年(1806)頃
39	32-09	金沢城二ノ丸絵図面	金沢市立玉川図書館 郷土資料	090-776		Ⅳ 1 二ノ丸御殿全体図 文化再建後
39	32-10	二之丸御殿御補修絵図	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-36	文政3年(1820)	Ⅳ 1 二ノ丸御殿部分図 文政3年6月に勝千代(斉泰)が 二ノ丸に移った際の補理の内容 を示す
39	32-11	二之丸御殿並御広式下部屋等絵図 (表御式台ヨリ竹之間迄、御台所ヨリ柳之御間迄 滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄 御広式下壇廻り橋爪御門櫓五疋建御廐)	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-49 ①～④		Ⅳ 2 二ノ丸御殿分割図(4枚)

第17表 二ノ丸庭園関連絵図史料2

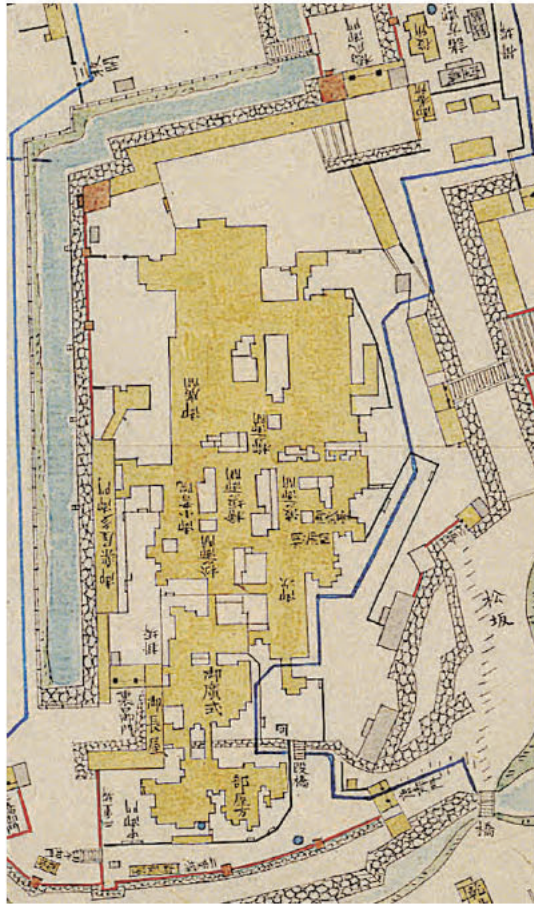
図	No.	題名	所蔵	請求番号等	作成年次	景観時期等	
39	32-12	金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.26-24		IV 2	二ノ丸御殿部分図
39	32-13	二ノ丸万年樋絵図	大友佐俊氏			IV 2	二ノ丸御殿全体図
40	32-14	御城中壺分基絵図	横山隆昭氏	絵図3	文政13年(1830)	IV 2	金沢城全域図 文政8～13年(1825～30)
40	32-15	加州金沢御城惣御絵図	小松市 加賀藩御大工渡部家文書		天保13年(1842)写し	IV 2	金沢城全域図 文政8～13年(1825～30)
40	32-16	金沢御城内外御建物絵図 (御表廻 御居間廻 御広式廻 御台所廻)	(公財)前田育徳会			IV 2	金沢城全域図(41枚組図) 天保4～9年(1833～38)頃
40	32-17	竹沢御座敷絵図 二之丸並金谷御殿絵図(二之御丸御居間廻)	大友佐俊氏			IV 2	二ノ丸御殿部分図(組図)
41	32-18	加州金沢城二ノ丸之図	(公財)三井文庫	c825-47		IV 3	二ノ丸御殿全体図 弘化4年(1847)以後
41	32-19	加州金沢城之図② (二之御丸三歩基之図)	(公財)三井文庫	c825-46		IV 3	二ノ丸御殿全体図 弘化4年(1847)以後
41	32-20	御城分間御絵図	(公財)前田育徳会		嘉永3年(1850)改正	IV 3	金沢城全域図 嘉永元年～3年(1848～50)
41	32-21	金沢城二之御丸三歩基図A	石川県立図書館	K-391-7		IV 3	二ノ丸御殿全体図 嘉永3年～6年(1850～53)頃
42	32-22	金沢城二之御丸三歩基図B	石川県立図書館	K-391-7		IV 3	二ノ丸御殿全体図 嘉永3年～6年(1850～53)頃
42	32-23	金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-40		IV 4	二ノ丸御殿部分図 嘉永6年(1853)以後
42	32-24	二ノ丸御殿図	青硯文庫			IV 4	二ノ丸御殿全体図 嘉永6年(1853)以後
60	32-25	二ノ御丸御広式御居間遠望図	金沢市立玉川図書館 泉景文庫	24.2-4	安政5年(1858)	IV 4	絵画
61	32-26	二ノ御丸御好屋口より専光寺浜眺望図	金沢市立玉川図書館 泉景文庫	24.2-5	安政5年(1858)	IV 4	絵画
42	32-27	金沢城廓内絵図面	石川県立図書館		明治5年(1872)	V	二ノ丸御殿全体図



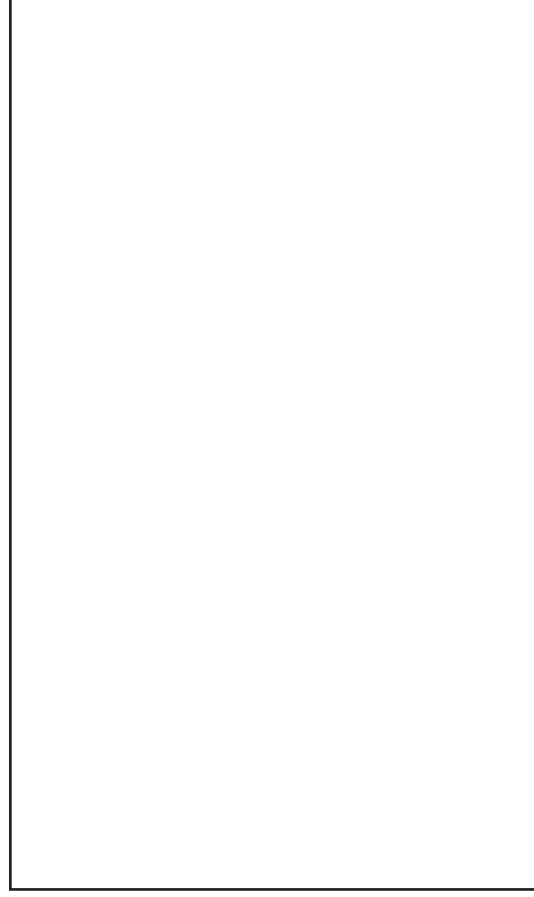
金沢城二之丸座敷之図[金沢市立玉川図書館蔵] 32-01 II 2



金沢城座敷之図二之丸[石川県立歴史博物館蔵] 32-02 II 3

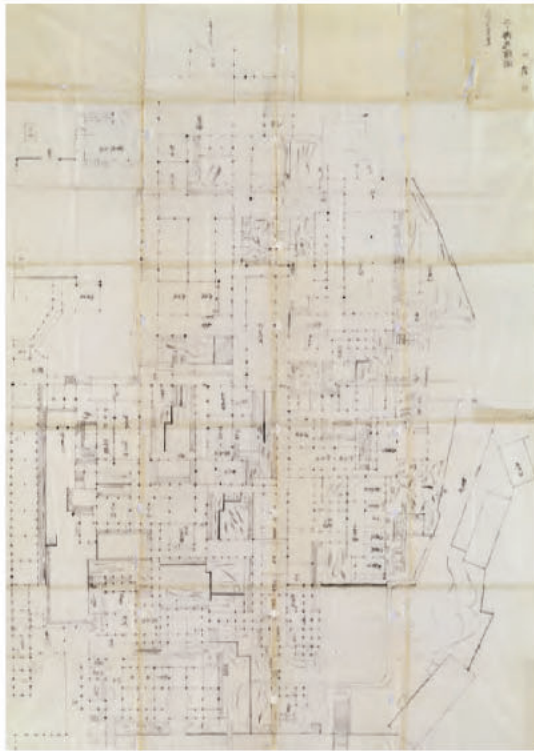


金沢城図[金沢市立玉川図書館蔵] 32-03 II 4



金府城二ノ丸[(公財)静嘉堂文庫蔵] 32-04 II 4

第37図 二ノ丸 絵図1



二ノ丸絵図[金沢大学附属図書館蔵] 32-05 II 4



金沢城御殿絵図[金沢市立玉川図書館蔵] 32-06 II 4

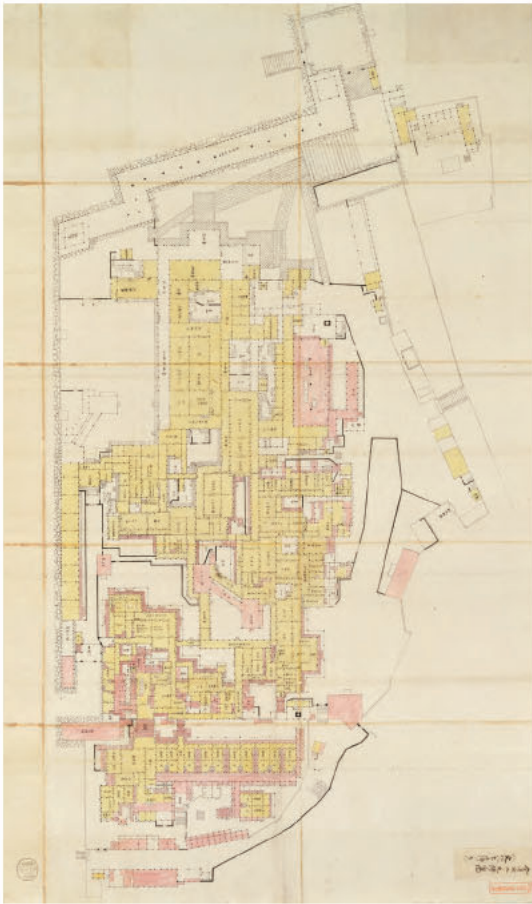


二之丸御殿并御広式御絵図[金沢市立玉川図書館蔵] 32-07 III 2

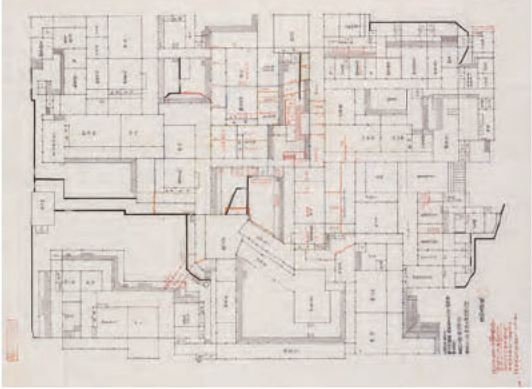


石川門から二ノ丸まで水廻樋之図[石川県立歴史博物館蔵] 32-08 III 2

第38図 二ノ丸絵図2



金沢城二ノ丸絵図面 [金沢市立玉川図書館蔵] 32-09 IV 1



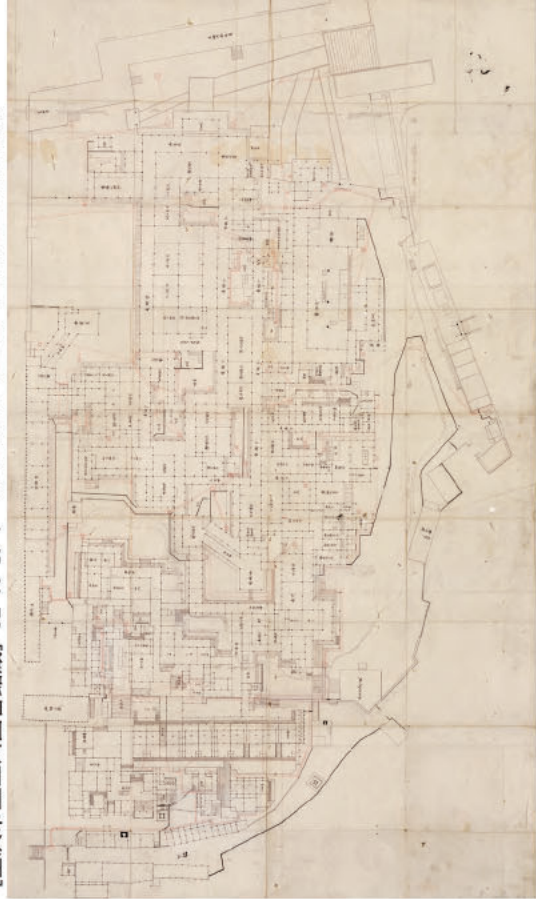
二之丸御殿御修絵図 [金沢市立玉川図書館蔵] 32-10 IV 1



二之丸御殿並御広式下部屋等絵図 (藩之御間・波之御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄) [金沢市立玉川図書館蔵] 32-11 IV 2



金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図 [金沢市立玉川図書館蔵] 32-12 IV 2



二ノ丸万年榭絵図 [大友佐俊氏蔵] 32-13 IV 2

第39図 二ノ丸絵図3



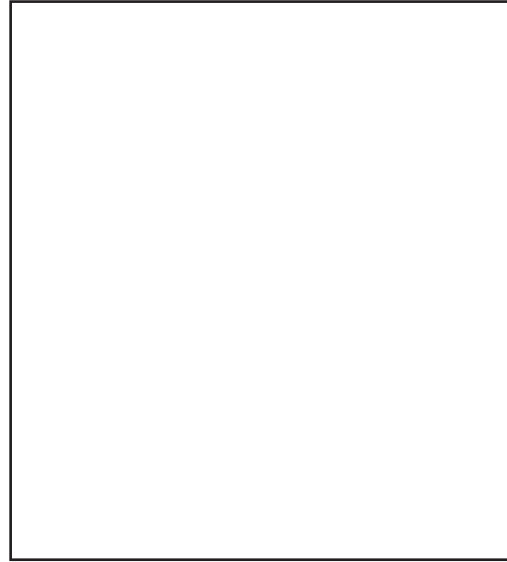
御城中台分基絵図[横山隆昭氏蔵] 32-14 IV 2



加州金沢御城惣惣御絵図[小松市蔵] 32-15 IV 2



金沢御城内外御建物絵図(御広式廻)
[(公財)前田育徳会蔵] 32-16 IV 2

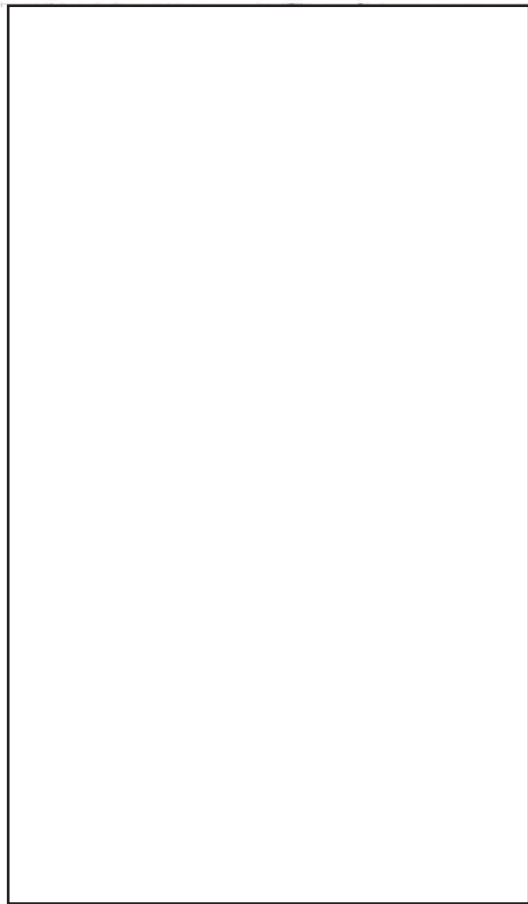


金沢御城内外御建物絵図(御居間廻)
[(公財)前田育徳会蔵] 32-16 IV 2



竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図
(二之御丸御居間廻)[大友佐俊氏蔵] 32-17 IV 2

第40図 二ノ丸 絵図4



加州金沢城二ノ丸之図〔(公財)三井文庫蔵〕 32-18 IV 3



加州金沢城之図② (二之御丸三步基之図) 〔(公財)三井文庫蔵〕 32-19 IV 3

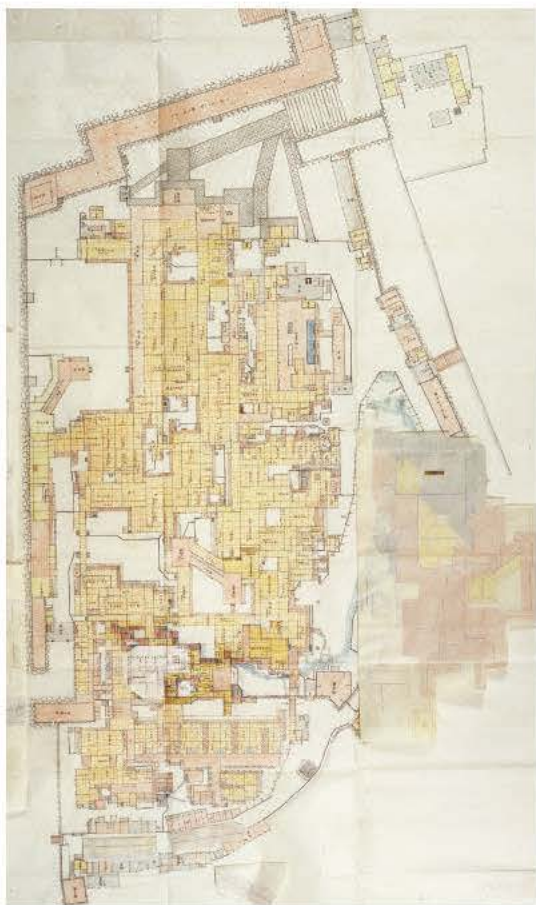


御城分間御絵図〔(公財)前田育徳会蔵〕 32-20 IV 3

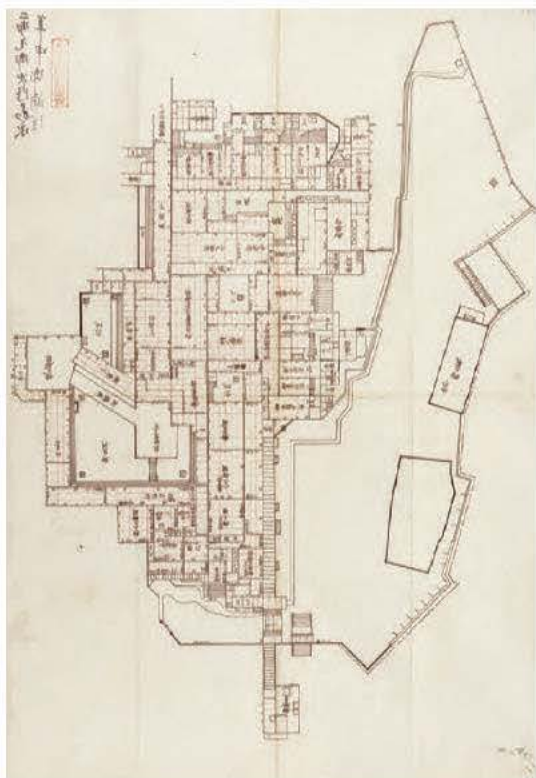


金沢城二之御丸三步基図A〔石川県立図書館蔵〕 32-21 IV 3

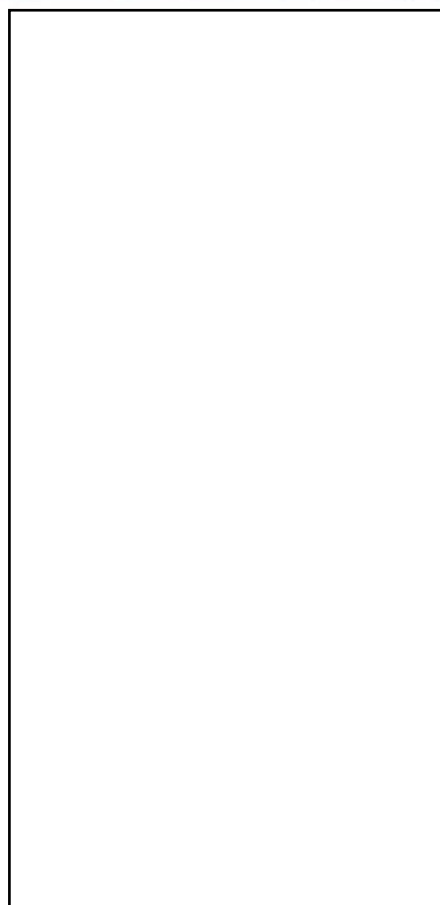
第41図 二ノ丸 絵図5



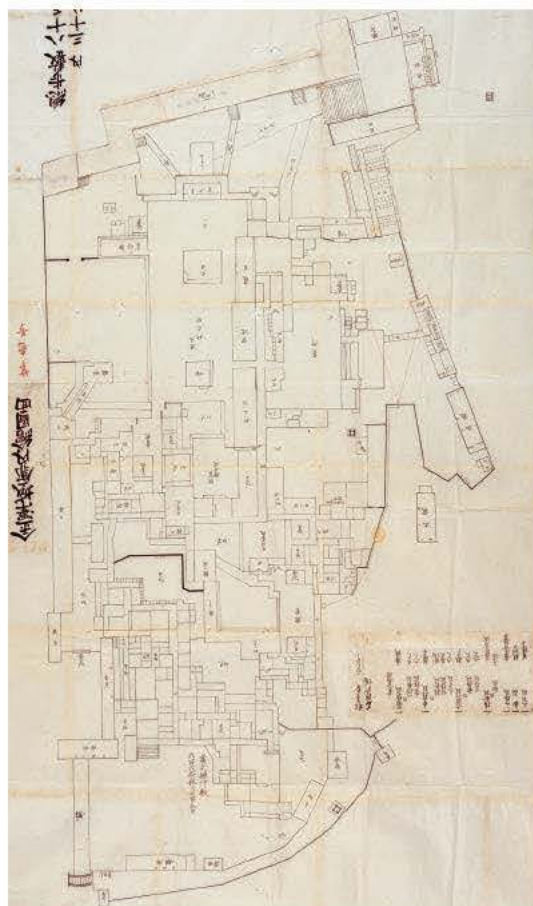
金沢城二之御丸三歩基図B [石川県立図書館蔵] 32-22 IV 3



金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図 [金沢市立玉川図書館蔵] 32-23 IV 4



二ノ丸御殿図 [青硯文庫蔵] 32-24 IV 4



金沢城廓内絵図面 [石川県立図書館蔵] 32-27 V

第42図 二ノ丸絵図6

3. 庭園遺構の状況

(1) 概要

石垣を除き、地表上に遺構（庭園構成要素）は残っていない。二ノ丸本体部の概ね北側は、金沢大学の校舎敷地と重複しており、地下遺構についても多くの部分が失われている可能性がある。一方、二ノ丸本体部の南縁（居間先）では、ボーリング調査の結果等からも、石垣沿いを中心に地下遺構がある程度遺存している可能性が考えられる。数寄屋屋敷もまた、陸軍時代の造作は多いとみられるが、近世の地下遺構への影響は甚大ではないと推定される。

(2) 雛土蔵下石垣 数寄屋屋敷東石垣・北石垣（第43図、位置：第34図）

雛土蔵下石垣・数寄屋屋敷東石垣は、二ノ丸本体と西側の数寄屋屋敷との間に構築されている。後者の郭面は約3～4m低いが、この間には近世前半のうちに埋め立てられた堀がある。北部の雛土蔵下で実施した平成29年度の確認調査等の知見によれば、石垣の高さは堀部分を含め、5.9mを測る。上部6段分は正面長方形、下部4段分は正面正方形の石材を布積みとするもので、上部・下部の高さはほぼ同じとなっている。雛土蔵下石垣は、とくに石垣石材の規格性が高く、表面調整も入念である。赤戸室石・青戸室石の他、少数であるが黒色を呈する坪野石（金沢市南部産の溶結凝灰岩）も配置され、色彩を意識した意匠となっている。雛土蔵の南から数寄屋屋敷東中央部にかけては、石垣編年6期（宝暦～安永年間（1751～81）頃）・7期（享和～文化年間（1801～18）頃）〔石川県金沢城調査研究所2012c〕の改修を受けており、以前の状況は不明である。南部では雛土蔵下とは異なり、刻印を残し表面調整の粗い仕上げの切石材が主体となっている。ただし、積みの縦目地を一段飛ばしに揃える点等は共通している。

数寄屋屋敷北石垣は、数寄屋屋敷北側の空堀南岸沿いにおいて、雛土蔵下石垣に直交するもので、基礎部分のトレンチ調査により、一体的に構築されていることが判明した。高さは約4m（確認調査トレンチ内）を測り、西端には櫓台を擁する。寛永期の石材を転用するなどして、正面を多角形に整形し、その周囲を切り合わせ、中央部を旧材の面のままとする切石積（金場取残し積み）であり、雛土蔵下石垣・数寄屋屋敷東石垣とは対照的な特徴をもつ。

両石垣の構築年代については、17世紀半ばから後半の間と推定されるが、今後の課題となっている。ともに意匠を凝らした石垣であり、とくに数寄屋屋敷東石垣は、本地点以外に城内では例を見ない。また石垣中に坪野石が組み込まれている事例は、他には玉泉院丸のみであり、数寄屋屋敷が、文字通り庭園に関連する数寄空間であったことを示唆している。

ただし絵図・文献において、数寄屋屋敷の名称については、寛文元～元禄元年（1661～1688）の間の景観年代を示す絵図（第37図32-01）に記載されているのが古い事例であるが、その時点で明地となっており、詳細は不明である。この他、寛永15年（1638）に推定される3代藩主前田利常の書状（第11表31-01）にみえる、二ノ丸のわきに設けた「数寄屋」との関連性が注目される点がある。

(3) 数寄屋屋敷東石垣面の石樋・切り込み等

石樋（第44図・45図①・②）

数寄屋屋敷東石垣には、5基の角形石樋が組み込まれ、石垣面から開口部を突出させている。本体部分は凹字形で上部は蓋石状となるもの、一石で構成されるもの等、形状には幾つかの種類があるが、全て戸室石製である（第45図①・②）。寸法は概ね幅40cm台、高さ30～40cm台を測るが、南端の1基は幅67cm、高さ55cmと大きい。基本的には二ノ丸郭面における雨水等を受ける下水溝の一部であり、近世前半のある時期までは数寄屋屋敷側の堀、その後は溝へ導引する機能を担っていた。

しかしIV4期の景観を描いた絵画（「二ノ御丸御広式御居間遠望図」第17表32-25）には、石垣に



① 雛土蔵下 (2710W)・数寄屋敷北 (2800N) 北西から



② 同 確認調査基底部調査状況



③ 同 確認調査基底部調査状況近景



④ 数寄屋敷東石垣 (2720W) 北部 西から



⑤ 数寄屋敷東石垣 (2720W) 南部 西から

第 43 図 雛土蔵下石垣 数寄屋敷東・北石垣写真

付加された階段基礎の石樋から水が豊富に流れ出ている景観が描かれていて、雨水等下水を排水しているようには窺えない（第44図③）。IV4期の絵図（第59図・原図「二ノ丸御殿図」32-24等）によると、居間先から用の間横を通り、西の数寄屋屋敷側に降りる階段付近に至る、辰巳用水の流れ（泉水）が示されている。階段基礎内部の状況は不明なものの、絵画32-25の描写にみえる石樋を経て数寄屋屋敷に導水していたことが了解される。少なくともこの時期、石樋の一部は流れと繋がり、庭園の構成要素であったと言える。

第44図は、上記の絵図・絵画情報と、数寄屋屋敷東石垣に残された遺構痕跡との対比を示したもので、上段①にはIV4期の平面状況（原図32-24）、中段②には数寄屋屋敷東石垣立面図、下段③にはIV4期の絵画（32-25）を配している。

あらためて現況を確認すると、階段部分は近代以後に撤去され、絵画・絵図の描写そのままの状況は認められないが、石垣面に階段基礎の取付痕を見出すことができる（②A）。その取付痕の内側に遺存する石樋（同B）が、辰巳用水の流れを受けていた部分と判断される。ただし、機能時には階段基礎の内部に埋め込まれた状態であった筈で、③絵画32-25に描かれた石樋（C・D）の根元側に相当するものである。この石樋Bは、他の箇所の石樋と異なり、前面が鍵形に削られ、仕口状の受けが作り出されている（⑤）。階段基礎が付加される以前は、他と同じく石垣面から直接突き出す形であったのが、階段基礎内部に取り込まれるとともに、外側に追加延長する新規石樋との結節を容易にするため、元の樋口が加工されたと推定される。なお、絵図と絵画の表現からすれば、追加された石樋は階段基礎内部で分岐していることとなる（①北側）が、そこまでは遺構からは窺えない。

以上の通り、現況遺構である石樋は、そのままでは排水溝の一部としか思えないのであるが、絵図・絵画史料と照合することで、庭園を構成する要素としても機能していたことが判明した。

切り込み

数寄屋門石段北側から6m北の地点で、天端石を基盤にした切り込みが認められる（第44図②E・⑥）。幅26cm、深さ5cm程度で、天端石の控側に続くと推定されるが、樹木の根により延長15cmまでしか確認できない。IV3期の絵図と照合すると、居間先から対面所側に向かう流れ本流から分岐し、風呂屋口門付近で数寄屋屋敷側に向かう分流の位置とおおよそ合致する（第44図①E、原図「金沢城二之御丸三步碁図」B32-22）。このことから切り込みEは、石垣天端を越える水路の遺構である可能性がある。

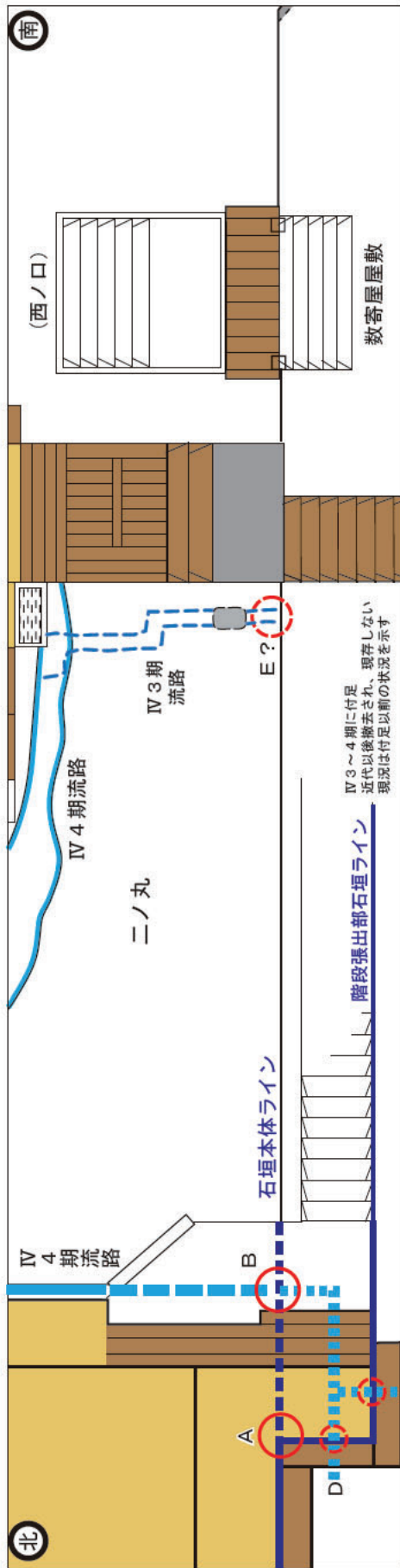
ただし天端を乗り越えた後、どのように水が落ちていくのか、構造は明瞭ではない。また、切り込みのすぐ南側には、石垣面の各所に柄穴状の小孔があり、これらは御殿の一部を構成する木造の廊下・階段の取付痕と推定される。これらの痕跡から、施設の構造の復元までには及んでいないが、ここで取り上げた切り込みも、これらに含まれる可能性も考えられる。

（4）発掘遺構等

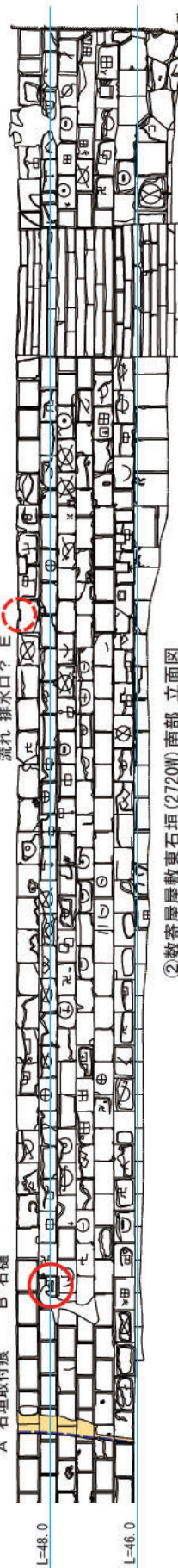
極楽橋詰の木樋

昭和44年度における二ノ丸南側のトレンチ調査で検出された遺構であり、①南北方向で、凝灰岩製の石樋の内部に設置されていたものと、②その下層にあって東西方向を示し、トレンチ断面で痕跡として認識されたものがある。この調査区については、正式な報告がされておらず、詳細は明確ではないが、[井上1969]によると、①・②ともに上水（辰巳用水）と認識されている。

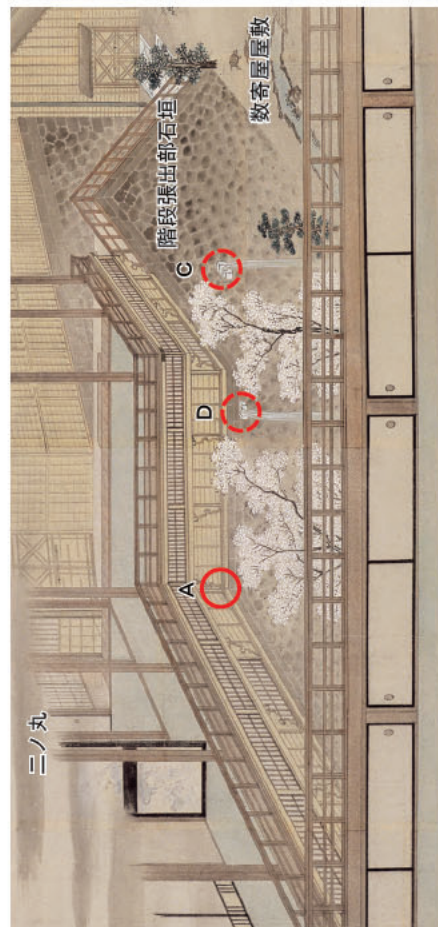
①については、断面凹字形の本体に蓋石を被せた石樋の内部に、木製の角樋が、要所を棕櫚に巻かれた状態で設置されていた。位置は、近世後期の絵図で排水経路が描かれた部分に近く、部材間の密着性が強固ではない石樋の方は、城内各所で確認された同種の構造をもつ施設と同様に、南側に向けた排水溝であった可能性が高い。木樋については、水漏れ防止用とみられる棕櫚で補強されていることから、排水施設とは考え難い点がある。勾配等検討するべき課題があり、憶測の域を出ないが、



①IV 3・4期 泉水経路等と絵図
 原図「二ノ丸御殿図」〔青楓文庫蔵〕32-24 IV 4期 現況測量図より一部調整
 *IV 3期流路の形状は、「金城城二之御丸三歩基図」B〔石川県立図書館蔵〕32-22 を参考とした



②数寄屋敷東石垣(2720W)南部 立面図



③IV 4期 石樋と水の流れ 下図：二ノ丸御広式御居間遠望図〔金沢市立玉川図書館蔵〕32-25 安政5年(1858)



④現況(北から)

⑤B 前面を継手状に切り込む

⑥E 幅26cm、深さ5cm程度の浅い切り込み

第44図 数寄屋敷東石垣面の遺構痕跡



①数寄屋敷東石垣 石樋（北部） 西から



②数寄屋敷東石垣 石樋（中部） 西から



③二ノ丸居間先 奥納戸土蔵付近 北東から



④二ノ丸居間先 居間先土蔵付近 北から

第 45 図 数寄屋敷東石垣石樋・二ノ丸居間先付近写真

排水溝を利用して木樋を設け、排水とは逆に北側への給水を図ったのかも知れない。この想定の場合、IV 5 期以降の可能性が考えられる。用途としては、庭園の流れ（泉水）への給水、用心水等が挙げられる。

②については、①以上に情報が少ないが、木樋痕とみられる空洞の周りに、礫混じりの粘土等が認められたとある [井上 1969]。時期の特定は難しいが、天保後期に石樋となる以前の辰巳用水木樋である可能性がある。厳密な照合は困難であるが、近世前期・後期ともに、辰巳用水は二ノ丸南側を東から西へ流れていたのであり、本地点の状況も矛盾するものではない。

二ノ丸居間先の池

平成 24 年度のボーリング調査では、Ⅲ 3 期の絵図にあらわれる居間先の池に相当する地点も対象とした (BP71 地点 [石川県金沢城調査研究所 2015d]、周辺写真第 45 図③・④)。この結果、近現代層直下に約 20cm の厚さで暗褐色粘質土の堆積があり、その下位には白灰色粘土が認められた。前者は池底堆積層、後者は池の底打粘土層と判断される。現地表から底面までの深さは 1.26 m を測る。

4. 各時期の様相

Ⅱ期（第46図）

成立・契機等

寛永8年（1631）に二ノ丸御殿が造営された際に、庭園も整備されたと考えられるが、具体的に史料で確認できていない。玉泉院丸には、寛永11年（1634）に泉水、築山等が整備され、寛文年間（1661～1673）頃には色紙短冊積石垣が構築された。色紙短冊積石垣にある樋には、二ノ丸から分岐した辰巳用水が供給されていたとみられることから、二ノ丸においても、早い段階から泉水等が整備されていたものと推測される。寛永15年（1638）、3代藩主前田利常が、「二の丸のノわきニすきやをいたし」家臣に茶を振舞ったこと（第11表31-01）は、「数寄屋屋敷」成立を窺わせる出来事であるが、これを別にすれば、史料で明確に確認できるのは、享保12年（1727）に、6代藩主前田吉徳の初入国時に御居間廻の作事、御居間先御露地の普請が行われた時である（31-02～05）。

造営体制

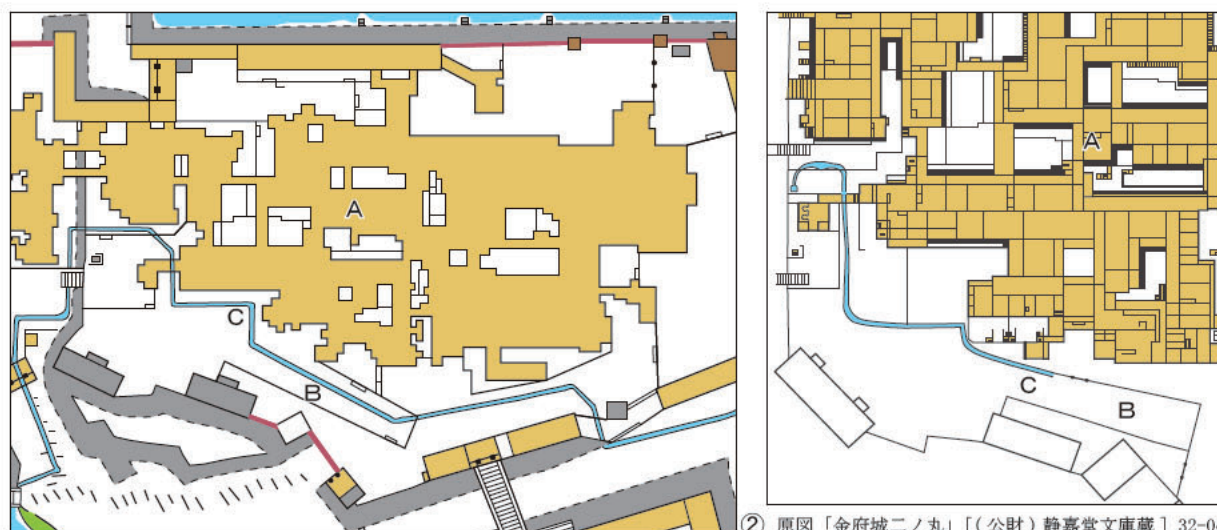
享保12年の御居間先御露地の普請は、三十人頭の村上源五太夫に命じられており、三十人組が担当していた。ただし普請奉行から小者、作事奉行から御居間先御庭入口番人足軽4人を遣わされており、三十人組だけでは人員が足りず、応援を得ていた（第11表31-02）。また、御鷹部屋に以前のように戸札を付けるか御帰城後に伺いを立てるように中川長定が申し渡しており、藩主の意向を反映する必要があったことが窺える（第11表31-04）。

構成等

Ⅱ1・2期は史料がなく詳細は不明である。Ⅱ3期には、馬場が出来ており、御居間先に空間があったことがわかるが、具体的な様相は不明である。Ⅱ4期には、絵図や文献史料により、庭園の構成を知ることができる。以下Ⅱ4期の構成を示す。

文献では、家老・若年寄である中川長定の覚書に、享保12年（1727）の御居間先御露地普請について記述がある。御居間前に水が懸っていること（第11表31-05）、御鷹部屋が新たに建てられたこと（31-04）がわかる。

絵図については、同年代史料である作事所系B類の一種（「金沢城図」第16表・第37図32-03）や二ノ丸御殿の図（「金府城二ノ丸」第37図32-04・「二ノ御丸絵図」第38図32-05）に庭園の描写があるが、水路（泉水）を描くのみである。



① 原図「金沢城図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕32-03 縮尺約1/2,500

② 原図「金府城二ノ丸」〔(公財)静嘉堂文庫蔵〕32-04 縮尺約1/1,500

第46図 二ノ丸Ⅱ4期庭園構成要素等配置図

絵図 32-03 による諸施設の配置は次のとおりである（第 46 図①）。敷地中央部には、御殿（A）、南に東西方向に軸をとる馬場（B）がある。流れ（泉水）（C）は、石川門、鶴之丸、二ノ丸を經由して玉泉院丸へ通じる辰巳用水の流路である。長屋（極楽橋門）東から二ノ丸に入り、馬場、居間先、広式、数寄屋屋敷、数寄屋屋敷唐門（数寄屋門）から玉泉院丸へ至る経路が描かれる。ただし、この絵図の注記には、「埋水樋」と記されている。

絵図 32-04 では、流れ（泉水）が詳細に描かれる。流れ C は、馬場の二枚開より堀に沿ったあと、居間先を西側に進み、ほぼ直角に折れて北向きへ流路を変え、熨斗立の下をくぐり、広式に入る。ここで池状の溜まりを形成し、再び熨斗立の下をくぐり広式から出て、榊に到達する。榊より部屋方へ流下しているものと思われる。

利用状況

利用を示す記事は限られており、「政隣記」に享保 16 年（1731）9 月に居間先馬場で馬の見分が行われた記事がある（第 11 表 31-06）。

Ⅲ期（第 47 図）

成立・契機等

宝暦の大火によって焼失した二ノ丸御殿は、10 代藩主前田重教によって宝暦 13 年（1763）までに裏式台、居間廻り、広式、部屋方が再建された。重教時代の庭園の様子は史料がなく詳細は不明である。明和 8 年（1771）に 11 代藩主となった前田治脩は、安永 2（1773）年より居間先に泉水等を整備した。以下、絵図の他は主として前田治脩の日記「太梁公日記」により検討する。

造営体制

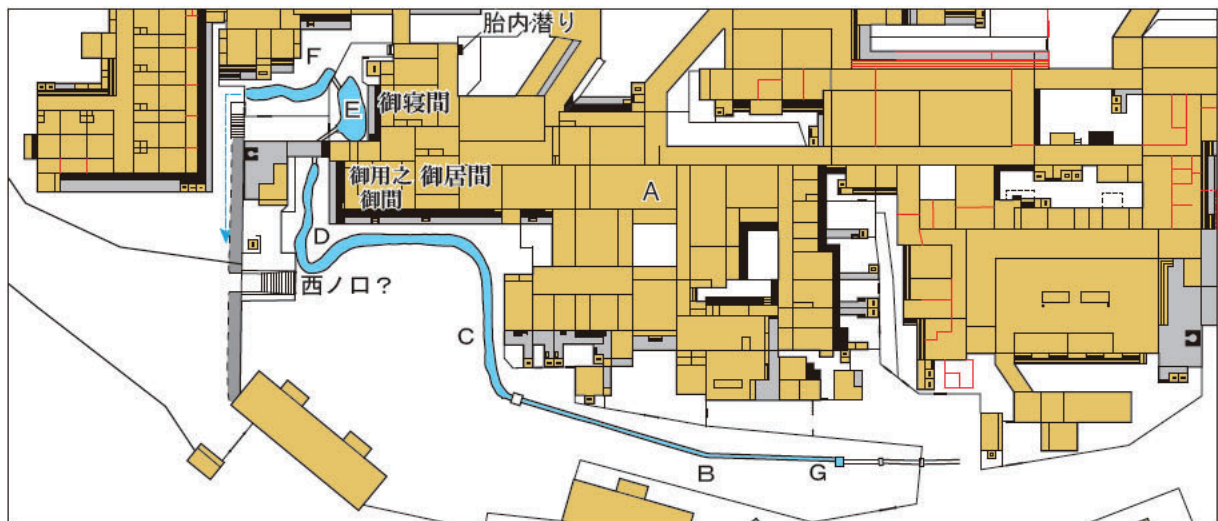
庭園の整備や維持管理は、藩主の意向が近習や居間方坊主を通して、三十人頭へ伝えられ、三十人組が行っていた。三十人頭に命じられたものには、居間先庭の六間の堦の覆い、用之間横庭の庭籠・泉水（第 12 表 31-11）、寝間庭と奥との境の熨斗立の移動、堦の覆を一段高くすること等がある。

施工・管理の部分でも藩主の意向を伺っており、庭籠の植木の大体の配置ができたと報告し、指示を受けて植えなおしている（31-14）。藩主治脩は、鞠場の地面をならず際に、西ノ口の二枚開より人夫を入れたいという三十人頭の申し出（31-17）や、用之間横庭の庭籠、泉水の完成時には、庭籠造営に係った手木足軽に酒代が渡すこと等を承諾している。居間先の庭園は、三十人組が維持管理を行っていたものの、作事所が関与することもあった（31-15）。もっとも作事所による作業は数日であり、屋根掛け等の仕上げのみに携わっていた可能性も考えられる。

構成等

Ⅲ 1 期の庭園の様相を示す史料がないため、Ⅲ 2 期の庭園の構成を示す。文献では「太梁公日記」に詳細に描かれるものの、同時代頃の絵図には庭園は描かれない。やや時代が下って文化 3 年（1806）頃の絵図「石川門から二ノ丸まで水廻樋之図」（第 16 表・第 38 図 32-08）には、殿舎、台所、御居間廻りの南側の一部と泉水が描かれる。第 47 図は、寛政 5 年（1793）頃の二ノ丸御殿全体を描く絵図「二之丸御殿并御広式御絵図」（第 16 表・第 38 図 32-07）に、絵図 32-08 の泉水の経路を合成した図である。ここでは、「太梁公日記」の時期（安永 2 年（1773））の庭園の状況を説明するが、御殿絵図と泉水の絵図と時期差があるため、一致しない箇所があるかもしれない。この図は庭園の配置を便宜的に示すものであることをあらかじめ断っておく。

敷地中央部には、御殿（A）がある。「太梁公日記」には、居間先馬場（B）、居間先庭（C）、用之間横庭（D）、寝間庭（E）とある。絵図には庭名は記されていないが、その名称から位置を推定した。また、広式前にも庭（F）がある。居間先庭 C と数寄屋屋敷の間は、掛堀及び石垣、居間先庭 C と玉泉院丸の間は内の方が板打ちの柵、居間先馬場 B 周辺や二ノ丸内の庭園は主に熨斗立により区切られる。



原図「二之丸御殿并御広式御絵図」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-07
「石川門から二ノ丸まで水廻樋之図」[石川県立歴史博物館蔵] 32-08 合成 縮尺約 1/1,000

第 47 図 二ノ丸Ⅲ期庭園構成要素等配置図

第 18 表 庭園の利用回数 (安永 2 年 8 月～3 年 2 月)

	治脩						治脩見分		治脩・頼姫見分
	射的	鳥銃打	乗馬	蹴鞠	投網稽古	鳥捕獲	乗馬	射的	蹴鞠・射的・投網稽古
8 月	6	5	1				1	4	
9 月	1	1					3		
10 月	2	1						3	
11 月							3		
12 月	1						1		
1 月	2		4		1	1	1		1
2 月			2	3			3	2	
計	12	7	7	3	1	1	12	9	1

流れ(泉水)(G)は、馬場の塀に沿って樋を通り、居間先前で開渠となる。この後は北、続いて西に屈曲して居間の縁を通り、再び北に折れて用之間横庭Dに至る。更に風呂屋への廊下で暗渠となり、寝間庭Eへ流れ込むが、ここでは小さな池を形成する。池から再び暗渠となり、熨斗立を潜って広式前の庭Fに至っている。それより先は部屋方(数寄屋屋敷)へ流下しているものと思われる。

「太梁公日記」に記されている庭園の構成要素として目立つものに、用之間横庭に設けられた庭籠、泉水(第12表31-11)がある。庭籠については時期的に近接して複数の記事があり、後述する。この他、居間先庭には六間あるいは十五間の塚(31-09)や、馬場に伴う馬見所が設けられている。また、寝間の方には鞠場が作られた(31-12・17)。ただし、第47図の寝間庭Eの池とは時期が異なるのか、このあたりの関係性は明確ではない。

利用状況

明和8年(1771)8月から安永元年(1772)7月の入国時には、藩主治脩が行ったものとして、居間先庭にて蹴鞠(10月)を行っている。治脩が見分したのは、居間先馬場で馬の見分を1回(8月)、居間先にて馬の見分を1回(10月)、乗馬1回(10月)、居間先塚にて鉄砲撃ちを1回(5月)となっている。

安永2年(1773)8月から入国時には、治脩が行ったもの、見分したものを月別に表にまとめた(第18表)。

藩主治脩が行ったものとして、射的、鳥銃打、乗馬、蹴鞠、投網稽古、鳥捕獲がある。射的は最も

多く12回あり、場所は、居間土掾2回、用之間掾2回、掾先1回、居間先庭4回、居間先庭六間塚が2回、十五間新塚1回となっている。居間先庭では十五間の距離で打っているが、居間土縁からは六間、用の間縁側から十一間とあり打つ距離が異なるものと考えられる。鳥銃打ちは7回行っており、このうち4回は居間先庭（第12表31-09）で打ち、3回は用之間縁側より打っている。乗馬は7回行っており、場所は居間先、居間先馬場、居間先、庭と表現が異なるものの、居間先馬場で乗ったものと考えられる（31-18）。蹴鞠を3回行っており、場所は寝間土掾1回、土掾1回、不明1回である。庭にて投網稽古を1回行っている。塚を寄せているので、居間先庭と考えられる。また朝、庭の塚辺にいた四十雀を指竿で捕獲しようと試みたこともあった。

藩主治脩が見分したものは、乗馬と射的がある。乗馬が最も多く12回あり、場所は居間先、居間先馬場、居間先、庭と表現が異なるものの、居間先馬場で乗馬させたものと考えられる。そのうち一回は用之間縁側の障子を明けて見物している（31-10）。射的が9回あり、居間先庭もしくは居間先塚にて行わせており、このうち一回は馬見所から見物している（31-08）。

この他水鳥の飼育に関する記述も多い。安永2年（1773）9月には、庭（居間先庭カ）に雌雄のアヒルを放したことがあり、そのアヒルが馬場の塀を超えて飛んでいったことに驚いている。

治脩は養女である穎姫（10代藩主重教女）に種々の心配りをしている。安永3年（1774）1月には居間に招き、庭へ出し遊ばせ、蹴鞠、的射、投網等を見せた（第13表31-19）。同年3月には居間先で水鳥や花を見物させ、また遠的等を射て見せた後、用之間の縁側でかゆ餅と煮染めを穎姫と一緒に賞味している。なお、藩主や子女、近臣以外の利用例はあまり見られないようであるが、この時は庭の桜の下に敷物を敷かせ、年寄女中などに菓子を食べさせている〔長山2006b、P78～79〕。

庭籠

庭籠については、複数の記事がみられることから、第19表にまとめた。

庭籠1～3は別の庭籠である可能性もあるが、1の用之間横庭に係る一連の普請・作事のようにも思われる。2の記事では場所として居間先庭が記されているが、ここでは好みを申し付けたとあり、実地での指示としては「内庭」に出向いている。また3の記事は、作事所の管轄を示すが、作業期間が短く、同一箇所で作事部分を分担したとみなすこともできる。5についても、2との関連からすれば、用之間横の可能性もある。ただし4については、名称からすれば別の地点であってもおかしくない。以上から当該期には、少なくとも2か所の庭籠が存在したと考えておきたい。

絵図や文献からこの庭籠の規模を確認することはできないが、IV期の絵図には庭籠が描かれるものがある。「二之丸御殿並御広式下部屋等絵図」（滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄）（第

第19表 庭籠関連記事

	場所・名称	記載内容	飼育物等
1	用之間横庭	安永2年9月26日より取り掛かる。10月6日に水を入れている。この時まで仮屋根がかかっていたが、取り払われている。	カモ・アヒル雌雄
2	内庭（居間先庭）	植木を藩主の好みに合うように植え替えさせている。	
3	?	10月10日より作事所手合として取り掛かる。13日には作事所の作業は完了したが、三十人方の方はやや残る。	ハクガン、マガモ雌雄、小鳥、ヤマガラ、アオ、アツ、トウ、カシラ、ヒワ数羽
4	おく庭籠	安永3年1月28日、アヒルが卵を産んでいたが、傷があったため取り払う。	アヒル
5	?	2月6日、藩主の好みにより植木を半分取り払い、中程を巖石に変えている。	

16表・第39図32-11、詳細第50図)には、用之間横庭に2つ庭籠が描かれ、1つは大きさが約2m×約3mのものであり、もう一つは御庭籠六囲とあり、四方約1mのものが、6つ連なっているものである。「金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図」(第17表・第39図32-12、詳細第51図)には居間先に庭籠が描かれ、大きさは2間×3間のものである。片流れの屋根があり、壁は三面が板貼で、一面に金網戸が入っている。

用之間庭の庭籠は、泉水と同時に普請が命じられていることから、一体のものであった可能性が高い。庭籠に水を引いているため、庭籠の中に泉水が一部入るものか、通り抜けるような構造のものであったと推定される。

鞠場

鞠場の記事は2つあり、9月の記事(第12表31-12)は、寝間の方の鞠場が出来の趣とだけあるので、詳細は不明である。11月の記事(31-17)は、土台は切石であり、柱を立て屋根を設置している状況を示す他、人夫が土を担いで胎内潜りからは往来しにくいので、西二ノ口の二枚開より往来したとある。同時期の絵図に「西二ノ口の二枚開」の記載は見えないが、後のⅣ期の絵図は、風呂屋口上の二枚開きを「西ノ口」と記す。一方、「胎内潜り」は、寝所前と能舞台前の空間を結ぶもの(第47図)、広式と部屋方を結ぶ棧橋に続く廊下の下を潜るもの、桧垣之間前廊下を潜るもの等がある。9月の記事との関係を考えれば、寝所前-能舞台前の間を指す可能性があるが、西ノ口の二枚開から寝所前に到達するルートは絵図では確認できない。もっとも風呂屋口の北側にも数寄屋屋敷側から上る出入口(階段)があり、これを「西二ノ口」と呼んだのかも知れないが判然としない。

また、規模については、ここでは読み取ることではできないが、同時期の「金谷御殿絵図」には、鞠場が描かれており(第126図)、これは2間×2間程度のものである。

Ⅳ1期(第48図)

成立・契機等

文化5年(1808)正月15日の火災により、二ノ丸御殿が焼失し、12代藩主前田齊広は御造営方役所を設置して、御殿を再建したが、同時に庭園の整備も行われた。

造営体制

文化の大火の再建では、御造営方役所が工事全体の施工管理を行い、実務は普請会所や作事所が行っていた。御近習御用からの指示は御造営役所へ直接なされるのではなく、実務を担当する御大工を通してなされることがあった。庭園にかかる施工では、御泉水樋の製作を作事所が行い(第13表31-23)、居間先露路手入を三十人組(31-21)、穴生が坪野石で御囲惣盤を作成している(31-22)。

構成等

第48図は、文化の再建直後の御殿の殿舎を描く「金沢城二ノ丸絵図面」(第16表・第39図32-09)を原図とする。敷地中央部には、御殿(A)がある。「御造営方日並記」には、御馬場(D)、御居間先御露路(E、第13表31-23)、御居間先御泉水(K、31-23・24)、御寝所先御庭(F、31-26)、御対面所庭(H)とある。Eには、別図によると建仁寺垣で囲われている箇所(M)があり、Ⅱ期の32-01の「山」の辺りで(第37図)、「御城高石垣之事等」(金沢市立玉川図書館後藤文庫、[日本海文化研究室1976])等に見える「新五郎塚」に対応するようである。Ⅳ1期の絵図は枚数が多いものの、庭園の主要構成要素は描かれていない。ここでは「御造営方日並記」に見える名称から位置を推定した。

文化の大火再建時には、当初より泉水が設けられており、居間先を通っていたことは確認できるが(「御造営方日並記」)、詳細な流路は不明である。居間先泉水には、埋樋、榊で地下に埋まった部分(31-23)と懸樋で地上に流れる部分(31-24)があった。また、泉水用の樋は、竹ノ間で使用する予定だった6本の松が転用され、作事所へ引き渡されている(31-20)。

この他、「御造営方日並記」から読み取れる構成要素としては、御囲(茶室)(L)があり、惣盤は



原図「金沢城二ノ丸絵図面」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-09 縮尺約 1/1,000

第 48 図 二ノ丸IV 1 期庭園構成要素等配置図

坪野石であったことがわかる (31-22)。御囲は絵図によれば広式に位置する。なお、御囲が存続するのは、IV 1 期のみである。

寝所先庭の風呂屋入口の所には、腰懸が設けられた (31-26)。また、露地には庭石があり (31-25)、配置場所は不明であるが、越前石 (笏谷石、緑色凝灰岩) の水舟も調達されていた (31-27)。

なお、文化 11 年 (1814) には、御大工である清水又十郎が居間先で御亭鳥籠等を普請している (31-28)。

利用状況

文化 13 年 (1816) 5 月 25 日には、12 代藩主前田斉広が、居間先で長寿者 2 名と対面し、金、菓子を渡している (31-29)。また、近習の諸士に居間先で弓稽古をさせていたことがわかる (31-30)。

IV 2 期 (第 49 図)

成立・契機等

文政元年 (1818) には「御寝所御舗 (補) 理御居間御住居替」が行われた (「清水又十郎相統以来二ノ丸造営其他主付御用の時拝領目録」第 13 表 31-31)。

構成等

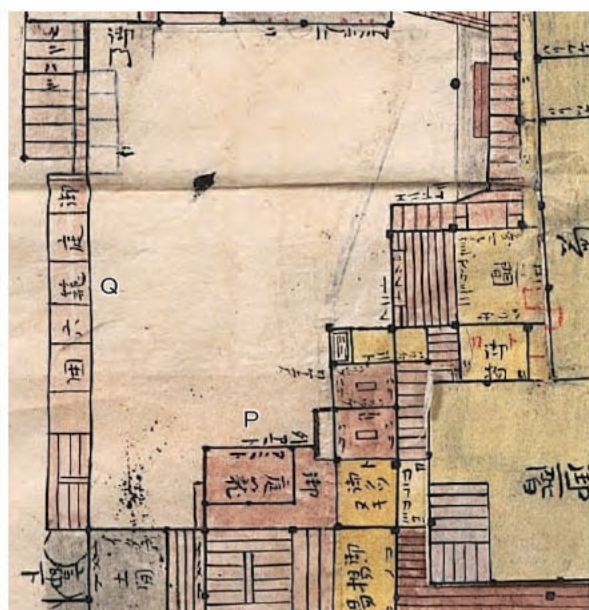
第 49 図は、文政 8～13 年 (1825～30) の景観を描く「御城中壱分基絵図」(第 17 表・第 40 図 32-14) を原図とする。馬場 (D) は、主に南側で掛堀の位置が移動し、拡張されている。居間先露路 (E) では、建仁寺垣の仕切がなくなり、鬘斗立の折廻 (M) となる。寝所先庭 (F) は風呂屋が数寄屋屋敷へ下りたため、広がっている。対面所庭 (H) も鬘斗立が東側に移動し、広がっている。

絵図に注記があり、堀などの種類が明確となる。馬場 D を取り囲む堀は掛堀であり、居間先露地の御土蔵 (居間先土蔵) (C) から IV 1 期に建仁寺垣で仕切られていた箇所までは太鼓堀であり、その先、奥御納戸御土蔵 (B) までは柵であった。寝所先庭 F、対面所庭 H を仕切るのは鬘斗立であった。



原図「御城中老分基絵図」〔横山隆昭氏蔵〕32-14 縮尺約 1/1,500

第 49 図 二ノ丸Ⅳ 2 期庭園構成要素等配置図



「二之丸御殿並御広式下部屋等絵図」(滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄)〔金沢市立玉川図書館蔵〕32-11

第 50 図 二ノ丸Ⅳ 2 期庭園 御庭籠

庭籠・唐傘亭・腰掛 (第 50・51 図)

「二之丸御殿並御広式下部屋等絵図」(滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄) (第 16 表 32-11、詳細第 50 図) では、寝所先庭に 2 つの庭籠が描かれており、御庭籠 (P)、御庭籠六囲 (Q) と記される。庭籠 P は御風呂屋へ通じる廊下に隣接し、大きさが約 2 m × 約 3 m のもので、中が仕切られている。内外に「アミト」と記される。庭籠六囲 Q は数寄屋屋敷との境の石垣上にあり、一辺約 1 m のものが、6 つ連なる。

第 51 図は「金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図」(32-12) を原図とする。居間先露地に庭籠・唐傘亭・腰掛が描かれ、それぞれに仕様に関する注記がある。「御庭籠」と記載される R は、注記から 2 間 × 3 間の規模であることや、片流れの屋根があり、壁は三面が板貼で、一面に金網戸が入っていること等が窺える。S は名称の記載がないが、いわゆる唐傘亭で、一尺二寸の丸柱が中央に立ち、32 枚の板で葺かれていること等が記されている。T は「御腰掛」とあり、鴨居や棚等の内装の仕様・寸法について詳細に記されている。T の脇の囲いは絵図 32-14 の M とみられるが、形状が異なる。

泉水等 (第 52～55 図)

Ⅳ期の二ノ丸御殿の絵図に泉水が描かれる初例は、文政 3 年 (1820) に世子前田斉泰が二ノ丸御殿に相殿する際の修理を描いた「二之丸御殿御補修絵図」(第 16 表・第 39 図 32-10) である。本絵図を原図とする第 54 図①では、対面所庭 (H) に泉水が流れていることは分かるが、詳細な流路は不明である。

二ノ丸御殿全体の流れを詳細に描くのは「二ノ丸万年樋絵図」(第 17 表・第 39 図 32-13) 以降の絵図からである。絵図 32-13 を原図とする第 54 図②では、流れ (泉水) は馬場東端の二枚開から馬場の敷地に入り、二枚開横の榎 (N) より開渠となる。それより馬場南側の掛堀に沿い、奥納戸土蔵 (B) の西側で池 (O) を形成する。そのまま北西方向へ流れ、風呂屋への廊下の下で暗渠となり、寝所先庭 (F) に入るが、ここでも小さな池状を呈する。この後、建物下に潜りつつ広式居間前の空地 (G) を経て、対面所庭 H へ達する。対面所庭では、水路の幅が広がっており、曲水のように流れが緩やかになっていたことが想定される。流末は土蔵の下を通り、二ノ丸内堀へ排水されている。

御腰掛 (T) の注記

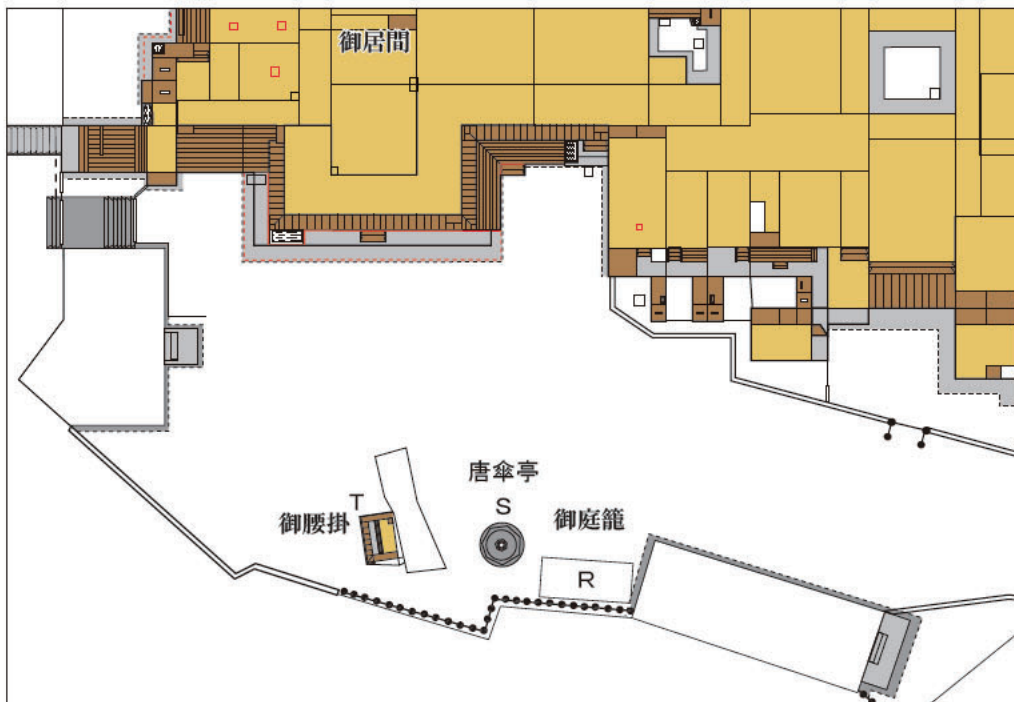
<p>御棚長一尺二寸幅一尺五步厚三步八厘 苦竹一本ニテ釣中敷下端御棚板上端 ニシテ内萌黄壁也</p>	<p>右敷居厚九步法立同内法四尺二寸 地敷居上端ヨリ中敷居上端迄一尺五寸 鴨居内法二尺五寸ナリ</p>	<p>地ヨリ軒桁下端迄高サ六尺柱太サ二寸四歩 軒間七尺三寸梁間五尺二寸六分向テ左之中敷居 鴨居内法一尺二寸方立并鴨居厚八歩也</p>
<p>中敷居方立内法 四尺一寸 御疊幅 二尺八寸七歩 中敷居高サ二尺六歩</p>	<p>軒出一尺六寸垂木敷破風共九枝 板敷高サ九寸二歩 エンハハ 九寸 破風出 一尺四寸</p>	

御庭籠 (R) の注記

ハトノトヤ深サ一尺ニシテ
間二丈一尺三ツ割
梁間九尺一寸二ツ割
梁間築立ニシテ梁引六寸高配ニテ片ナカレ
御庭籠
側三方作見板ナリ
外雪垣取付ナリ
前側三間金網戸入ルナリ
高サ軒桁下ハ迄七尺七寸ナリ柱太サ三寸四歩

(唐傘亭) (S) の注記

柱大サ一尺二寸丸柱ナリ
長サ六尺一寸五歩垂木大サ一寸一歩二一寸五厘
■敷三十二板軒長サ間ヨリ四尺五寸



原図「金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-12 縮尺約 1/500

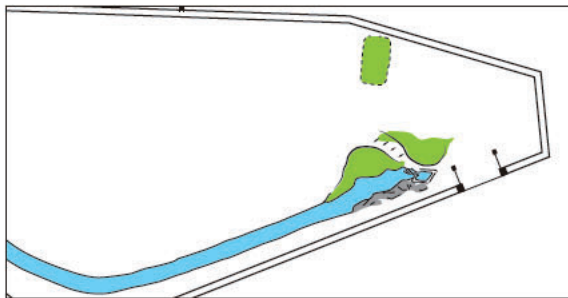
第 51 図 二ノ丸Ⅳ 2 期庭園 御庭籠・唐傘亭・御腰掛

第55図①は、文政13年(1830)作成の「御城中巻分碁絵図」(32-14)を原図とする。流路全体に大きな変化はないが、居間先の池(O)が、折廻(M)に接するようになる。また、対面所庭(H)では、流路が途中で狭くなり、入江状となっている。

第55図②は、天保4~9年(1833~38)頃の景観年代を示すとされる「金沢御城内外御建物絵図」の二ノ丸部分(32-16)を原図とする。居間先の池(O)と対面所庭(H)での流れの形状は、絵図32-13(第54図②)に近い形で描かれる。

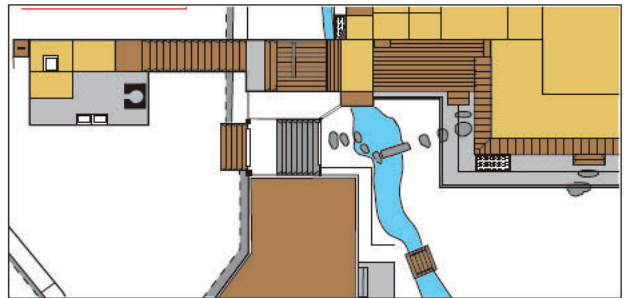
第55図③は、②の32-16よりも後の景観を描く絵図(「竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図」(二之御丸御居間廻)32-17)を原図とする。居間先の池(O)の形状は、①(絵図32-14)と類似している。なおこの絵図では、居間先にある榊(N)は滝組状に描かれ、すぐ北側に塚(V)が描かれる(拡大第52図)。また用之間から西ノ口二枚開きにつながる飛石が描かれる(第53図)。

第55図④の原図「加州金沢御城惣御絵図」(32-15)は、①の絵図32-14と同系統であるが、32-14の作成から12年後の天保13年(1842)に写されたものである。この絵図には寝所先庭(F)で流れが分岐して、部屋方側(数寄屋屋敷)に向かうように描かれる。



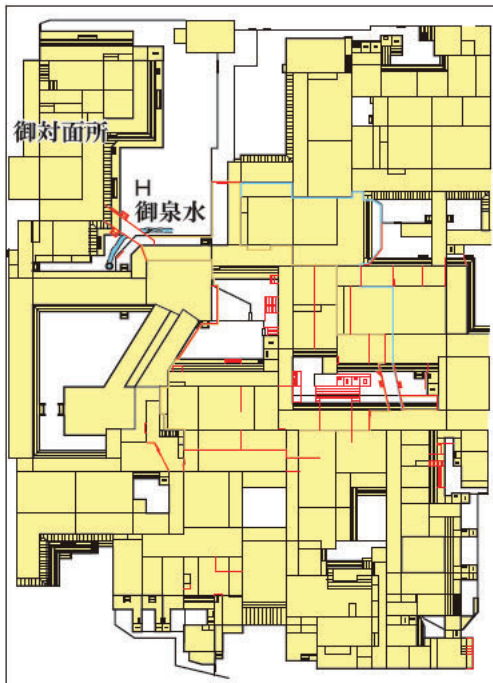
原図「竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図」(二之御丸御居間廻) [大友佐俊氏蔵] 32-17

第52図 滝山、塚

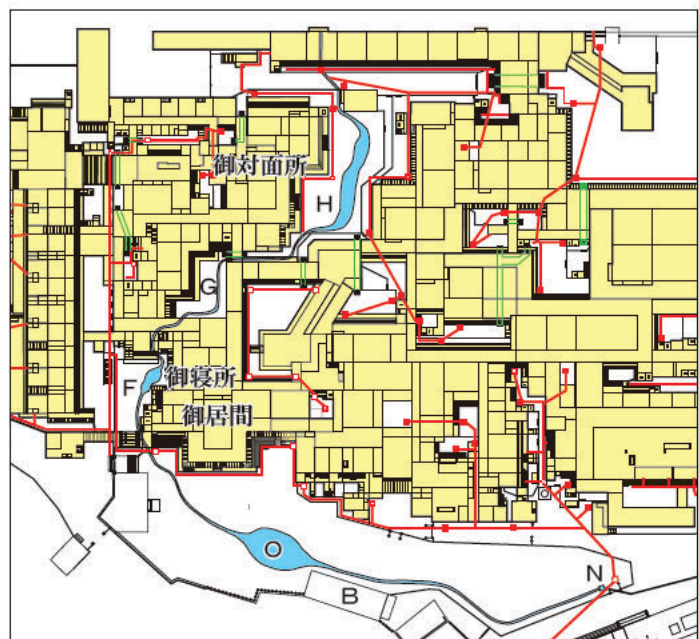


原図「竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図」(二之御丸御居間廻) [大友佐俊氏蔵] 32-17

第53図 泉水と飛石



①文政3年(1820)頃
原図「二之丸御殿御補修絵図」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-10 縮尺約1/1,000



②文政13年(1830)以前
原図「二ノ丸年種絵図」[大友佐俊氏蔵] 32-13 縮尺約1/1,500

第54図 二ノ丸IV 2期泉水の変遷 1

なお、前田斉泰は、藩主となる前の文政元年（1818年）に長連愛（甲斐守）の屋敷を訪れ、庭の泉水にあった銅製の立鶴を所望して持ち帰り、常に御居間先御泉水に置いたとする記録がある（第14表31-32）。

利用状況

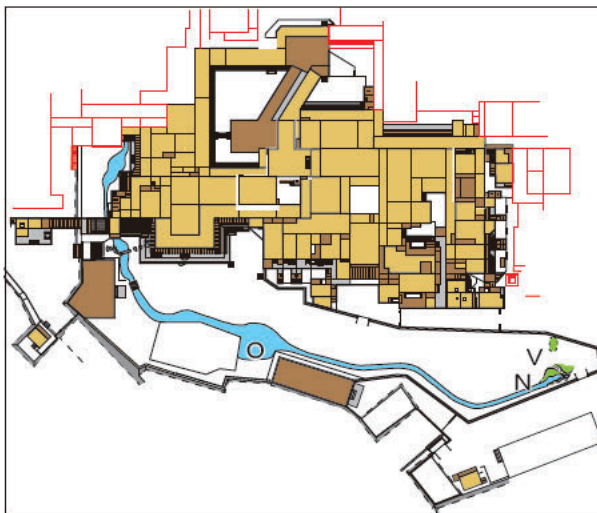
藩主前田斉泰の弟延之助の行状を記した「賢良公子御夜話」には、文政11、12年（1828、29）頃のこととして、幼い延之助が二ノ丸居間前の泉水に船を浮かべて遊んだ時の逸話が記されている（第14表31-33）。また、弘化3年（1846）閏5月25日に、藩主前田斉泰が居間先庭で火矢方の大筒を見分している記録がある（「成瀬正敦日記」第14表31-34）。



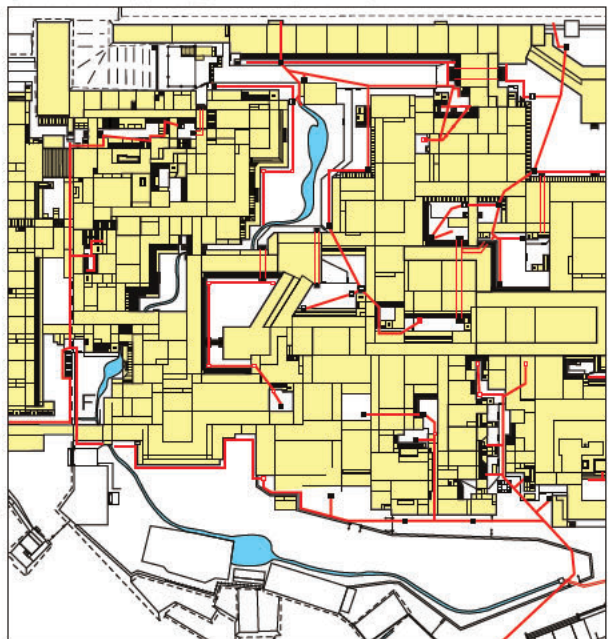
①文政13年（1830）頃
原図「御城中老分基絵図」[横山隆昭氏蔵] 32-14 縮尺約1/1,500



②天保4～9年（1833～38）頃
原図「金沢御城内外御建物絵図」（御表廻 御居間廻 御広式廻 御台所廻）
〔公財〕前田育徳会蔵] 32-16 縮尺約1/1,500



③天保4～9年（1833～38）以降
原図「竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図」（二之御丸御居間廻）
[大友佐俊氏蔵] 32-17 縮尺約1/1,500



④天保13年（1842）頃
原図「加州金沢御城惣御絵図」[小松市蔵] 32-15 縮尺約1/1,500

第55図 二ノ丸IV 2期泉水の変遷2

Ⅳ3期（第56～58図）

成立・契機等

弘化4年（1847）に13代藩主前田斉泰の子、基五郎（後の12代大聖寺藩主前田利義）、豊之丞（13代大聖寺藩主前田利行）のために松之間を奥向に取り込む普請が行われた（「官私随筆」）。

構成等

第56図①は、嘉永3年（1850）作成の「御城分間御絵図」（第17表・第41図32-20）を原図とする。馬場（D）、居間先露地（E）、寝所先庭（F）では、変化はみられないものの、対面所庭（H）では熨斗立が移動し、松之間（U）先の空地（I）にも庭園が描かれる。松之間側からの鑑賞に対応し、Iの築山は熨斗立沿いに設けられている。

泉水等（第56・57図）

Ⅳ2期からの変化として、居間先御露地の池（O）がやや縮小し、橋（W）が架けられている。流れは広式居間先の空地（G）で幅が広がるとともに、対面所庭（H）から熨斗立の下を潜り、松之間先の空地（I）に至っている。

第56図②は、①よりやや後出する「金沢城二之御丸三步碁図」B（第42図32-22）を原図とする。両図の大きな相違点として、②では泉水（流れ）がH・Iにみられないことが挙げられる。明記されていないが、寝所先庭Fにおける分岐点がなくなり、西側の部屋方（数寄屋屋敷）に全て流下するようになったとみられる。

本絵図には、用之間から西ノ口二枚開、御居間から御居間先土蔵、西ノ口二枚開に連なる飛石が詳細に描かれている（拡大第57図）。なお、絵図32-20（第56図①）で飛石が描かれないのは、この絵図は金沢城の全域を対象としており、二ノ丸御殿のみを描く32-22と性格が異なるためであろう。

また、弘化から嘉永年間に、広式居間先泉水の漆喰等を修復したとする史料がある（光専寺蔵・屏風下張り文書、[山本2015]）。

熨斗立・二枚開の意匠（第58図）

「加州金沢城二ノ丸之図」（第17表・第41図32-18）・「加州金沢城之図」②（二之御丸三步碁之図）



①嘉永3年（1850）

原図「御城分間御絵図」[(公財)前田育徳会蔵] 32-20 縮尺約1/1,500

②嘉永3～6年（1850～1853）

原図「金沢城二之御丸三步碁図」B[石川県立図書館蔵] 32-22 縮尺約1/1,500

第56図 二ノ丸Ⅳ3期庭園構成要素等配置図

(32-19) には、熨斗立、西ノ口二枚開の図と寸法が描かれる。西ノ口二枚開（第58図①）は、塀重門で樺により化粧をしている。居間先露地の熨斗立は柱を見せるもの（②）と見せないもの（③）の2種類があり、いずれも板を縦張りし、上部を樺により化粧をしている。寢所庭の熨斗立（④）は、板を縦張りするだけの部分と、下部3尺6寸を板縦張とし、上部3尺8寸を網とする部分がある。

利用状況

弘化4年（1847）9月9日、栄操院（藩主実母）が藩主前田齊泰の留守中につき、居間先、寢所先の梅之間と庭をとともに広式で借用したいと申し出ている（「成瀬正敦日記」第14表31-35）。

嘉永2年（1849）3月17日には、外国へ漂流し、イギリス船により送還された、越中放生津町と東岩瀬村の4人を召して聴取を行った（「諸事要用雑記」31-36）。漂流民4人は御庭口より入り、御居間三之間縁に敷かれた薄縁のところで、聴取を受けた。齊泰は障子越しに聴取を聞いていた。

IV4期（第59～62図）

成立・契機等

嘉永6年（1853）に広式・奥居間・部屋方が修築され、寢所前に新たな庭が築造された。居間周辺の形状が大幅に変更となったことが絵図で確認できる。

造営体制

IV4期の画期とした嘉永6年（1853）の普請においては、御用主付は高木兵部（金沢留守居番）と赤井伝右衛門（馬廻番頭・二丸広式御用）の両名で、御作事方の主付は山本文左衛門（内作事奉行）であった（第14表31-37）。

藩主齊泰は、高木兵部と赤井伝右衛門を召連れ、日々御普請所へ夕七時過より出て、明日の仕事を指図していた。御用主附である2人より藩主の意向が現場に伝えられていたことが推測される。

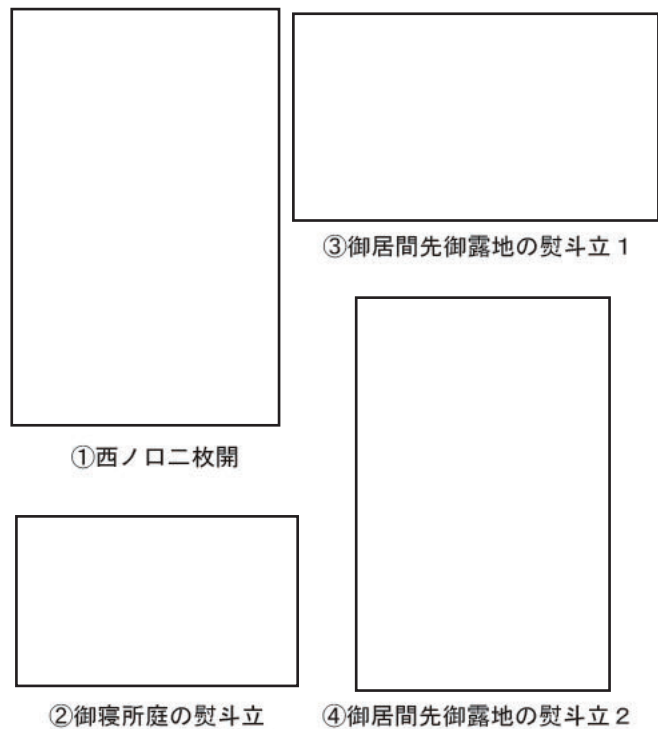
構成等

第59図②は、嘉永6年（1853）から文久3年（1863）の二ノ丸御殿全体を描く「二ノ丸御殿図」（第17表・第42図32-24）を原図とする。馬場（D）付近では、南側で奥納戸土蔵（B）の東側に接続



原図「金沢城二之御丸三步基図」B〔石川県立図書館蔵〕32-22 縮尺約1/500

第57図 泉水と飛石



「加州金沢城之図」②（二之御丸三步基之図）〔（公財）三井文庫蔵〕32-19

第58図 熨斗立・二枚開の意匠

していた塀が、松坂門の櫓台東側に接続するようになり、松坂門櫓台には階段（Y）が取り付けられた。居間先露地（E）は、御殿居間部分の南への張り出しがなくなったため、相対的に広がることとなった。居間先土蔵（C）は描かれておらず、この時期に撤去された可能性があるが、撤去を明治初期とする史料もあって検討の余地がある。寢所先庭（F）では、IV 3期の末期に北側の部屋が縮小し、面積が増えている。対面所庭（H）では、熨斗立が二ノ丸IV 2期とほぼ同じ位置に戻ったため広がったが、相対的に松之間先の空地（I）は縮小している。数寄屋屋敷には空地（J）が設けられており、「見聞袋群斗記」（第 14 表 31-37）にみえる「御数寄屋先二枚開き前」の庭に該当すると考えられる。

泉水・噴水

第 59 図①の原図は、「金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図」（第 17 表・第 42 図 32-23）とあり、嘉永年間に修理したときのものとされる絵図である。泉水の流れが大幅に変化しており、榊（N）の位置はほぼ変わらないものの、榊よりすぐに北上し、御馬場の北側の塀に沿って流れ、一部、馬場の塀の外を流れる。居間先露地（E）からは、御居間先の縁側に平行して流れ、強く北へ屈曲して寢所先庭（F）に入る。これ以降はIV 3期の状況を踏襲し、西側に曲がって部屋方に至る。ただしこの時の普請では「御寢所前に新御庭出来、御泉水も出来」（31-37）とあるので、寢所先露地が作り直されたようである。

①に後出する第 59 図②では、泉水は、御居間先の縁側あたりから描かれる。出水口（X）は、中央に円を描き、縁側に突き出している。なお、文久元年（1861）7月には「御居間御縁先」に噴水が設けられた記録があり（「御用方手留」31-39）、出水口Xが該当する可能性も考えられる。

利用状況

御数寄屋先二枚開き前の新御庭には腰掛も設けられ、藩主齊泰は日々、庭に出て夕景を楽しんだ。非常の際の空き地にもなるということで、齊泰の意に叶ったものであった（31-37）。

また、場所は不明であるが、安政3（1856）年6月に真龍院の古稀の祝いとして贈られた亀が、御座之間の前の御庭の御泉水に放されており、真龍院は日々の慰めとしていた（31-38）。

なお、文久元年（1861）7月に設けられた噴水については、年寄であった奥村栄通が拝見を許されている（31-39）。



① 原図「金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図」[金沢市立玉川図書館蔵] 32-23 縮尺約 1/1,500

② 原図「二ノ丸御殿図」[青硯文庫蔵] 32-24 縮尺約 1/1,500

第 59 図 二ノ丸IV 4期庭園構成要素等配置図

景観（第60～62図）

藩の御抱絵師佐々木泉景が安政5年（1858）に描いた写生図が2点知られている（「二ノ御丸御広式御居間遠望図」第17表・第60図32-25、「二ノ御丸御好屋口より専光寺浜眺望図」第61図32-26）。ともに二ノ丸居間・広式から南方・西方を望んだもので、手前の城内は南方、遠景は西方を合成した構成となっている。前者の方が広範囲で、視点の角度がやや異なるが、対象に大きな違いはなく、城内では、居間や広式の一部、風呂屋等の他、数寄屋屋敷の平庭一带が対象となっている。

32-25（第60図）では、居間先からの流れが石樋を通り、数寄屋屋敷へ落ちている様、流れ、植木鉢、石橋、石灯籠等が描写されている。風呂屋の続きには茶室風建物があり、前面の流れを跨ぐ飛石が見られ、四季を問わない形で草花も描き込まれている。また亀の描写もあり、第14表31-38との関連も窺える。遠景の方角を別にすれば、絵図32-24とよく合致している（第62図）。文献31-37にみえる「御数寄屋先二枚開き前」の庭の景観を具体的に示す史料として注目される。

IV5期

成立・契機等

文久3年（1863）、13代藩主前田斉泰正室浴姫が江戸より金沢へ移ることになり、御守殿が造営された。御居間廻の御居間等、表向の松之間、牡丹之間、御楽屋、御能舞台等を御広式に取り込み、修繕が行われた（「見聞袋群斗記草稿」）。

構成等

この頃の二ノ丸御殿を描く絵図は、松之間と対面所付近を描く部分図と数寄屋屋敷の北側の一部を



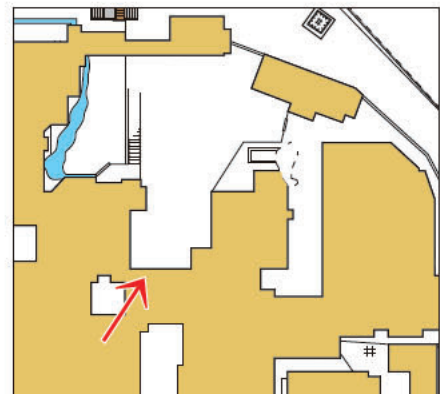
第60図「二ノ御丸御広式御居間遠望図」

〔金沢市立玉川図書館蔵〕32-25



第61図「二ノ御丸御好屋口より専光寺浜眺望図」

〔金沢市立玉川図書館蔵〕32-26



原図「二ノ丸御殿図」〔青硯文庫蔵〕32-24
縮尺約 1/1,500

第62図 視点の向き

描く絵図しか伝来しておらず、庭園はもとより御殿の全容が不明である。なお、この普請により松ノ間が御居間となったため、松之間先の空地が広がっている。

利用状況

13代藩主前田齊泰は慶応2年(1866)4月に隠居して金谷御殿へ移り、二ノ丸御殿には14代藩主前田慶寧が金谷御殿より入った。翌3年2月には、御居間先に角場(射的場)が出来し、御側少将に訓練をさせていた(「御家録方調書」第14表31-40)。この後、3月、4月にも大小将の武芸を見分している(「御用方手留」第15表31-41)。

8月には、居間先馬場において、慶寧は本多政均(播磨守)所有の馬を見分し、奥村栄通(伊予守)と本多政均に乗馬を命じている(「御家録方調書」31-42)。また明治元年(1868)12月には、居間先庭において、前田直信(土佐守)、奥村栄通(河内守)、本多政均(播磨守)、村井長在(又兵衛)、参政の人々とともにイギリスの馬を見物している(「御用方手留」31-43)。

V期(第63図)

成立・契機等

明治2年(1869)、14代前田慶寧が二ノ丸御殿を退出し、御殿は主のいない建物となった。明治3年(1870)11月から竹之間を兵隊屯所にするための修理が開始されたが、明治4年(1871)、廃藩によって兵部省(のち陸軍省)の所管となり、順に改修・改造が行われた。

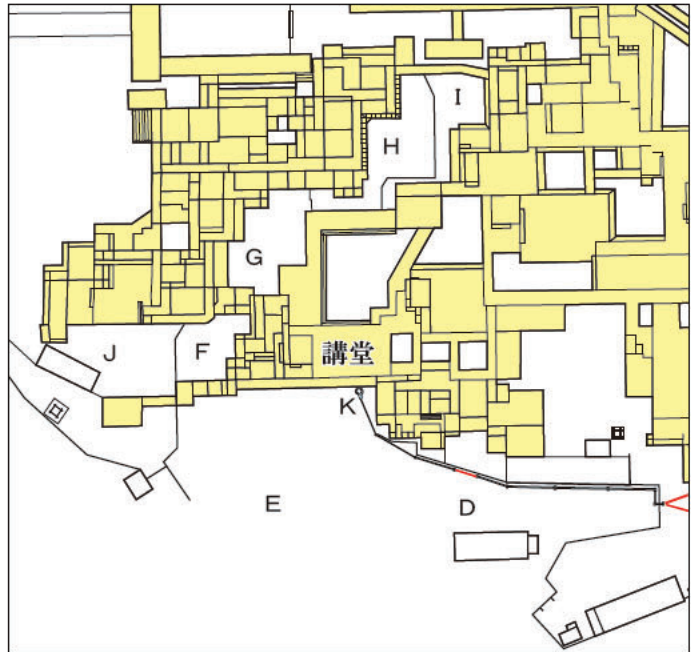
構成等

第63図は、明治5年(1872)の二ノ丸御殿を描いた「金沢城廓内絵図面」(第17表・第42図32-27)を原図とする。御殿は居間廻りが講堂になるなど、兵舎への改変が進んでいる。泉水(K)は御居間先より橋爪門周辺に設けられた便所、風呂へ流下している。馬場(D)、居間先露地(E)、寢所先庭・露地(F)、松之間先の空地(I)は空白であり、広式居間先(G)、対面所庭(H)、数寄屋敷の空地(J)は空地と記されており、存続状況は不明である。

5. 小結

(1) 変遷過程

二ノ丸庭園は、居間、寢所、対面所等に付随する限られた空間を利用した複数の小庭園からなる。その変遷は、殿舎を主体とした二ノ丸自体の動向と合致しており、二ノ丸II期(17世紀前半～18世紀前半)を第1段階、III期(18世紀後半)を第2段階、IV期(19世紀前半～中葉)を第3段階とすることができる。なお第3段階(IV期)の細別についても対応するが、庭園に即して整理すると、3-1段階(IV1期)は火災からの再建当初、3-2段階(IV2期)は居間先馬場の拡張、3-3段階(IV3期)は表向に属していた松之間前における庭園造営、3-4段階(IV4期)は居間先露地の拡張、数寄屋屋敷の庭園造営等により区分される。いずれの時期も御殿建築の変化と強く連動するもので、



原図「金沢城廓内絵図面」[石川県立図書館蔵] 32-27 縮尺約1/1,500

第63図 二ノ丸V期庭園構成要素等配置図

金沢城庭園の中でもとりわけ御殿との一体性が強く、二ノ丸庭園の大きな特徴となっている。

また、構成上の特徴としては、辰巳用水による流れが御殿各域の小庭園を貫くように配されていることが挙げられる。

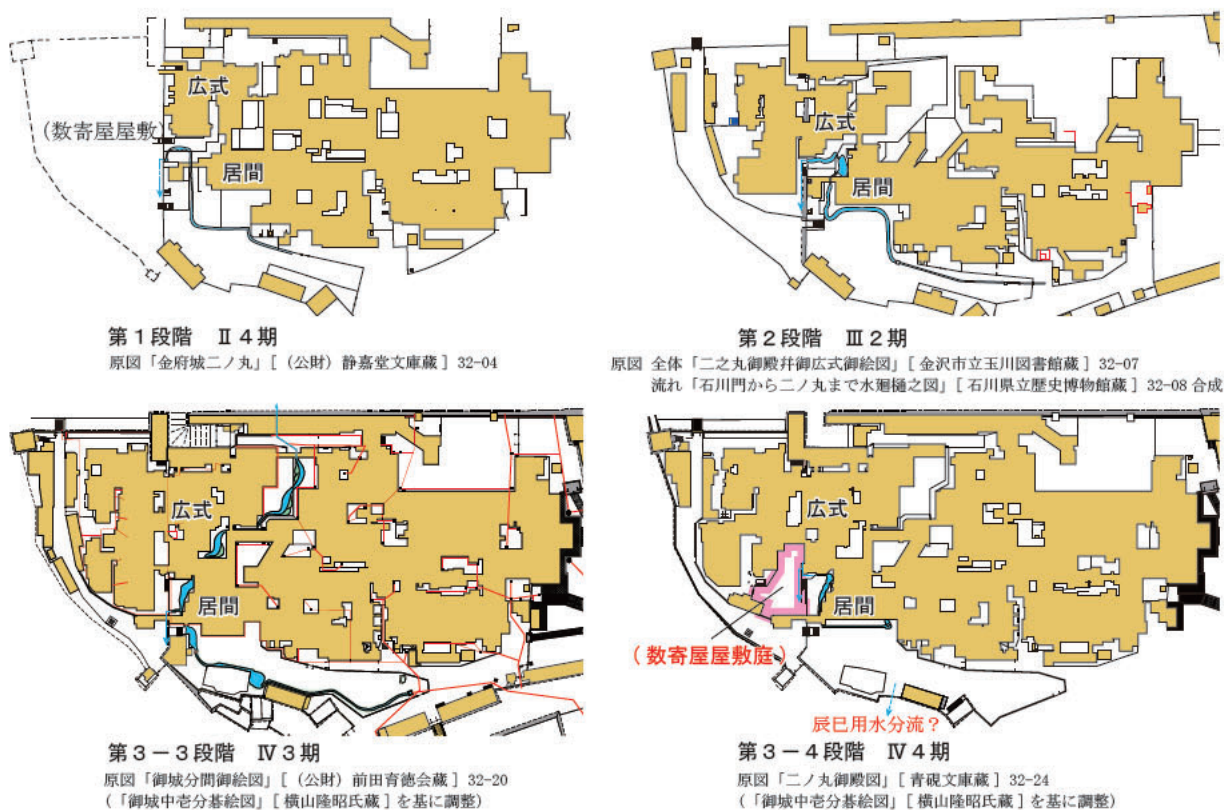
この辰巳用水の流れも段階ごとに変化している（第64図）。第1・2段階では、居間先から西側の数寄屋屋敷に流れるのに対し、第3段階では、居間先から北に向かい、奥向にある対面所前を通過して、二ノ丸内堀に流れるようになる。但しこの経路のみでは、玉泉院丸庭園に辰巳用水が導引されないこととなり、課題が残るが、この点については第6章で改めて検討する。

第3-3段階においては、数寄屋屋敷への分岐が明示されるとともに、表向にある松之間にも流れるようになる。しかし第3-4段階になると、北側経路がなくなり、第1・2段階と同様に、居間先から数寄屋屋敷への経路のみとなる。第3-3段階における変化は、松之間に藩主子弟が入ったことによるものと考えられ、泉水の変化が示すものは、庭園単独の変化ではなく、御殿空間全体としての配置や利用方法に起因するものと考えられる。

二ノ丸庭園が位置する居間廻りや広式は藩主やその家族が生活を営む場所であるため、その変更にあたっては、藩主の意向が強く反映される。特に11代藩主治脩、13代藩主斉泰期には史料で具体的に確認することができるが、藩主の意向は、御近習から三十人組などに伝えられ、庭園等に手が入られた。

(2) 利用状況

二ノ丸庭園のうち、居間先庭を中心に、Ⅲ、Ⅳ期を中心に利用に関する文献が残る。居間先庭の利用の形態は、乗馬や射撃の見分、平民身分との対面等、「外庭」的な在り方から、藩主やその身内のみで利用するものなど多種にわたる。一方、寝所や広式の庭は、藩主やその身内の利用に限られた。同じ二ノ丸に設けられた庭園でも、御殿空間の本質的な用途に起因するものであるが、庭園によって利用者・利用方法が異なっていた。



第64図 二ノ丸庭園の変遷（縮尺約 1/3,000）

第4節 玉泉院丸

1. 概要

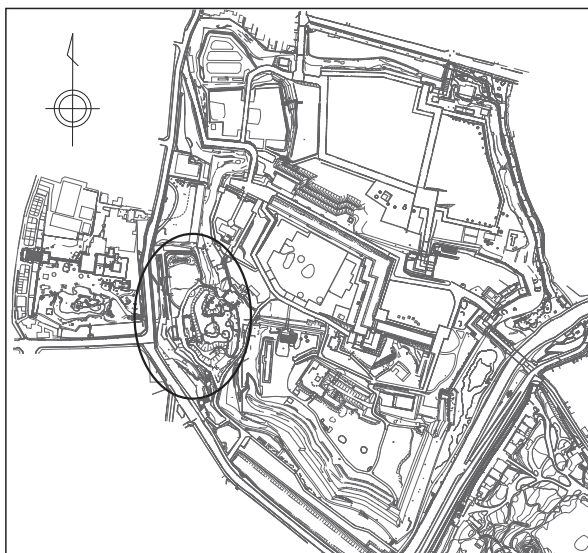
(1) 玉泉院丸の位置と地形的特徴 (第65・67図)

玉泉院丸は、城内西部、二ノ丸の南西・本丸附段の西・薪ノ丸の北西に位置し、いもり堀の北部を挟み、金谷出丸の東に隣接する(第65図)。二ノ丸とは北側の数寄屋門・南側の松坂門、金谷出丸とは鼠多門・鼠多門橋を介し連絡している(第67図)。西辺石垣上で標高約33mを測り、二ノ丸よりおよそ16m、本丸附段より22m、薪ノ丸より8m低い。一方金谷出丸に対しては約6m高くなっている。本丸・二の丸・御宮等、尾根頂部の郭が小立野段丘に属するのに対し、玉泉院丸は一段の下の笠舞段丘(笠舞Ⅳ面)に属している。

郭はおよそ南北180m、東西(中央部)120m、面積約17,000㎡を測る。北半は比較的整った矩形で、南半は池を抱え東西にやや膨らむ平面形状を呈する。西辺沿いに平地があり、東から南東にかけては泉水(池)、二ノ丸～薪ノ丸下の東側斜面は通路・石垣が設けられている。

(2) 現況 (第66・67図)

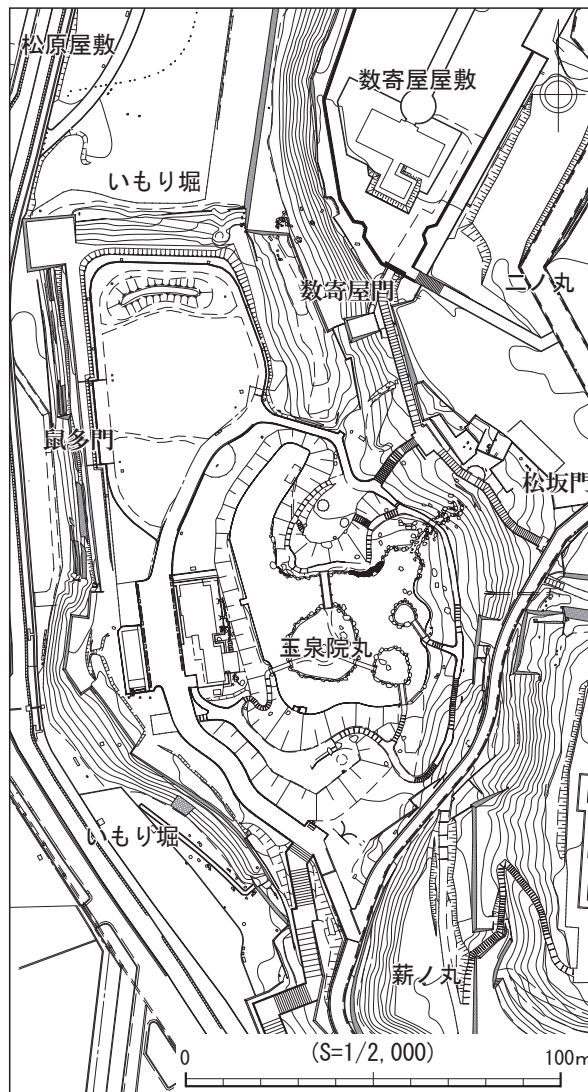
戦前は陸軍用地として監獄や露天馬場等が置かれた。戦後には県スポーツセンターが設けられ、昭



第65図 玉泉院丸の位置 (S=1/10,000)



第66図 玉泉院丸の現況 西から



第67図 玉泉院丸全体図

和 40 年には石川県体育館が建設された。体育館は平成 20 年に閉館・移転の運びとなったが、庭園の遺構については、周辺の石垣の他、堀状を呈する池北部が半ば埋まりながら地表上に姿を留めていた状態であった。以後、金沢城公園整備事業に係り、池北部・西部（南半西側）、東側斜面、色紙短冊積石垣周辺等において確認調査を実施した。その後遺構及び近世後期の絵図に基づき、暫定的な庭園の復元整備が行われ、平成 27 年 3 月に完了し現況に至っている（第 66 図）。

（3）玉泉院丸の沿革（第 20 表）

第 20 表は、玉泉院丸における普請・作事の記録を中心とした年表である。玉泉院丸の変容については、[石川県金沢城調査研究所 2015d]（『金沢城跡－玉泉院丸庭園 I－』）第 2 章第 4 節の記述を踏まえつつ、絵図の記載内容等を加味して区分設定した。

I 期（～1634）

寛永 11 年（1634）の庭園築造以前を一括する。玉泉院丸は、初期には西の丸と呼ばれ、天正 19 年（1591）頃には重臣村井長頼の屋敷（「三壺聞書」他）、また慶長期には長連龍の屋敷（「長谷部信連記」金沢市立玉川図書館加越能文庫）が置かれていたという。この他慶長後期頃の情報を含む絵図（「加州金沢之城図」東京大学総合図書館南葵文庫）には、近藤大和・上坂又兵衛の名前が見える。

慶長 19 年（1614）、越中高岡城で隠居していた 2 代藩主前田利長が没すると、元和元年～3 年（1615～17）の間に、正室玉泉院（永）が金沢に移り、この郭に屋敷を設けて居住した（「本藩歴譜」（公財）前田育徳会尊経閣文庫、『金沢市史 資料編 3』等）。玉泉院丸の名称はここに由来する。

整備に伴う埋蔵文化財調査では、庭園の池（泉水）の原型をなしたと推定される堀や溝・土坑等、当該時期に遡る遺構も確認されている。

II 期（1634～1661）

玉泉院が元和 9 年（1623）に没した約 10 年後、寛永 11 年（1634）に、3 代藩主前田利常により庭園が築造された（「三壺聞書」、第 22 表 41-01・02 他）。玉泉院丸の変遷上、最大の画期と言えるが、遺構に寛永期に特定できるものが少なく、絵図史料も欠いており、本期の具体像については検討すべき課題が多い。

なお前田利常が寛永 16 年（1639）に隠居し小松に移った後、4 代藩主前田光高・5 代藩主綱紀の初期の治世まで約 30 年の間、藩主在府の期間が長く、金沢城は特段の整備はなかったと推測される。

III 期（1661～1727）

寛文元年（1661）、初めて国許入りした 5 代藩主前田綱紀により、玉泉院丸も再整備が進められ、厩の造営や池の掘削が行われた（後者については井戸の可能性もある）。庭園の東側に展開する意匠を凝らした切石積石垣は、現時点で露呈している部分については、寛文年間頃（1661～1673）の特徴を示すものが最古となっている。

また元禄元年（1688）には当時加賀藩に茶頭として仕えていた千宗室を奉行とし、亭・花壇・石橋等が普請される等、改めて庭園が整備された（「葛巻昌興日記」「前田貞親手記」「三十人頭一件」加越能文庫、41-05～08）。このため元禄元年前を III 1 期、以後を III 2 期とする。

IV 期（1727～1759）

享保 12 年（1727）、玉泉院丸に三十人方（露地方）役所が造営された（「中川長定覚書」加越能文庫、41-09）。庭園等の造営・管理に携わる露地方は、先代藩主前田綱紀の頃に設けられたと思しく、元禄元年までその役所は玉泉院丸にあったが、庭園再整備に際して撤去され、松原屋敷等の既存建物が利用されていた（「三十人頭一件」加越能文庫、41-08）。綱紀の嫡男吉徳が 6 代藩主を継いで（享保 10 年）すぐ、露地方役所を再び玉泉院丸に戻したものと判断される。この頃の絵図によると、元禄期に亭があった場所が露地方役所となっており、近世後期まで継承されている。

第 20 表 玉泉院丸関連年表

年号	西暦	事項	時期	史料
天正19頃 慶長5頃	1591 1600	重臣村井長頼の屋敷が西ノ丸に置かれていた 「三壺開書」(県図森田文庫)[石金研 2017b] 他 関ヶ原合戦ののち、重臣長連龍の屋敷が西ノ丸に置かれていたと伝える 「長谷部 信連記」(玉図加越能文庫)、[金沢古蹟志] 他	I 期	
元和 元 ～3	1615 ～17	2代藩主前田利長正室玉泉院(永)の金沢移徙に際し、この地に屋敷が造営され る 「御歴代御書写」(加越能文庫)、「本藩歴譜」[金沢市史資料編3近世1]		
寛永11	1634	3代藩主前田利常の指示により庭園が造営される 「三壺開書」他	II 期	41-01
寛文 元	1661	玉泉院丸に厩を建設し、池を掘らせる 「政隣記」(加越能文庫)、「日帳」(森田文庫)[石野 2005]	III 1 期	41-03
寛文年間 ～73	1661 ～73	この頃、色紙短冊積石垣等を構築(修築)か		
元禄 元	1688	5代藩主前田綱紀、馬廻組番所を撤去し、千宗室に御亭や露地の整備を指示する 「葛巻昌興日記」(加越能文庫)	III 2 期	41-05
元禄 5	1692	この頃玉泉院丸に氷室を設置か [金沢古蹟志]		
享保12	1727	三十人方役所(露地方役所)が出来する 「中川長定覚書」(加越能文庫)	IV 期	41-09
明和 2	1765	鼠多門橋を架け替える 「政隣記」	V 期	
文化 9	1812	鼠多門長屋を修理する 「御触抜書」(玉図奥村文庫)[加史 12]		
文化13	1816	鼠多門を玉泉院丸門と改称する 「御城方御親翰御加筆物写」[加史 12]		
文政 4	1821	武具土蔵を新築する 「名倉氏採取襖下張文書」(金沢大学日本史学研究室)[木越 2006]	VI 期	
天保 3	1832	12代藩主前田斉泰、カラカサ亭の設置を命ずる 「温敬公日記」(前田育徳会)		
安政 3	1856	滝が造営される 「公私心覚」(加越能文庫)		41-15

V 期 (1759～1821)

宝暦9年(1759)の大火では玉泉院丸は被害を免れたが、宝暦10年(1760)の修補願図には、従前から変状をきたしていたと考えられる数寄屋門台・数寄屋門下泉水縁石垣も併せて挙げられている。

現状でもこれらの石垣は、石垣編年6期(宝暦～安永年間頃)の特徴が認められるので、宝暦9年以後をV期とする。火災の被害を受けなかった郭平坦部については、18世紀後半代の景観ははっきりしないが、19世紀に入っても大きな変化はなかったと思われる。

VI 期 (1821～1871)

IV・V期の基本的な構成はその後踏襲されたが、玉泉院丸に属する建物の新設・増改築や、庭園の部分的な修築は行われている。ここでは便宜上、文政4年(1821)の土蔵増設を目安として、VI期を設定しておく。この他露地方役所では、これ以前に北側が御鳥部屋となり、土間部屋が増築されるとともに、近接した箇所にも物置が設けられている。また鼠多門長屋の修理等も行われており、変化は漸移的であった。泉水とその周辺においては、天保3年(1832)のカラカサ亭設置(「温敬公日記」尊経閣文庫、[長山 2006b] P218～P219)、安政3年(1856)の滝造営(「公私心覚」加越能文庫、41-15)、また池の中島が天保元年までに3基となっている等の動きがある(第24表・第70図42-11)。

なお、明治4年(1871)からの数年間には、御雇外国人であったスロイスの邸宅が存在していた。一方で明治4年7月の廃藩後は兵部省(のち陸軍省)の管轄となり、明治13年(1880)には、兼六公園内に「明治紀念之標」を築くため玉泉院丸の石材が転用された。池については明治30年代の地図になお描かれているが、明治40年代以降は描かれなくなり、大正13年(1924)には露天馬場等の施設敷地となっていて、すでに埋め立てられている。

2. 庭園に関する資料

(1) 遺構 (第21表)

地表上からも確認できる現存遺構としては、堀状を呈する池北部と、東側斜面に分布する石垣群があるが、池北部は近代以後に半ば埋め立てられた状態であり、石垣も近世の地盤面や前面の遺構は埋没している状態であった。

平成20年度から実施した発掘調査やボーリング調査等（埋蔵文化財調査）により、庭園に先行する遺構（屋敷地推定遺構面や堀）、北側池下部、南側の池・中島・出島の一部、これらに関わる護岸石垣・石組・景石、段落ちの滝とその周辺の景石や園路跡、最上流にある色紙短冊積石垣とその下部・周辺石垣の基底部等を検出した。これらのうちの幾つかは年代をある程度の幅で推定できたが、築造時期の特定については難しいものが多い。また密度の高いボーリング調査により、池や堀のおおよその範囲や深さ、造成状況等の知見が得られた。相互の関係性や変遷状況等が課題となっている。

なお池南部の西側については、スポーツセンター・県体育館建設に伴う造成土により削平を受けており、Ⅲ期以降存続した「露地役所」等の地盤の大部分は失われている。

上記調査のうち、第1～3地点及びボーリング調査等の成果については、報告書のIとして取りまとめた〔石川県金沢城調査研究所2015d〕。またこの他、南西～南側の石垣解体修理等に係る報告書を刊行している〔石川県金沢城調査研究所2010b〕〔石川県金沢城調査研究所2017c〕。

(2) 文献 (第22・23表)

玉泉院丸庭園に関する文献史料は全般的に少ない。築造経緯については、今のところ一次史料では確認できず、元禄8年(1695)以前に成立した「三壺聞書」(第22表41-01・02、〔石川県金沢城調査研究所2017b〕)にみえるのが最初で、以後の編纂物に取り上げられるが、基本的には「三壺聞書」の情報に拠っている。17世紀後半以後では、元禄元年(1688)の修築普請について、藩士の日記である「葛巻昌興日記」・「前田貞親手記」にまとまった記載(41-05～07)がある。利用状況に関わる史料も、蓮池庭・竹沢庭(兼六園)等と比べてかなり少なく、二、三例が確認できたのみである。

(3) 絵図 (第24表・第68～70図)

玉泉院丸は城内の一郭として、城郭全体図においては基本的に描写され、また部分図も幾つか知られているが、類似の表現も多く、庭園としての構成要素を詳細に描写するものはそれほど多くない。

庭園築造期のⅡ期については、玉泉院丸のみならず金沢城全体を通じて絵図は知られていない。Ⅲ期～Ⅴ期にかけては、ある程度の数量があるが、比較的描写が簡略なものが主体である。Ⅵ期には、「御城中壺分基絵図」(第24表・第70図42-11)等、園路等が詳細に描かれた精密な絵図が3種ある。

第21表 玉泉院丸庭園関連埋蔵文化財調査一覧

年度	調査形態	調査区	調査地点	遺構等
H20 (2008)	発掘調査	北部	第1地点	池跡、東岸石垣根石、作庭以前堀跡
H21 (2009)	発掘調査	西部	第2・3地点	池跡、護岸石垣、中島(大)、出島、作庭以前溝跡等
H22 (2010)	発掘調査	北東部	第4地点	護岸石組、斜面裾石組、斜面石組、滝石組等
H23 (2011)	発掘調査	北東部	第4・5地点	色紙短冊積石垣の滝・滝壺、滝石組の滝(斜面下部)等
H24 (2012)	発掘調査	北東部	第4・5地点	色紙短冊積石垣の滝・滝壺、滝石組の滝(斜面下部)等
H25 (2013)	発掘調査 (石垣解体修理)	南部等	玉泉院丸 南石垣等	南石垣解体修理に伴う発掘調査で土人形・玩具類出土 周辺切石積石垣の解体修理
H21 (2009)～ H25 (2013)	ボーリング調査	全域 周辺	BP1～92	旧地形、初期の堀、池の広がり・変遷等 (郭周辺の調査はH25以後も継続)
H23 (2011) H24 (2012)	高密度表面波探査	中央部 東部	W-1～8	初期の堀、池底形状

第 22 表 玉泉院丸庭園関連文献史料 1

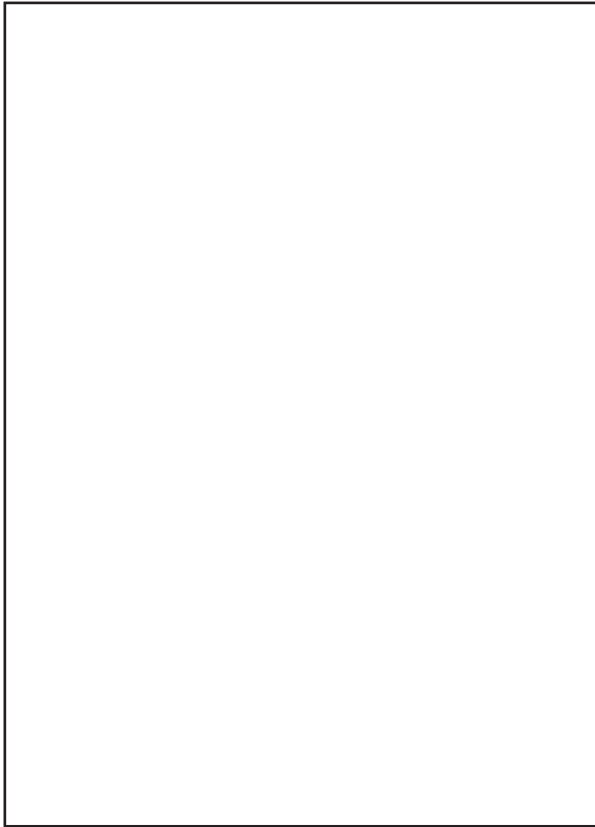
No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
41-01	寛永 11(1634)	加州利常公御帰国之事 (略)玉泉院殿御屋形之跡を御露地に可被仰付とて、大橋又兵衛・滝長兵衛などに被仰渡、先地形之土をならさせて、泉水などに可被成所の土を町中へ可被下旨御触にて、毎日掘て取行程に、頓而谷峯と成りけり、(略)	三壺聞書	石川県立図書館 森田文庫	石金研 2017b P137
41-02	寛永 11(1634)	玉泉院様丸御普請之事 利常公ハ金沢 _江 御着ノ翌日ハ御普請所へ毎日御出被為成、京都ハ被召寄たる釧左衛門と云山作りに被仰付、築山・泉水・御亭等ノ品々、前代未聞なるもの也、能州 _ハ (修羅) 宮腰へ大石共着岸す、五百人・千人宛しゆらニ載て被為取、其石窠つ宮腰道半途にて角欠けれハ、其儘今に捨置ぬ、御家中ハ植木共指上ル、鶴来山・二俣山・能州 _ハ 在々所々尋かゝりの能植木・石等を取寄られ、御前御直に御普請被成、其日 _ハ の奉りを以、御奉行勤ける程に、惣御奉行ハ殿様也、人足ハ御相撲の者五拾人・百人者ト名付て御鉄炮の者共也、御目通り之外ハ役人・御小人也、(略)	三壺聞書	石川県立図書館 森田文庫	石金研 2017b P137
41-03	寛文元 (1661) 11.3	(泉脱力) 一、玉様丸・金屋々敷両池ほらせ、奉行板坂吉丞・ (城番馬廻) 疋田半平申渡ス、	寛文元年二年 日帳	石川県立図書館 森田文庫	石野 2005 P75
41-04	延宝 7(1679)	(略)玉泉院様丸御泉水、御本丸之方段々石垣御座候、是ハ先年より度々被上候絵図、植込ニ絵取、石垣ハすくなく御座候、寛文八にも其通ニ可仕由ニ付、石垣あらハに無御座様ニ絵取仕申候、(略)	金沢御城絵図 付札	(公財) 前田育徳会 尊経閣文庫	木越 2005 P28
41-05	元禄元 (1688) 6.24	六月廿四日。玉泉院様丸御庭被仰付に付、造事千宗室江被仰付。	葛巻昌興日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 4 P955
41-06	元禄元 (1688) 9.11,21	九月十一日。玉泉院様丸に先年より有之十間之御厩、今日よりこぼち申也。此跡に御亭被仰付、御花塙可被仰付由也。 九月廿一日。今度被仰付玉泉院様丸御亭出来、今日御作事方奉行人より、其旨達御聴也。	葛巻昌興日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 4 P969_970
41-07	元禄元 (1688) 9.23	覚 (略) 地形石橋御用ニ付置申候 同(御ふち方大工) 小右衛門 清兵衛	前田貞親手記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
41-08	元禄 3(1690) 7.8	一、去々年 玉泉院様御丸御普請就被 仰付候、私共役所こぼち候様被 仰渡候故、(略)	三十人頭一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
41-09	享保 12(1727) 9.20	玉泉院様丸三十人方役所出来仕候旨(略)	中川長定覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	

第 23 表 玉泉院丸庭園関連文献史料 2

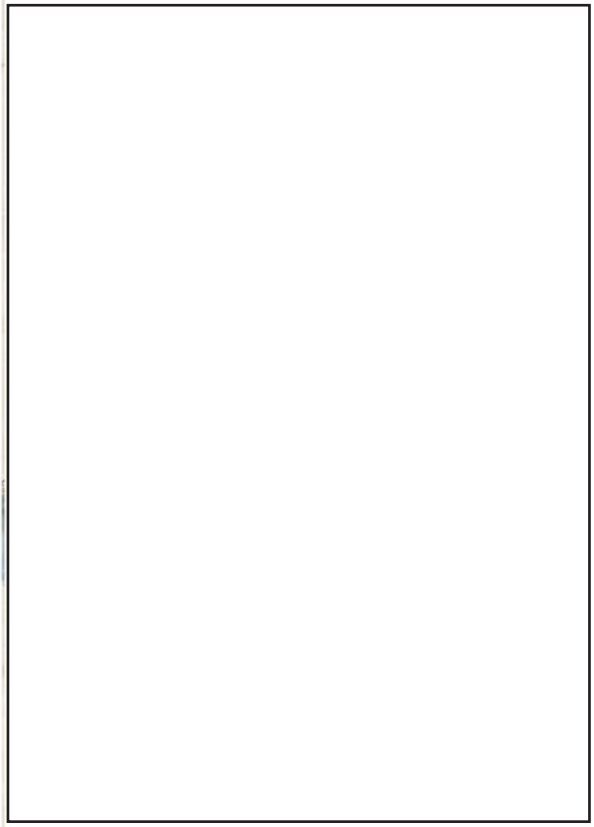
No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
41-10	宝暦4~6(1754~56)? 3.4	<p>善良院様・斐姫様御歩ニ而玉泉院様丸辺御行歩御出可被成旨被 仰候旨、別紙覚書を以九里覚右衛門申 (平出)</p> <p>聞候付、御武具方乾場之役所御腰被懸候ても指支申儀者も有之間敷哉之旨、御武具奉行へ相尋候処、指つかへ申儀も無之旨申聞、御露地方役所之儀もつかへ不申由、三十人頭申聞、御縮等指支不申候間 御出之時分御縮有之候様夫々申渡置候可被達 御聽候、以上、</p> <p>三月四日 横山大膳判 略 前田兵庫様 ○覚書爰ニ落ス 富田数馬様 小堀牛右衛門様</p>	奥村尚寛 御城方覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2016b P34
41-11	明和 2(1765) 9.1	<p>九月朔日 松坂御門往来有之人々、家来返候節并迎ニ呼寄候節も、右御門ヨリ致往来候者有之体ニ候、主人不召連家来ハ相通不申筈ニ候条、迎等ニ取寄候節ハ河北・石川両御門相通候様家来末々へ可申渡旨、且又石川御門御石垣出来ニ付、御着城御当日ヨリ往来不差支旨、御城代被仰渡候由等、例之通御横目廻状有之</p>	政隣記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	高木 2015 P90 (加賀藩史料8 P377)
41-12	安永 8(1779) 10	<p>付札、御横目江 松坂御門往来之儀は、急切御用之節格別、常役所等江罷出候節も、宅手寄に而致往来候人々も有之躰に相聞候。右御門往来之儀、近年御改も有之候処、猥に相通候儀に而者無之筈に候。此度拙者共迄御噂之趣も有之候に付、改申渡候條、右御門致往来候人々嚴重相心得、御用之外は一切往来有之間敷候。是以後猥に往来有之人々可相糺候條、此段夫々可被申談候事。 十月</p>	日記		加賀藩史料 9 P275_276
41-13	文化 14(1817)	<p>松坂御門外御土蔵際ニ色紙短尺積之高キ御石垣有之候。此石垣ニ樋有之。此樋ノ滝ニ相成水落ル。此樋下ニ滝つぼ有之也。此所土ニ而埋り居候。此辺御泉水向御様子有之。御石垣も見事ニ積有之候。</p>	御城高石垣之事等(高石垣等之事 御城中御門々名目并御長屋間敷等之事)	金沢市立 玉川図書館 後藤文庫	日本海文化 研究室1976 P325
41-14	天保 14(1843) 3.11	<p>(カ) 一、今朝玉泉院様丸御縮ニ而御歩行御試被遊候由</p>	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2015d P39
41-15	安政 3(1856) 8.18	<p>(略) 玉泉院様丸御庭瀧被 仰付、最早七步通り相済候処、 (略)</p>	公私心覚	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	

第 24 表 玉泉院丸庭園関連絵図史料

図	No.	題名	所蔵	請求番号等	作成年次	景観時期等	
68	42-01	加州金沢城絵図	(公財)前田育徳会		寛文7年(1667)	Ⅲ 1	金沢城全域図 城郭修補願絵図の控図
68	42-02	金沢城内絵図	滋賀県立安土城考古博物館			Ⅲ 1	金沢城全域図 万治2～延宝4年 (1659～76年)頃
68	42-03	金沢城二之丸座舖之図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-28		Ⅲ 1	二ノ丸御殿全域図 元禄9年(1696)以前の内容 寛文元～元禄元年(1661～88) か
68	42-04	金沢御城絵図	(公財)前田育徳会			Ⅲ 1	金沢城全域図 延宝年間(1673～1681)
69	42-05	金沢城絵図	石川県立歴史博物館	2-18-2 1613		Ⅲ 1 ～ Ⅲ 2	金沢城全域図 延宝4～元禄年間(1676～1704) 頃
69	42-06	金沢城絵図	石川県立歴史博物館 竹下家文書			Ⅲ 2	金沢城全域図 元禄元年(1688)以後 D類
69	42-07	金沢城中地割絵図 甲号(玉泉院丸)	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-12⑤		Ⅲ ～ Ⅳ	金沢城全域図(組図) 宝暦9年(1759)大火以前
69	42-08	金沢城図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大1125		Ⅳ	金沢城全域図 18世紀前半
69	42-09	玉泉院丸絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-51	宝暦5年(1755)	Ⅳ	部分図
70	42-10	金沢城内絵図	石黒信二氏			Ⅴ	金沢城全域図 文化7～13年(1810～16)頃
70	42-11	御城中壘分碁絵図	横山隆昭氏	絵図3	文政13年(1830)	Ⅵ	金沢城全域図 文政8～13年(1825～30)
70	42-12	金沢御城内外御建物絵図 (薪之御丸辺 玉泉院様御丸辺)	(公財)前田育徳会			Ⅵ	金沢城全域図(41枚組図) 天保4～9年(1833～38)頃
70	42-13	御城分間御絵図	(公財)前田育徳会		嘉永3年(1850)	Ⅵ	金沢城全域図 嘉永元年～3年(1848～50)



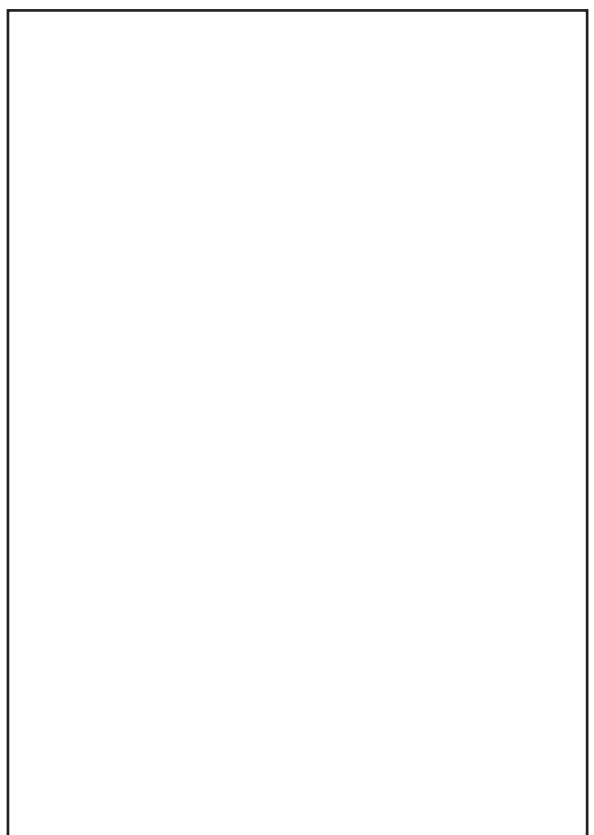
加州金沢城絵図〔(公財)前田育徳会蔵〕42-01 Ⅲ 1



金沢城内絵図〔滋賀県立安土城考古博物館蔵〕42-02 Ⅲ 1



金沢城二之丸座舗之図〔金沢市立玉川図書館蔵〕42-03 Ⅲ 1



金沢御城絵図〔(公財)前田育徳会蔵〕42-04 Ⅲ 1

第 68 図 玉泉院丸 絵図 1



金沢城絵図 [石川県立歴史博物館蔵] 42-05
Ⅲ 1 ~ Ⅲ 2



金沢城絵図 [石川県立歴史博物館蔵] 42-06 Ⅲ 2



金沢城中地割絵図 (玉泉院丸)
[金沢市立玉川図書館蔵] 42-07
Ⅲ ~ Ⅳ



金沢城図 [金沢市立玉川図書館蔵]
42-08 Ⅳ



玉泉院丸絵図
[金沢市立玉川図書館蔵] 42-09
Ⅳ

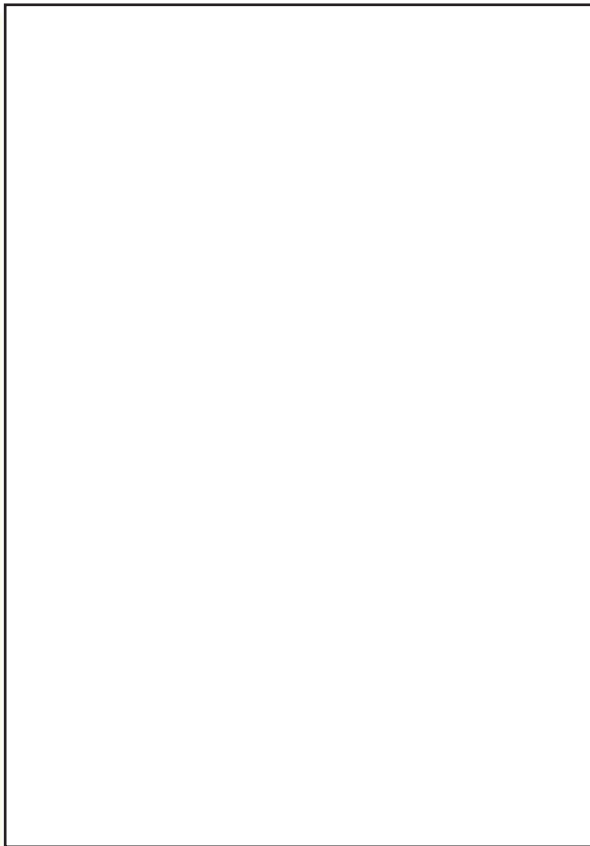
第 69 図 玉泉院丸 絵図 2



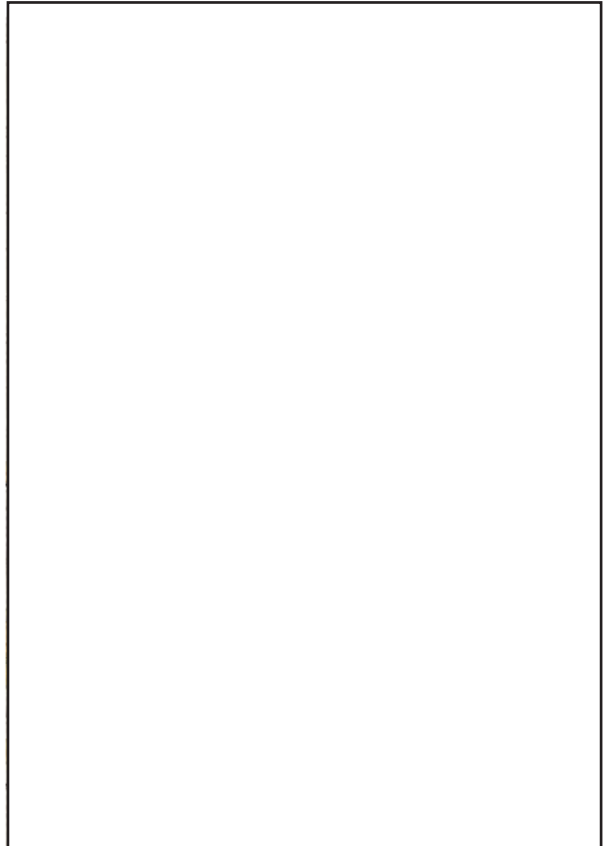
金沢城内絵図 [石黒信二氏蔵] 42-10 V



御城中巻分基絵図 [横山隆昭氏蔵] 42-11 VI



金沢御城内外御建物絵図 (薪之御丸辺 玉泉院様御丸辺)
[(公財)前田育徳会蔵] 42-12 VI



御城分間御絵図 [(公財)前田育徳会蔵] 42-13 VI

第70図 玉泉院丸 絵図3

3. 庭園遺構の状況

地割・区画施設（第71図）

玉泉院丸は北・西側に対し高く、この外側にはかつて水堀（いもり堀の延長）があったが、現在は埋め立てられている。郭側法面は下半が土羽で、川原石で護岸されている部分が目立つ。上部には石垣（鉢巻石垣）が巡っている。また石垣上には二重堀・櫓が設けられていて、一部に柄穴や地覆石等が残る。西側の金谷出丸に向かい、西辺中央にあった鼠多門は、明治17年（1884）に焼失したが、平成26年度からの確認調査で下部構造が良好に遺存していることが明らかになった〔石川県金沢城調査研究所2015a・2016a・2017a〕。

ただし上記の地割・区画施設は、郭自体に関わるもので、庭園に特化したものではない。庭園域とそれ以外（役所空間等）が明確に区分されていない点が、玉泉院丸の特徴の一つとなっている。

石垣（第72～76図、位置：第71図）

玉泉院丸周辺の石垣のうち、二ノ丸・本丸附段側（東側）の斜面に展開する石垣の多くは意匠を凝らした切石積で、庭園の構成要素としての特色が認められる。ここではこれら石垣群について、斜面に沿う通路（松坂）を目安として、堀状を呈する池北部の東縁・数寄屋門台付近（松坂北西）、二ノ丸居間先下・色紙短冊積石垣付近（同東）、本丸附段から薪ノ丸側に至る一帯（同南）に区分けし、それぞれ北部・中央部・南部と呼ぶこととする（第72図）。

北部石垣群（第72図②）

数寄屋門台が突出して高く、他にも櫓台を呈する箇所があり段差は大きいものの、概ね堀状の池に沿った軸を主体に構成されている。池縁から立ち上がる部分は、庭園築造時に先行する堀（後述）の東側を埋め立てて構築され、当初は粗加工石積であったが、17世紀後半（石垣編年5期）に乱切合わせの切石積となった（第73図）。さらに宝暦9年（1759）の大火以後にも修築を受け、現況の数寄屋門台石垣も18世紀後半（6期）の特徴を有する。数寄屋門台石垣は、6期段階の地盤からの高さでも9m近く、中央部の色紙短冊積石垣、南部の本丸附段西側下段石垣と並び、象徴的な役割を担っていると考えられるが、これらのうち唯一建物の土台としての機能も有している。

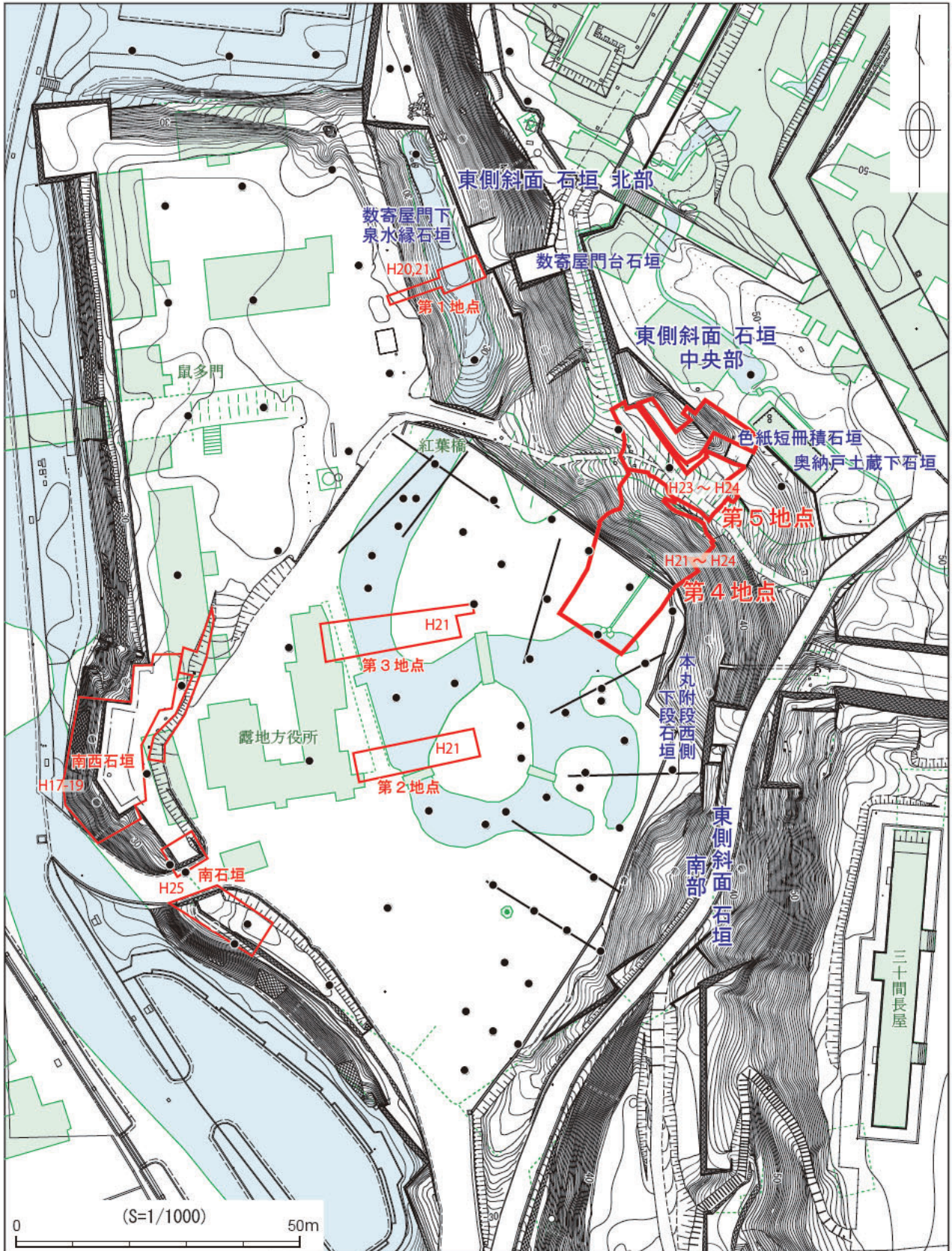
中央部石垣群（第72図③）

二ノ丸居間先土蔵～奥納戸土蔵下に相当し、これら土蔵等を直接戴く奥側の石垣と、その前面に段状となって展開する石垣群からなる。高低のみならず平面的な地割も複雑な折れ曲がりをも有し、面毎に角度を異にする等、自然の岩山に擬えているように見え、群としての意匠性も窺える。

色紙短冊積石垣 段状の石垣群の中心南寄りに位置する（第74図①・第75図①）。石垣は南北6.5m、東西7.6m、高さ9.5m以上（発掘調査による）を測る。天端は東側を一段高く作る。背後は庭籠下・奥納戸土蔵下石垣に接するが、本石垣奥側が埋め込まれる形となっている。両脇前方にはやや低い切石積石垣がそれぞれ接し（第74図②③・④⑤、第75図②～⑤）、前面側に平面コの字状の空間（窪地）が形成される。ただし詳細にみると、石垣面同士が接する入角部の状況は、西側では複雑な入り組みがあり、東側も鋭角となっており一様ではない。調査前の地表から約2.5m下で近世末期の砂利面が確認されたが、石垣はさらに下方に伸びており、全容は不明である。

色紙短冊積石垣との名称は、石垣普請を家職（穴生）とする藩士、後藤彦三郎がその著作で記したもの（第23表41-13等）で、縦位で用いられる角石状の細長い長方形石材を短冊（原文では短尺）形、正方形に近い材を色紙形とし、これをこの石垣を代表する特徴と見做したことに基づいている。

短冊形の石材は、確認できる限り3個組み込まれている（第74図①・第75図①）。上位石材（約2m）より中位・下位石材の方が長大（約2.7m）であり、視覚的な効果も意識して配置されたと考えられる。なお北側に隣接する脇の石垣にも長大な縦位の角石（長さ約2.8m）が用いられており（第74図④、



背景は嘉永3年(1850)「御城分間御絵図」42-13を転写

- | | | | |
|--|------------|---|-------------------|
| | 発掘調査地点 | | 近世後期遺構推定箇所 (絵図転写) |
| ● | ボーリング調査地点 | | 地形境界 |
| | 高密度表面波探査箇所 | | 堀・池・流路・開渠 |
| | 石垣 | | 建造物 |

第71図 玉泉院丸調査地点・主要石垣位置図

[石川県金沢城調査研究所 2015d]
第27図より転載・加筆



①玉泉院丸東側斜面の石垣 西から



②北部（泉水縁） 南西から



③中央部（色紙短冊積石垣周辺） 西から

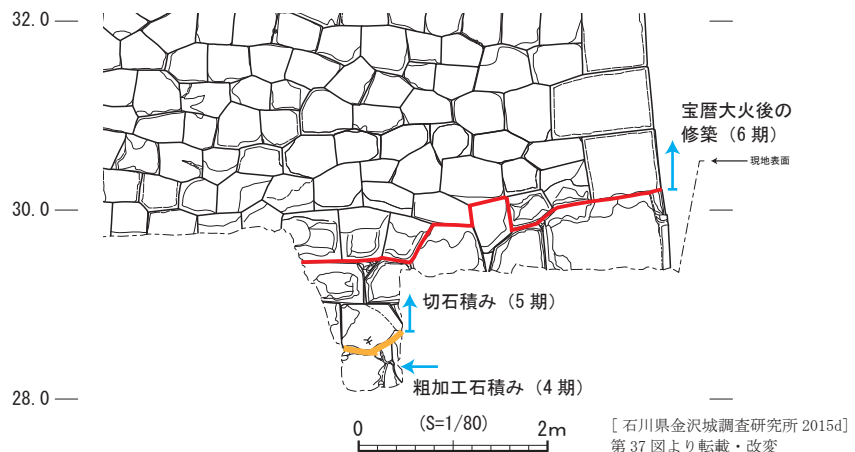


④南部北半（本丸附段下） 北西から



⑤南部南半（本丸附段下） 北西から

第72図 玉泉院丸東側斜面の石垣



第73図 数寄屋門下泉水縁石垣北櫓台西面下部

第75図③)、レベルとしては短冊形下位石材に連続する位置にある。

短冊形石材の間には、横位の正面長方形材の他、正面多角形材が切り合わされ、全体として、中央部が落ち込むような意匠が形成される。その一方、上位の短冊形石材の南側には、堅緻で黒色を呈する坪野石が集中し、その中央には断面V字形の石樋が組み込まれている。また後述の通り、石垣前面の窪地は、石組の池を伴っていた。このように一帯は水が流れ落ちる滝として構成され、切石積石垣が滝石組・滝壺の機能や意匠を具えていた。石垣は17世紀後半(5期)の特徴を示し、また前面の池部分は藩政末期に改修されたとみられるが、最下部は未調査であり、特異な造形の原型が、寛永11年(1634)の庭園築造時に遡るかどうかが課題となっている。

色紙短冊積石垣背後の奥納戸土蔵下石垣は、転用した粗加工石の面をそのままとし、上下左右を切り合わせた切石積石垣の一形式「金場取残積」である(第76図①・③)。色紙短冊積石垣の前面から北側にかけては、乱積みの切石積石垣が連続する。北端に近い居間土蔵下石垣下半では、粗加工石積であるが、隣接する石材間の隙間(石口)を加工して受け部を作り、板状詰石を嵌め込み平板性を高める細工が施されている。色紙短冊積石垣の北側の一部、居間土蔵下石垣上半からその南側にかけて、近世後期の修築が認められるが、その他は17世紀後半(5期)の特徴を示す。

南部石垣群(第72図④・⑤)

北端には北部の数寄屋門台、中央部の色紙短冊と並び、突出した高さの石垣(第76図②・④)がある。天端は色紙短冊積石垣と同様に段がついている。石垣面は、正面多角形の石材を用いた乱積で、坪野石による材が散らされている。また下部には、刻印の有する石面を粗く残した石材が集中している。この石垣の南～東側にも、乱積みの切石積石垣が展開している。

泉水

滝(色紙短冊積石垣付近)(第77図)

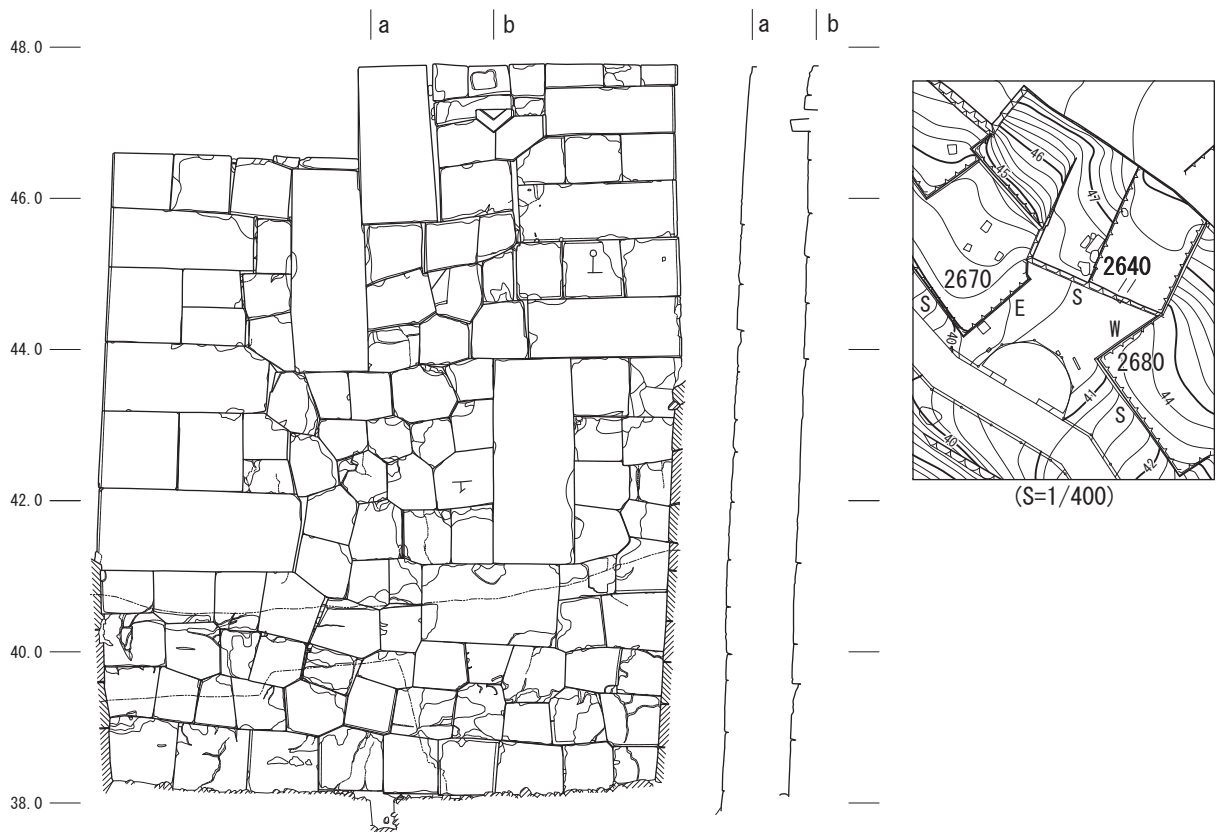
色紙短冊積石垣上部に組み込まれた坪野石製の石樋(第77図②)への給水経路は未確認であるが、二ノ丸まで揚水された辰巳用水が供給元と推定される。色紙短冊積石垣の下には、幅5.2m、奥行4.0m、深さ2.1mの窪地=滝壺が形成されている。その底には大形の板石を中心とする石組があり、玉石が敷かれている(①・③・④)。板石の前面には、大きな溜りが造られ、背面には、水受石が石樋直下に置かれている(石樋から約9m下位)。一筋の滝として石樋から流れ落ちた水は、溜りへと導水される。園路坂道(松坂)の水路側溝からの流れ込みとあわせ(①・⑤)、あふれ出た水は暗渠を通り(④)、松坂を横断して斜面下手側に導かれたと考えられる。

石組の一部は、滝壺の護岸石垣に組み込まれて構築されていること、玉石敷は少なくとも上下二面確認できること、近代初期の埋土に直接覆われていることなどから、滝壺周辺の石組は、当初の景色のままではなく、安政3年(1856)の改修を経た最終段階の様相を示すと考えられる。

導水路と段落ちの滝(滝石組)(第78・79図)

松坂を横断して暗渠から流れ出た水は、弧を描くように石組間を流れ、下位の段落ちの滝に至っている(第78図・第79図①)。この間の水路は地山・地山質整地土を基盤とする。岸には景石・石組(第79図②)が見られるが抜き取り痕も多く、本来の形状は判然としない。

段落ちの滝は、4段程度で構成されていたと考えられる。色紙短冊積石垣等の下方、斜面下位を占め、落差は全体で約4mある。このうち上段の石組は、盤状の大型戸室石を階段状に据え付けた構成をとる(③)。滝の水は石の上面加工から幅広の流れとなって落ちていたと推定される。中・下段の詳細は明確ではないが、流れの西側では、大ぶりの平石等を弧状に並べる等、特色ある配置が窺える(④)。滝の流れはこれらの石組間を蛇行しつつ下り、池に至ったとみられる(⑤)。以上は安政3年(1856)の改修後の景観であるが、この時点で追加したと考えられる景石のほか、上記した弧状の配石部分等、古い段階から継続して存在する景石もその構成に預かっている。この他、安政期には造成土に全体が

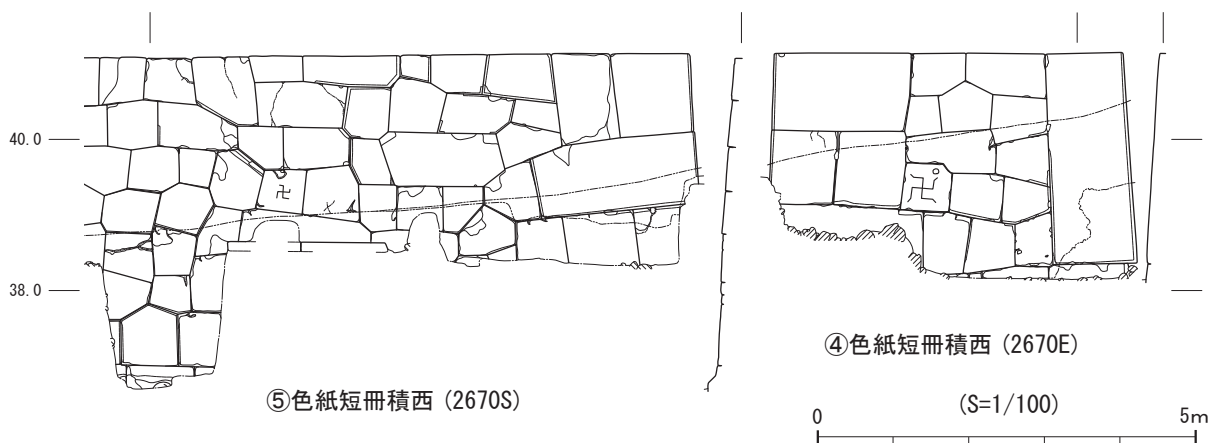


①色紙短冊積積石垣 (2640S)



②色紙短冊積東 (2680W)

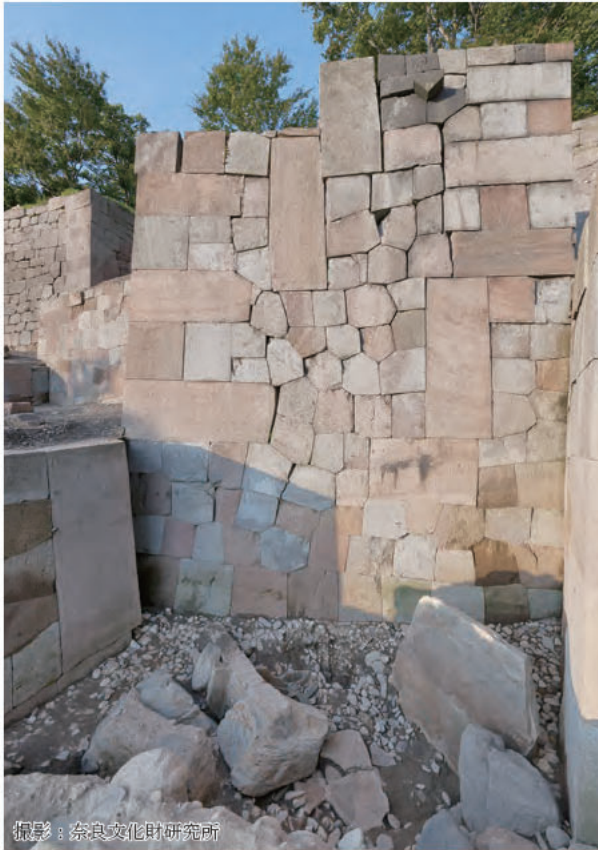
③色紙短冊積東 (2680S)



⑤色紙短冊積西 (2670S)

④色紙短冊積西 (2670E)

第74図 色紙短冊積石垣・周辺石垣立面図・断面図



撮影：奈良文化財研究所

①滝壺と色紙短冊積石垣（2640S） 南西から



②色紙短冊積石垣東（2680W） 北西から



③色紙短冊積石垣西（2670E-2640S接続部）南東から

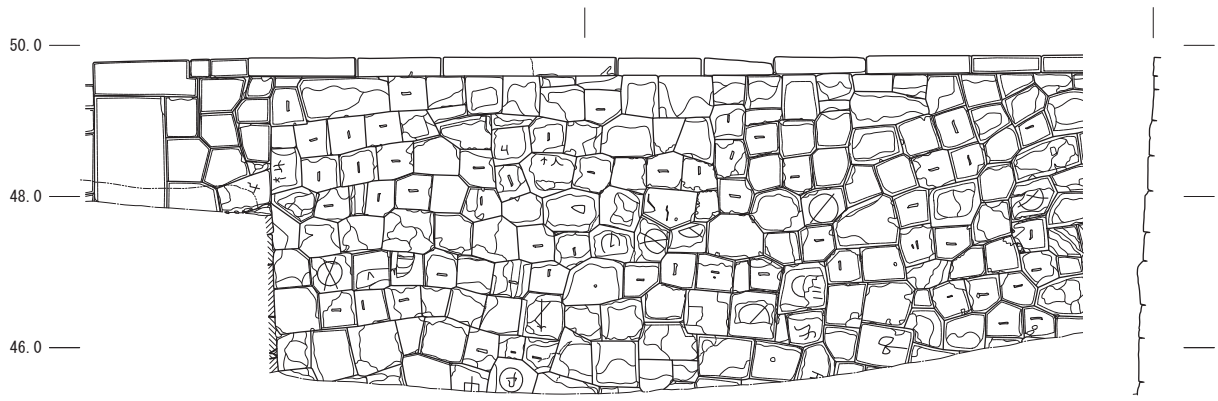


④色紙短冊積石垣東（2680S） 南から

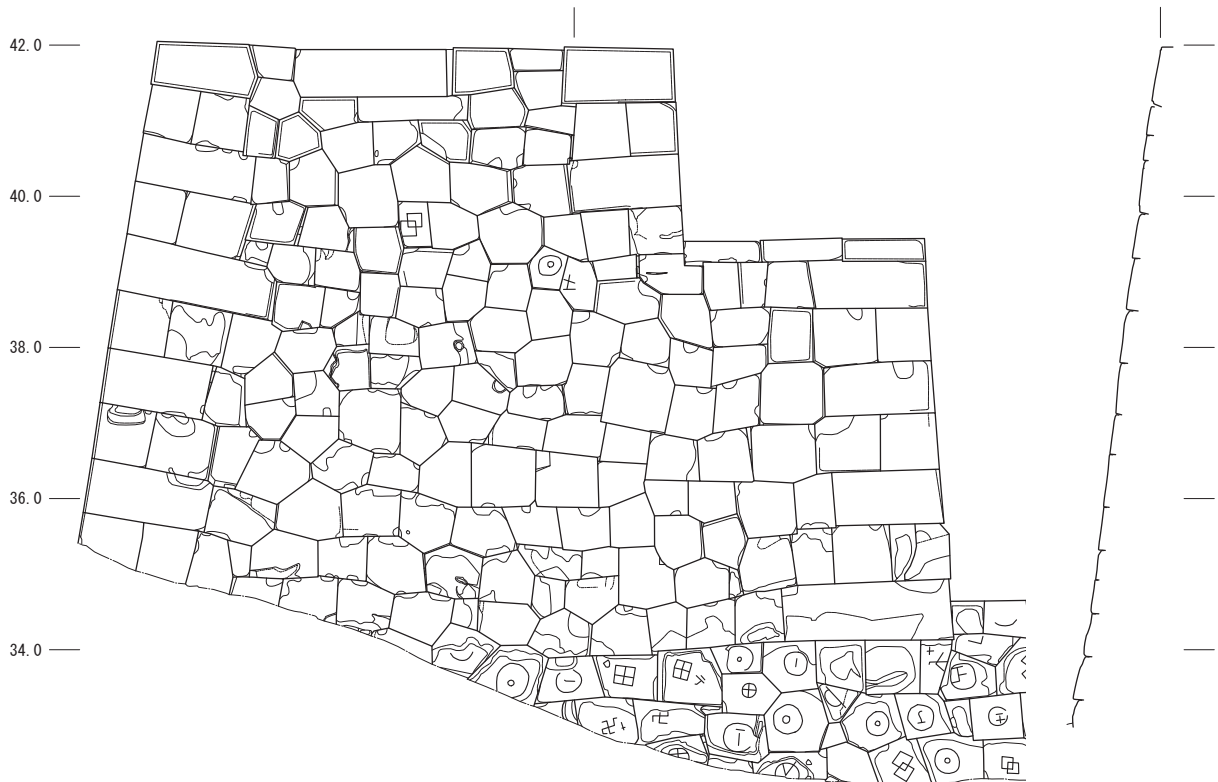


⑤色紙短冊積石垣周辺 西から

第 75 図 色紙短冊積石垣周辺写真



①奥納戸土蔵下 (2620S)



②本丸附段西側下段 (1511W)

0 (S=1/100) 5m

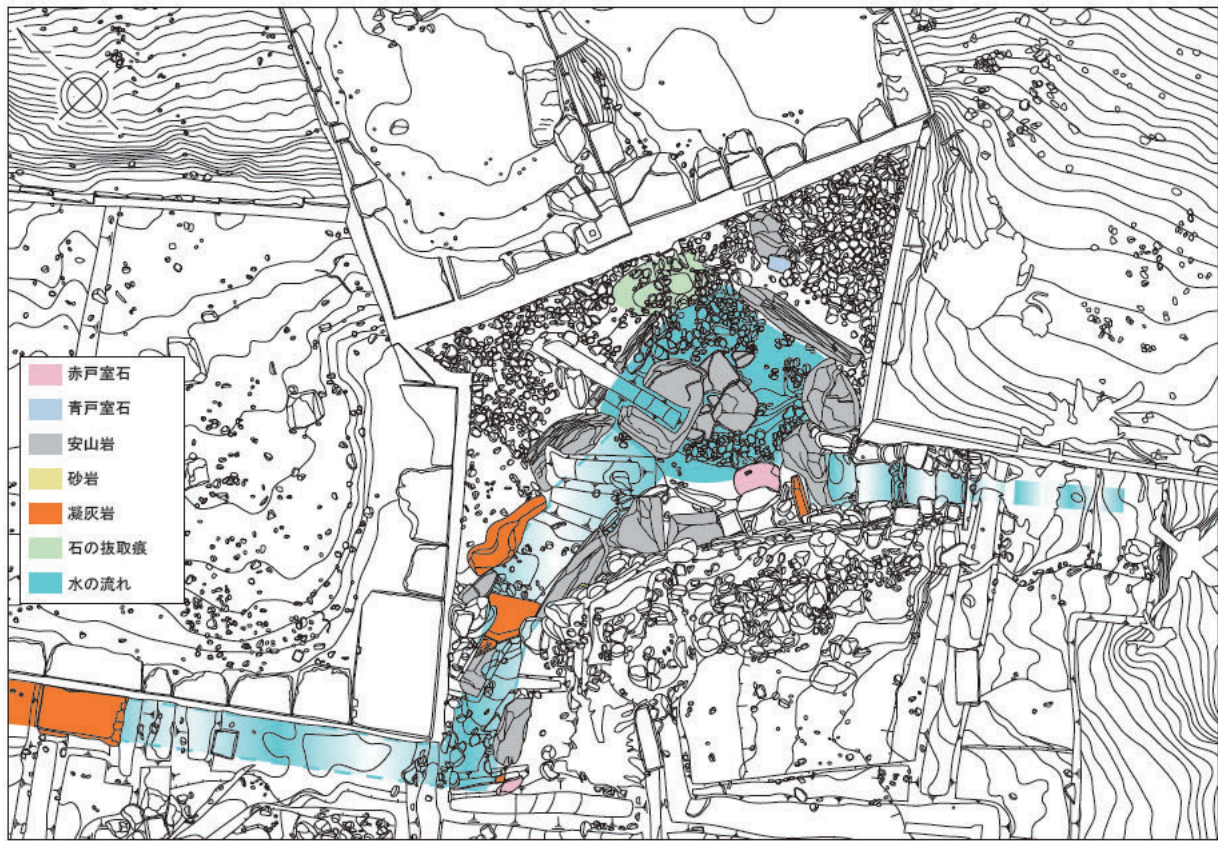


③奥納戸土蔵下 (2620S)



④本丸附段西側下段 (1511W)

第76図 奥納戸土蔵下・本丸附段西側下段石垣立面図・断面図・写真



①色紙短冊積石垣下滝壺 平面図 (S=1/100) 5m



②石樋 (色紙短冊積石垣上部)



③色紙短冊積石垣下滝壺 石組全景

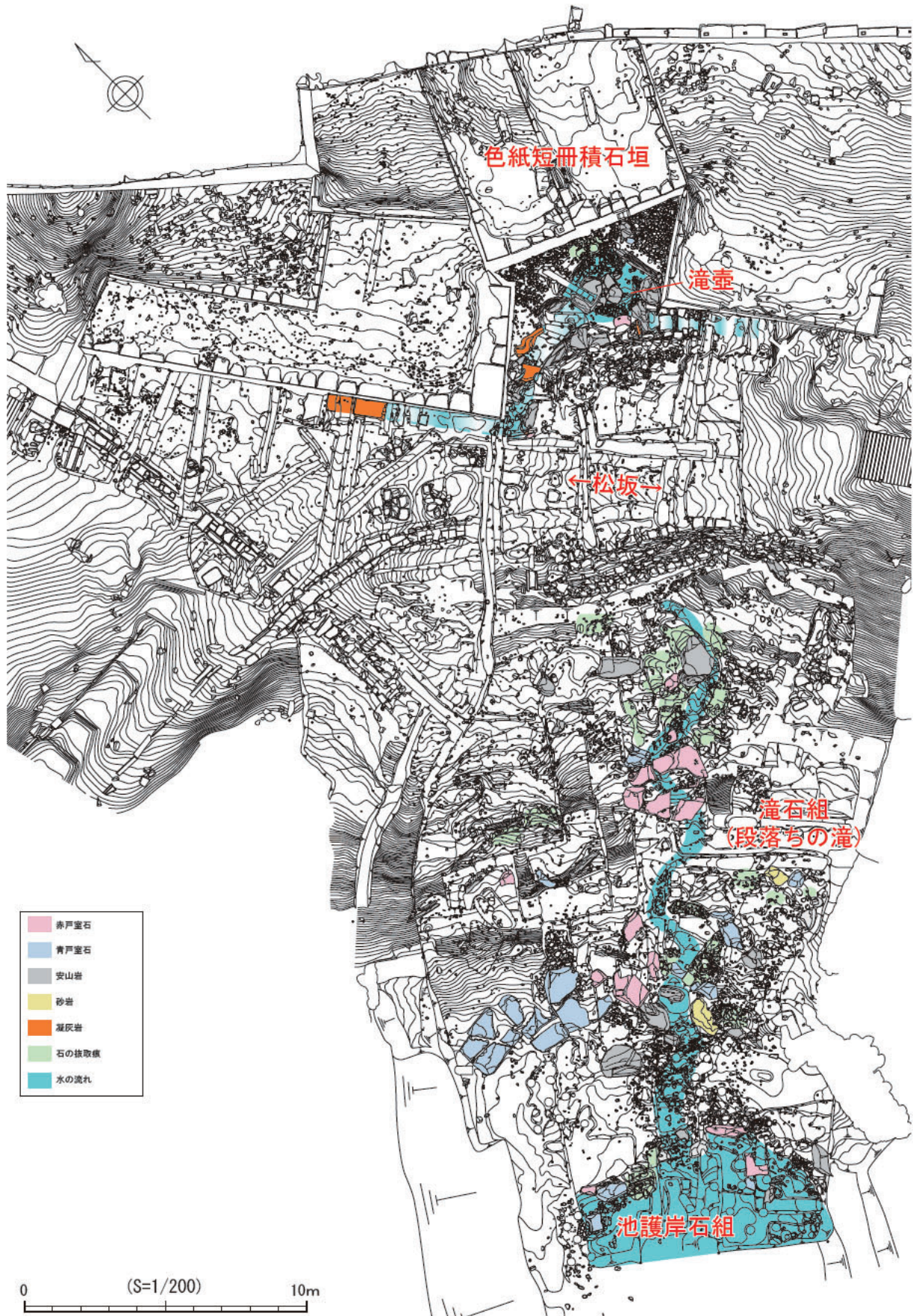


④色紙短冊積石垣下滝壺 北西から



⑤水路 (西側・数寄屋門方向)

第77図 色紙短冊積石垣下滝壺平面図・写真



第78図 第4・5地点全体図（色紙短冊積石垣～滝石組・池護岸石組）



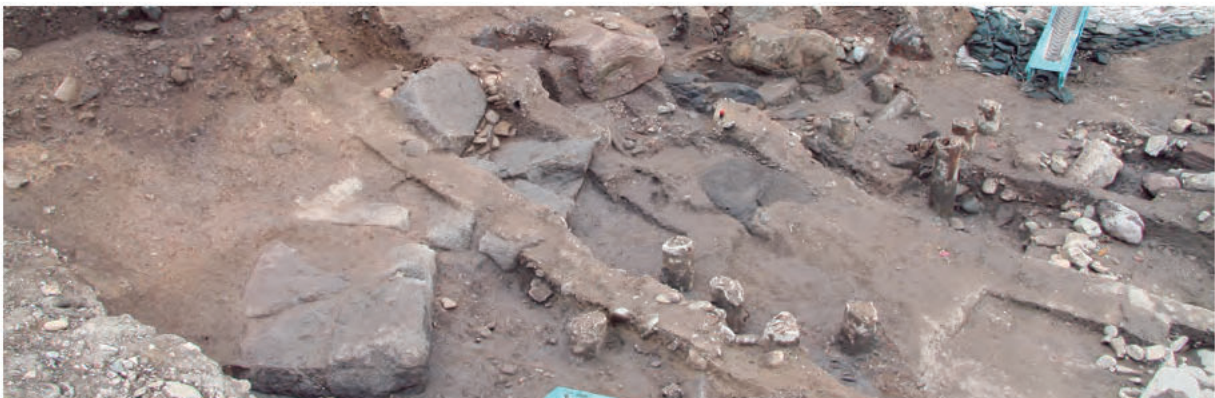
①導水路・滝石組（段落ちの滝） 全景 南西から



②滝石組上方 導水路付近景石



③滝石組上段 北西から



④滝石組西部 斜面裾石組 西から



⑤滝石組下流部（池流入口付近） 南西から



⑥滝石組西部～出島 板石

第 79 図 滝石組等写真

覆われている景石も確認されている(⑤)。景石の岩石種については、安政期に追加されたものは戸室石が多く、その他能登産とみられる安山岩や砂岩がある。

なお、色紙短冊積石垣から池への流入口までは直線距離で約33m、比高差約20mを測り、極めて立体的な景観が形成されていた。

池(第80～83図、全体第71・86図)

池については、北部の堀状を呈する部分を除き、明治後期以後陸軍用地として埋め立てられ、以後その形状は不明となっていた。天保期以降の絵図によると、埋め立てられた南部について、北側に出島があり、池中には3基の中島があった。また出島の向いの西岸には護岸石垣が築かれていた。以下では埋蔵文化財調査で得られた知見を主体に、築造過程の推定復元を交えながら記述する。

先行する遺構－堀－ 池北部は、庭園廃絶後も完全に埋め立てられることなく、堀状の形状を保ったまま存続した。第1地点のトレンチ調査(第80図)等によると、庭園の池の下層には、その前身となる幅約12～20m、深さ約4mの断面箱型を呈する堀があった。この堀は出島付近で途切れるが、土橋状部分を挟んで、南側にもほぼ同規模の堀が斜面裾を巡っていた。

池の築造 池の築造に際しては、先行する南北の堀の間をなす土橋部分を出島とし、出島以南において堀を拡幅するように庭園以前の遺構面(屋敷地推定面)が掘り窪められた。出島及び大型の中島は、地盤を掘り残すかたちで形成された(第81図・第83図①)。北側の堀は、堆積層の上部に若干造成を受けたものの、深さはさほど減じなかったが、東辺沿いが埋め立てられ石垣が構築された(第80図)。南側の堀は北半の岸が削られるとともに、堀内は2～2.5mに及ぶ埋め立てを受けたが、南半の平面は堀の形状を留めることとなった。以上から築造当初の池は、出島の南側に中島を擁く略円形中央部があり、南北に細長い旧堀の形状を残す部分が連なる平面形を呈していた(第86図参照)。

護岸石垣とその周辺 出島・中島の西側には直線的な護岸石垣が設けられている(第81・82図)。護岸石垣は、最下段が部分的に残るのみであったが、粗加工石積であり、石材正面を現地で平坦に加工し、三角形の詰石を石口に詰めるという特徴が窺えた。池の築造当初(Ⅱ期)から存在していたか、Ⅲ期に下るのか、検討の余地が残る。裏込めの状況からは複数の改修が想定される。石垣の前面は玉砂利を敷いた州浜の緩やかな法面となり、池底に連なる。池底はシルト質の地山面(黒ボク層)で、粘土・三和土・漆喰等による底打ちは認められなかった(第81図断面)。また池中の堆積層からは、碗や火鉢等を主体とする近世後期の陶磁器等が出土している。餌猪口や手木足輕に係る釘書・墨書をもつ碗等が見られ、周辺役所建物の備品が一括して廃棄された可能性がある。

改修 池はその後複数の改修を受けている。大型の中島の東側には、小型の中島が2基増築された。これらの中島は、池の堆積層上に盛土造成して形成されているため、大型の中島に後出すると判断される。また南側へ突き出していた堀の形状を残した部分も、小型の中島が形成される頃には埋まっていたと推定される。池北部については、前述の通り東縁の石垣が17世紀後半に切石積に変化し、また18世紀後半にも修築されたことに伴い、池岸も造成を受けて緩斜面化している。

段落ちの滝(滝石組)の下流部一帯については、礫混じりの土砂を基盤とする護岸石組が検出されている。基盤の更に下位には、古い段階の池底砂層が厚く堆積していることから、石組は築造当初のものではなく、滝石組と同じく安政3年(1856)に改修されたものと考えられる。

埋樋 池西側の護岸石垣の下部には、排水(導水)路とみられる埋樋が組み込まれていた(第83図②)。排水口本体は失われていたが、背後の裏込や、基礎となる切石・柱状石材(枕石)の遺存状況から、護岸石垣を一旦取り外して石樋による排水口を構築し、外側へは木樋を接続したと考えられるもので、護岸石垣に後から付加された遺構である。木樋については底板や打ち留め用の鉄釘等が遺存し、幅35～40cmの寸法が復元される。木樋設置のための掘方は、検出面での幅1.5m、深さ2.25m以上を測る。

排水口のレベルは、標高 29.1 m 以上と高く、池の水面がこのレベルとなると、出島や中島の大部分、また護岸石垣手前の州浜等が水面下となり、常時機能していたとは考え難く、下流（北側）に堰を設け、水位調節を図って導水したものと推定される。以上からすれば、単なる排水路というより、積極的・意図的に水を送り出す施設と考えるのが妥当である。

後述するように、慶応 3 年（1867）、玉泉院丸の池から堀向こうの金谷出丸へ導水工事を行ったとする史料（「金谷御殿御普請諸事留」第 5 節第 29 表 51-40）があり、対応する可能性がある。

園路（第 83 図③）

東側斜面滝石組（段落ちの滝）の中段付近で、岸边に下る園路の飛石が確認された。飛石は、戸室石の割石や円礫等を均し入れた上に安山岩の板石を敷いた構造をもつ。この板石は、含かんらん石 - 角閃石 - 斜方輝石 - オージェイト - 安山岩とされる岩石（第 5 章第 4 節）で、本庭園の他、本丸・東ノ丸の庭園でも多く認められる。能登半島の海岸部で採取されたものと推定されるが、産出地の特定が課題である。

なお郭内・郭間を連絡する幹線として、鼠多門 - 紅葉橋（出島北側・池北部に架かる木橋）間の経路と、その延長東端で交差する斜面沿いの南北経路（松坂）がある。前者の西半は、鼠多門出入口が郭面より低いため、東に上る坂道となっていて、平成 29 年度までの発掘調査で、明治期に埋め立てられる以前の状態が判明した。坂道東側の紅葉橋は、近世の絵図によると木橋であるが、現状では土橋となっている。松坂については、経路のおおよその位置は近世以来踏襲されており、側溝の一部等、近世段階の遺構が遺存しているが、近世の最終路面は、調査箇所においては近代に削平されていた。

出土遺物（第 84・85 図）

池中の出土遺物については、前述した近世後期の陶磁器等の他、庭園に関連すると推定される石造物（水鉢・円柱状の部材・灯籠中台）が出土している（第 84 図）。水鉢（S21）は径 38.9cm を測る青戸室石製で、手水等に用いられた可能性がある。円柱状の石材（S22）は、長さ 48.5cm 以上、径約 26cm を測るやはり青戸室石製で、一方は端面が遺存し、直方体の柄が作り出されている。用途は不明であるが、灯籠の竿や橋脚部材の可能性がある。灯籠中台（S23）は赤戸室石製である。前二者は庭園廃絶時の池底堆積層、後者は池跡の埋め立て・造成に関する層から出土した。なお池中の堆積土から「木葉石」の岩塊が出土している。「木葉石」は木葉化石や貝化石を含む堆積岩で、能登半島北端・現珠洲市馬縹地区で産出する。蓮池庭・竹沢庭でもわずかに見られる程度で、希少な景石として利用されていた可能性がある。

この他、特筆すべき遺物に、土人形・土製品がある（第 85 図）。庭園廃絶時の池底堆積層からは、施釉土器のミニチュア釜、施釉土器ないし彩色した土人形（西行）が出土した（P163・P164、[石川県金沢城調査研究所 2015d]）。また南石垣背後の造成土からは、各種の土人形、独楽・碁石等の土製品がまとめて出土した（P077～P106、[石川県金沢城調査研究所 2017c]）。これらは金沢城下町遺跡においては普遍的に認められる遺物であるが、金沢城内では玉泉院丸のみでしか確認されておらず、注目される。憶測の域を出ないが、藩主子女等が利用した可能性も含め、検討を要する。

植生

花粉・種子等植物遺存体・自然木等の分析・鑑定によれば、作庭以前は広葉樹が比較的多いが、作庭後は高木ではアカマツないしくロマツが主体で、スギ・モミ・ヒノキ等の針葉樹、ツクバネガシやウラジロガシ等のアカガシ亜属、シイ類、キリ等が加わる構成であった。小高木ではウルシ属、モチノキ属、カエデ属、低木ではキイチゴ属、ニワトコ他が見られる。また水深の浅い沼沢地環境を示すガマ属・ヒシ属がある。この他ソバの花粉・イネの朶が確認されており、二次的に持ち込まれたか、周辺で栽培されていたかが課題となっている。

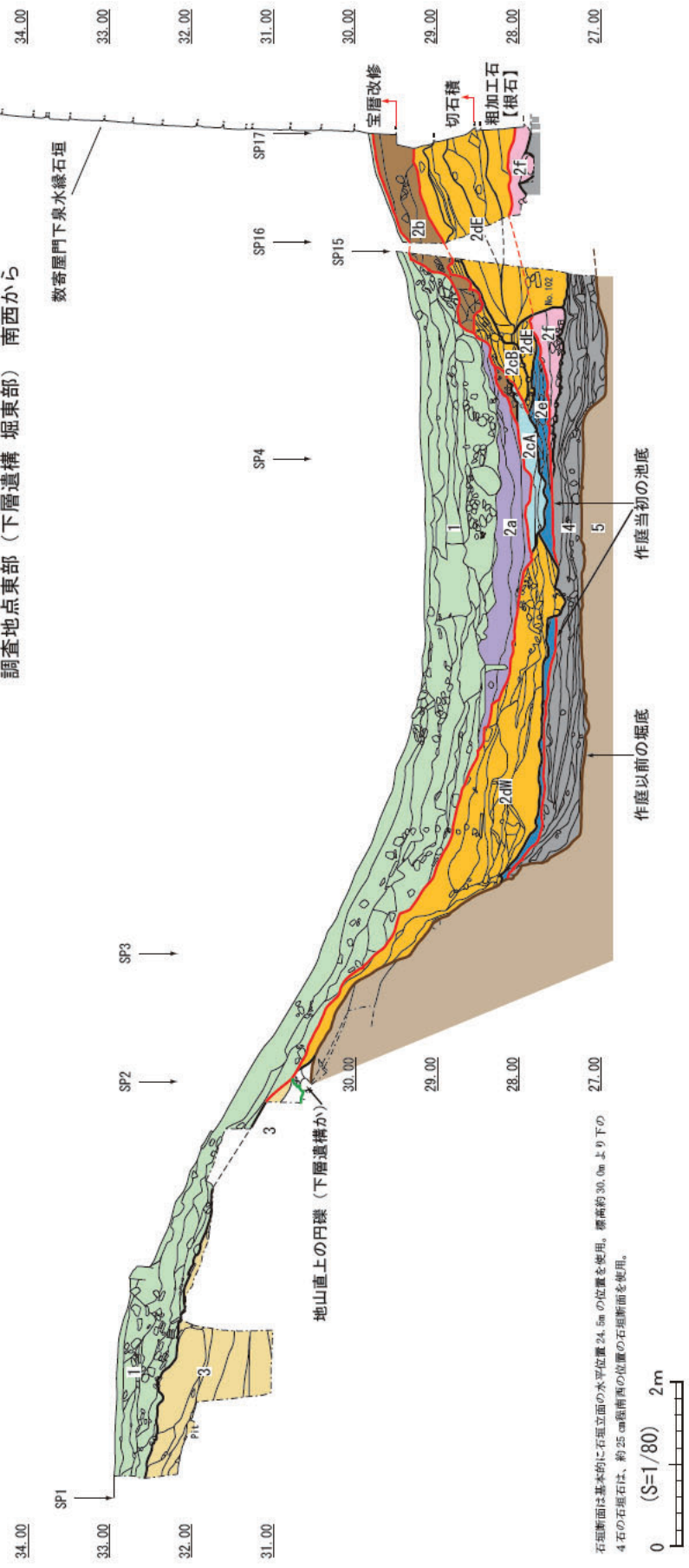
大別層凡例

1	近代以後造成土 (庭廃絶後)	3	庭園造成土
2a	池底堆積層 (宝曆石垣修理後～泉水廃絶まで)	4	作庭以前の堀堆積層
2b	宝曆大火後の石垣修理に伴う整地層	5	地山
2cA	池底堆積層 (宝曆大火前)		
2cB	2cAの池岸となる石垣前面整地層 (宝曆大火前)		
2dE	石垣前面・池東岸整地層		
2dW	池西岸整地層		
2e	池底堆積層		
2f	石垣創建時の整地層		

— 石垣整備に伴う整地面
— 作庭以前の堀底面
— 地山直上の遺構面か

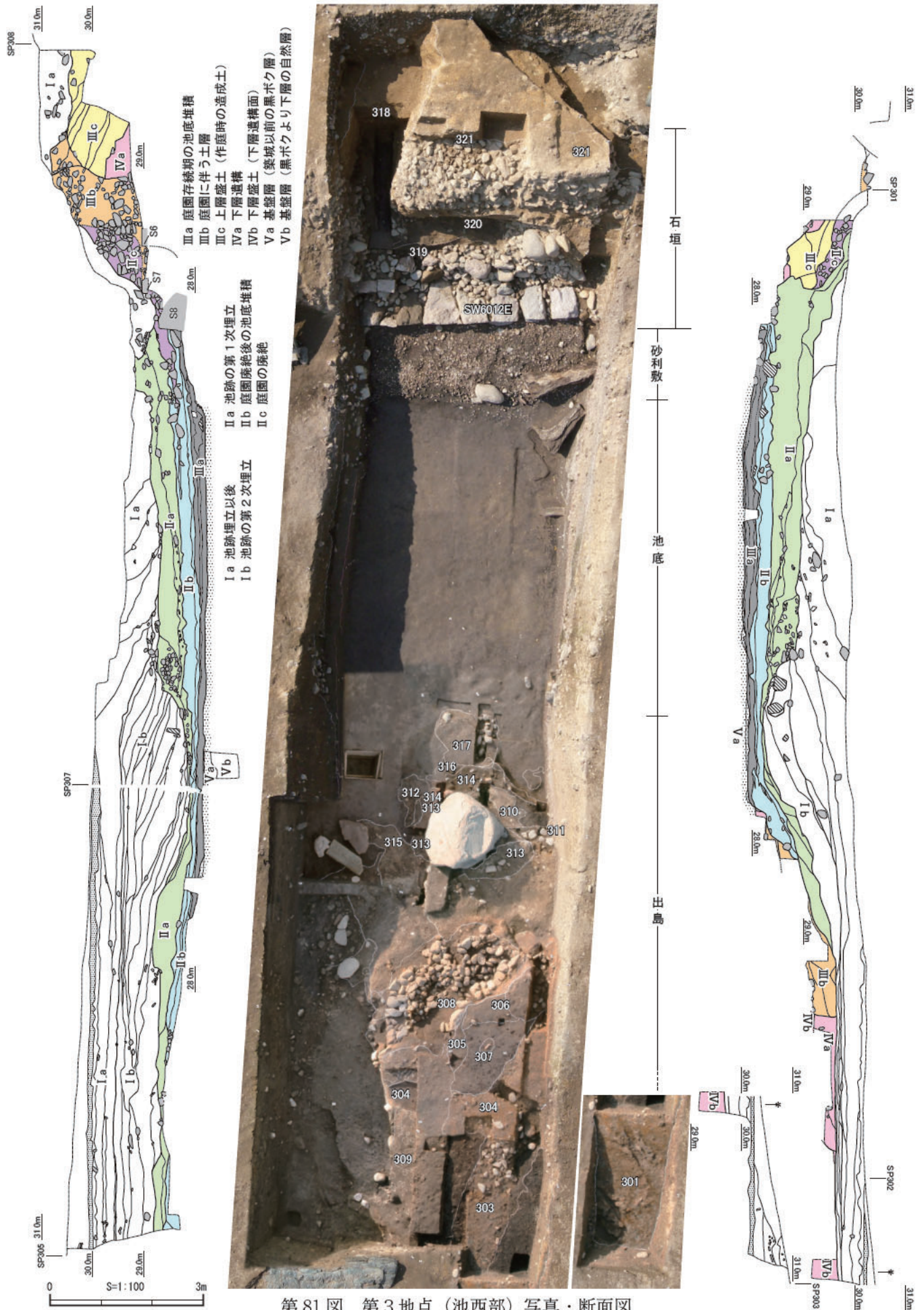


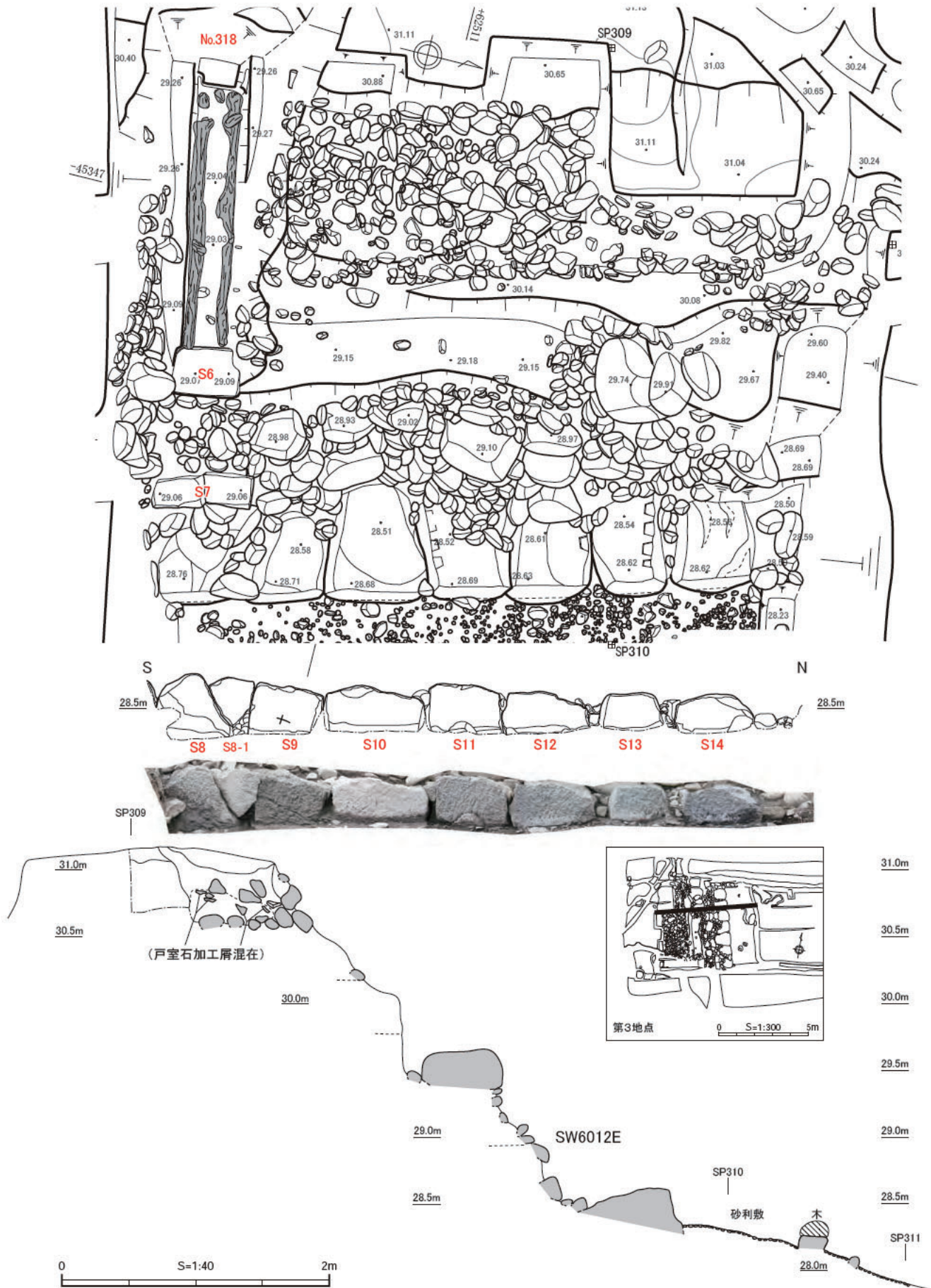
調査地点東部 (下層遺構 堀東部) 堀東部から 南西から



第80図 第1地点 (池北部) 北壁土層大別層

[石川県金沢調査研究所 2015a] 第35図より転載・調整





第 82 図 第 3 地点石垣（池西部護岸石垣）詳細図

〔石川県金沢城調査研究所 2015d〕
第 61 図より転載



①第3地点（池西部） 出島 全景 西から



②第3地点（池西部） 木樋 全景 西から



③第4地点（池東部） 飛石 西から

第83図 出島・木樋・飛石写真



200906-S009 S21
水鉢：38.9×43.0×25.5cm
戸室石

200906-S010 S22
不明石造物：48.5×26.1×25.8cm
戸室石

200906-S011 S23
灯籠中台：32.1×44.2×19.1cm
戸室石

・玉泉院丸庭園 I
S21；第2地点 II h-2層（II h-3層堆積以後）
S22；第2地点 II h-3層
S23；第2地点 I b層トレンチ 近現代整地土表土除

[石川県金沢城調査研究所 2015d] 第86・87図、写真図版61・62より転載・加筆

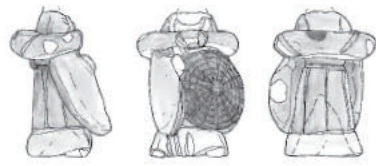
0 (S=1/10) 20 cm

第84図 玉泉院丸庭園出土石造物



200906-B035 P163

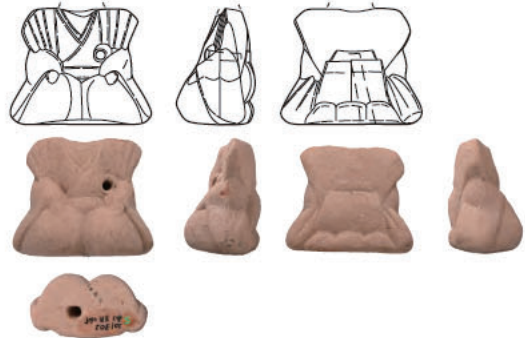
ミニチュア釜



200906-E001 P164



201302-E002 P077



201302-E005 P080

人形



201302-E023 P096



201302-E033 P105



201302-E031 P106



201302-E013 P091

201302-E015 P093

独楽

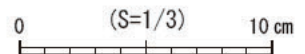
基石

・玉泉院丸庭園 I
P163；第2地点 IIh-3層下半部
P164；第2地点 IIh-3層下部

[石川県金沢城調査研究所 2015d] 第76図、写真図版52より転載・加筆

・玉泉院丸南石垣
P077：南2区 先行トレンチ
P080：南3区 7層
P091：南3区 5層
P093：南3区 No.8
P096：南3区 No.9
P105・P106：南3区 攪乱(樹木)

[石川県金沢城調査研究所 2017c] 第6-46・48～50図より転載・加筆



第85図 玉泉院丸庭園・南石垣出土人形・玩具

4. 各時期の様相

Ⅱ期（第86図）

成立・契機等

一次史料を欠くが、「三壺聞書」には、寛永11年（1634）、3代藩主前田利常が命じた庭園普請の様子が記されている（第22表41-01・02）。

藩主利常自身が「惣御奉行」と記述されるほど関与していたようであり、京都から「山作り」の「劔（劔）左衛門」という人物を招聘したこと、「御相撲の者」を「五拾人・百人者」と名付け人足として編成したこと等がみえる。

この他、能登や鶴来（現白山市）・二俣（現金沢市）等から植木や石を調達したことが記されている。なお、能登より回漕され宮腰道（金石往還）を運搬されたものの、欠損したため捨て置かれたという大石は、後代の地誌にも紹介され、現在も金沢市藤江の高鞆神社境内に遺存している。岩石種は安山岩で、いわゆる福浦石であり、玉泉院丸を始め、本丸・東ノ丸や金谷出丸、蓮池・竹沢の庭園でも一般にみられる景石材である。

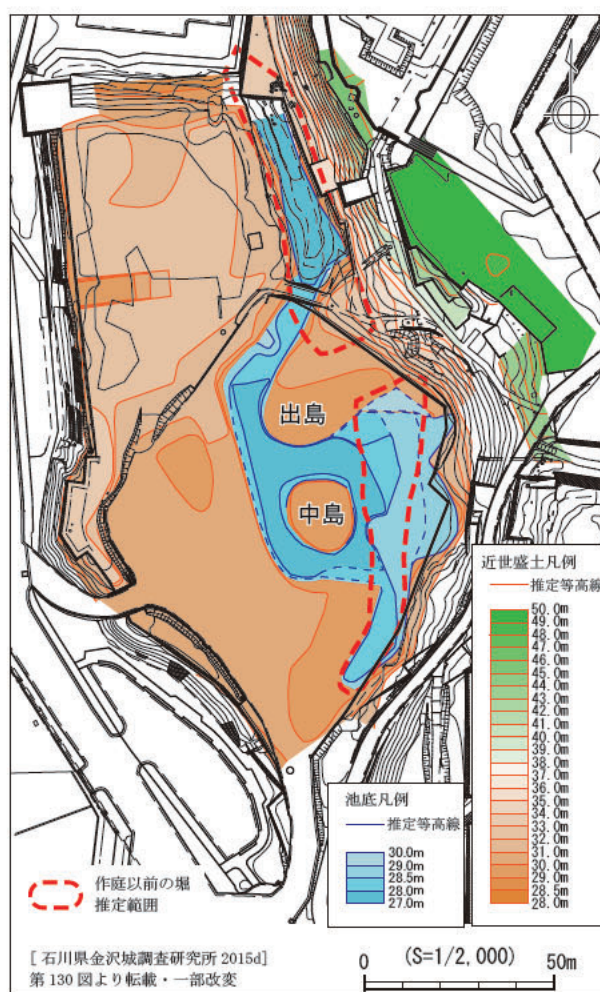
築造状況

上記「三壺聞書」には、泉水等に予定している範囲について、土取り後の土を与える触れを出して町方に掘削させ、すぐに起伏ある地形が仕上がったとする（「頓而谷峯と成りにけり」）が（41-01）、やや伝承めいており、また埋蔵文化財調査で確認された、先行する北堀・南堀との関わりは述べられていない。

第86図は、発掘調査・ボーリング調査により推定した近世盛土・池底の等高線を示したもので、実年代観は明確に示し難いが、庭園築造当初に近い段階が想定される。なお太い赤破線部分は、庭園に先行する堀遺構の推定範囲を示している。以下、前述した池の項の記述と重複するところもあるが、改めて本期の形成過程・様相を概観する。

作庭以前、堀は二ノ丸～本丸附段の尾根西沿いに配置され、北堀と南堀との間は土橋となり、出入り口を形成していた。庭園築造に際し、堀が池の軸となり、土橋が出島として利用されていることが分かる。

出島の南側には大型の中島があるが、出島とともに地盤＝屋敷地推定遺構面を削り残して築造されており、原型は築造当初から存在したと判断される。Ⅰ期の南堀を反映した池南端の突出部は、後述するように17世紀後半にはおおよそ埋め立てられ、その北部に小型の中島が設けられたとみられるが、後代まで窪地として存続した。池南部の西岸には護岸石垣があり、確認調査でも根石等を確認しているが、石材加工等の点から、本期まで遡るかどうかが検討の余地



第86図 玉泉院丸における池底推定等高線(古相)

がある。

東側斜面の石垣群も、本期にすでに存在していたのか、また存在していたとして現況と類似した意匠であったのか等、不明なところが多い。前述の通り、池北部東岸、数寄屋門台西側の石垣については、本期には粗加工石積であり、Ⅲ期以降切石積に修築されたことが判明しており（第73図）、単純にⅢ期以降のような切石積主体の景観を遡らせて考えることは難しい。

利用状況

玉泉院丸庭園の利用に関する史料は全体的に少なく、本期においても明確な史料を欠いている。なお、寛永15年（1638）とみられる前田利常の書状では、江戸にいる子息光高に、「二の丸ノわき」に数寄屋を設け、家臣に茶を振舞っている旨を書き送っているが（「御歴代御書之写 二」第3節第11表31-01）、この場所を玉泉院丸に推定する見方がある。ただ二ノ丸本体や西側の数寄屋屋敷も候補となり、特定し難いように思われる。

Ⅲ 1 期（第87図）

成立・契機等

寛文元年（1661）に掘削されたとある「池」については（第22表41-03）、井戸の可能性もあり、これ以外に直接造園と結びつく史料は知られていないが、同年の厩の造営とともに、この年初めて入国した5代藩主前田綱紀による城内修築・再整備の一環であった可能性がある。遺構の面からは、郭東側の切石積を主体とする石垣群が本期の特徴を示しており、この時に構築されたか、あるいはⅡ期石垣が修築されたかのどちらかで見做される。なお北部石垣群においては、粗加工石積から切石積への変容が確認されている。いずれにせよ意匠豊かで変化に富んだその特徴が成立したとすれば、石垣のみの普請に留まるものではなく、庭園の再整備として捉えるべきと思われる。

構成等

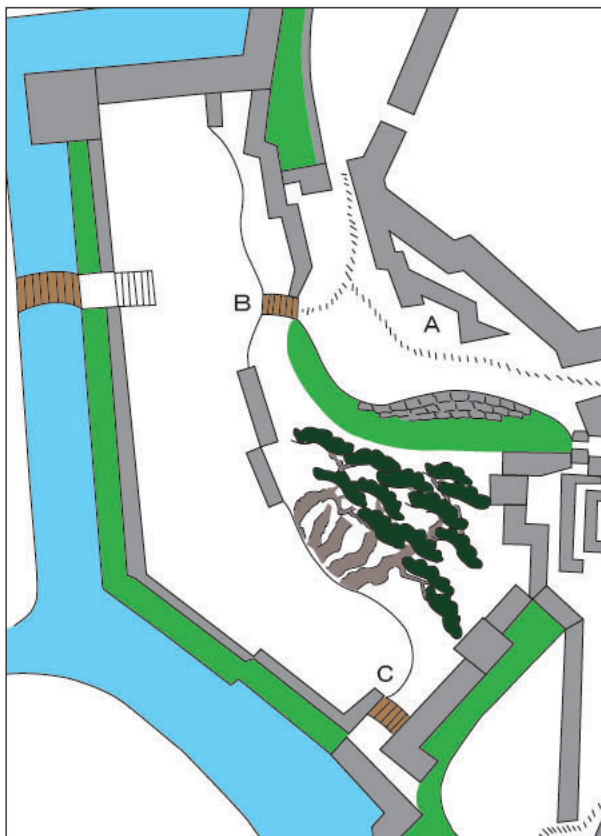
Ⅱ期からの変容過程が必ずしも明確ではないが、石垣以外の要素も含め、遺構調査データと17世紀後半の作成年代・景観年代を示す絵図の情報（第87図）により、庭園全体の様相を検討する。

第87図①は寛文7年（1667）に作成された城郭修補願絵図の控図（第24表・第68図42-01）を原図とする。建物は省略されているが、鼠多門・数寄屋門等の出入口、鼠多門から続く坂道、東斜面沿いの松坂等の通路、池（泉水）や池西側の護岸石垣、東斜面の石垣群が描かれており、遅くともこの段階で、多くの要素が成立していることが窺える。とりわけ石垣群のうちAは、色紙短冊積石垣付近に相当し、歪みや省略はあるものの、平面形状としては現況とほぼ同様の状況を示す。なお延宝年間（1673～81）の状況として、「御泉水、御本丸之方段々石垣」が以前からあるが、これまで絵図に明示してこなかったとする史料がある（「金沢御城絵図付札」第22表41-04）。

色紙短冊積石垣には前出の通り石樋が組み込まれており、実態として給水経路の機能を担っていたことが想定されるが、絵図には表現されていない。本期に遡るかどうかはっきりしないが、延宝4年（1676）以後の景観年代を示す「金沢城絵図」（第88図①、原図第69図42-05）では、二ノ丸西側の数寄屋屋敷から流れてきた辰巳用水の余水が、池に流入している状況が窺え、色紙短冊積石垣付近からの水流は見られない。

また第87図①では、池北部と池南部最南端に木橋（B・C）がある。実際に木橋C付近まで湛水域が延長していたか疑わしいが、橋の存在から、南部の突出部が埋め立てられる以前の景観のように見受けられる。同②の原図（「金沢城内絵図」第68図42-02）は万治2年～延宝4年（1659～76）の景観年代を示し、①より詳細な表現となっている。池南部の突出部は埋め立てられて窪地状（D）になっており、橋は見られない。

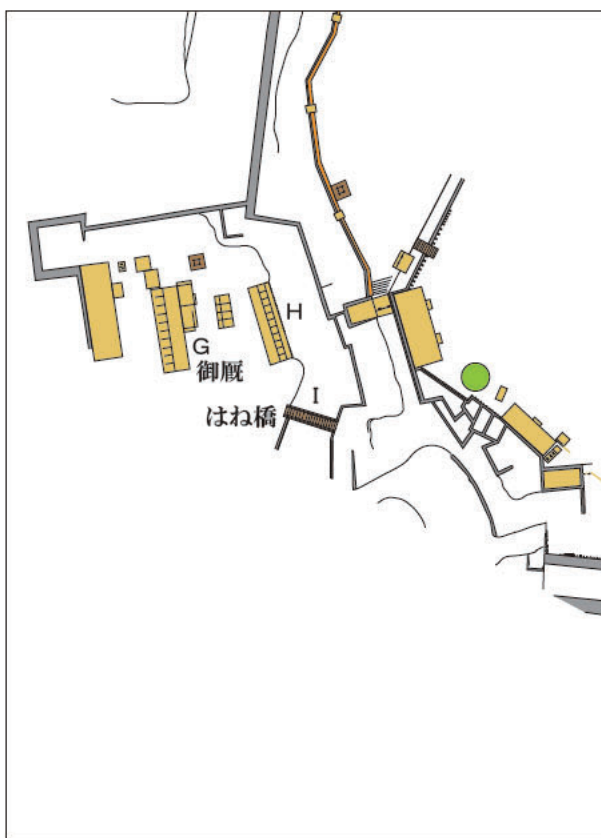
④は延宝年間（1673～81）・延宝7年（1679）頃に作成された「金沢御城絵図」（42-04）を原図とする。池南部に突出部が認められない一方、2基の中島（E・F）が描かれている。西側の中島Eは、



① 原図「加州金沢城絵図」〔公財〕前田育徳会蔵 42-01
縮尺約 1/2,000



② 原図「金沢城内絵図」〔滋賀県立安土城考古博物館蔵〕42-02
縮尺約 1/2,000



③ 原図「金沢城二之丸座舗之図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕42-03
縮尺約 1/2,000



④ 原図「金沢御城絵図」〔公財〕前田育徳会蔵 42-04
縮尺約 1/2,000

第 87 図 玉泉院丸Ⅲ 1 期庭園構成要素等配置図

Ⅱ期当初に築造されているが、東側の中島**F**は、Ⅵ期絵図にみられるものと同一であれば、池下層埋土に盛土して形成されていることになる。①・②では中島自体が省略されていると考えられ、東側中島がどの段階で出現するのかはっきりしないが、池南部突出部の埋め立て以後の可能性が高い。

③は、元禄9年(1696)以前の景観年代を示す「金沢城二之丸座舗之図」(42-03)を原図とする。寛文元年(1661)に設けられた厩(**G**)とともに、池北部西岸には懸造りと考えられる名称等不詳の建物(**H**)がみえる。厩は元禄元年(1688)に撤去されたともあり(「葛巻昌興日記」第22表41-06)、より時期が限定できると思われる。またⅥ期の絵図に「紅葉橋」とある橋(**I**)は「はね橋」と記述されている。加賀藩領には越中黒部川に架かる長大な刎橋「愛本橋」があり、蓮池庭にもその写しがあった。橋**I**も庭園の構成要素にふさわしい形で整備されていた可能性が考えられる。

以上要点を整理すると、東斜面の石垣については、寛文7年(1667)頃までには特徴的な平面プランが確定しており、その意匠性を重視する見方からすれば、切石積石垣による景観も同じ頃に成立していると想定される。またこの頃、池南部の突出部はまだ湛水域として残っていた可能性が高いが、遅くとも延宝の初め頃までには埋め立てを受け、加えて盛土造成によるとみられる中島が設けられ、中島は合計2基になったとみられる。

Ⅲ 2期 (第88図)

成立・契機・造営体制等

普請作事の経緯に関しては、「葛巻昌興日記」「前田貞親手記」等の史料により、おおよその動向が判明する(第22表41-05～08)。元禄元年(1688)、5代藩主前田綱紀の命により、馬廻組番所や寛文元年設置の厩、更に庭園普請・管理等を管轄する三十人組(露地方)役所等が撤去され、亭等庭園の整備が改めて行われることとなった。この普請にあたっては、当時加賀藩に仕えていた千宗室が奉行を務め、三十人頭(露地方奉行)らが補佐する体制が執られた。なお、「前田貞親手記」によると、9月23日の整備完了後に関係者に褒賞が与えられているが、このうち「地形石橋御用」を担ったのは扶持方大工となっている(41-07)。

構成等

本期は文献史料に比較的恵まれているが、対応する遺構は明瞭ではない。色紙短冊積石垣の北西側、紅葉橋方面への分岐点付近では、松坂の路盤が、近世前半のうちに1.7m以上盛土で嵩上げされており、本期に行われた可能性があるが、確定は難しい。

絵図では、[木越2004]において、D類とされた一群がある。D類は、作事所系藩用図の系譜を引くものではなく、これらを参考に私的に作成された絵図と推定されているが、一方でD群にしか見られない情報がある。第88図②はこのうちの一つ(「金沢城絵図」第24表・第69図42-06)を原図とする。

注目されるのは池南部西側にある建物(**C**)で、「御亭」と記載されており、元禄元年(1688)の文献史料にみえる「御亭」に対応すると考えられる。玉泉院丸北部には「乾場」(**D**)とされる建物があるが、Ⅳ期以降の絵図に現れる「武具(方)役所」とほぼ同形で、その前身と思われる。なお、Ⅲ2期以後の絵図にある「氷室小屋」はここでは認められない。もっとも「氷室小屋」の設置は元禄5年(1692)頃と考証されており(『金沢古蹟志』)、原図の景観年代はこれ以前である可能性がある。

池については、中島の数が2基であること等も含め、Ⅲ1期の後半(第87図④)とおおよそ変わっていない。なお堀を挟んだ北側には、「御露地小屋」と記載される小型の建物があり、これは元禄元年(1688)以後の露地方(三十人組)の役所あるいは詰所である可能性がある。

第88図①の原図は延宝4年(1676)以後の景観を示す「金沢城絵図」(42-05)で、Ⅲ1期に遡る可能性もある。池の中島が描かれない等、第87図②(42-02)の系譜を引いているように思われる。本図の特徴として、排水経路を表現している点が挙げられる。本図には辰巳用水の経路は記載されて

いないが、二ノ丸数寄屋屋敷方面から下る水路は、辰巳用水の余水を含み、常時水流があったと考えられる。流末は二筋に分かれ、一筋（A）は出島の付根・松坂路面下を暗渠となって横断し、池南部に取り付いている。もう一筋（B）は西側に折れ、紅葉橋の袂から池北部に至っている。Aについては、発掘によりおよそ重複する位置で石組溝が検出されているが、時期は近代に下るもので、近世段階の状況は不明である。またBはⅣ期の絵図（第69図42-08）にも描かれている経路である。他方、色紙短冊積石垣付近から発する水路は見られない。

利用状況

庭園の整備がおおよそ落ち着いた元禄元年（1688）10月4日に、5代藩主前田綱紀が、養女の恭姫（実父は七日市藩主前田利意）を伴い、玉泉院丸に新たに建てられた亭を訪れている（「前田貞親手記」）。恭姫の「御慰」というのが理由であり、綱紀が自身の子女の暮らしに配慮している様子が窺える。ただし恭姫は以前から蓮池庭を度々訪れており、本年以後もしばしば利用しているのに対し、玉泉院丸については見られないようである。

Ⅳ期（第89図）

成立・契機等

享保8年（1723）、前田綱紀が没し、嫡男吉徳が6代藩主となった。吉徳は2度目の入国となった享保11年（1726）、蓮池庭の亭の解体・建て直し、庭園の修築などを命じており、玉泉院丸でも、享保12年（1727）、三十人方役所（露地（方）役所）が設置されている（「中川長定覚書」第22表41-09）。史料41-08と対応させると、元禄元年（1688）以来40年振りに玉泉院丸に戻ったことになる。後述する通り、元禄元年に設けられた亭の位置と重複しており、蓮池庭の状況と併せ、前代の状況を改変する意図があったのかも知れない。

構成等

第89図①は「金沢城図」（第24表・第69図42-08）を原図とする。享保12年（1727）以後、延



① 原図「金沢城図」〔石川県立歴史博物館蔵〕42-05 縮尺約1/2,000 ② 原図「金沢城図」〔石川県立歴史博物館蔵〕42-06 縮尺約1/2,000

第88図 玉泉院丸Ⅲ2期庭園構成要素等配置図

享2年（1745、6代藩主前田吉徳の没年）頃の間を景観年代を示すと考えられる。

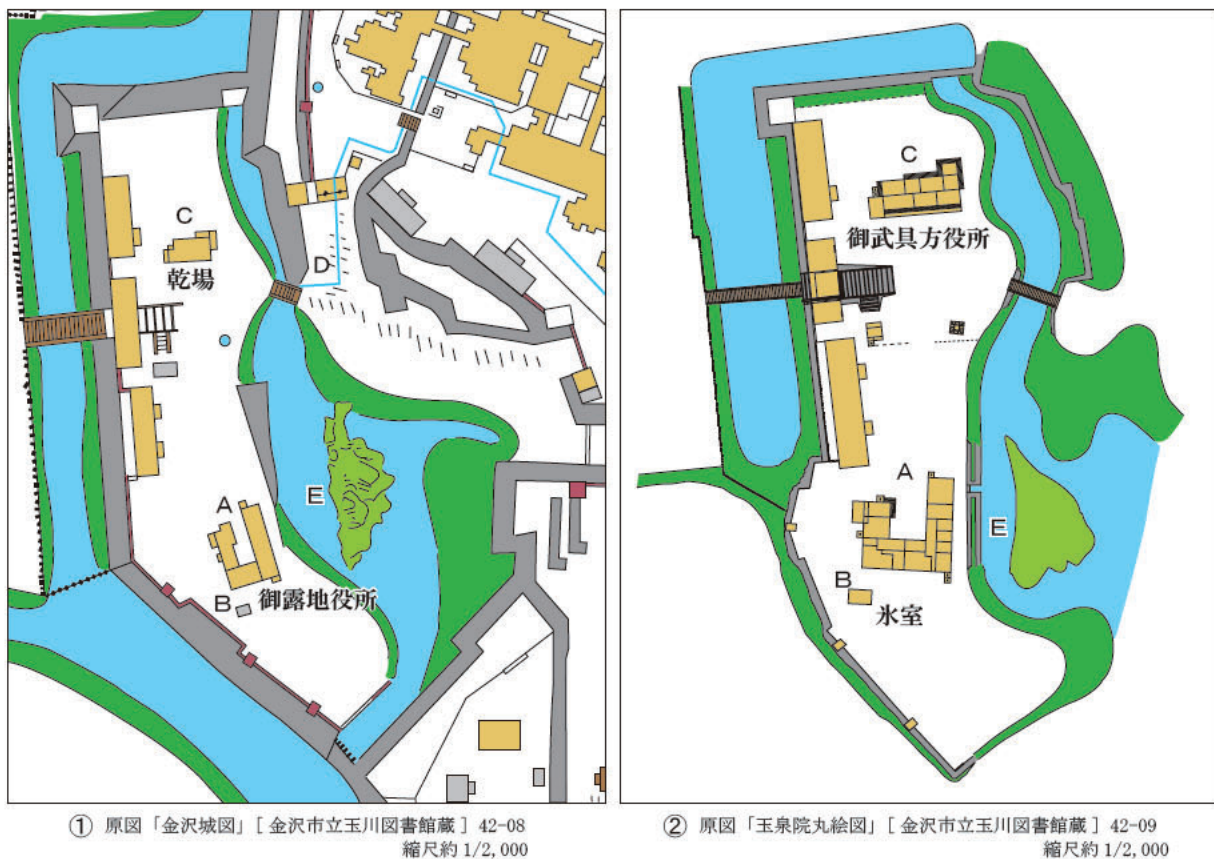
Ⅲ2期における中核的な構成要素だったと推定される亭があった位置に、露地役所（三十人方役所）が設けられている（A）。役所の南側にある小さな土間表現の建物（B）は、②（原図「玉泉院丸絵図」42-09）から「氷室」と判断されるが、前述の通り、Ⅲ2期に設けられた可能性がある。また郭北側において①で「乾場」と記載されていた建物は②では「御武具方役所」になっている（C）。これは史料41-10（第23表）では「御武具方乾場之役所」とある。

給水は第88図①の経路Bを踏襲している（①D）。なお玉泉院丸内の給水経路について、本図では辰巳用水の末端として表現されている。

池に関する描写上、最も注目されるのは中島（E）が1基となっている点で、Ⅲ2期や、後述するⅥ期（中島3基）の状況との整合性が問題となる。②の原図（42-09）は、宝暦5年（1755）作成とされる部分図で、①の原図（42-08）とは系統が異なるが、やはり中島は1基として表現される。どちらの図でも中島は平面プランではなく、役所側から見た立面として描かれている。この意味については、実際は2基あるが、絵図では1基のように表現しているのか、あるいは実際に1基に変容しているのかが問題となる。様々な推測は可能であるが、ボーリング調査においてもこの辺りの事情は判然とせず、保留せざるを得ない。

利用状況

宝暦4～6年（1754～56）頃に推定される史料として、善良院（9代藩主重靖生母）・斐姫（6代藩主吉徳息女）が玉泉院丸を行歩するにあたり、武具奉行・三十人頭（露路（地）奉行）に支障の有無等を問い合わせた書状が「奥村尚寛御城方覚書」に収載されている（第23表41-10）。武具方役所に「御腰被懸」との記述があることから、庭園は役所が設けられた空間とかなり一体的で、また庭園建造物としての亭や腰掛（懸）等はむしろ備わっていなかったらしいことも窺える。利用に関する史



第89図 玉泉院丸Ⅳ期庭園構成要素等配置図

料自体極めて少ない中で、藩主の側室・子女が利用していることを示す事例である。

V期 (第90・91図)

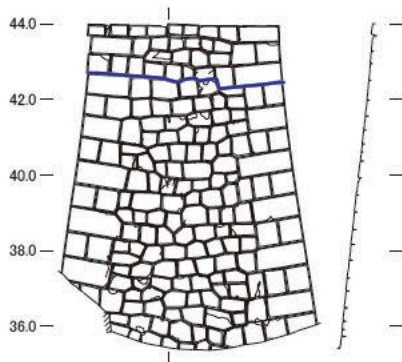
成立・契機等

本期は、5期(17世紀後半、寛文年間)石垣が修築を受けた時期である。宝暦10年(1760)の修補願図(「金沢城之図」(公財)前田育徳会蔵)には、前年9年の大火の被災箇所と併せて、おそらく以前から孕みが生じていた「数寄屋門台」「数寄屋門下泉水縁」石垣も挙げられている。補修願図に記された範囲と、現況で観察できる石垣の特徴はほぼ合致しており[石川県金沢城調査研究所2016c]、届け出通り修築されたと判断される。また約40~50年後の享和元年(1801)・文化5年(1808)には、東斜面上部の二ノ丸御居間先柵下石垣・土蔵下石垣が修築されている(「政隣記」,「二ノ丸御居間土蔵下石垣縄絵図」(金沢市立玉川図書館後藤文庫、[日本海文化研究室1976]所収)。

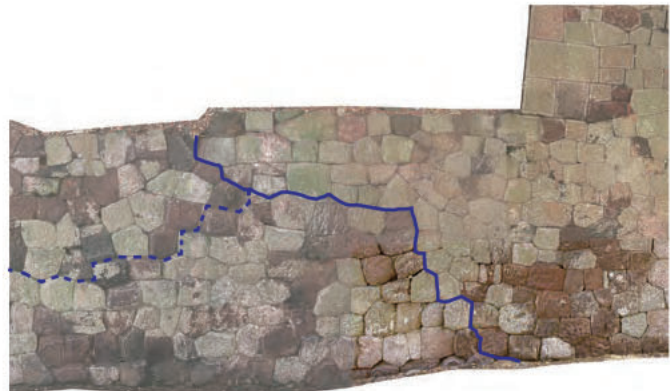
構成等

数寄屋門台石垣・数寄屋門下泉水縁石垣(第90図)は、石垣面の大部分において、周囲に縁取り加工のある正面多角形の石材を布積みとする、石垣編年6期(18世紀後半、宝暦~安永年間頃)の特徴を示す。泉水縁北側続きには5期の石垣が遺存しており、6期修築部分に比べると若干ながら乱積み要素が窺える。

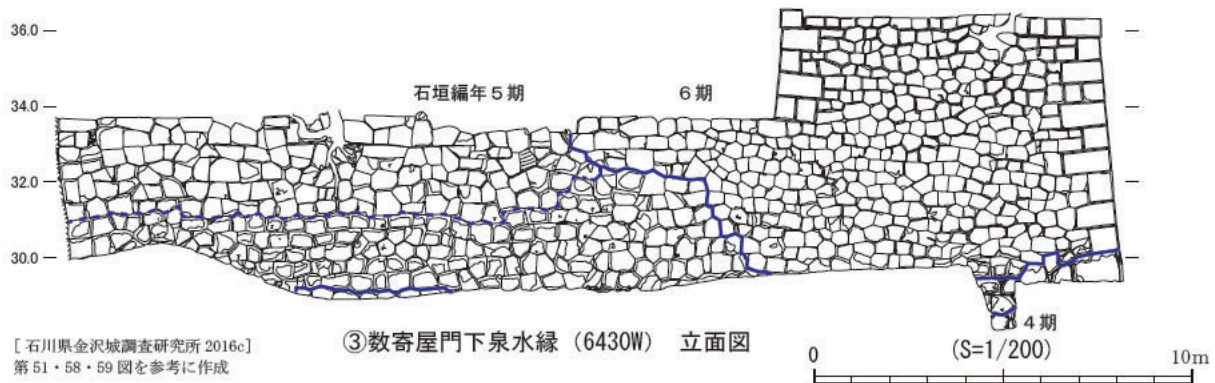
享和元年(1801)~文化5年(1808)の石垣修築は、中央群上方が対象となっている。このうち北西側の御居間下・庭籠下石垣における修築前の5期石垣はやや特異で、丸みを帯びた長方形を正面とする石材が用いられ、布積みとなっている。近世後期の修築部分は、若干粗さがあるが切石積の範疇に属するもので、正面が長方形に近い材が用いられ、布積みとされる点、5期石垣の意匠を踏襲しているようである。一方、南東側の松坂門付近の石垣は、正面多角形の石材を布積みとするもので、7期(19世紀初期、享和~文化年間頃)の修築である。



①数寄屋門台(2830W)立面図・断面図



②数寄屋門下泉水縁(6430W) 改修境付近オルソ写真



[石川県金沢城調査研究所2016c]
第51・58・59図を参考に作成

③数寄屋門下泉水縁(6430W) 立面図

第90図 数寄屋門台・数寄屋門下泉水縁石垣立面図・断面図・写真

このように本期の修築石垣（6期・7期）には、修築前の5期石垣に近い意匠が採用されているように思われる部分もあるが、一方で明確な乱積みが認められず、基本的には多くが正面多角形石材・布積みの組み合わせに置き換えられた可能性が高い。意図的かどうかはともかく、庭園構成要素の重要な部分の変容されたものと考えられる。

第91図は、「金沢城内絵図」（第24表・第70図42-10）を原図とするもので、文化7年（1810）～13年（1816）の間の景観年代を示す。絵図42-09（第89図②原図）の年代から50年以上の開きがあり、露地役所の形状にやや変化がある他、西側に小型の建物（V期の絵図から物置と判断される）が設けられる等の違いがあるが、池や中島の状況に大きな変化はないように見受けられる。以上から本期は、石垣意匠の変容に特徴付けられる。

なお文化14年（1817）において、色紙短冊積石垣下の滝壺が埋まった状態であることを示す史料がある（第23表41-13）。

利用状況

本期については、庭園としての利用の記録は知られていない。ただし、庭園内部の通路である松坂の通行に制限を科する内容の史料がある（「政隣記」等、第23表41-11・12）。明和2年（1765）の件（41-11）では、藩士の供が単独で通行する場合を咎め、14年後の安永8年（1779）の件（41-12）では、とくに役儀のない者について、登城経路等としないように布告したものであるが、違反する者が多かったことが窺えるようである。蓮池庭等と異なり、玉泉院丸庭園の場合は、一般の藩士の眼に触れる機会も多かったと推察される。

また、11代藩主前田治脩の「太梁公日記」には、安永2・3年（1773・74）に、蓮池庭や二ノ丸居間先庭等に関する事項が多く記されているが、同時期、松坂・紅葉橋を頻繁に通行しているにも関わらず、玉泉院丸庭園への言及は見当たらない。この頃は藩主らが特別に利用する空間として、位置付

けられていなかった可能性がある。

Ⅵ期（第92・93図）

成立・契機等

文政4年（1821）に武具土蔵が追加された頃の庭園の全容は明確ではないが、文政13年（1830）に作成された「御城中壺分基絵図」によると、中島が3基となり、さらに橋が5か所架かっている。ボーリング調査では、小型の中島は2基とも盛土造成により、池築造当初には具わっていなかったことが確認されているが、付加された詳細な時期や経緯は明らかではない。

天保3年（1832）、13代藩主前田斉泰は、玉泉院丸の池を見分し、「カラカサ亭」の設置を命じている（「温敬公日記」〔長山2006b〕P218～P219）。玉泉院丸には、しばらく亭と呼べる施設はなかったのであるが、小規模とはいえ庭園建造物が復興されたこととなる。

弘化2年（1845）、隣接する金谷出丸における御殿普請に際し、玉泉院丸の庭石が搬入されており、庭園景観に幾分かの影響を与えたと思われる（「世子御座所普請方御用主附一件」第5節第



原図「金沢城内絵図」〔石黒信二氏蔵〕42-10
縮尺約1/2,000

第91図 玉泉院丸V期庭園構成要素等配置図

28表 51-25)。

安政3年(1856)には、手木足軽や三十人組の働きにより、滝が造営されている(「公私心覚」第23表 41-15)。文政期に埋没していた色紙短冊積石垣前面の滝壺も、この時再整備され、機能が再興された可能性が考えられる。

慶応3年(1867)、金谷御殿の造営に係り、金谷への導水工事が行われた。この時の記録「金谷御殿御普請諸事留」によると、導水経路は、竹沢庭(兼六園)から、埋樋・掛樋により、本丸下の御花畑・稲荷屋敷を通すものであった(第5節第28表 51-35・41)が、この先の処置が必ずしも明確ではない。その一方、玉泉院丸の池からの導水工事も行われており、上記と一体なのか、別経路なのか判断しがたいが、いずれにしろ、御鳥部屋の建物下を掘削し、導水を図っている様子が記されている(51-40)。

構成等

第92図①は、文政13年(1830)に作成された「御城中壺分基絵図」(第24表・第70図 42-11)を原図とする。武具役所の北側には文政4年(1821)新設の土蔵(A)がある。露地役所の建物(B)は、西側棟が露地(三十人)方、東側棟は御鳥部屋等に仕切られている。北側に細かく部屋割りされた土間が増築されているが、御鳥部屋にかかる庭籠の可能性もある。庭園本体においては、前述したように池の中島が3基に増え、橋が多く架かっていること(D~H)が、従前との大きな違いで、Ⅲ期絵図との比較からすれば、北東の小島が追加された可能性がある。岸・中島間は木橋(D)、石橋(E・F・G・H)により連携されている。池への給水については、色紙短冊積石垣(I)から松坂を挟んだ池側に景石(J)があり、ここから流れ出してほぼ直線的に池際の石組(K)に導かれる形となっているが、暗渠とみられる景石Jまでの経路は判然としない。また池の北・東・南側は、松坂とは別に小道(園路)が整備されている。



① 原図「御城中壺分基絵図」[横山隆昭氏蔵] 42-11 縮尺 1/2,000

② 原図「金沢御城内外御建物絵図」(薪之御丸辺 玉泉院様御丸辺) [公財] 前田育徳会蔵] 42-12 縮尺 1/2,000

第92図 玉泉院丸Ⅵ期庭園構成要素等配置図1

第92図②は天保4～9年（1833～38）頃の景観を示すとされる「金沢御城内外御建物絵図」（薪之御丸辺・玉泉院様御丸辺）（42-12）を原図とする。池の南側には、平面八角形の「御亭」（L）があり、これが天保3年（1832）設置の「カラカサ亭」に対応する。また周囲に萩垣や四ツ目垣を巡らせた高台も併せて築造されているが、高さは不明ながら、頂部平坦面の幅が30 m程度に復元される、比較的大きな構築物である。この他には、①とは園路形状等に若干の差異があるものの、描写表現の幅とも受け取れ、大きな差異は見出せない。

第93図①は、嘉永3年（1850）作成の「御城分間御絵図」（42-13）を原図とする。基本的な構成は第92図①・②と類似しているが、池への給水について、松坂の下を通ると推定される暗渠からの出口の位置が北西に移り（A）、開渠になってからの流れは南西側に大きく屈曲する（B）。また小型の中島と池岸との間の橋が土橋となっている（C・D）。さらに松坂門南西の斜面には、池沿いの園路から分岐する九十九折りの道があり、終点は径2間程の平地となっていて、中央に1間×半間程の基盤目状の石敷らしき施設がある（E）。これらの普請については、今のところ文献史料に見当たらない。C・Dの遺存状況は不明であるが、A・Bについては、埋蔵文化財調査では検出されておらず、その後の改修により失われた可能性もある。Eについては、現状では斜面中の該当箇所に平地や園路は認められない。この北西側の確認調査範囲では、土砂崩れの痕跡が見られるが、すでに流出しているのか、あるいは埋没しているのか判然としない。

第93図②は、「御城分間御絵図」（42-13）を基本図とし、現況図と照合しつつ、埋蔵文化財調査で検出した滝壺（F）・段落ちの滝（G）・池護岸石組（H）・暗渠木樋（I）等の遺構及び「二ノ丸御殿図」（第3節第17表・第42図32-24）に描写された建物等を合成したもので、安政3年～慶応3年（1856～1867）頃の状況を想定した図である。



① 原図「御城分間御絵図」〔(公財)前田育徳会蔵〕42-13
縮尺約1/2,000

② 原図「御城分間御絵図」〔(公財)前田育徳会蔵〕42-13
*「二ノ丸御殿図」〔青視文庫蔵〕32-24 二ノ丸御殿
部分、発掘遺構（ボーリング推定範囲含む）を合成
縮尺約1/2,000

第93図 玉泉院丸Ⅵ期庭園構成要素等配置図2

F～Hの遺構の造営は、安政3年（1856）の史料（第23表41-15）に対応すると考えられる。なお池護岸石組Hは、古い堆積砂層を基盤としているが、基盤の標高は約29mで、南部西側で確認されている池底面はもとより、近世堆積層上面と比べても1m程度高い。現況の蓮池庭瓢池のように、水面が堤状の施設で幾つかに仕切られていた可能性も想定される。

また木樋Iは、前述した慶応3年（1867）の金谷御殿への導水工事（第5節第28表51-40）に関連する施設の可能性がある。51-40では、「御鳥部屋下掘抜」とあり、遺構の位置とおよそ合致している。慶応期の普請は金谷御殿を核とするものであるが、導水工事については、沿線の郭にもかなりの影響を与えたと思われる。

利用状況

天保14年（1843）3月、重度の脚気を患っていた13代藩主斉泰が歩行訓練を行っている（「成瀬正敦日記」第23表41-14）。この他利用に関する史料は明確ではない。

5. 小結

（1）変遷過程（第94図）

ここでは庭園としての変遷を大きく4段階にまとめ、それぞれの段階と変遷の特徴について検討を加える。

第1段階（17世紀前半）は、玉泉院丸Ⅱ期に該当する。玉泉院丸庭園の造営に際しては、御殿（二ノ丸）に直接付属する形ではなく、別の郭を敷地としたことが、それまでの本丸・東ノ丸の庭園と異なっている。ただし、二ノ丸奥側に隣接する位置にあり、数寄屋屋敷や松坂を介した一連の導線上に配置されているとも言える。また、本来二ノ丸西側を防備するために設けられた郭東辺の堀が、御殿の言わば後園である玉泉院丸庭園の池（泉水）に改変されている点に、当該時期の城郭構造の変容が看取される。

本期の全容は明らかではないが、中心をなす池（泉水）については、中島が1基であり、庭園以前の遺構である堀の名残として、南側に突出部を有する他は、Ⅲ1期（17世紀後半）以後の形状と大きく変わるものではなかったと推定される。その一方、池の北・東・南を廻る石垣群については、北群が粗加工石積であったことが判明しているため、当初から切石積主体の景観が成立していたのか疑念が残る。

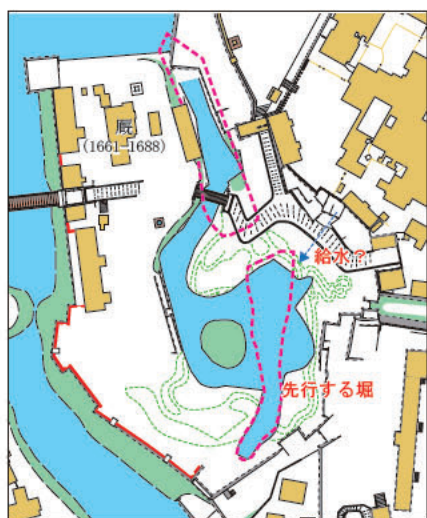
第2段階（17世紀後半～18世紀初）は、玉泉院丸Ⅲ期に該当する。Ⅲ1期は北部石垣群が切石積に変容した時期であり、また中央部・南部も本期に改修もしくは新設されたとみられる。新設ではもちろん、改修であったとしても、現時点での編年観からすれば、その著しい意匠性は寛永期とは区別されるものであり、切石積石垣を庭園の主要な構成要素そのものとする、本庭園の最も重要な特徴が明確になった大きな画期と見受けられる。

文献史料上では本期の庭園整備に係り、池を掘削したとの史料があるが（第22表41-03）、「池」を泉水とみるべきか課題があり、また石垣普請の動向等は必ずしも明確ではない。絵図の描写からは、延宝初期までには池の南側突出部もある程度埋め立てられ、中島が2基になったとみられる。ただし寛文7年（1667）作成の絵図42-01（第87図①）をみると、石垣整備が先行し、若干ずれをもって池の埋立・中島増設がなされたようにも思われる。

Ⅲ2期の元禄元年（1688）の普請作事では、亭建設の他、地形（造成）や石橋架設も行われたことが判明する（第22表41-05～08）。亭については、寛永築庭時には設けられたと想定されるものの実態は不明で、文献史料・絵図史料に現れるものは、本期の亭とⅥ期のカラカサ亭のみである。ただし当時の地盤は削平され、遺構としては確認できない。造成による変化については、発掘調査からは、厳密な時期の確定は難しいが、松坂の路盤が本期に嵩上げされた可能性が考えられる。絵図におい

ては、Ⅲ1期に比べ、池等の形状が大きく変動したようには窺えない。

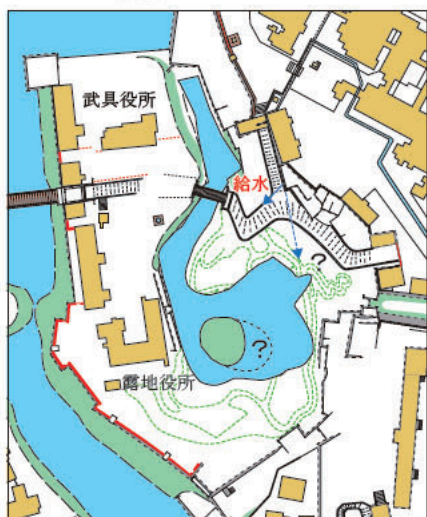
第3段階（18世紀前半～19世紀初）は、玉泉院丸Ⅳ期・Ⅴ期に該当する。庭園整備の点ではあまり変化がなく、元禄元年設営の亭が撤去されたと判断されること、意匠性が高かったであろう5期（寛文期）石垣が改修されていること、庭造りやその利用について多くの記事がある、11代藩主前田治脩の日記（太梁公日記）に本庭園に係る記述がないこと、一般の藩士にとっても園内の通行が可能であったこと、色紙短冊積石垣下の滝壺が埋没していること等、この頃は蓮池庭等と比べ、藩主らが利用する庭園としては重視されていないように考えられる。Ⅳ期・Ⅴ期の絵図が揃って中島を1基として描写していることも、あるいは池の水量低下や土砂堆積等に起因するのかも知れない。元禄期以降、隣接する金谷出丸が屋敷・御殿としての性格を強めていくなかで、城内中枢への出入り口にあたる玉泉院丸の位置付けが変容したとも推定される。もっとも藩主子女等の利用があったことは知られており（第23表41-10）、また亭の跡地に建てられたのは三十人方役所（露地役所）であって、造園普請の



第1段階～第2段階初 Ⅱ～Ⅲ1期初
第86図・「金沢城二之丸座舖之図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕42-03・32-01等参照



第2段階 Ⅲ2期
「金沢城絵図」〔石川県立歴史博物館蔵〕42-06
「金沢城二之丸座舖之図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕32-01等参照



第3段階 Ⅳ期
「金沢城図」「玉泉院丸絵図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕42-08・42-09等参照



第4段階 Ⅵ期 安政3年(1856)頃
*「二ノ丸御殿図」〔青視文庫蔵〕32-24等参照

* 下図：現況測量図に合せ「御城分間御絵図」〔(公財)前田育徳会蔵〕42-13を調整
* 発掘調査・ボーリング調査・絵図景観に基づく各時期池推定プラン・流路・建物等を合成

縮尺 約 1/3,000

第94図 玉泉院丸庭園の変遷

拠点としての性格は保持していたと言える。

第4段階（19世紀前半～中葉）は、玉泉院丸VI期に相当する。詳細な時期は明確ではないが、文政13年（1830）までには中島が3基となって多数の橋が架かり、天保3年（1832）にはカラカサ亭造営と高台（築山）造成、安政3年（1856）には滝の造成等が行われている。滝については、発掘調査の所見によると上段の色紙短冊積石垣周辺の整備を伴うものであり、17世紀後半以来の庭園構造が再興されたとも言える。その一方、例えば弘化2年（1845）の金谷御殿普請に際しては、庭石が持ち出されていること（第5節第28表51-25・28）からすれば、構成要素の保持に対し、優先度が高かったようには考え難い。

以上の通り玉泉院丸庭園は、寛永11年（1634）の築庭以来、近世を通じて存続したが、基本的な平面構成は、造営当初から大きな変動がなかった。同じくそう推定される蓮池庭（兼六園）とともに、台地崖面の取り込みという自然地形の活用が、一方では制約として働いたことが理由の一つに数えられる。ただし第2段階（Ⅲ期）においては、重要な構成要素である切石積石垣が現況に近い状態に整備され、最大の画期となった。第3段階（Ⅳ期・Ⅴ期）以降は、全体として庭園としての重要性は低減したように窺われる。第4段階（Ⅵ期）にカラカサ亭や滝の造営等の動きが再び認められるが、役所空間や城内通路と厳しく区画されていない点は変わらず、他の庭園と比べて異例である所も多い。

利用に関する史料は、存続全期間を通じ極めて少ないが、真に利用自体が低調であったのか、記録に残らないような利用の在り方だったのか、判然としない。ただ土人形や玩具等、城内では他にみられない出土遺物が何らかの混入でないとすれば、わずかな文献史料の記載と併せ、二ノ丸広式に居住する藩主の子女・側室等との関わりが想定される。

（2）給水経路について（第95図）

本庭園の池への主たる給水経路については、二ノ丸を経由した辰巳用水が供給源となっていると判断される。ただし遺構が一部検出され、絵図や文献にも記載があるものの、概して情報は断片的である。ここで改めて整理し、全容を想定したい。

経路Aは、二ノ丸居間先から分岐して色紙短冊積石垣の石樋に至り、松坂を横断して池南部東岸に達する。ただし二ノ丸-色紙短冊積石垣間の経路は遺構・絵図・文献史料ともに未確認である。石垣側に石樋や水受け石、滝壺が具わっているのが、実際に給水されたと判断しているが、導水路そのものの確認が大きな課題となっている。色紙短冊積石垣前方の滝壺以後の経路は、松坂を横断する経路しか考え難く、実際に安政3年（1856）改修以後の状況は滝壺東端の排水口の検出により同定できる。

造営当初のⅡ期における経路は不明であるが、石垣の特徴からⅢ1期には成立していたと考えたい。Ⅲ2期以降の存続は不明瞭となり、Ⅴ期末にあたる文化14年（1817）に書かれた史料（41-13）からは、滝壺が埋没し、機能を果たしていないことが窺える。安政3年（1856）の滝造営の際に再興された可能性が高いが、文政13年（1830）作成の「御城中壺分碁絵図」以降、天保～嘉永期の絵図には、色紙短冊積石垣の上方に当たる二ノ丸居間先石垣際に、辰巳用水の流れにより形成された池が描かれており、この池から給水されたとすると、本経路の再興がより遡ることも想定され、一考を要する。

なお、これらの絵図では、松坂の東側に石組があり、ここから池に向かう流れが発しているが、石組に至る導水は描かれていない。本経路がこの頃に機能していたとすると、暗渠として上記石組まで繋がっていたと見做すのが妥当であるが、安政期まで再興されていない場合、後述する経路Bと連絡していたことも想定される（経路A・B）。

経路Bは、二ノ丸居間先から西側の数寄屋屋敷に落ち、数寄屋門脇を伝って降下する水路で、Ⅳ期に属する絵図（第89図①、原図42-08）には、城内を巡る辰巳用水の一環として、紅葉橋北側に取り付く所まで描写されている。やや先行すると思われる絵図（第88図①、原図42-05）では、排水路としての取り扱いではあるが、数寄屋屋敷側から玉泉院丸に至る部分について、池北部・南部にそれ

それぞれに向かう経路が描かれている。

Ⅵ期の「御城中壘分碁絵図」(第70図42-11)では、二ノ丸から数寄屋屋敷(広敷下段・部屋方)へ向かう部分について、辰巳用水の流れとしては明確に描かれていない。ただし暗渠として通じている可能性があり、そうだとすれば、数寄屋屋敷から玉泉院丸に至る水路(開渠)は描かれているので、Ⅳ期の経路をおおよそ踏襲していることとなる。なお後出する「御城分間御絵図」(嘉永3年・1850)には、辰巳用水が二ノ丸から数寄屋屋敷(広敷下段・部屋方)へ分流する部分が開渠として描かれており(第56図①)、玉泉院丸への導水経路は明確である。

ただしどちらの絵図にも、池までには途絶部分があり、取付ははっきり表現されていない。おそらく暗渠を介し池に通じていたと考えられる。ここでは、B-1:Ⅳ期と同様に、紅葉橋北側に取り付いていた、B-2:出島の付け根を横断し、紅葉橋南側の池南部に通じていた、B-3:松坂の側溝となつて、色紙短冊積石垣前の滝壺に至り、経路Aと合流する、の3経路を想定する。前述の通り、Ⅵ期の絵図には、紅葉橋南側・松坂東側に石組があり、ここから流れが発しているが、石組までの導水は描かれていない。経路Aの再興が安政期に下るとすれば、こちらの経路が延伸(B-2)していた可能性もある。

経路Cについては、慶応2~3年(1867~68)の文献史料(「金谷御殿御普請諸事留」)に、金谷出丸への引水を目的とし、御花畑(本丸高石垣下)~稲荷屋敷を経由する樋が敷設された一方、玉泉院丸の池の水を金谷に導く普請が行われたことがみえることから(第5節第29表51-35・40・41)、両者が一体で、玉泉院丸の池に一旦水を集めた可能性を考慮して想定したものである。



経路A①推定(Ⅲ1期~?) 経路B①「金沢城絵図」42-05「金沢城図」42-08 ②Ⅵ期(安政頃)埋蔵文化財調査 ②「金沢城絵図」42-05
 経路A・B①「御城中壘分碁絵図」42-11 ③「金沢城絵図」42-05他、埋蔵文化財調査
 ②「御城分間御絵図」42-13 経路C「金谷御殿御普請諸事留」51-41、埋蔵文化財調査
 原図:「御城分間御絵図」
 [(公財)前田育徳会蔵]42-13
 縮尺約1/500

第95図 玉泉院丸庭園給水経路

第5節 金谷出丸

1. 概要

(1) 金谷出丸の位置と地形的特徴 (第96・98図)

金谷出丸は、金沢城の最西部に位置する (第96図)。金沢城本体からみて西に張り出した出丸状の地形で、平面はおよそ南北180m、東西130mの略方形を呈する (第98図)。郭内は、南縁の築山部分以外は概ね平坦で、標高約27mを測る。いもり堀を隔てた東側の玉泉院丸よりは約6m低いが、西側の城下町・北側の丹後屋敷・南側の堂形に対して高い。とくに西側に対しては比較的急な約5mの段差が形成されている。かつては四方ともに堀が巡っており、北側・東側・南側とは土橋や木橋による連絡があった。

(2) 現況 (第97・98図)

金谷出丸の地には、明治6年(1873)に藩祖前田利家等を祭神とする尾山神社が創建され、現在も北西の一部を除き、大半がその敷地となっている。本殿・拝殿・社務所等の位置は、御殿域のおよそ東部に相当する。神社の正面は、藩政期には出入り口のなかった西側に設けられ、明治8年(1875)には神門(重要文化財)が建設された。庭園は郭の南部を占め、尾山神社庭園(旧金谷御殿庭園)として県の名勝に指定されている。なお郭全体が埋蔵文化財包蔵地・金沢城跡の一部であるが、史跡の区域外となっている。

(3) 金谷出丸の沿革 (第25表)

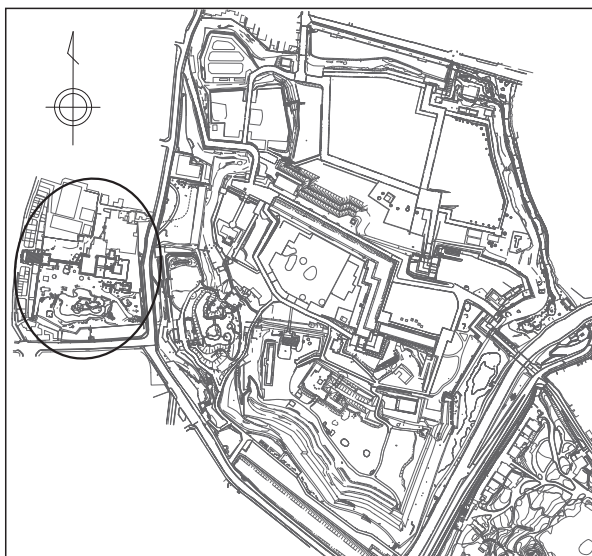
金谷出丸の沿革については、[木越2004]、[田中2008]に詳しく、ここではこれらに拠りつつ、主に殿舎の構成変化に着目して金谷出丸全体の時期区分を設定する。なお第25表は、金谷出丸における普請・作事の記録を中心とした年表である。また第100図では主要な絵図を製図し、おおよその縮尺を併せて時期別に配列した。

I期 (~1660)

万治3年(1660)の馬場造営以前を一括する。「金沢細見図譜」等によると、寛永12年(1635)の火災まで金谷の地には町屋があったとする(『金沢古蹟志』)が、詳細は不明である。

II期 (1660~1688)

本期は、馬場(万治3年(1660))、池(井戸の可能性もあり、寛文元年(1661))、書院(寛文



第96図 金谷出丸の位置 (S=1/10,000)



第97図 金谷出丸の現況 北から



第 98 図 金谷出丸全体図

5年(1665)以前)、書院・御亭(延宝9年(1681))等の諸施設が整備される時期である(「改作所旧記目録(加賀司農序年代摘要)」『改作所旧記 下編』・「日帳」[石野 2005](石川県立図書館森田文庫)、「奥村尚寛御城方覚書」[石川県金沢城調査研究所 2016b]・「葛巻昌興日記」『金沢古蹟志』(金沢市立玉川図書館加越能文庫))。なお金谷出丸の施設としては、古書籍等を収蔵した文庫土蔵・南土蔵が著名であり、延宝9年の段階で文庫土蔵が存在していたことが判明するが、創建年次は不明である。庭園については、寛文元年史料が築造年の候補となるが、史料中の「池」を井戸とする解釈(『金沢古蹟志』)もあり一考に値する。ただし寛文5年(1665)には厩と並んで書院が存在しており(「奥村尚寛御城方覚書」)、庭園も17世紀後半に設けられている可能性が高い。

Ⅲ期(1688～1759)

本期は藩主子女の屋敷が設けられ、御殿に準ずる屋敷空間が形成された時期である。元禄元年(1688)、前年の詮議の通り(第26表51-06)、5代藩主前田綱紀の養女豊姫は金谷出丸に居住することとなった(「前田貞親手記」)。建物の構成等に不明なところは多いが、金谷出丸の土地利用上大きな画期となった。また享保19年(1734)には改めて「御広式」が造営され、藩主世子(後の7代藩主宗辰)が二ノ丸より移徙している(「政隣記」(加越能文庫)『加賀藩史料6』)。以上から享保19年より前をⅢ1期、以後をⅢ2期とする。なお、宝暦9年(1759)大火頃までの景観を描いた絵図は4タイプ知られるが、殿舎の平面形等に差異があり、Ⅲ2期とした区分にも更なる細別の余地がある。

Ⅳ期(1759～1775)

宝暦9年(1759)の大火に際しては、金谷出丸は類焼を免れ、直接的な影響は受けなかったが、全焼した二ノ丸に代わり、金谷出丸に一時仮御殿が造営される(「泰雲公御年譜」(加越能文庫)等、『加賀藩史料8』)等、新たな普請・作事が生じ、結果的に大火以前の様相とは異なるものとなったと推測される。なお二ノ丸御殿は、表部分の多くが未完成ながら宝暦12年(1762)には一応の再建を見、金谷出丸の景観にも改めて変化が生じたと考えられるが、明確ではない。第10代藩主前田重教世子(実弟)治脩が明和6年(1769)から居住しているが、普請・作事については不明である。

本期については期間も短く、普請の経緯や殿舎の構成等にも不明な点が多いが、一時的にせよ金沢城中枢部の機能を担ったこと、先行するⅢ期と後続するⅤ期との殿舎がかなり異なること等から、一つの期として扱った。

Ⅴ期(1775～1833)

安永4年(1775)、隠居して江戸に滞在していた前藩主(10代)前田重教は金沢に戻り、金谷出丸に居住(「政隣記」他『加賀藩史料9』)するにあたり、敷地南側に大規模な表能舞台を伴う御殿を造営した。「金谷御殿絵図」(第32表・第102図52-06)は、この重教の隠居御殿を描いたものとみられる。殿舎は宝暦大火以前の形状を一部留めているが、敷地北東に広式、南東に御居間、西側に表を配し、大規模に改変された。この御殿を基本形として踏襲する段階を一括してⅤ期とする。なお表舞台の更に南側には、東西方向に長い空闲地がある。後続する絵図には「外御庭」「御馬場」と記載される区画で、この地割は慶応頃まで存続する。重教の死後、天明8年(1788)頃には表能舞台は撤去されるが(「高島厚定職事日記」(加越能文庫))、主要部分の変化は漸移的と言えるものであった。

享和2年(1802)には、重教の跡を次いだ治脩が藩主を退き、金谷出丸に退隠した(「政隣記」他『加賀藩史料11』)。この頃の様相は絵図52-08(第102図)・52-09(第103図)が示す通りで、西側が表、東側が奥という区分が一層明確になっている。

文政6年(1823)、表側が撤去され、再び奥＝広式のみ形状となった。この後、綿羊小屋が設けられる(「名倉氏採取襖下張文書」(金沢大学日本史研究室))等、指標となる普請・作事がみられるが、天保4年(1833)まで、殿舎の構成に大きな変更はなかったものと推測される。これらの状況は、文政13年(1830)作成の「御城中壺分碁絵図」(第103図52-10)に描写されている。

第 25 表 金谷出丸関連年表

年号	西暦	事項	時期	史料
万治 3	1660	金谷出丸・堂形に馬場が造営される 「改作所旧記目録（加賀司農庁年代摘要）」（県図森田文庫）[改作所旧記下編]	Ⅱ期	51-01
寛文元	1661	金谷出丸・玉泉院丸に池（井戸の可能性もある）が掘削される 「日帳」（森田文庫）[石野 2005]		51-02
寛文 5	1665	留守中火事之刻定に金屋（谷）屋敷書院の記載あり「奥村尚寛御城方覚書」（玉図加越能文庫）[石金研 2016b]		51-03
延宝 9 （天和元）	1681	書院・亭等が建造される 「葛巻昌興日記」（加越能文庫）[金沢古蹟志]		51-04
天和 4 （貞享元）	1684	金谷御文庫土蔵が一棟追加される 「葛巻昌興日記」[加史 4]		51-05
貞享 4	1687	5代藩主前田綱紀の息女豊姫、金谷屋敷への移徙が詮議される 「前田貞親手記」（加越能文庫）		51-06
元禄元	1688	豊姫金谷へ移る 敷地南東に七間建廐が建造される 「前田貞親手記」	Ⅲ 1 期	
享保 19	1734	金谷御殿広式普請が完了し、6代藩主前田吉徳の嫡男勝丸（後の7代宗辰）が二ノ丸広式より移る 「政隣記」（加越能文庫）[加史 6]	Ⅲ 2 期	51-07
宝暦 9	1759	金谷は宝暦の大火を免れ、焼失した二ノ丸に代わり、一時藩主の居所とするため御殿が修築される 「泰雲公御年表」「泰雲公御年譜」（加越能文庫）[加史 8]	Ⅳ期	
安永 4	1775	前藩主（10代）前田重教、江戸より金沢に戻り、金谷御殿に居住する 「政隣記」他[加史 9]	V 1 期	
天明 6	1786	重教死去、嫡男斉敬金谷に移徙する 「政隣記」[加史 9]		
天明 8	1788	金谷御庭修築 この頃表能舞台撤去 「高昌厚定職事日記」（加越能文庫）	V 2 期	51-11
寛政 7	1795	前田斉広（重教次子、後 12代藩主）金谷へ移る 「政隣記」[加史 10]		
寛政 11	1799	金谷御庭にて帯佩を行う 「横山氏日記」（加越能文庫）[加史 10]		51-12
寛政 12	1800	金谷御庭にて草鹿を行う 「筆のまに／＼」（玉図奥村文庫）[加史 10]		51-13
享和 2	1802	前藩主（11代）前田治脩、江戸より帰国し金谷御殿に入る 「政隣記」他[加史 11]	V 3 期	
文化 2	1805	金谷御庭にて草鹿を行う 「金龍公記史料」[加史 11]		51-14
文化 7	1810	治脩死去 「政隣記」他[加史 11]		
文政 6	1823	表廻建物を撤去する 「名倉氏採取襖下張文書」（金沢大学日本史学研究室）[木越 2006]	V 4 期	51-15
文政 8	1825	綿羊小屋を竹沢から金谷へ移す 「名倉氏採取襖下張文書」[木越 2006]		
天保 4	1833	13代藩主前田斉泰の弟延之助、金谷御居宅に移る 「諸事要用雑記」（加越能文庫）、「官私隨筆」（奥村文庫、加越能文庫）[加史 14]	Ⅵ 1 期	
天保 5	1834	延之助死去 「官私隨筆」他[加史 14]		
天保 9	1838	前藩主（12代）前田斉広正室真龍院（鷹司隆子）、江戸より金沢に移り、金谷御殿に入る 「越の山文」「諸事要用雑記」他[加史 14]	Ⅵ 2 期	51-16
弘化 2	1845	13代藩主前田斉泰の嫡男慶寧（後 14代）、江戸より金沢に移り、改築なった金谷御殿に入る 真龍院の居所を松之御殿と称し相殿とする 庭園も大きく修築 「諸事要用雑記」「官私隨筆」[加史 15]、「世子御座所普請方御用主附一件」（加越能文庫）[石金研 2014b]	Ⅵ 3 期	51-19 ～ 31
安政元	1854	6月 真龍院、二ノ丸広式に移る 「御用方手留」（奥村文庫）[加史藩末上] 9月 藩主前田斉泰の子利行金谷へ移り、居所を南之御住居と称する（当年中死去） 「御用方手留」他[加史藩末上]	Ⅵ 4 期	
安政 4	1857	金谷広式の庭で天満宮の鎮守祭礼が行われ、小間物店等が設けられる 「大野木日記抜萃」（加越能文庫）		
慶応 2	1866	前藩主（13代）前田斉泰、子女とともに二ノ丸から金谷御殿に移る 「御用方手留」他[加史藩末下] 庭園を含め御殿の改修に着手する 「諸事留牒」「御親帳書抜」他[加史藩末下]、「金谷御殿御普請諸事留」（玉図清水文庫）[石金研 2013b]	Ⅶ期	51-32 51-33
慶応 3	1867	玉泉院丸の池から金谷への取水を図る また蓮池庭坂下門付近より本丸高石垣下を通す辰巳用水の新たな経路を設ける 「金谷御殿御普請諸事留」 外御庭築山上に滝を築造する 「見聞袋群斗記」[加史藩末下] 14代藩主前田慶寧、上洛から帰還し、金谷御庭にて前藩主斉泰と会談する 「見聞袋群斗記」[加史藩末下]		51-40 51-41 51-44 51-48
明治 2	1869	金谷御殿（後御住居）竣工、藩首脳を招き庭園を披露する 「成瀬正居日記」（金附図）		51-52
明治 3	1870	金谷御住居で宴が催され、権大参事横山政和、庭園を漢詩に詠む 「環翠楼詩鈔」		51-53
明治 4	1871	廃藩に伴い前田家退去 「御用方手留」[加史藩末下]		
明治 5	1872	御住居建物撤去 「金谷御殿一件（私下）」（成巽閣）[尾山神社々務所 1973]		
明治 6	1873	尾山神社創建 庭園修繕を受ける 「尾山神社編年要誌」（尾山神社）[尾山神社々務所 1973]		51-55

以上の通り、V期の内容は4小期に細別できる。各小期を画する実年代は、明確でないところもあるが、およそ①安永・天明期（重教隠居御殿、絵図 52-06）、②天明・寛政期（52-07）、③文化期（治脩隠居御殿、52-08・09）、④文政・天保初期（52-10）に対応する。

VI期（1833～1866）

天保4年（1833）、当代13代藩主前田齊泰の弟延之助が金谷出丸に居住するにあたり、改めて殿舎を建造することとなった（「諸事要用雑記」「官私随筆」『加賀藩史料14』）。絵図 52-11（第103図）は、この時の作事による殿舎を描写したと考えられる。表・居間・広式・部屋方のおよその配置は類似するものの、建物の平面プランは前代V期と比較して一新されており、殿舎の根幹的な建替が行われたと考えられる。この天保4年度殿舎の原型を踏襲する段階をVI期とする。

その一方、敷地南側を占める外御庭の地割はそのままであり、後述するように、庭園の形状も変化があるものの、殿舎に見られる程の画期ではない。この後、天保9年（1838）に12代藩主前田齊広正室の真龍院（鷹司隆子）（「官私随筆」『加賀藩史料14』）、弘化2年（1845）に13代藩主齊泰世子慶寧（後14代藩主）（「諸事要用雑記」「官私随筆」『加賀藩史料15』、「世子御座所普請方御用主附一件」（加越能文庫）〔石川県金沢城調査研究所2014b〕等）、安政元年（1854）に慶寧弟利行（「御用方手留」他『加賀藩史料藩末編上』）が金谷出丸に居住し、それぞれ作事が生じているが（第103図 52-12～第105図 52-17）、いずれも建継（増築）であり、天保4年度殿舎の形状が基盤となっている。

以上の通りVI期の内容は4小期に細別でき、小期間の実年代も普請・作事記録から明確である。すなわち①天保4～9年（1833～38）（絵図 52-11）、②天保9～弘化2年（1838～45）（52-12）、③弘化2～安政元年（1845～54）（52-13～16）、④安政元～慶応2年（1854～66）（52-17）の各期である。

VII期（1866～1871）

慶応2年（1866）、第13代藩主前田齊泰は世子慶寧に跡目を譲り、金谷出丸に隠居した（「御用方手留」他『加賀藩史料藩末編下』）。直ちに御殿の普請が開始されたが、これは弘化期のような増築ではなく、全面的な改築であり、天保4年度殿舎は姿を消した。更には御殿部分のみならず、17世紀後半以来、金谷出丸西縁の一角を占めていた文庫土蔵や、その南側の南土蔵を城内本丸に移す等、金谷出丸全体にわたる抜本的な改修が行われた（「金谷御殿御普請諸事留」金沢市立玉川図書館清水文庫〔石川県金沢城調査研究所2013b〕、第28表 51-33～第29表 51-34～43、第30表 51-45～47）。

絵図では52-19（第33表・第105図）が対応する。殿舎は表・奥（広式）の基本配置は従前どおりとするものの、平面プランは全く変わっており、以前泉水の範囲であった敷地南側まで占めている。絵図には描写されていないが、改修前までの内御庭（泉水等狭義の庭園）、外御庭（馬場）を廃し、後述するように現存の庭園（池・滝・築山等）が広い区域を占めるように築造されたと考えられる。齊泰の隠居御殿の最終的な完成は明治2年（1869）に下るが（「由緒一類附帳（正田源六）加賀藩御大工等先祖由緒一類附帳」（加越能文庫）、第30表 51-50等）、2年後の同4年には廃藩置県が断行され、齊泰以下前田家の面々は東京に去った。主を失った殿舎は翌5年には解体・撤去されている（「金谷御殿一件（払下）」（成巽閣）『尾山神社々務所1973』）。

VII期は慶応2～明治4年（1866～1871）の6年間という短期間であるが、前代から大きく変容し、また現況に繋がるという意味でも重要な時期である。

金谷出丸の殿舎配置

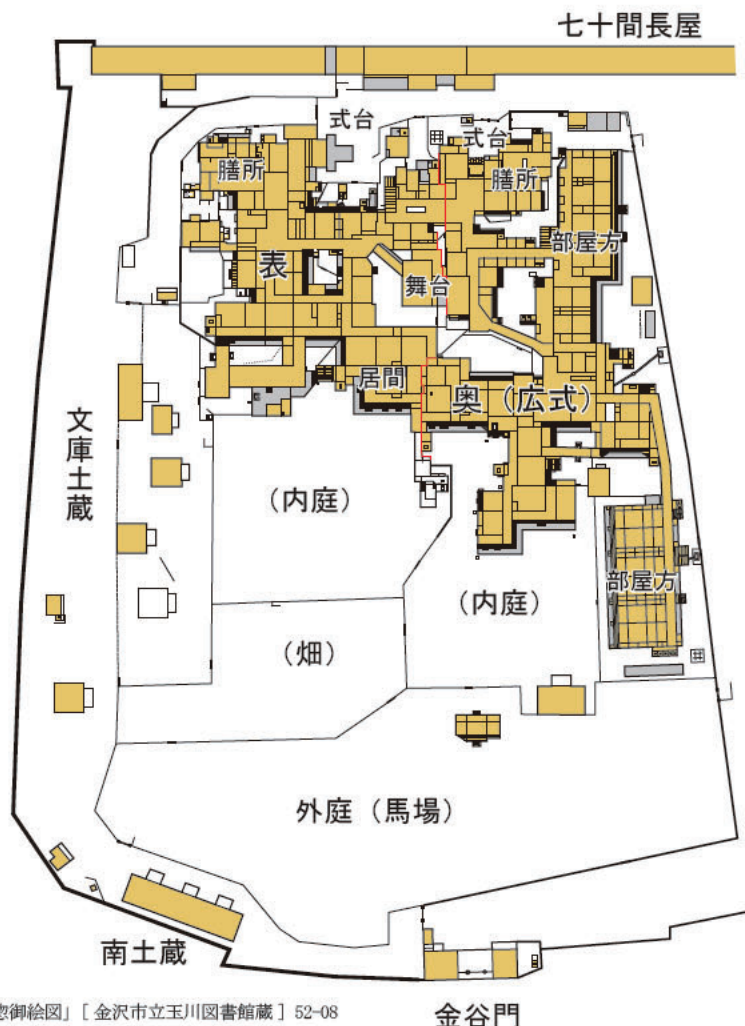
上記のように、金谷出丸では、III期以降、前藩主や世子、藩主近親の居宅が設けられた。居住者の身分・立場により、御殿・御屋敷・御住居等名称は改められたが、実態はいわゆる御殿建築であった。第99図は、V3期、文化元年（1804）の内容を描いたとされる絵図（「金谷御殿并御広式惣御絵図」第32表・第102図 52-08）を製図したものである。正門は北側（図上）で、金谷出丸の殿舎はいずれの時期においても北面している。御殿の表は西側（図左）であり、奥（広式）は東側（図右）を占

める。原図ではその境界が朱書線で引かれている。このように金谷出丸のV期以降においては、表・奥が並列し、役人詰所や膳所は北側に、狭義の居住空間は南側に配されている。

庭園については、表・広式ともに殿舎の最深部に設けられている。なお、表における「奥」側の呼び方については、中心的な一室である「居間」(御居間)に代表させているようであり、本書でも「居間」「居間側」等と呼称する。

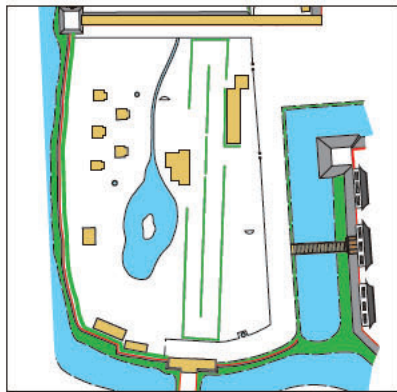
第99図では、金谷出丸西縁は土堀、東縁は掛堀、内部は熨斗立で仕切られている(時期により若干の変動がある)。また東辺～南辺に沿って、文庫土蔵・南土蔵が連なっている。殿舎の変遷に伴い、しばしば位置の変動を余儀なくされるが、前述の通り殿舎より古い成立で所管も異なり、殿舎に付随する施設ではない。

ここではV3期を例にとったが、時期によって御殿の平面形が変わっても、正門・表・奥(広式)のおおよその位置に変動はない。金谷出丸の殿舎の基本形は通底していると言える。

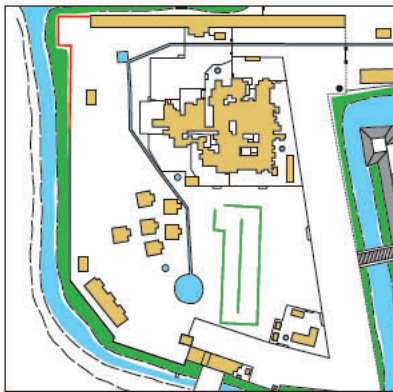


原図「金谷御殿并御広式惣御絵図」[金沢市立玉川図書館蔵] 52-08
縮尺約 1/1,500

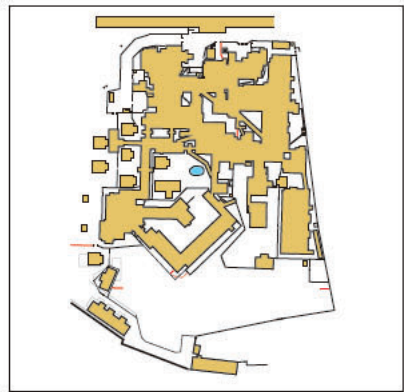
第99図 金谷出丸殿舎配置 (V3期)



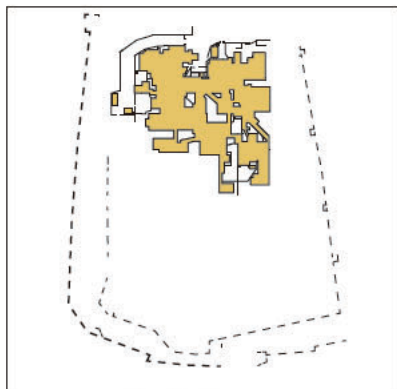
II 原図「金沢古城図」(金谷屋敷之図)
[石川県立図書館蔵] 52-01



III 2 原図「金沢城図」
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-02



V 1 原図「金谷御殿絵図」
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-06



V 2 原図「金谷御殿絵図」
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-07



V 3 原図「金谷御殿并御広式惣御絵図」
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-08



V 4 原図「御城中老分基絵図」
[横山隆昭氏蔵] 52-10



VI 1 原図「金沢御城内外御建物絵図」(金谷屋敷敷兩御居間廻等 金谷外御庭辺)
[(公財)前田育徳会蔵] 52-11



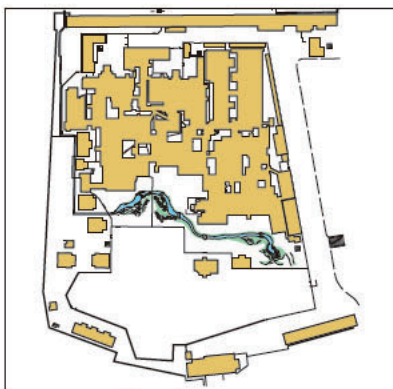
VI 2 原図「金谷御殿間取図」
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-12 他



VI 3 原図「金谷御殿間取図」
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-13 他



VI 3 原図「御城分間御絵図」
[(公財)前田育徳会蔵] 52-16



VI 4 原図「金谷御殿図」
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-17



VII 原図「金谷御殿図」(現況図合成)
[金沢市立玉川図書館蔵] 52-19

第 100 図 各時期の金谷出丸

2. 庭園に関する史料

(1) 遺構

県名勝尾山神社庭園は、金谷御殿の遺構とされているが、神社創建時の造営、あるいはその時に大きく改修された可能性も指摘されてきた。本報告では、金谷御殿の最終段階（金谷Ⅶ期）に築造されたもので、その形状を留めていると判断した。明治以後、周辺環境の変化にも影響を受け、給水の仕組みを始め、護岸石積・池の底面等、改修が度々実施されているが、形状を大きく改めるには至らず、全体としてよく保存されている。以下に近代以後の主な修繕履歴等を記した。

明治 14～15 年 (1881～82) 頃 辰巳用水の給水が止まり、池の水が枯れる

明治 38 年 (1905) 頃 旧藩臣横山家等の協力により庭園が修繕される

昭和 23 年 (1948) 辰巳用水の給水が止まる

昭和 29～32 年 (1954～57) 給水の復旧作業、滝口・護岸石積の修繕等が行われる

昭和 37～39 年 (1962～64) 辰巳用水に由来する給水が途絶したため、鑿井・揚水工事が実施され、併せて滝石組や池護岸の補修が行われる

平成 13 年 (2001) 凶月橋補修

平成 15 年 (2003) 池（泉水）の浚渫、護岸補修等

平成 17 年 (2005) 排水施設周辺補修

また平成 27 年度には、神饌所建築工事に伴い、金沢市埋蔵文化財センターによる埋蔵文化財調査が実施されている [金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2016]。

(2) 文献（第26～31表）

藩士の日記や職務記録等の一次史料が主体であるが、一部編纂物所収の記事にも依拠している。

近世前期には「葛巻昌興日記」（第 26 表 51-04・05）「前田貞親手記」（51-06）等があり、庭園関連施設等の造営に関する記事がある。しかし庭園の内容に触れた史料は限られている。

近世後期においても、19 世紀前半までの史料は断片的である。弘化期・慶応期に至って、金谷出丸全体にわたる普請・作事記録である「世子御座所普請方御用主附一件」（第 27 表 51-19～第 28 表 51-31）、「金谷御殿御普請諸事留」（第 28 表 51-33～第 29 表 51-43、第 30 表 51-45～47）において、庭園の築造に係る事項が見られ、組織や工程の一端を知ることができる。

使用に関する史料は、近世後期を通じまとまった史料は少ない。それでも寛政～文化期に「草鹿」等の儀礼的武芸を行った件（第 26 表 51-12～14）や、藩政最末期に藩の首脳を招き饗応した件（第 31 表 51-52）があり注目される。この他文芸史料ながら、庭園の時期やその景観の一端を示すものとして、和歌・漢詩等が若干存在する（第 27 表 51-16、第 31 表 51-53）。

(3) 絵図（第32・33表、第101～108図）

近世前期（Ⅱ・Ⅲ期）の庭園が描かれる絵図は 3 種類（第 101 図 52-01・02、第 102 図 52-05）あるが、いずれも比較的単純な図柄で、構成要素等の情報は多くない。近世後期（Ⅴ・Ⅵ期）には、庭園本体が描かれる絵図が 7 種類（第 102 図 52-06、第 103 図 52-10・12（第 104 図 52-13 と同じ）、第 104 図 52-14～16、第 105 図 52-17）あり、構成要素が写実的に表現される図柄も見られる。また本体は描かれなくとも、庭園の存在が窺える絵図もあり、現存遺構と併せ、庭園景観・形状の特徴とその推移について、かなり綿密にたどることが可能である。

なお現存庭園（Ⅶ期）が描かれている絵図・絵画については、年紀の明確なものは近代以後に下る。近代以前に属すると考えられる絵図 52-21（第 33 表・第 107 図）は、現段階では写真のみ知られ、所蔵不明となっている。近年、これと景観内容が酷似した絵画 52-20（第 33 表・第 107 図）の存在が確認された。

第 26 表 金谷出丸庭園関連文献史料 1

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
51-01	万治 3(1660) 12	金谷堂形馬場今年十二月出来。	改作所旧記目録 (加賀司農序年代摘要)	石川県立 図書館 森田文庫	石川県図書館協会 1970 P289
51-02	寛文元 (1661) 11.3	(泉脱力) 一、玉様丸・金屋々敷両池ほらせ、奉行板坂吉丞・ (城番馬廻) 疋田半平申渡ス	寛文元年二年 日帳	石川県立 図書館 森田文庫	石野 2005 P75
51-03	寛文 5(1665) 3.22	留守中火事之刻定 (略) 一、金屋々敷廐 与力裁許二人 同書院 明与力 (略)	奥村尚寛御城方 覚書〔御城方覚 書〕	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2016b P1_3
51-04	延宝9(天和元) (1681)3.26	延宝九年三月廿六日金谷屋敷御文庫の前に追廻し之 馬場並に御書院・御亭、旧冬被仰出、頃日有増出来、 御書院は馬場の御書院と号し、御亭は馬場先の御亭 と号す	葛巻昌興日記 (葛巻昌興自記)	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	金沢古蹟志 上巻(巻六) P363
51-05	天和4(貞享元) (1684)6.27	天和四年六月廿七日金谷屋鋪に、今一御文庫可被仰 付候。是は表御納戸方古筆御書物等為可被入なり。 (略) 当時は御文庫五有之。是は皆御書物奉行預なり。	葛巻昌興日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 4 P763
51-06	貞享 4(1687) 6.14	一、金沢 御姫(豊姫)様御養育之儀、(略)御別館可 宜候、(略)左候へハ、金谷屋鋪の外ハ、無御座旨、 申上ル、(略)池之際に有之御亭ハ、御文庫之御用、 又湿も有之候間際、馬場且此方ニ有之長き御座敷ヲ たすけ、(略)	前田貞親手記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
51-07	享保 19(1734) 6.16	六月十六日今般金谷御広式御普請出来、今日勝丸様 御移、(略)	政隣記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 6 P862
51-08	[文政 8(1825) 11]	御城中御門々・御長屋・御櫓名目附并員数、宝曆御焼 失以前之御模様、大概相調、(略) 金谷等之部(略)御文庫 御馬場 御泉水(略)	文禄年中以来等 之旧記(横山本)	横山隆昭氏	石金研 2008c p141
51-09	(天明末年以降 成立?)	(末尾・朱書) 右年限以前、二之 御丸江水上り不申哉、 金谷江者天明年中ヨリ行、初メハ二ノ松坂ハ単多橋下 釣樋也、天明之末ハ御馬場通り埋樋ニ成、	「上ヶ水樋 図り帳」 扣	穴太政洋氏	
51-10	天明 8(1788) 4.19	一、金谷御庭成就□御勝手方ハ御渡物、内作事江相 渡也、	高島厚定職事日 記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
51-11	天明 8(1788) 6.20	一、金谷御舞台等、取払之儀、御城代ハ御勝手方へ 入立旨、猶更御達申様ニ与被 仰渡也、	高島厚定職事日 記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	
51-12	寛政 11(1799) 9.17	九月十七日 快晴 一、八時半たいはい見物人相廻り候間、罷越候而も宜 段、玉川七兵衛申聞候に付、年寄中等何茂追付退出、 松坂通鼠多門向二枚開より金谷御庭へ入、見物所に 罷越候処、(略)	横山氏日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 10 P919_920
51-13	寛政 12(1800) 4.17	一、今日金谷御庭において、草鹿被仰付候付、(略) 二御丸より金谷御庭へ、鼠多御門橋之向之小口より 罷出、御見物所次之間江罷出。	筆のまに／＼	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	加賀藩史料 10 P950
51-14	文化 2(1805) 4.24	四月二十四日於金谷外庭。命近侍射草鹿。使人持組 觀之。	金龍公記史料		加賀藩史料 11 P449

第 27 表 金谷出丸庭園関連文献史料 2

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
51-15	文政 6(1823)	一、八貫八百八拾目七分九厘 金谷御屋敷御表廻御取量	名倉氏採取襖下張文書	金沢大学日本史学研究室	木越 2006 P77
51-16	天保 9(1838) 8.22	瀧津なみ落て流れのすゑ清く千よもすむべき宿のいけ水	越の山文 (真龍院 鷹司隆子 作)		加賀藩史料 14 P956
51-17	天保 12(1841) 3.25	一、金谷御門傍埋石樋相損、水吹出之候由、御作事より相達候、依之御修覆方之義、先達而右石樋被仰付候源三郎江申渡、所方より人足呼寄取懸り候筈之事、	村井長貞日記	金沢市立玉川図書館加越能文庫	石金研 2016b P175
51-18	天保 13(1842) 5.22	(略) 一、無程御庭へ御出、丹後やしきへも御出、御供仕罷越。 御鎮守稻荷堂も拜見、御戸帳開拜見被仰付。左右七面観音等之由。 一、右より御小間へ御入、圍茶式被遊、御相伴仕る。主人 長谷川学方 録事 御祐筆某歟 御上客は真龍院様、其次相公様、其次丹後守、其次老女花山等也。 (略)	官私随筆	金沢市立玉川図書館奥村文庫加越能文庫	加賀藩史料 15 P371
51-19	弘化元 (1844) 11.18	一、金谷御庭御泉水之内、中島之北方埋置、并同所ニ有之嶺(巖カ)石之分、御広式へ受取度旨、左兵衛申聞、則相伺候処、其通申談候様、被 仰出、明日ニ而も、可申談筈之事、佐兵衛へ十九日 申談ル	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立玉川図書館加越能文庫	石金研 2014b P72
51-20	弘化元 (1844) 11.18	一、同所御表御居間先御泉水水溜之處、いかゞ可被仰付哉、山之際之流迄位ニ可被 仰付哉、此儀ハ春ニ至り、御覧之上、御治定被 仰出候様、申上置候、何レ此絵図ニ而ハ、御堀も六ヶ敷可有之、流レ而巳位之事ニ可有之哉と、 御意之事、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立玉川図書館加越能文庫	石金研 2014b P72
51-21	弘化元 (1844) 11.22	一、田辺左兵衛罷出、御泉水埋立候図り書指出、壹貫目計ニ相成候ニ付、御作事奉行相尋候処、御作事ニ而ハ、平面ニ而御渡之上、御建物迄之取図りニ候へ共、何レニ而被 仰付候而も、同様之事と申聞ニ付、左候ハ、先此図りを以、御作事ニ而も、予メ為図可被申候、其上ニ而、金谷御露地手合事輕ニ候へハ、夫々可被 仰付と隼人へ申合遣候事	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立玉川図書館加越能文庫	石金研 2014b P74
51-22	弘化元 (1844) 11.24	同廿四日 一、金谷御泉水埋立御入用御広式ニ而、同所御庭方図り、左之通、八拾壹貫八百文 高 右、御作事ニ而、及僉議候処、左之通之旨、岡田隼人罷出申聞、御広式の方、御益ニ付、則田辺左兵衛へ申談、夫々取懸り候儀ニ申談ル、 壹貫三百八拾目計 高	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立玉川図書館加越能文庫	石金研 2014b P74
51-23	弘化 2(1845) 3.26	一、廿六日 御発駕前日、金谷へ被為 入、御普請所御覽被遊、其節拙者儀、御奥へ出、御供致、御庭之御模様も申上、相伺、松一本、梅壹本、御縁先之分、伐木之儀申上、被 仰出候事、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立玉川図書館加越能文庫	石金研 2014b P80
51-24	弘化 2(1845) 4. 朔日	四月朔日 一、御膳所絵図、御地面も六ヶ敷ニ付、(略) 右、御膳所御補理ニ付、柿ノ木二本植替之儀、伺相濟居候ニ付、三十人頭江申談、御文庫之内内井戸之辺ニ植替候様申談ル、 一、松・梅伐木之儀、其外御泉水之模様等、廿八日、三十人頭等罷出候ニ付、夫々申談ル、 一、右伐木御座所御庭之儀ニ付、分而御城方へハ、不申達候事、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立玉川図書館加越能文庫	石金研 2014b P80_81

第 28 表 金谷出丸庭園関連文献史料 3

No	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	取載刊行物
51-25	弘化 2(1845) 4.9	一、御普請所御居間先御庭御手入之儀、御発駕前、伺置 _二 付、三十人頭 _江 申談置候処、少々岩石も入用 _二 付、玉泉院様丸等 _二 而、右石受取度旨、申開刻、遂見分候処、不目立 _ケ 処 _二 而十計、堂形御囲内 _二 も有之 _二 付、其内も受取置旨申聞、夫々見計、引寄方、其儀、三十人頭へ申談ル、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P81
51-26	弘化 2(1845) 4.9	一、右御庭御用、三十人頭主付被 仰付候程之事に _而 ハ無之候得共、彼是僉議方も貫通可致候儀も可有之、主付僉議無之 _而 者何 _二 か御不益之儀も有之 _二 付、急度主付被 仰付候 _二 而ハ無之候得共、三十人頭筆頭木村平六、僉議方主付相勤候様、拙者より申談候、右、三ヶ條之趣、御序 _二 被申上候様、今便成瀬迄申遣候事、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P81
51-27	弘化 2(1845) 4.9	一、三御規敷、当十三日就被 仰付候、御作法方披見物 _二 而、夫々申談ル、三十人頭木村平六も御用懸り _二 付、罷出候儀、夫々申談ル、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P81
51-28	弘化 2(1845) 4.12	四月十二日 一、左之通、御城方へ早川浅之丞を以、及御達、金谷御普請所、御庭爲御用、玉泉院様丸暨堂形御囲内 _二 而見計、石御引寄之儀、三十人頭木村兵六 _江 申談候、員数之儀ハ、追而御達可申旨御達、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P81
51-29	弘化 2(1845) 6.19	(略) 一、白銀貳枚御目録 三十人頭 木村平六 平六儀、主付被 仰付候 _二 而無之候得共、僉議方も区々 _二 可相成 _二 付、申談、一人究而相勤候ハ、可然段、申談候処、申談次第 _二 可爲心得旨 _二 付、筆頭平六 _江 申談置候、御手木小頭三十人小頭者、同頭 _二 において、主付申渡候旨、及届候、 一、小判壹両 御手木小頭 壹人 一、金百五拾疋 同 壹人 但、主付 _二 而者無之候得共、老功之者 _二 而、日々罷出、示談 _二 加 _二 居候 _二 付、 一、同三百疋 三十人小頭 壹人 一、同百疋充 御手木足輕 (鳥) 十三人 一、□目拾五貫文 三十人組手組 三十七人 一、同壹貫貳百文 同 木登 三人 一、金貳百疋 田辺左衛門手先留書足輕 壹人 (略)	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P88
51-30	弘化 2(1845) 6.24	一、岡田隼人儀、御庭方御手入之儀も、日々見分有之、同人宅 _二 有之モチノ木二本、若々御用立候ハ、指上候 _而 も不苦旨、内分申聞有之 _二 付、御手木小頭指遣、爲致見分候処、随分御用立候 _二 付、取寄植付候事 _二 申談ル、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P90
51-31	弘化 2(1845) 7.9	一、御座所御庭出来方之儀、夫々今九日出 _二 申上ル、竹田・富田より指上候樹木、并岡田隼人より、取寄よりもちの木之事、并石燈籠も壹基、居候筈之旨等、委曲申上ル、	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P91
51-32	慶応 2(1866) 8.11	(略)中納言様、金谷御殿御建直し被遊度思召之御様子(略)御庭を広く被遊度由御意に而、(略)	諸事留牒	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 藩末篇下巻 P492_493
51-33	慶応 2(1866) 9	今般金谷 御殿御普請 _二 付、同所外御庭内 _江 大工小屋等懸渡、暨御馬見所急速取置候様被 仰出候 _二 付、右外御庭御普請中御作事所 _江 引請度段、同所御用部屋中 _江 相達、則引受申候間、此段御達申候事、 寅九月 御作事所	金谷御殿御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P175

第 29 表 金谷出丸庭園関連文献史料 4

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
51-34	慶応 2(1866) 9	金谷外御庭御馬見所御取置之木品等、竹沢御庭内江持運、且同所御庭内ニ有之候積石取出候ニ付、棟梁断次第、竹林御門往来方不指支様、竹沢御庭方江急速被仰渡可被下候之事、 寅九月 御作事所	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P176
51-35	慶応 2(1866) 10	(略)本別紙絵図面之通、懸樋等を以稲荷屋敷、玉泉院様丸通り、金谷 御殿江相通候者、今度御文庫通り御土蔵転地就被 仰付候、非常用水心、暨部屋方用心水ニも相成、万事御用弁甚宜御座候ニ付、(略) 寅十月 御作事所	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P180
51-36	慶応 2(1866) 10	御文庫通ニ有之候御土蔵五筋、金谷御門統江引移之義被 仰出候付、先日絵図面を以御達申置候処、右御土蔵五筋之内式筋、金谷御門統新物置跡江別紙絵図面朱引之所江引移、式筋者七拾間御長屋内絵図面張懸之所江引移候様重而被 仰出候、(略) 寅十月 御作事所	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P180
51-37	慶応 2(1866) 11	金谷 御殿御普請ニ付、同外御庭内御水樋掘揚候様被 仰出候ニ付、堀揚方之義、岩黒村常三江被仰渡可被下候事、 寅十一月 御作事所	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P189_190
51-38	慶応 3(1867) 2	金谷御文庫ニ有之候南御土蔵転地被 仰付候、地元之義為御詮儀絵図面御渡、則遂見分詮義仕候処、別紙絵図面張懸之通、御本丸内江転地被 仰付候ハ、番人兼合ニも相成可然哉ニ御座候、弥彼地江御治定ニ候ハ、御建物ニ指障り候杉大小七本計、根伐不致而者難相成御座候、猶御詮儀之上、御治定可被仰渡候、依而御渡之絵図面取添、此段御達申候事、 卯二月 御作事所	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P200
51-39	慶応 3(1867) 4.28	(略) 一、沓ツ 鶴川石筒 内法式尺七寸、横内法式尺五寸、高式尺、 此運賃百拾五匁 厚三寸之底付之分 一、沓ツ 同 方法同断、底無之分 此運賃同断 (略)	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P201
51-40	慶応 3(1867) 5.1	玉泉院様丸御堀より金谷御庭内江取水就被 仰付候、御鳥部屋下堀抜方ニ付、土中暗り灯火為相用申候、尤御横目足軽為指添申候間、此段御達申候事、 卯五月朔日 御作事所 御城方 御横目所	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P207
51-41	慶応 3(1867) 5	竹沢御庭内より高石垣下通、金谷 御殿御庭内江取水就被仰付候、別紙絵図面朱引之通鬩斗立、且稲荷屋敷入口門戸前付替出来為致可申候間、此段御達申候之事、 卯五月 御作事所 御城方	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P210
51-42	慶応 3(1867) 8	(略) 四千八百三拾七貫目計 御書齋并外御庭江御亭相建可申 旨、重而被仰付候付見込銀高 (略)	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P219
51-43	慶応 3(1867) 9.6	金谷 御殿御普請中、同所外御庭内暨入隅御門等私共手合江引受置申候処、今度御奥廻り御成就ニ而、御困廻御門々々も出来ニ付、右外御庭内等御用無御座候間、此段御広式頭中等江為申談之様いたし度、且御門々々鎖鍵ハ御広式頭中江直ニ相渡置申候事、 卯九月六日 中村家外平 神戸直次郎 但、神戸持参、赤井伝右衛門達、	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P223
51-44	慶応 3(1867) 9.22	九月廿二日、金谷御広式外御庭江、築山之上より滝被仰付候処、土中水すどり、山之滝口崩れ落、御庭江土持込候。日用清次郎 深く怪我致し、不便思召、右清次郎父久右衛門江生涯一人扶持被下候段被仰出、十月六日町奉行不破亮三郎呼立申渡すなり。	見聞袋群斗記	(草稿 金沢市立 玉川図書館 加越能文庫)	加賀藩史料 藩末篇下巻 P668

第30表 金谷出丸庭園関連文献史料5

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
51-45	慶応3(1867) 10.15	十月十五日 一、左之紙面為入御用部屋、赤井伝右衛門より到来、 及応答、 金谷御文庫ニ有之候井戸、今度金谷御廣式御 庭内江御取込ニ相成候ニ付、入之義、御作事所 江御申談御座候之様いたし度候事、 金谷 十月十一日 御広式頭	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P232
51-46	慶応3(1867) 12.16	御文庫御土蔵御本丸内江軒地相建、今度出来仕候付、 明四時引渡申候間、請取方不指支様被仰渡可被下候 事、 卯十二月廿六日 神戸直次郎 御城方也、	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P238
51-47	慶応3(1867) 9	覚 一、九拾 戸室双盤、太サ天五寸、高サ七寸、 一、式拾壱間半 同メト石 太サ五寸ニ四寸 一、式間 同土台石 五寸四方 一、九間半 同カツラ石 五寸ニ六寸 一、拾三間半 越前カツラ石 四寸ニ五寸 一、拾壱間半 同メト石 三寸ニ四寸 一、壱口 鶴川イロリ石 内法三尺ニ式尺五寸、深サ尺三寸 一、壱枚 同流石、大サ内法三尺ニ式尺五寸タルクチ 一、壱枚 同流石、大サ内法四尺六寸ニ壱尺七寸タルクチ 一、四間半 同五六桶石 トメ式ケ所 一、拾式 双盤ツボノ石 天四寸式部、高六寸計 一、六ツ 戸室双盤、大サ天壱尺式寸、高六寸計 一、五間 同土台石、大サ五寸ニ六寸 土堀下 一、四拾九間 同抜石ニ而敷幅式尺五寸、高サ式尺五寸、 鑿合場ニシテ、隅石三ヶ所 一、式拾石 御椽先御柱夕岸石台石臥渡 但、古石相渡可申、 右、金谷外御庭ニ御腰懸出来ニ付、右御用之双盤石等 猶更御普請所承合、早速出来伏渡候之様、御普請會 所へ御申談之様いたし度候事、 卯九月 中村家外平 神戸直次郎	金谷御殿 御普請諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研 2013b P223_224
51-48	慶応3(1867) 12.22	(略)今昼四時六歩宰相様益御機嫌よく御着城被遊 候。御居間江被為召候而御意等有之。(略) 今日金谷御庭御縮中納言様より被仰出候に付、御表 御用御済せらる七時前より、御縮内より金谷江被為 入、御対顔、委細に京地之模様御引取之御都合等被 仰上なり。	見聞袋群斗記	(草稿 金沢市立 玉川図書館 加越能文庫)	加賀藩史料 藩末篇下卷 P725
51-49	明治2(1869)	岳秀樓記 慶応丙寅。黄門公老而退休于金谷。令茲己巳春。參 議公將朝京師。則以定省曠而左右之歡有闕。欲作登 覽縱目之娛。以致朝夕奉養之萬一。乃卜金谷中位。 命有司創樓基。於是衆工齊作。至六月克竣功。黄門 公乃問名于臣立。記之曰。(略)請名曰岳秀之樓。 (略)	岳秀樓記 (杏凡山 作)		凡山遺集 (卷之下) P12
51-50	明治2(1869) 6	(略)明治二年六月御居間等御成就ニ付於金谷御廣式御 酒御吸物御料理頂戴(略)	由緒一類附帳 (正田源六) [加賀藩御大工 等先祖由緒一類 附帳]	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	

第31表 金谷出丸庭園関連文献史料6

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
51-51	明治2(1869) 7.4	一、今日御奥へ被召候付、上下着用可出旨、頭分申来、八過分兩人共出ル、御奥御普請出来、御庭も (市河遂庵) 出来、橋渡り初三治郎幾久馬夫婦被仰付、御二階 □御覽被遊、御亭御前ニ而、御酒等頂戴、頭も皆 上下ニ而出、頂戴、又御二階ニ而御茶等頂戴、扱御 二階御三階ニ御提灯四十余御灯し、御庭御拝見、 (カ) 御見之事哉、今度御普請御庭等之義者彼是御起も 仕候ニ而うつくしう之思召、於御前こわ女分演述、 (略)	成瀬正居日記	金沢大学附属 図書館	
51-52	明治2(1869) 9.6	一、今日執政・參政中・隠居共御庭拝見被 仰付候 旨昨日被 仰出候ニ付、夫々談置候処、左之通罷 出、 (直信) (政瀨) 前田從五位殿 横山外記殿 (頼善) 不破亮三郎殿 藤懸十郎兵衛殿 木村九左衛門殿 丹羽次郎兵衛殿 今枝宗軒老 織田口是樂 多賀源介殿 御庭分御亭拝見 齋 從三位様御出、扱御書院より被入、正三位様御出、 御二階・御三階・御対面所拝見、一応溜被行衆急 速再御庭御亭へ被召、御菓子・御茶・御吸物・御酒・ 御配肴御渡被下、 御両殿様被召上レ、夜五時比相済候事、御礼被申 聞置候事、 (ママ)	成瀬正居日記	金沢大学附属 図書館	
51-53	明治3(1870)	老公賜讌於同好亭應 命 懸山飛瀑拖寒練 架壑駟橋現彩霓 願此恩波千頃水 分成甘澍遍蒼黎	環翠樓詩鈔 (横山政和 作)		環翠樓詩鈔 P22
51-54	明治4(1871) 7.15	七月十五日正三位様御還曆に付、同日御祝有之、御能御囃子等被仰付、御賑々敷御祝、方々様も御打寄、夜半迄も御囃子有之。御庭之山之上にても御囃子有之。兩大夫其外役者數十人被為召、御料理等被下、御吸物・御酒・御肴・御餽御膳等、御附一統江頂戴、其上にて金子御目錄も被下候。右御入用知事様より過分に付、万事思召通御本卦之御祝被為遊、不一形御喜悅之御容子に奉見上、是迄無御座御賑々敷御祝なり。	見聞袋群斗記	(草稿 金沢市立 玉川図書館 加越能文庫)	加賀藩史料 藩末篇下巻 P1371
51-55	明治6(1873) 10.18	十月十八日 此日ヨリ藤波柳興田辺吉次等(共ニ元手子組ノ者)社地内ノ庭園ヲ修繕ス。	尾山神社編年要誌	尾山神社	尾山神社々 務所 1973 P453
51-56	明治6～16 (1873～83)頃?	(略)扱其庭を眺むれば。池広くして水清く小鳥のさまも珍らしく。琵琶と見ゆれば汀なる。松の嵐も四の緒の調べとばかり聞ゆなり。扱又蕭にかたとれば。鳳凰為に飛下り。遊ぶ姿の鳥かぶと。鳥も羽袖を色すらし。此方には弥高く作立たる築山や。尽ぬけしきは常世なり蓬萊山もかくやらんシテ「亀の尾の山の岩根をとめて落つる同滝の白玉。君が千とせの毎なれや。音は遠くも響くにぞ響遠瀑と名付けたる。霞のうちに彩るは。あけに緑を交へつつ。かざり粧ふ玉の橋。それのみならじ東路の三河にならふ八橋や。はるばるさぬる旅ならで。爰は間近き神の庭。(略)	謡曲 好文木 (加藤理路 作)		尾山神社々 務所 1973 P384_385

第 32 表 金谷出丸庭園関連絵図史料 1

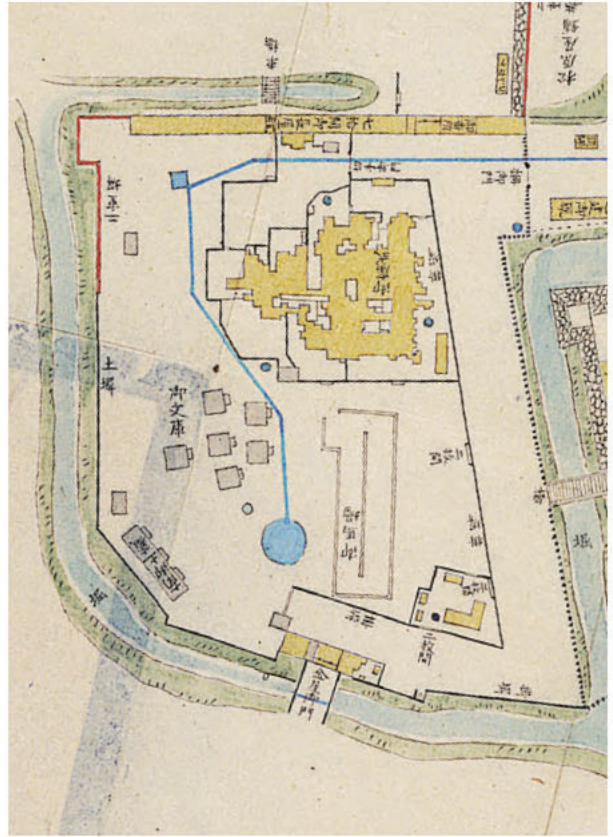
図	No.	題名	所蔵	請求番号等	作成年次	景観時期等	
101	52-01	金沢古城図(金谷屋敷之図)	石川県立図書館 富田文庫	富田文庫 2		Ⅱ	郭全体図 天和 2～貞享 4 年(1682～87)頃
101	52-02	金沢城図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大1125		Ⅲ 2	金沢城全域図 18世紀前半
101	52-03	金沢城御殿絵図	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-34		Ⅲ 2	金沢城全域図 宝暦 5 年 (1755) 頃
101	52-04	金沢城図 (金谷御広式図)	金沢市立玉川図書館 氏家文庫	13.0-73⑨	宝暦 5 年(1755) (大正14年 (1925)写)	Ⅲ 2	金沢城全域図(組図)
102	52-05	加州金沢御城来因略記(金谷御殿廻之部)	石川県立図書館	K391-35	天保15年(1844)	Ⅲ 2 (一部)	宝暦 9 年(1759)大火前の内容を朱書
102	52-06	金谷御殿絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-60		V 1	屋敷全体図 安永 4～天明 6 年(1775～86)頃 前田重教居住時
102	52-07	金谷御殿絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-57	文化 3 年(1806) 写	V 2	屋敷部分図 天明 6～寛政 4 年(1786～92)頃 前田齊敬居住時
102 106	52-08	金谷御殿并御広式惣御絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-58	文化元年(1804) (同 3 年写)	V 3	屋敷全体図 前田治脩居住時
103	52-09	金沢城内絵図	石黒信二氏			V 3	金沢城全域図 文化 7～13 年(1810～16)頃
103	52-10	御城中壺分基絵図	横山隆昭氏	絵図 3	文政13年(1830)	V 4	金沢城全域図 文政 8～13 年(1825～30)
103	52-11	金沢御城内外御建物絵図(金谷御屋敷両御居間廻等金谷外御庭辺)	(公財)前田育徳会			Ⅵ 1	金沢城全域図(41枚組図) 天保 4～9 年(1833～38)頃
103	52-12	金谷御殿間取図(貼掛上)	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大1148	弘化 2 年(1845)	Ⅵ 2	屋敷全体図 ～弘化 2 年(1845)頃 真龍院居住時
104	52-13	金谷御殿間取図(貼掛下)	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大1148	弘化 2 年(1845)	Ⅵ 3	真龍院・前田慶寧居住時
104	52-14	松之御殿図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-59		Ⅵ 3	屋敷全体図 弘化 2 年(1845)頃
104 108	52-15	金谷御殿絵図	石川県立歴史博物館	2-18-2 1023	弘化 2 年(1845) (同 4 年まで補足)	Ⅵ 3	屋敷全体図 弘化 4 年(1847)までの内容を補足か

第 33 表 金谷出丸庭園関連絵図史料 2

図	No.	題名	所蔵	請求番号等	作成年次	内容時期等	
104	52-16	御城分間御絵図	(公財)前田育徳会		嘉永3年(1850)	VI 3	金沢城全域図 嘉永元年～3年(1848～50)
105 108	52-17	金谷御殿図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大 1097		VI 4	屋敷全体図 安政元～慶応2年(1854～66)頃 前田慶寧・利行居住時
105	52-18	金谷御殿図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大 1147		VI 4 ～ VII ?	屋敷全体図 未完の碁絵図?
105 108	52-19	金谷御殿図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大 1121		VII	屋敷全体図 慶応2～明治4年(1866～71)頃 前田齊泰居住時
107	52-20	金谷御殿庭園図 (仮称)	石川県立歴史博物館			VII	庭園画 慶応2～明治4年(1866～71)頃 前田齊泰居住時
107	52-21	金谷御殿庭園(尾 山神社庭園)古絵 図				VII	所蔵等詳細不明(写真のみ) 石県教1979収載 慶応2～明治4年(1866～71)頃 前田齊泰居住時
105	52-22	金谷御屋舗御亭 平起絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-61		II	延宝9年(1681)頃
-	52-23	御囲絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.89-2	文化2年(1805)	V 3	52-24に類似
106	52-24	屋敷造作仕様図	松井建設			V 3	52-23に類似
106	52-25	尾山神社境内図	金沢市立玉川図書館 郷土資料	090-1167	明治6年(1873) か	近代	尾山神社創建当初の景観が描か れる 刷物



金沢古城図（金谷屋敷之図）[石川県立図書館蔵] 52-01 II



金沢城図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-02 III 2

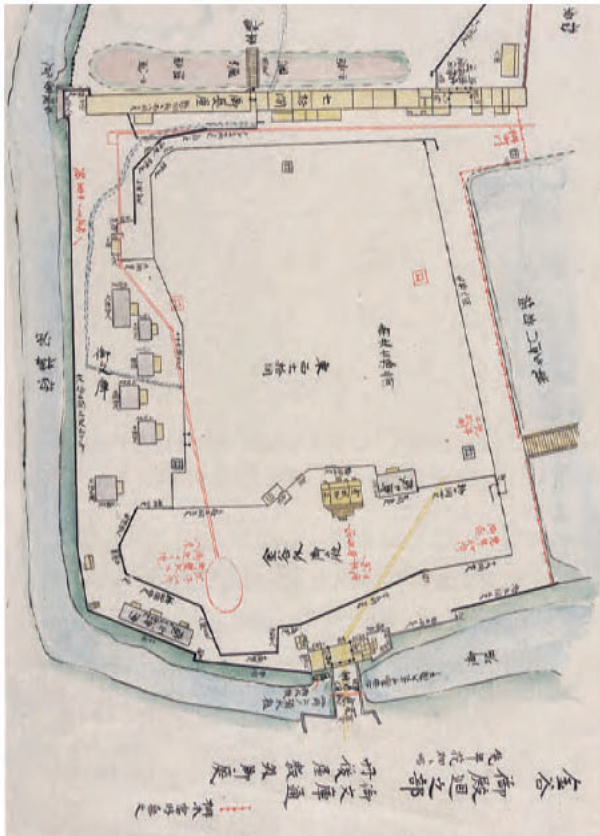


金沢城御殿絵図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-03 III 2



金沢城図（金谷御広式図）[金沢市立玉川図書館蔵] 52-04 III 2

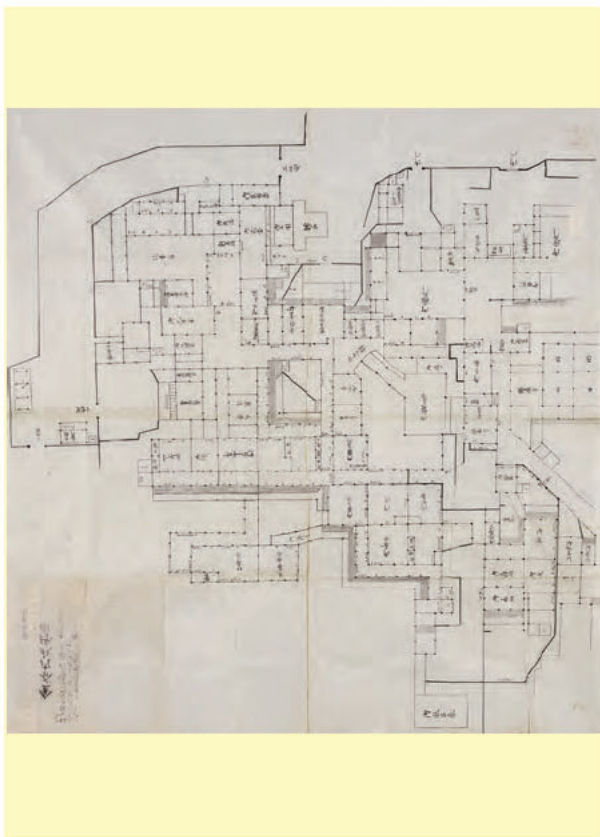
第101図 金谷出丸 絵図1



加州金沢御城来因略記（金谷御殿廻之部）
 [石川県立図書館蔵] 52-05 III 2



金谷御殿絵図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-06 V 1



金谷御殿絵図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-07 V 2



金谷御殿并御広式窓御絵図 [金沢市立玉川図書館蔵]
 52-08 V 3

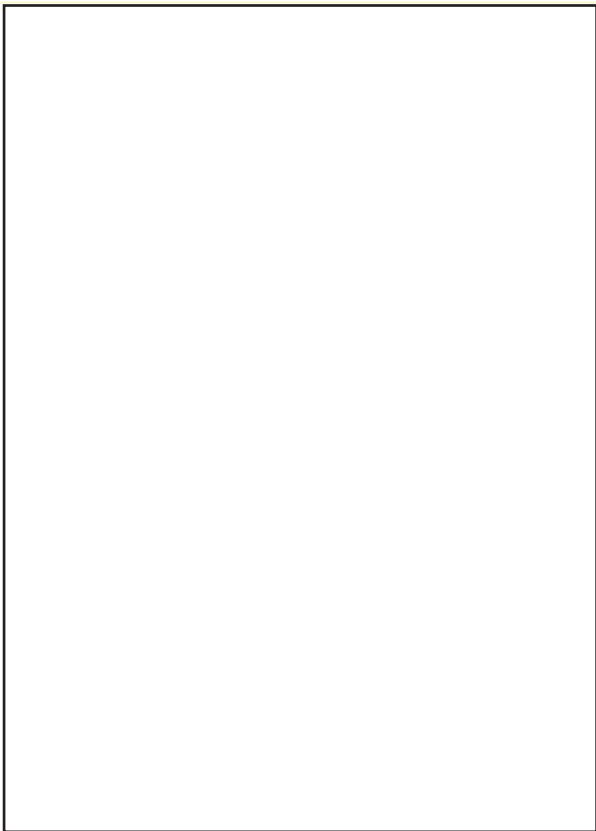
第102図 金谷出丸 絵図2



金沢城内絵図 [石黒信二氏蔵] 52-09 V 3



御城中巷分碁絵図 [横山隆昭氏蔵] 52-10 V 4



金沢御城内外御建物絵図 (金谷御屋敷兩御居間廻等
金谷外御庭辺) [(公財)前田育徳会蔵] 52-11 VI 1



金谷御殿間取図 (貼掛上) [金沢市立玉川図書館蔵]
52-12 VI 2

第 103 図 金谷出丸 絵図 3



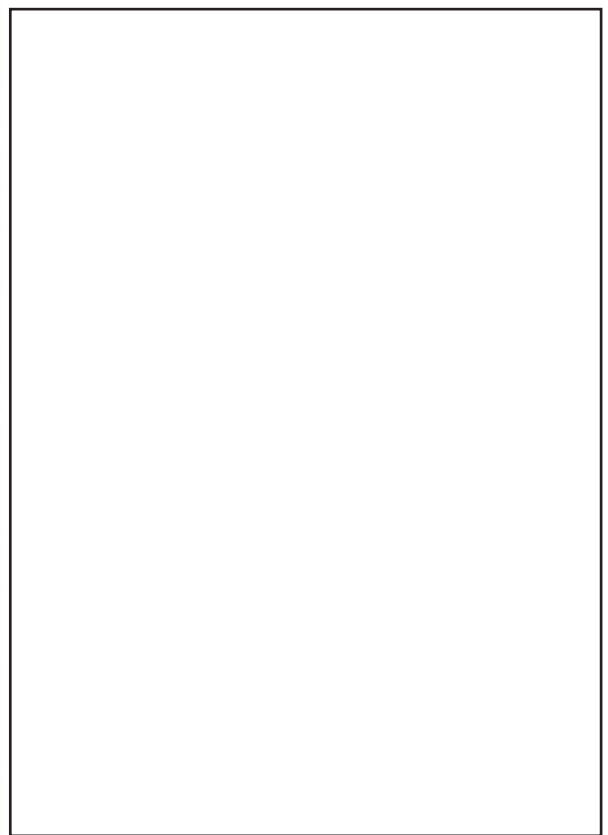
金谷御殿間取図（貼掛下）[金沢市立玉川図書館蔵] 52-13 VI 3



松之御殿図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-14 VI 3



金谷御殿絵図 [石川県立歴史博物館蔵] 52-15 VI 3

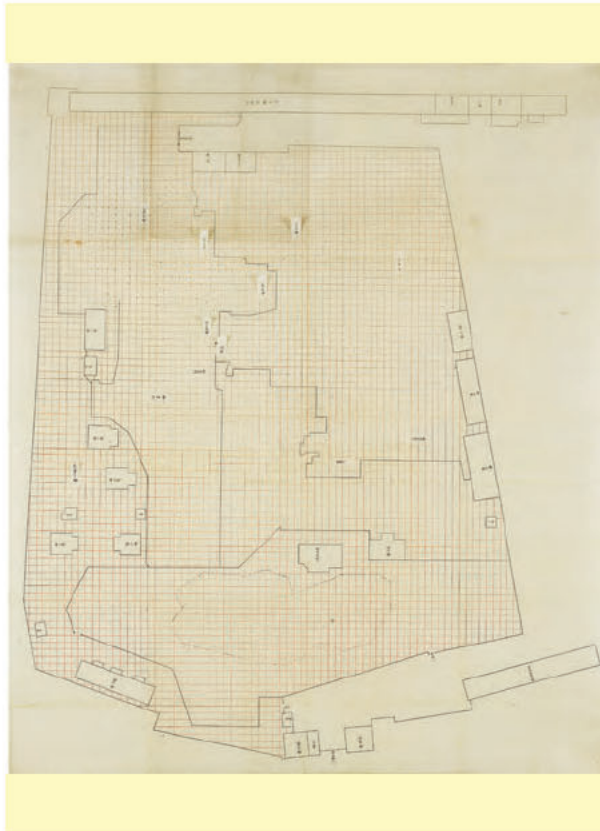


御城分間御絵図 [(公財)前田育徳会蔵] 52-16 VI 3

第104図 金谷出丸 絵図4



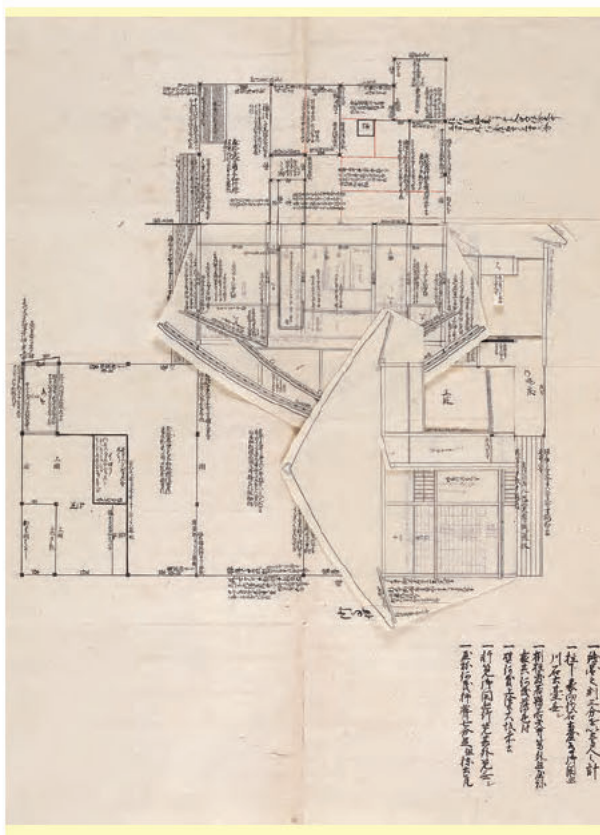
金谷御殿図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-17 VI 4



金谷御殿図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-18 VI 4 ~ VII ?

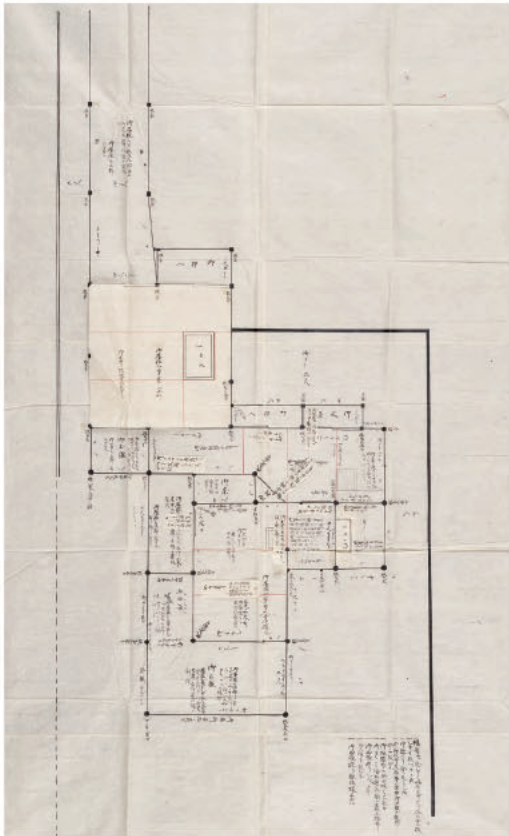


金谷御殿図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-19 VII

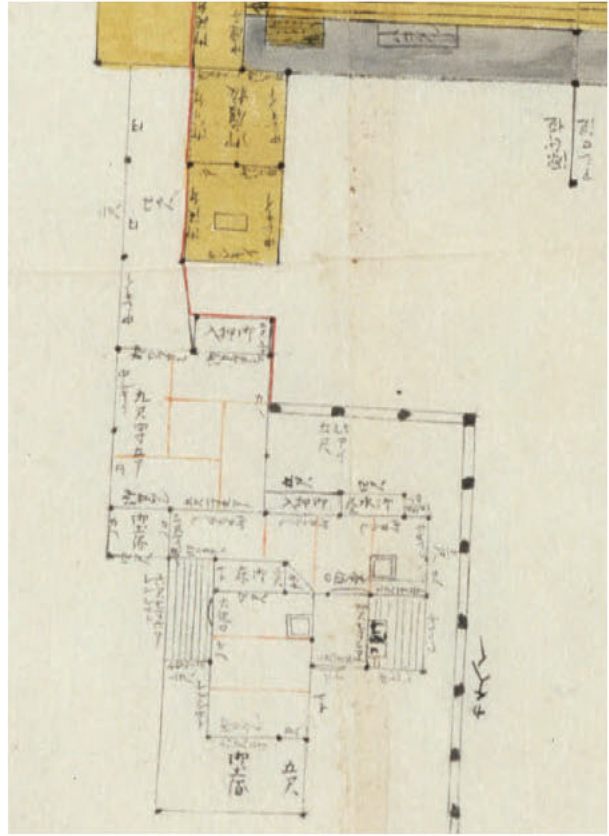


金谷御屋舗御亭平起絵図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-22 II

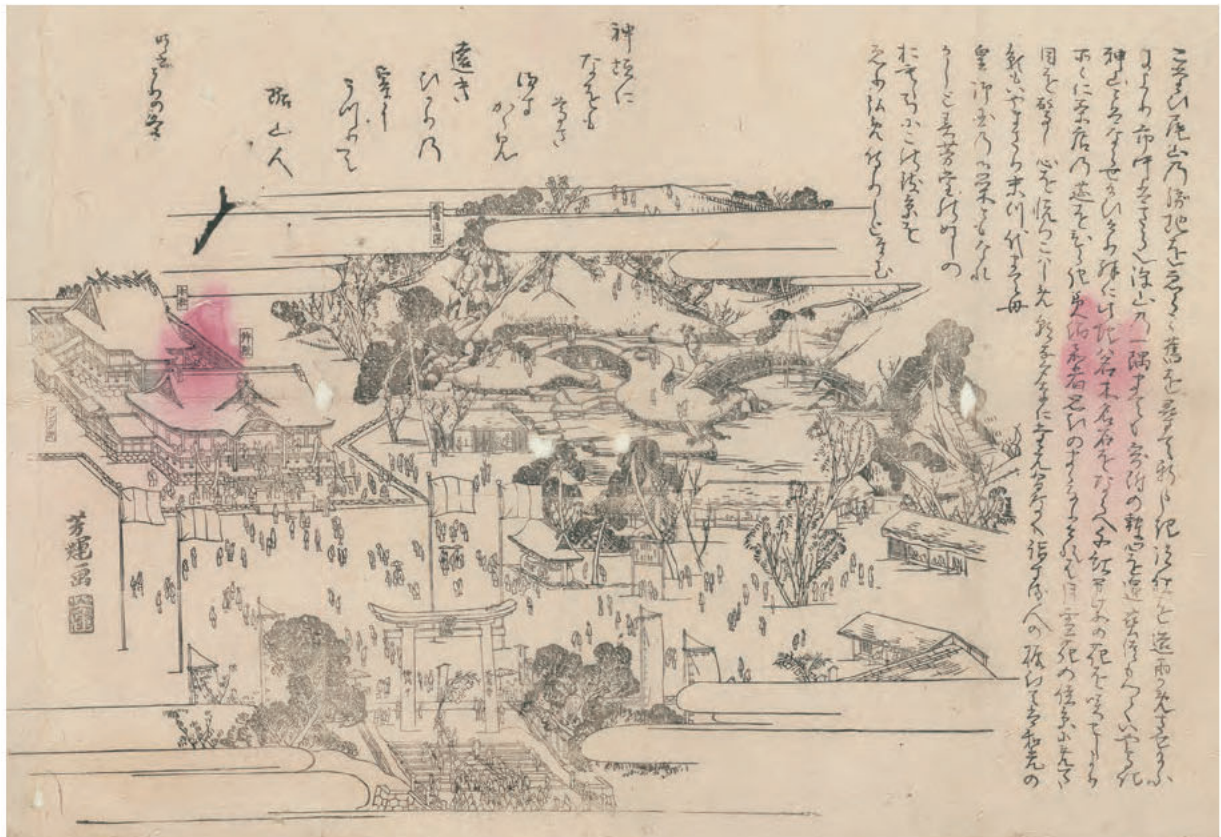
第 105 図 金谷出丸 絵図 5



屋敷造作仕様図 [松井建設蔵] 52-24 V 3



金谷御殿并御広式惣御絵図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-08 V 3 茶室部分



尾山神社境内図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-25

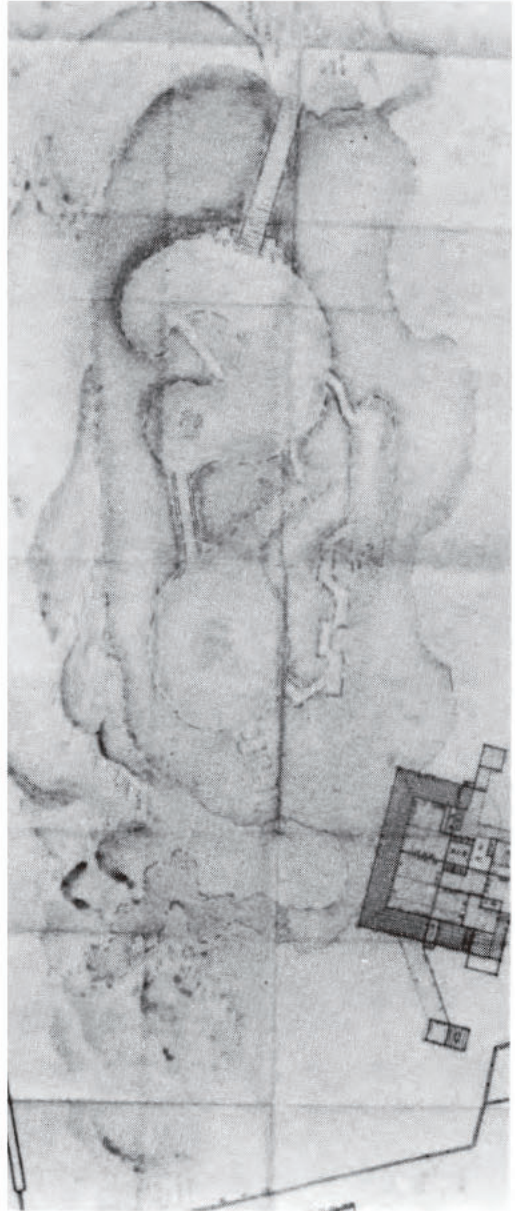
第106図 金谷出丸 絵図6



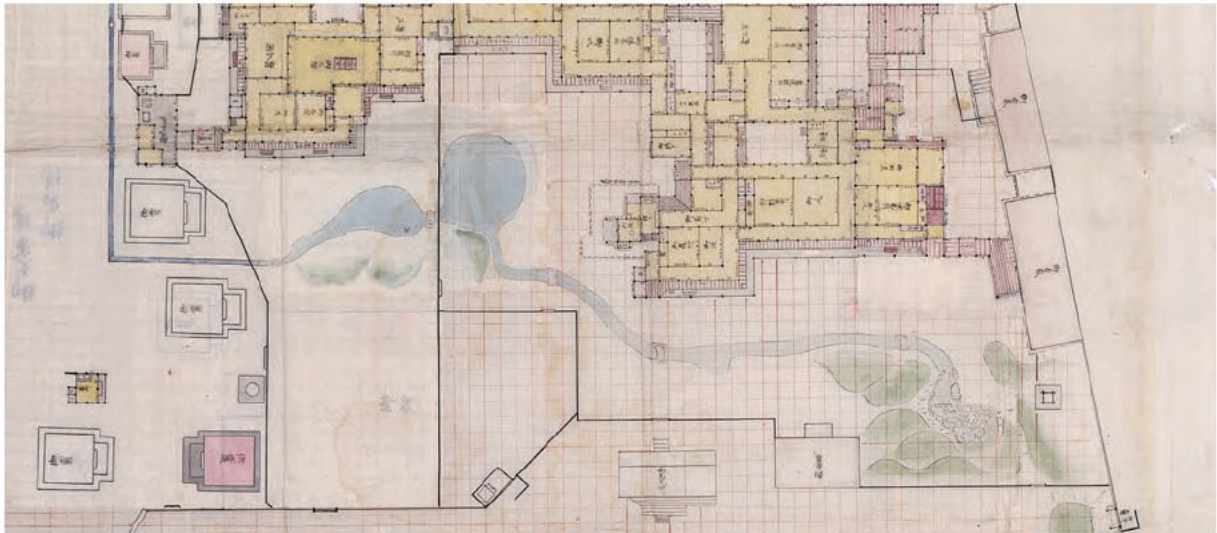
金谷御殿庭園図（仮称）〔石川県立歴史博物館蔵〕
52-20 VII

金谷御殿庭園（尾山神社庭園）古絵図 52-21 VII

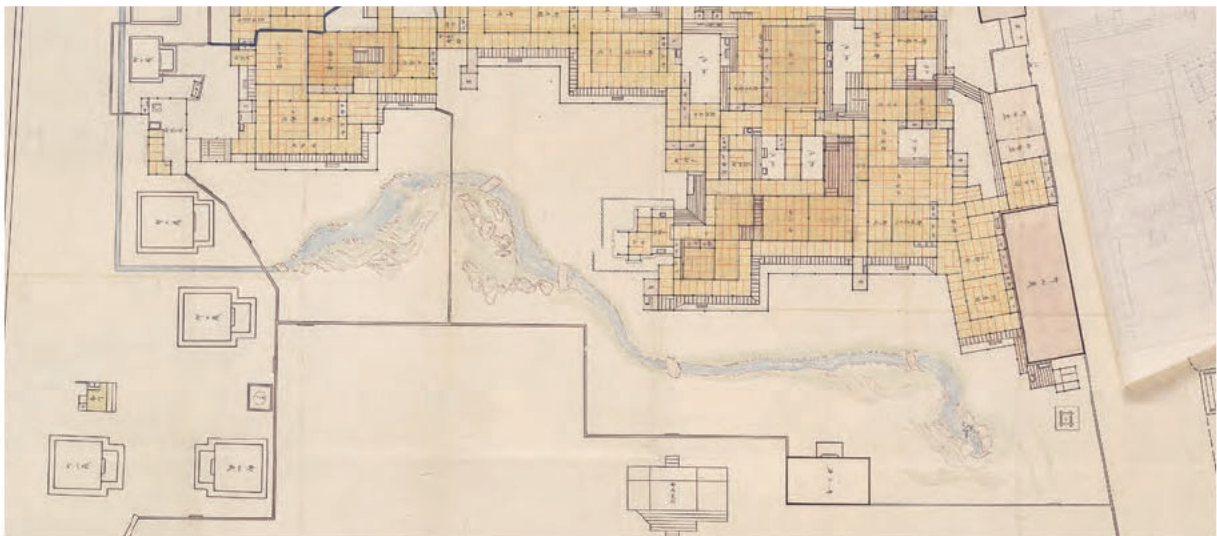
〔石川県教育委員会 1979〕より転載



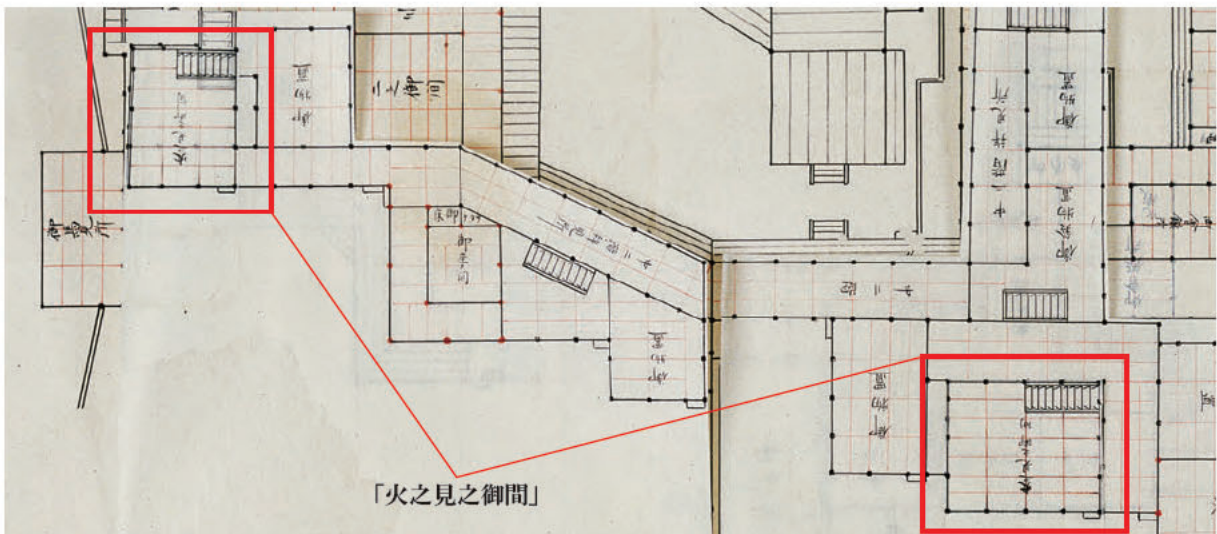
第 107 図 金谷出丸 絵図 7



金谷御殿絵図〔石川県立歴史博物館蔵〕52-15 VI 3 内庭部分



金谷御殿図〔金沢市立玉川図書館蔵〕52-17 VI 4 内庭部分



金谷御殿図〔金沢市立玉川図書館蔵〕52-19 VII 御殿三階部分

第108図 金谷出丸 絵図8

3. 庭園遺構の状況（庭園全体図第 109 図・断面第 110 図）

地割・区画施設

石垣（第 110～112 図）

神社敷地の南面、金谷門跡以西に所在する。築山の南縁にあつて、敷地の区画とともにその土留としての役割も担っていると考えられる。平面形状（第 110 図②）は南に突出するいびつな凸形を呈し、隅角部（出角・入角）で分割される面数は 7 面である。総延長は約 86 m、最も高い中央部（第 110 図② F G 面間入角）で高さ約 4.6 m を測る。

出角部 出角は A B 面間・B C 面間（第 110 図③・④）・D E 面間（第 111 図①・②）・E F 面間の 4 箇所、このうち D E 面間は緩やかな鎬（鈍角）で、他の 3 箇所はほぼ矩折れ（直角）となっている。構成する角石は戸室石（角閃石安山岩）が用いられている。角脇石も基本的に同様であるが、上部付近で川原石が用いられている箇所も散見される。

戸室石は調整の粗い切石材が用いられ、角石には直方体に近い一般的な材の他、幅に対し高さがやや低い板状のもの、大面が横長の六角形を呈するもの等も見られる。角脇石もまた、面が多角形となる材がある。B C 面間 C 面側はやや丁寧だが、この箇所を除くと隣接する石材間の密着度も甘く、全般的に切石材としての加工度は粗い。石積みについては、大面・小面を左右に振り分ける算木積みであるが、不揃いな箇所も認められる。

入角部 入角は C D 面間（第 111 図③）・F G 面間の 2 箇所がある。C D 面間は緩やかな鈍角、F G 面間は直角に近い急角度となっている。C D 面間には下端の勾配も緩やかである。

F G 面間付近は草木の繁茂が著しく、詳細な所見は得られておらず、以下 C D 面間について記述する。石材は戸室石が主体で、上半部はやや小ぶりの粗加工石材、下半部はこれに切石材が加わる構成である。ただし面の調整はともに粗く類似している。

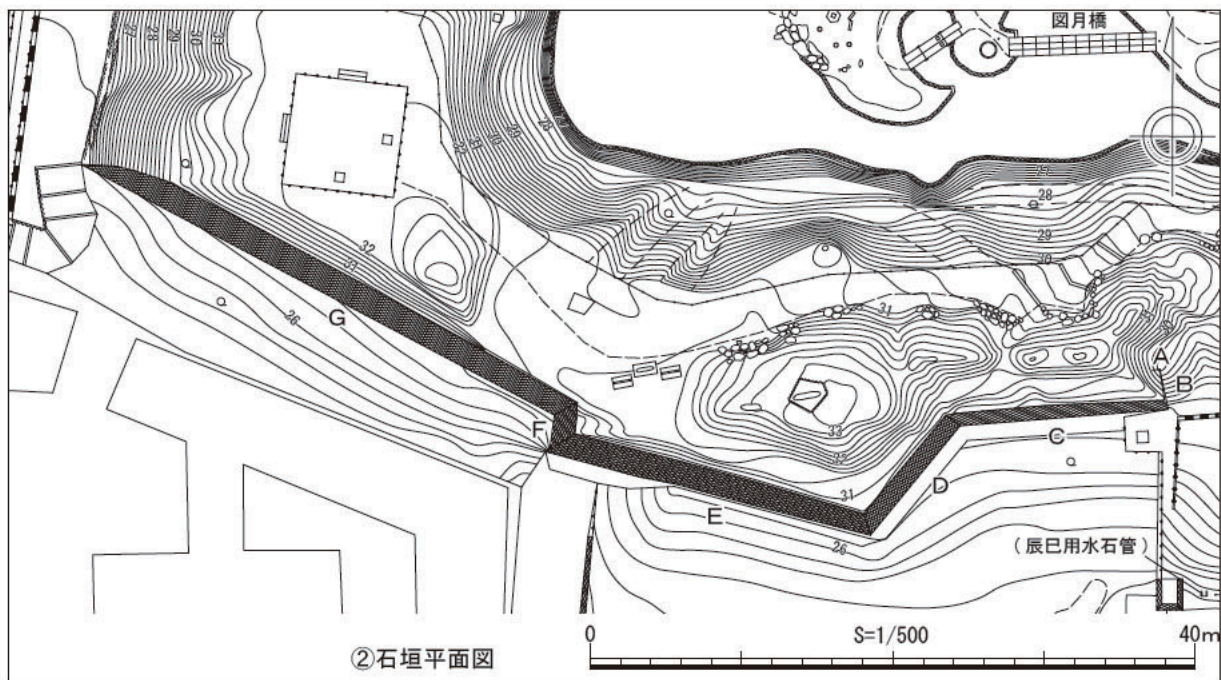
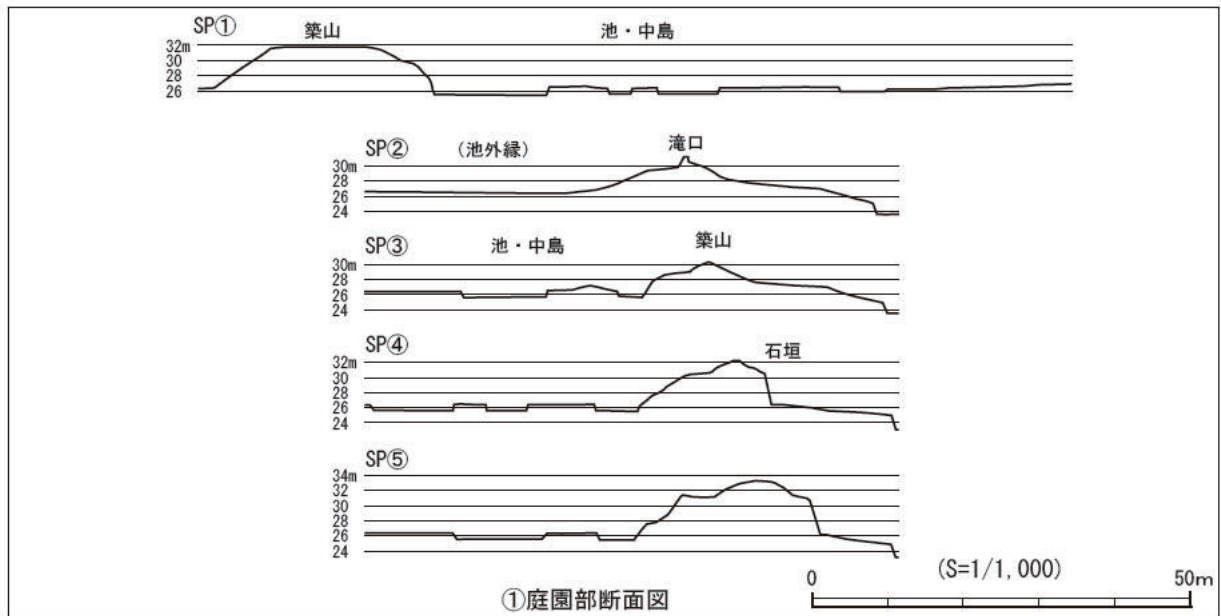
上半部については稜線が明確ではなく、築石の面の角度を少しずつ変えながら、全体として緩やかな凹線を形成しているように見える。一方下半部では、正面略長方形ないし横長六角形で、中央に稜線が通るように加工された（従って上面形は潰れた V 字状を呈する）石材の段と、二石一組で二石の中央に稜線が通る段が、合計 6～7 段、交互に積まれることにより、入角が形成されている。

築石部 築石部（第 112 図①～⑤）を構成する石材の主体は川原石で、中でも割落とした小口側を正面とし、隣接石材との合端は部分的なハツリ程度とするタイプが多い。ただし C 面の一部では、自然面を正面とし、周囲を広く打ち欠き隣接石材と切り合わせるものも存在する。また出隅部下部に接する箇所では、戸室石粗加工石材が一定量用いられ、面下端を弧状に抉り、下位の石材にかぶせるように積む手法が認められる（第 110 図④）。この他数量は少ないが、坪野石も認められる。坪野石は玉泉院丸庭園や兼六園等、庭園にはほぼ限定して石造物・石垣材等に用いられ、本地点でも例外ではない。

積みについては、ほとんど乱れのない布積みで、各段の大部分は途中で途絶することなく、隅角部間を横目地が通っている（第 112 図①・②・③等）。

修築等 G 面においては、中央付近と西端付近に、埋め込まれた出角状の積みが認められる（第 112 図④・⑤）。ただしいずれも基礎は石垣本体の地盤ではなく、築石部の中盤の高さ（地盤より 2 m 強）に置かれており、出角状の積みを埋め込んでいる部分と、その下部とで積み方の明瞭な差異は認識し難い。

絵図の描写と比較すると、現存庭園の築造当初には、G 面の中央以西は石垣が連続していなかったと考えられるが、この状況を反映しているのか、あるいは築造当初の状態が失われた後の改修（築留等）を示しているのか、現段階では判然とせず、より詳細な検討を要する。



③石垣BC間出角 東から



④石垣BC間出角 南西から

第110図 庭園部断面図 南側石垣平面図・写真



①石垣DE面間出角 南東から



②石垣DE面間出角 南西から



③石垣CD面間入角 南東から

第 111 図 南側石垣写真



①石垣D面 南東から



②石垣E面 西から



③石垣F・G面 西から



④石垣G面 出角状の積み



⑤石垣G面 南から



⑥辰巳用水石管 南西から



⑦辰巳用水石管 南東から

第112図 南側石垣・辰巳用水石管写真

なお、上述した、入角下部に戸室石粗加工石材がまとまる傾向についても、修築時期差を反映する可能性があるが、石積みの通りには明らかな乱れがなく、確定は難しい。

勾配 BC面間出角付近では上半において著しい反りが認められるが、西に推移するほど明確ではなくなる傾向がある。

時期 兼六園栄螺山南面石垣では、戸室石・川原石がともに用いられており、本石垣と類似した積み方・切り合わせ手法が認められる〔石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 2012〕。ただし用いられている川原石の大きさは、本石垣の方が全般的に小ぶりであり、均質化しているように見受けられる。

栄螺山石垣の構築時期は、絵図からの所見とも併せ、嘉永3年～安政3年（1850～56）頃と考えられている。一方本石垣の平面形状は、慶応2年～明治4年（1866～71）頃の絵図（第105図52-19）に描かれた区画線と類似しており、その構築はこの頃に遡ると見て良い。修築をどう捉えるのかが問題となるが、慶応～明治初期、金谷出丸Ⅶ期の庭園築造に伴うものを含むと考えられる。

給水施設・泉水等

辰巳用水石管（第112図、平面位置第109図）

旧金谷門内に相当する、神社南方（敷地外）道路脇法面に辰巳用水石管が一部露呈している。露呈部分は縦35cm、横39cm、奥行は外面で55cmを測る。内面については約1.8m奥に向かって空洞が続いている。印籠嵌めと称される、接続のための入念な加工が施されている。石質は凝灰岩製であり、越中砺波郡に産出する金屋石とみられる。嘉永3年（1850）作成の「御城分間御絵図」と照合すると、描写された辰巳用水の経路に近く、金谷門内に収まる。また内側の奥行からすれば石管は二基連結している可能性がある。これらから、元は埋設された埋樋であったが、道路工事等により損壊を受け、露出するに至ったと推定される。ただし、現状では本来の底面が側面となって転置されており（向かって右面、第112図⑦）、設置当初の状態を留めているとは言い難い。辰巳用水からの給水は、最終的には昭和38年（1963）に途絶するので、その時点までのある段階に改修されていると考えられる。

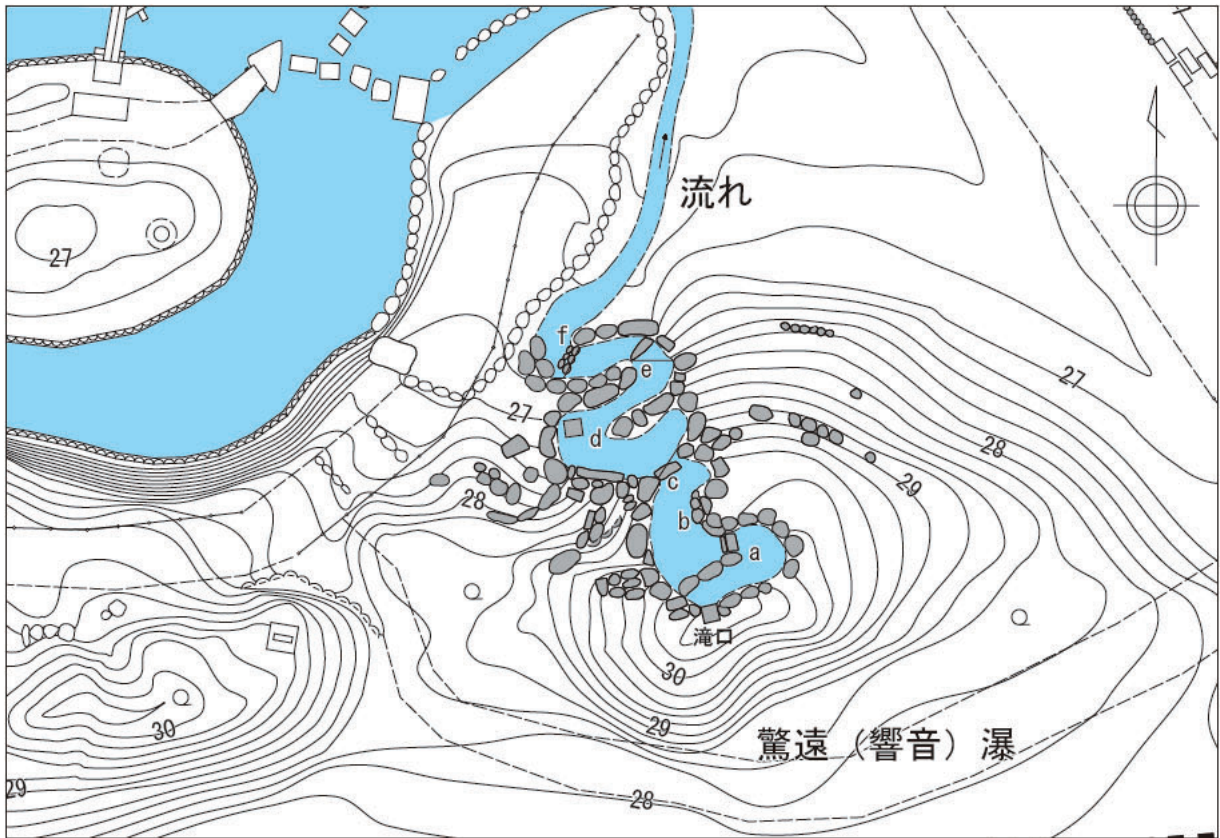
後述するように、北東約35m離れた地点に滝が設けられており、これに接続している可能性がある。滝口との比高差は約5.5mあり、接続の構造が問題となる。『兼六園全史』〔兼六園全史編纂委員会・石川県公園事務所 1976〕には、郷土史家の山森専吉氏による調査所見として、滝口の内部（「吐水管」）は「非常に深く真直ぐに立ち下っている」との記載がある（P156）。

滝（第113～115図）

庭園の南東角、築山の東端の小丘に位置する。強い屈曲を重ねる急流型の滝である。滝口から最下段までの水平距離約10m、高さ約4mを測る。

滝口 築山東端小丘の頂部にあり、方形の石製構造物（第113図・第114図②）が据えられている。本体構造は厚い底の中央が丸くくり抜かれ、側面の一つを欠いた箱型を呈する（第113図②）。水流はくり抜き孔を通じ直下から送られ、側面のない一辺から流出させる仕組みである。上面にはやや厚みのある板石が奥側半分を覆って蓋のように置かれている。なお現在、辰巳用水は途絶しており、石製構造物に鋼製のパイプが差し込まれている。構造物測壁にはこの他にもうがたれた小孔（コンクリートにより閉塞）が1か所見受けられる。昭和38年より井戸からポンプを用いて送水しており、これに関連する改変と推測される。

流路 滝口北側に始まる流路は、最初に東に向かい、都合6箇所（第113図①a～f・第115図①～⑥）の屈曲点を経て、著しく蛇行しながら約20°の勾配を下降する。屈曲部の多くは、岬状の石組が長く突き出している。dを除く各屈曲点付近には段が設けられているが、段の高さは概して低く、20cm前後である（f付近は2か所）。上流では戸室石製の雁木状を呈する切石や粗加工石（第115図①）

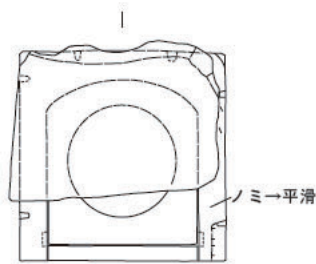


①滝 (響音) 遠 平面図

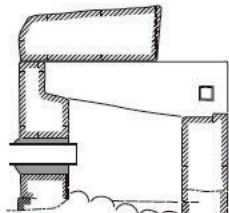
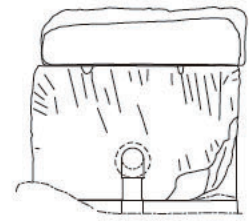
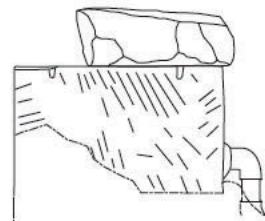
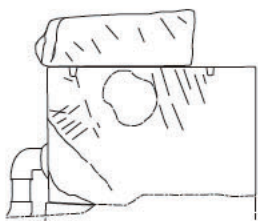
0 S=1/250 10m

・本体
幅 68 / 奥行 67 / 高 44 /
底厚 27 / 側壁厚 9 ~ 10
・蓋
幅 65 / 奥行 46 / 厚 17
(単位 cm)

②滝口石造物略測図・写真



0 S=1/25 50cm



円礫・礫片・土砂



第 113 図 滝・滝口平面図・略測図・写真



①滝 全景 北西から



②滝 滝口付近 北西から

第 114 図 滝写真



①滝 流路a 西から



②滝 流路b~c 南から



③滝 流路d 南西から



④滝 流路d~e 北東から



⑤滝 流路e 北西から



⑥滝 流路f 西から



⑦滝 流路左岸 北西から



⑧流れ 北から

第115図 滝・流れ写真

が用いられ、下流では平川原石を数個並べて形成される。最下端が最後の屈曲点（第113図①f、第115図⑥）であり、明確な滝壺を形成することなく、北流する緩やかな流れに移行する。流路の幅は中流では最大1.9mを測るが、下流では1m程度となる。なお流路の底面は、現状では防水用の目張り（モルタルないしコンクリート）が施されており、旧状は不明である。

滝石組 滝口下部は幅1m、高さ50cm前後の大振りの石材が2段程度垂直気味に積まれ、1m程度の段が形成されている（第114図②）。下降し蛇行する流路の側壁は、上流域では長軸1m未満の円礫を主体に、花崗岩・凝灰岩等を含む自然石が1～2段積まれる形状を呈する（第115図①・②）。

中流域（c～e）では比較的大型の福浦石・戸室石が用いられる。流路dでは、流れの中央まで突き出した側壁先端に径1mを越える福浦石（第115図③）を置くが、基部側は円礫状の石材を2段重ねる程度である。流路eでは、更に下流側との落差が大きく、側壁の石材は概して大型で、下流側から見れば高さ1m以上の戸室石等の自然石が壁のように並ぶ景観を呈する（④）。流路e付近右岸に坪野石（⑤）のような希少な石材も見られるが、全般的に基調となる石材は絞りにくく、産地不明の大振りの円礫が多い中、要所に福浦石・戸室石・滝坂石・花崗岩・凝灰岩等が使用されている。

なお流路左岸外側は、明瞭ではないが階段状を呈する石組が見られ（第115図⑦）、滝口への登攀路のようにも見受けられる。ただし付近には辰巳用水石管の残欠が置かれる等、近代以後の改変も考えておく必要がある。

流れ（第113図①、第115図⑧）

滝の流路最下段、fの屈曲点より以北で、池の東辺に近接・概ね平行する位置にある。強い屈曲がなく、勾配も緩やかな南から北への流れで、幅50cm～1.2m、池への取り付け部まで延長12mを測る。池との取り付け部で水流は西側に曲がり、幅広い浅瀬（州浜）状となる。流れの側壁は、大型の円礫（径40～50cm）等で構成されている。

池（第116図）

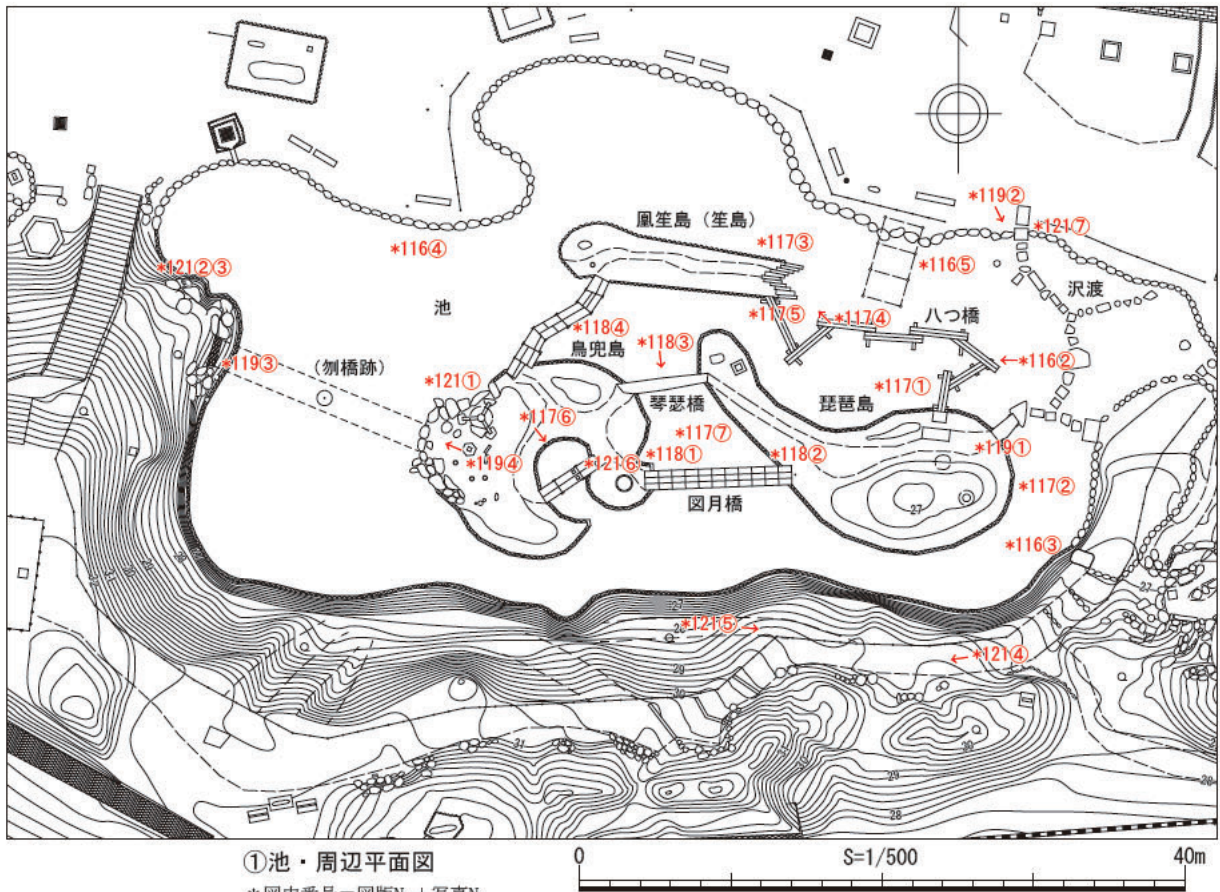
庭園敷地の中央に位置する。平面は東西約70m、南北約37mを測る略楕円状を呈し、北側に若干の凸部をもつが、概して出入りは顕著ではない（第116図①）。深さは東側が浅く、西側に向かって深くなり、現況では中央付近で約0.6mを測る。南側・西側は汀線まで築山が迫り、北側に開けている。

護岸は、断面を取った小ぶりの川原石による布積が主体であるが（③・④）、北東側は小型の景石（護岸石）が1～2段配置される（⑤）。底面については、流れが接続する北東側では玉石・砂利面が認められ、中央部を中心に黄色粘質土が貼られているが、詳細は判然としない。明治半ばには埋め立てられていたとの指摘もあり〔氏家・八木田1999〕、護岸や底面は近代以降、度々補修されていたと考えられる。池中には三基の中島とこれらを結ぶ橋・飛石がある。西部の木橋（刎橋）は失われているが、往時は中島・橋を経由して池を横断することが出来た。なお池の西部には近代以後に噴水が付加されている。

中島（第116図①、第117図）

三基の中島は、東側から琵琶島・笙（鳳笙）島・鳥兜島と称され、名前の通り雅楽器や雅楽装束を模った平面形を呈し、本庭園を特徴付ける構成要素として注目される。琵琶島のみ、胴部にあたる箇所わずかな高まりがあるが、ほとんどが低平で、池北側の平坦面とほとんど変わらない高さである。また護岸は、鳥兜島の一部以外は、池の主体部と同様の川原石積である。

琵琶島（第117図①・②）は楕円形の胴部と細長い竿部が表現されており、長軸約23m、幅約9.5m（胴部）を測る。**笙（鳳笙）島**（③～⑤）は細長い平面形で、長軸約16m、幅約4mを測る。東端部において石材により竹管を束ねた部分が表現されている（⑤）。竹管部分は長さ72～118cm、幅20～27cm、高さ16～24cmを測る戸室石角柱状材が素材であり、先端部が円柱状に細工されている。



②池 東から



③池 南側護岸



④池 北側護岸西部



⑤池 北側護岸東部

第116図 池平面図・写真



①琵琶島 北東から



②琵琶島 東から



③笙（鳳笙）島 北東から



④笙（鳳笙）島 南東から



⑤笙（鳳笙）島 竹管表現部 南から



⑥鳥兜島 北西から



⑦図月橋 北から

第 117 図 中島・橋写真

これらは長短の差はあるものの幅・厚さのばらつきが比較的少ない。Ⅶ期の普請作事史料「金谷御殿御普請諸事留」には様々な種類の石材が記載されており、中には「葛石」「土台石」等、形状・寸法の近いものも見受けられ（「長サ三尺、大サ七寸ニ八寸」「長サ三尺、大サ六寸ニ七寸」等）、これらの余材が利用されている可能性も検討に値する。

鳥兜島（第117図⑥）は雅楽の装束である鳥兜を模っており、長径約16mを測る。東側が頭部に相当し、「目」の位置には凝灰岩製の円筒（石筒）が置かれている（第121図⑥）。円筒は外径120～124cm、内径92～96cm、厚さ13～15cm、内側深さ60cmを測る。石筒についても、「金谷御殿御普請諸事留」に鶏川村（小松市）の製品として寸法等の記載がある（第29表51-39）。これには内法2尺5寸～7寸（約76～82cm）とあり、鳥兜島の遺構の方が一回り大きいが類品と言え、笙（鳳笙）島の場合と同じく、御殿普請の際の余材であった可能性がある。なお後述するように、島西側には、明治10年代（1877～）まで池西岸に連絡していた木橋が架かっていて、その袂には本庭園では数少ない立石主体の石組があり、護岸を兼ねている。

橋（第117～119図）

琵琶島と鳥兜島は二本のほぼ平行する橋で連絡されている（第118図③）。南側は図月橋と称される三連のアーチ橋（第117図⑦、第118図①～③）で、長さ約9.8m、幅1.27m、池底から橋上面中央までの高さ約1.9m、琵琶島地表面からの高さ約1.2mの規模を測る¹⁾。アーチ橋脚部が戸室石、本体部が腰瓦を埋め込んだ砂利混じり土、上部（路面部）が凝灰岩板石によってそれぞれ構成され、本体部は漆喰ないしモルタル状の化粧土で塗り込まれている。橋脚は、側面から見て略半円形のアーチ部分を三分割した形の、弧状の加工石材が単位となるが、一単位の厚みは橋幅の半分であり、二枚一組で対応させている。また最下部は東石状の土台に支えられている。なお腰瓦については、複数



①図月橋 西から



②図月橋 東端部近景



③琴瑟橋・図月橋 北西から



④鳥兜島-笙（鳳笙）島間石橋 南東から

第118図 橋写真

タイプの存在が見込まれ、「金谷御殿御普請諸事留」(第 29 表 51-36・38)にみえる文庫土蔵の移転・撤去等に係る転用が推測される。蓮池庭・竹沢庭(兼六園)にも類例のない、特異な特徴を有する橋として注目される。

北側は長さ約 6 m、幅約 90cm を測る石橋(琴瑟橋)(第 118 図③)で、矢穴を残す粗加工の青戸室石一枚で構成されている。

鳥兜島と笙(鳳笙)島とを連絡する橋(第 118 図④)は、18 枚の板状切石材で構成されており、二箇所折れを有する。切石材は統一的ではなく、転用材・余材を集めたものと考えられる。橋板の連結部下位には枕となる柱状の石材が置かれ、さらにこれらは束石により水面上まで支持されている。また鳥兜島には、頭部と翼部とを繋ぐ、やはり転用石材で構成された石橋がある(第 117 図③)。

笙(鳳笙)島と琵琶島は、木製の八つ橋により連絡されている(遠景第 116 図②)。八つ橋の橋板材は、近年では約 10 年単位で新調され、クリ・アテ等が用いられているが、Ⅶ期の絵図・絵画(第 107 図 52-20・21)に描写があり、原型は現況庭園作庭時に遡る。橋板の支持材は、鳥兜島-笙(鳳笙)島間の石橋と類似の構造を呈し、柱状を呈する枕石による。

琵琶島と池北東部との間は、亀甲形の戸室石切石材による石橋(第 119 図①)と、飛石(沢渡)(②)によって連絡されている。前者は竹沢庭の雁行橋(亀甲橋)等と同様の趣向で、Ⅶ期の絵図 52-21(第 107 図)に描かれている形状とは異なるように見えるが、前段階の庭園を描く絵図 52-17(拡大第 108 図)には類似の橋がみられる。飛石には自然石や戸室石の切石材が用いられているが、このうち後者は御殿部材の転用が想定される。

池西岸と鳥兜島との間には、明治 10 年代までは木橋(刎橋)が架かっていた(第 33 表・第 107 図 52-20・21、第 106 図 52-25)。長さは 14~15 m に復元される。西岸には、幅約 2 m で背後に低い川



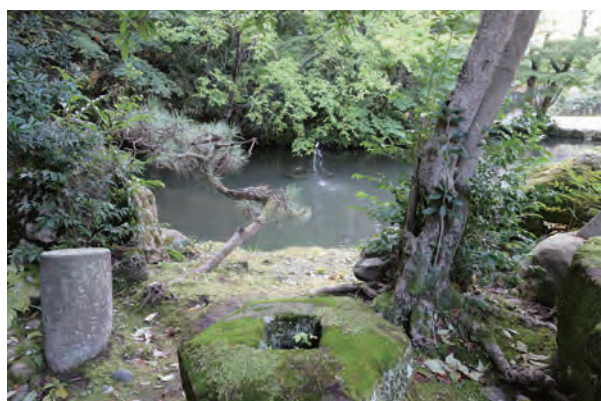
①琵琶島東端石橋 南西から



②池東部 沢渡 北西から

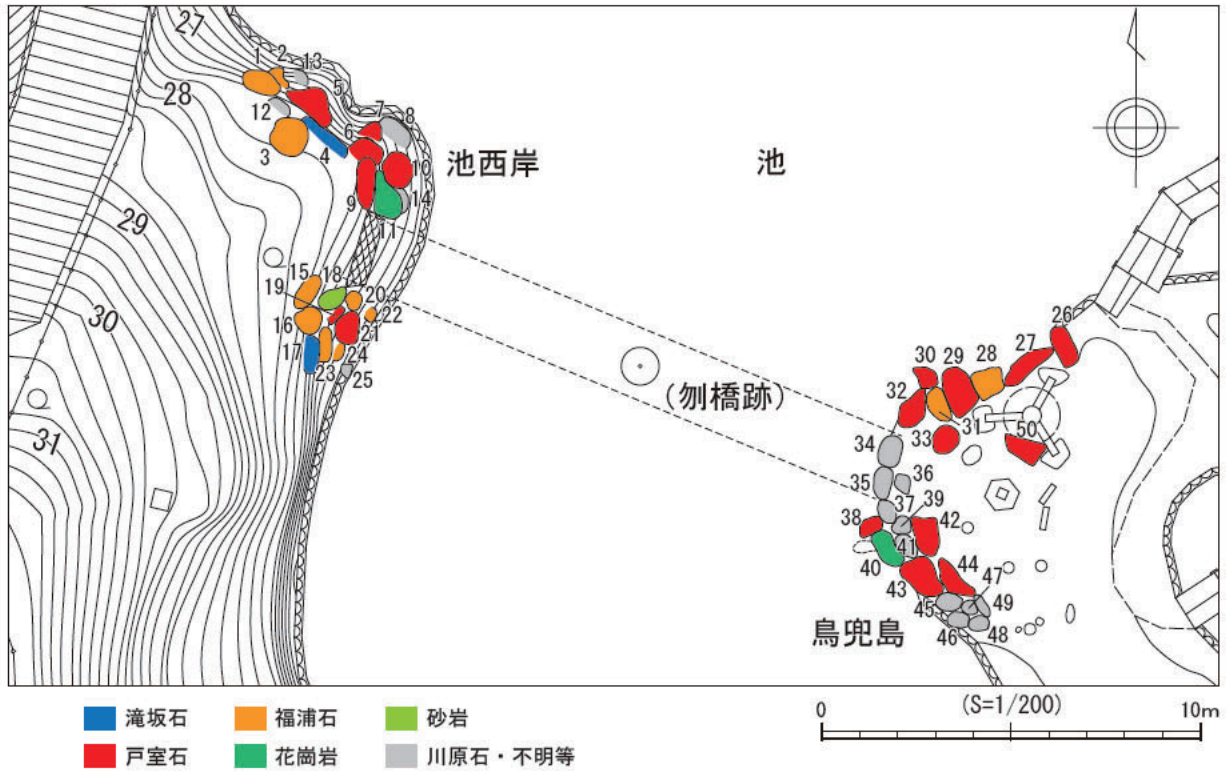


③刎橋跡 池西岸取付部 南東から



④刎橋跡 鳥兜島から池西岸を望む

第 119 図 橋写真



第 120 図 池西岸・鳥兜島石組 岩石種構成分布図

第 34 表 池西岸・鳥兜島石組 岩石種構成・計測表

No	岩石種				寸法 (cm)			備考	No	岩石種				寸法 (cm)			備考
	滝坂	戸室	福浦	他・不明	高さ	幅	奥行			滝坂	戸室	福浦	他・不明	高さ	幅	奥行	
1			1		70	100	50		26		1		100	100	60		
2			1			90	50		27		1		105	165	20		
3			1		75	120	65		28			1	140	80	50		
4	1					130	80		29		1		95	160	90		
5		1			70	140	90	矢欠	30		1		50	65	25		
6		1			130	60	60		31			1	70	160	60		
7		1			100	50			32		1		30	100	50		
8				1					33		1		55	80	55		
9		1			42	120	40	粗割・ノミ痕	34			1	40	65	55		
10		1			90	70	50		35			1	30	50	40		
11				1	65	100	80	花崗岩	36			1	15	50	40		
12				1		120		川原石	37			1	34	60	45	川原石	
13				1				川原石	38		1		30	75	30		
14				1				川原石	39			1	75	80	50	川原石	
15			1		60	80	60		40			1	95	95	45	花崗岩	
16			1		120	50			41			1	60	75	25	川原石	
17	1				68	160			42		1		120	110	40		
18				1	27	120	60	砂岩	43		1		90	115	50		
19		1			30	83	16		44		1		95	135	56		
20			1		40	55	42		45			1	70	70	58		
21		1			60	120	46		46			1	20	68	30		
22			1		60	65			47			1	50	50	30		
23			1		50	110			48			1	45	56	50		
24			1			70			49			1	60	80	30	海蝕?	
25				1					50		1		55	110	55		
計	2	18	11	19													

原石積を伴う、橋の取付部とみられる平場があり（第119図③）、平場の南北には比較的大型の景石で構成される石組が残る。また鳥兜島側にも上記の通り石組がみられるが、やはり南北に分かれており、中央に橋が取り付いていたことが分かる（第119図④）。

石組・景石（第120・121図・第34表）

本庭園では、目立つ石組は滝周辺（第113図①）と鳥兜島西側～池西岸付近（第120図）にはほぼ限定される。後者は上記の通り、往時に架っていた木橋の両端に位置する。鳥兜島では比較的薄手の立石を中心とし、汀に沿うように配置されている（第121図①）。池西岸については、草木の繁茂により詳細は視認し難いが、斜面を覆うように概ね三段程度に構成されており、鳥兜島より大きい景石もみられる（②・③）。

岩石種では戸室石が50基中18基（36%）を占めており、続いて福浦石が多いが、大型の川原石も多用されている（第34表）。兼六園（蓮池庭・竹沢庭）において19世紀半ば以降に主体的となる滝坂石は、ここでは数量は少ない。また形状についても、兼六園でよくみられる凹凸感のある立石ではなく、横幅のある垂直面が正面に配されており、崖面を表現しているように思われる。

築山・園路（第121図④・⑤、全体第109図、断面第110図①）

池の南側には築山が設けられている。東端にはやや独立して滝を戴く築山があり、西側に向かい鞍部を介しながらより高く連なる（第121図④）。特に中央付近は北側の郭面との比高差が約7m（最頂部標高33.3m）に達し、一際高い。ただし現在遥拝所になっている辺りは平坦になっている。築山の西部は池を囲うように北側に屈曲し、やや緩やかな斜面を為して郭面に至っている。東西の長さは約120mに及び、これに沿う形で南側（背後）には南面する石垣が築かれ、土留めの役割を果たしている。

園路については、池東端と三基の中島を各種の橋で結ぶ経路、築山の頂部を経て北西端に至る経路（第121図④）が現在も利用されている。この他、廃道となっているが、滝のある築山の南東裾を巡る経路、築山の斜面が迫る池の南縁沿いと、ここから斜面を登り築山尾根上に至る坂道が、痕跡をよく留めている（第121図⑤、位置第116図①等）。

石造物等（第121図⑦）

池の北東岸・東岸・琵琶島東部の3箇所においては、園路から橋や飛石に連なる部分に花崗岩製の平面長方形を呈する切石が配置されている。池の北東岸（第121図⑦）・琵琶島東部で各々2基、東岸では1基、合計5基を数える他、神社境内で他に1基認められる。規模は一定ではなく、最大（琵琶島東部）のもので長辺184cm、短辺76cm、高さ20cmを測る。これら花崗岩製切石の配置は、城内の他の庭園では兼六園・竹沢庭でよくみられ、趣向としてはやや新しい傾向を示すものかも知れない。

なお、鳥兜島・滝（響音瀑）にある雪見燈籠や、池西岸築山中腹に建つ層塔は、神社創建以後に寄進されたものである。また笙（鳳笙）島の燈籠は、本来は市内小立野の天徳院において、4代藩主光高の墓所に奉納されたもので、昭和27年（1952）になって神社に寄進された〔尾山神社々務所1973〕。燈籠等については、神社創建以後に配置されたものが多いと考えられる。

発掘遺構（第122図）

平成27年（2015）、尾山神社神饌所建設に伴い、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）により埋蔵文化財発掘調査が実施された〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2016〕。神饌所の位置は、御殿の北西側（表側背後）で、V期には表舞台、VI期には居間に付属する庭園があった範囲に相当する。

調査の結果、上層では黄褐色の砂層、燻瓦・釉薬瓦が廃棄された落ち込み、東西に延びる幅0.9m、深さ1.2mの垂直に近い溝状の穴（SD201、第122図①）、その南側に沿って並ぶ小穴等が検出された。このうちSD201と小穴は、塀や柵のような境界施設の地下構造と考えられている。下層では、側壁を



①鳥兜島 石組・景石 北西から



②池西岸 石組・景石 北西から



③池西岸 景石



④築山・園路 東から



⑤池南側園路 西から



⑥鳥兜島 石筒



⑦花崗岩切石 南から

第 121 図 石組・景石・築山・園路・石造物写真

1～2段の戸室石の石積とし、床面に約30cm大の川原石を敷き詰めた石組遺構 SX201 (②)、寛永8年(1631)ないし12年(1635)の大火層と考えられる焼土層、更にはその下層を基盤とする土坑や川原石積が検出された。SX201の埋土からは大量の燻瓦が出土したが、寛永大火層以下からは瓦は出土せず、陶磁器の食器類や土師質の灯明皿等、生活に伴う遺物が目立っている。

以上の知見は当該年度の年報(上記文献)によるものであり、今後の整理検討により修正あるいは新たに判明する事項も想定されるが、現時点において、明白な庭園構成要素が確認されているとは言い難い。もっとも、金谷出丸の成り立ちに関して重要な鍵を握る最下層の遺構を始め、いずれも文献・絵図史料だけでは窺えない、金谷出丸の来歴や構造を探る上で重要な資料が得られている。



①SD201・SP201～205 西から



②SX201 石組み遺構 南西から



③金沢城跡(金谷出丸) 下層遺構モザイク写真

金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2016
『平成27年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
P16・P17より転載・編集

第122図 金谷出丸の発掘調査

4. 各時期の様相

Ⅱ期

成立・契機等（第123・124図）

寛文元年（1661）、金谷出丸に「池」が掘削されたことについては（第26表51-02）、園池そのものの可能性もあるが、『金沢古蹟志』が井戸説を採り、また近世前期の絵図には井戸を池と記載する事例（「金沢城中地割絵図」金沢市立玉川図書館加越能文庫）も知られるので、金谷出丸における最初の築庭として確定し難い。ただし寛文5年（1665）までには「書院」が存在していた（「奥村尚寛御城方覚書」51-03）。関連は不明であるが、「葛巻昌興日記」では、万治3年（1660）に造営された馬場（51-01）に付随する形で、延宝9年（1681）にも書院・御亭が設けられたことを記す（51-04）。ほぼ同時期に整備された蓮池庭にも貞享3年（1686）の段階で馬場御亭が存在していたことから見て、馬場・書院・御亭・庭園が多少の時期幅はあれ、一体として整備されていったことが想定し得る。

「金沢古城図」（金谷屋敷之図）（第32表・第101図52-01）は、文献から窺えるこれらの様相と描写内容が似通っており注目される。本絵図は折本の一葉で、別葉となる金沢城全体図の記載内容を精査したところ、年代として天和2～貞享4年（1682～87）頃の景観を示していることが分かった。

金谷出丸を描く部分の内容においても、絵図中に本格的な殿舎が見られないことから、貞享5年（元禄元年・1688）以前であり、文庫土蔵5棟の南側に「新土蔵」とあることから、土蔵一棟を追加した貞享元年（1684）以後（「葛巻昌興日記」第26表51-05）の間とみなすことができ、この点で全体図と概ね合致する。別葉の二ノ丸部分図では元禄期以後と見做すべき内容も含まれており、全般的に慎重な取り扱いを要するが、Ⅱ期の具体的な景観を伝える史料は他になく、問題点を踏まえた上で、諸施設の配置状況（第123図）について概観する。

構成等

第123図は、上記「金沢古城図」（金谷屋敷之図）を原図とする。敷地中央に、南北を縦断するように「馬場」(A)があり、西側に固まって文庫（「文庫五」と明記）(B)、南側に離れて「新土蔵」(C)、更に南端に「文庫」(D)が2棟見られる。Dはいわゆる南土蔵に相当するが、2棟に描く絵図は本図のみであり、ここも本図の正確性が問われる部分と言える。馬場Aの中央から北寄りの東西に建物があり、西側は「亭」(E)とある。東側は「七間」と記された部屋が南北に並ぶ細長い建物(F)で、名称を欠く。このうちEは文献51-04（第26表）の「馬場先の御亭」に該当すると考えられる。Fは同じく「馬場の御書院」の可能性もある。なお、後述する貞享・元禄期の屋敷普請に係る史料には、「長き御座敷」との表現があり（「前田貞親手記」51-06）、Fに対応するとみられる。馬場・建物の脇には弓・鉄砲射場の存在を示す「的山」(G・H)2基がある。

これら土蔵・馬場に関係の深い諸施設に加え、特徴的な要素として、馬場Aと文庫・土蔵群B・C・Dに囲まれるように、比較的大きな池(I)と、その北側に接続する水路(K)が描かれている。

池Iは中島(J)を伴い、南北に長い長円形を呈する。描写は簡略で、滝・橋等の諸施設は描かれていない。規模については、もとより厳密性に乏しいが、金谷出丸全体の寸法との比較からすればおよそ60×30m程度となる。水路Kについては、本図からは給排の判別ができないが、Ⅲ期の絵図（第32表・第101図52-02）を参照すれば、金沢城内を経由した辰巳用水による給水路であることが判明する。

以上より本期の金谷出丸は、馬場の成立後しばらくして書院・文庫・御亭・泉水等が加わり、特定の御殿に付属しない、広義の庭園空間として推移したとみられる。後述する蓮池庭等の状況と比較すると、書院・亭を含めた構成要素が類似しており、蓮池庭に先行する「別邸」「別所」空間として注目される。

馬場先之御亭

改めて亭Eに注目すると、「馬場先の御亭」にふさわしく、馬場中央沿いに位置を占める一方、馬場と反対側においては池の汀にほど近い。平面形状においては、馬場に面する側が直線をなし、池側は雁行的に出入りのある外郭を呈して描かれている。

金谷出丸の亭としては、「金谷御屋舗御亭平起絵図」と題する指図が知られており、所蔵機関の目録〔金沢市立玉川図書館 1992〕では、延宝9年（1681）の図と推定している（第33表・第105図52-22、第124図a～c）。間取り・部材等の仕様が詳細に記されており、藩主の御座となる「上段」を備えた座敷や、四畳台目の茶室等で構成されていることが判る〔池田 1998〕。図中の書き込みには（第124図c）、藩主御座のある「表向」と背後の「御囲（茶室）廻」の基礎部分仕様を対比させる表現も窺える。

このうち建物の座敷に面する直線部分外側に「御馬場」との書き込みがあり（第124図b）、これを基準に考えると、第123図に示した亭Eの位置及び平面形と大筋で似通っていることが指摘できる。更に座敷「上段」の区画についても、共通の箇所に表示されており（第124図a・d）、両絵図の「亭」「御亭」は同一の建物を表現していると推定される。ただし平面形の細部や間取り全体はかなり異なっており、図の内容から見て、「金沢古城図」の方に情報精度の低さが表れているように思われるが、厳密さとはともかく、大筋の形状、位置関係については一定の信用を置けるものとする。

以上を踏まえ改めて両絵図を検討すると、馬場・座敷の反対側に庭園（池）・茶室を配していることが看取される。「馬場先の御亭」を境に、改まった場・くだけた場が区切られていたと思われ、V期以降（金沢城中後期）に明確化する庭園の仕切りの在り方とも関連する可能性がある。なお、文献51-06（第26表）には、「池之際に有之御亭ハ、御文庫之御用」とあり、文庫利用時に併せて用いられたと考えられる。



第123図 金谷出丸Ⅱ期庭園構成要素等配置図

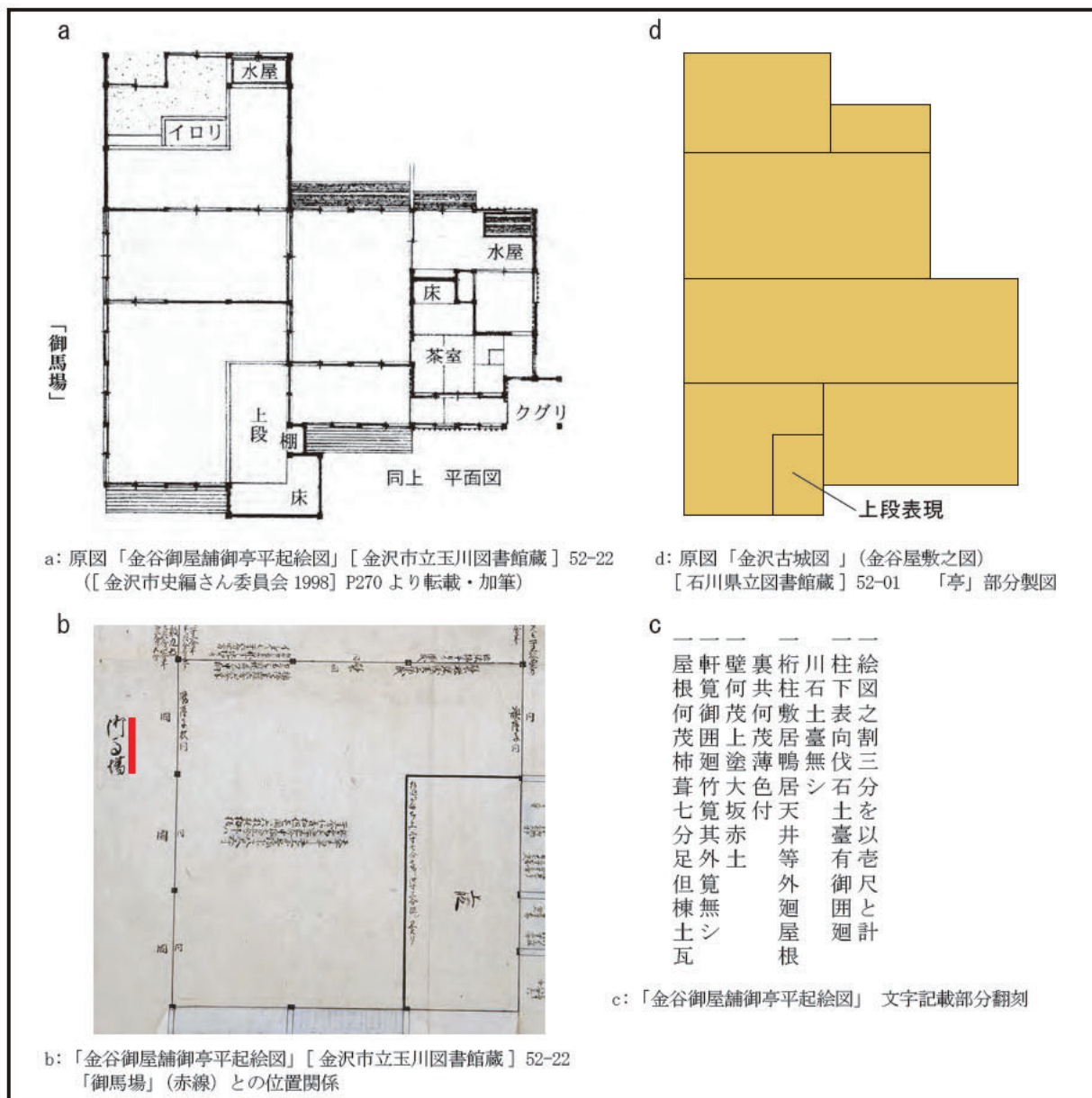
Ⅲ 1 期

絵図は知られていないが、文献では「前田貞親手記」においてその直前を含めた様相が窺える（第26表 51-06）。文献 51-06 は、5代藩主前田綱紀息女豊姫の養育に係り、金谷に「御別館」を設ける詮議の様子が記されている。ここでは池際の「御亭」は文庫の御用に必要で、また池が近いせいか湿気があるとして、「馬場」「長き御座敷」の側を建物敷地とする方向で進められているようである。Ⅱ期の絵図（第123図）から推測すれば、候補地は郭の北半に該当し、Ⅲ 2期絵図の描写とも合致する。

Ⅲ 2 期（第125図）

構成等

宝暦9年（1759）の大火以前の状況を記した文献 51-08（第26表）で庭園（泉水）の存在が知れる他、具体的な内容が窺える史料は知られていない。絵図については、「金沢城図」（第32表・第101図 52-02）・「加州金沢御城来因略記」（金谷御殿廻之部）（第102図 52-05）に庭園の描写があるが、簡略に池・水路（泉水）を描くのみである。なお 52-02 の景観年代は18世紀前半と幅を持たせているが、第2四半期以後の可能性が高く、殿舎形状も宝暦頃の絵図と大きく変わらないため、ここではⅢ 2期



第124図 金谷出丸Ⅱ期の「亭」

として扱っておく。

第125図は上記「金沢城図」(52-02)を原図とするもので、諸施設の配置は次の通りである。敷地北部に「御広式」(A)、南部に南北方向の「御馬場」(B)があり、金谷出丸の中心部を構成する。敷地南西には元禄元年(1688)に設置された七疋建厩(名称欠、C)がある。西側に「御文庫」(D)6棟、南端に「南御土蔵」(E)1棟がある。池(F)は馬場Bの西側に平面円形として描かれるが、簡略化・記号化された印象を受ける。水路(G)は池Fの北端に取り付いており、広式殿舎の西・南側を巡り、水溜と思しき榊(H)を形成しつつ、金谷出丸北東を抜けている。「金沢城図」の全体を見ると、水路Gは金沢城南東から引導された辰巳用水の末端で、石川門西側で二ノ丸に向かう経路と分岐し、三ノ丸北辺を経由して松原屋敷に下り、金谷出丸に導かれていた。凡例では経路は「埋水樋」となっているが、水路Gに開渠部分がなかったかどうか判然としない。また排水路については不明である。

Ⅱ期との主な相違は、①広式及び七疋建厩の存在(広式の造営による馬場の短縮)、②「馬場先の御亭」「馬場の御書院」が見られない点で、庭園の主要構成要素である池と給水路については、Ⅱ期と比較して基本的な形状は変わっていないようである。なお広式=殿舎と庭園とは鬘斗立で仕切られており、庭園は後のⅤ期・Ⅵ期と異なり、殿舎に取り込まれていない。

Ⅳ期

本期の庭園景観を伝える史料は、現在のところ確認できていない。

宝暦9年(1759)の大火は、前述の通り金谷出丸に直接の被害を与えなかったが、後続するⅤ1期の池が小規模であること等から、Ⅲ期までの給水路が廃絶している可能性が高い。金沢城内における金谷出丸への専用経路に、大火による影響があったと推測される。この場合、Ⅲ期までの景観は維持



第125図 金谷出丸Ⅲ2期庭園構成要素等配置図

されていないと考えられる。

大火後における給水については、「上ヶ水樋回り帳」扣（穴太政洋氏蔵）に天明年中（V1・2期）とする状況の記載があるが（第26表51-09、後述）、この段階に関しては不明である。復旧がV期に下るとすれば、IV期には大規模な泉水（池・流れ）が築造されていない可能性も考えられる。

V1期（第126図）

構成等

第126図は、「金谷御殿絵図」（52-06）を原図とする。第10代藩主前田重教の隠居御殿で、付帯施設を含めた広大な能舞台（表舞台）の存在が大きな特徴である。これによると、御居間と表舞台との間に、小型の池（「御泉水」、A）・「御鞠場」（B）が配される区画（推定600㎡強）が認められる。区画の南西側にあたる表舞台やこれに連なる廊下とは、塀ないし熨斗立で仕切られているが、南東側の御居間とは縁・土縁を介し一体的で、御居間に付随する庭園空間（内庭）と見做すことができる。なおこの区画には土蔵も一棟見られるが、土蔵の方が以前から存在していたらしく、屋敷地西縁に、赤枠で土蔵の建造予定地（C）（「御文庫御土蔵追テ此所相建申事」）が描かれているところからすれば、移転を計画していたのかも知れない（ただし後出絵図には、本絵図の「建造予定地」に土蔵は建てられていない）。

池Aは、北西角を隅切りとした小判形の平面形を呈し、おおよそ長軸7～8m、短軸5m程度の規模と推測される。絵図には給排水施設が見えず、描写の省略も考え得るが、池の規模や宝暦9年（1759）大火の影響を考慮すると、辰巳用水による直接の給水を受けておらず、井戸水等を汲み入れていた可



第126図 金谷出丸V1期庭園構成要素等配置図

能性も十分考えられる。

この点について、「上ヶ水樋図り帳」扣（第26表51-09）に興味深い記述がある。当該史料は、辰巳用水の二ノ丸への給水に係り、木樋等の仕様及び数量・費用の見積を示したものの控えて、安永4年（1775）との別筆の朱書がある。注目されるのは末尾に同じく朱書で、辰巳用水の供給状況に関する記載があることで、①安永4年以前の二ノ丸への導水に疑問を呈し、②金谷出丸への給水は天明以降であり、③初めは二ノ丸から松坂を下り、鼠多門橋を釣樋で渡していたが、④天明末年以降は「馬場」（堂形）を経由するようになったとしている。

末尾朱書の内容については検討すべき部分も多いが、例えば②については、宝暦大火後に限定すれば成立の余地がある。④については年代が問題になるが、給水経路の変化は絵図や埋蔵文化財調査〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2010〕で確認されている。また③については、雑用水のための仮設経路であって、池や流れ（泉水）に十分に供給できていない形を示しているとしたら、第126図池Aの状況とも符合するようと思われる。以上からすれば、②～④の内容がおおよそ事実を伝えていることも成り立ち得る。

もっとも③の釣樋の引き込みは絵図には描かれていない。近世前期の絵図に見られない「水掛口」（D、北側にもあり）が何らかの関係性を有する可能性があるが、明白な根拠に欠ける。上記史料の内容は重視されるべきと思われるが、他史料による裏付け等、なお検討を必要とする。

外御庭

御殿空間の南端には、南北30～40m、東西120m程度と推定される区画（E）がある。南辺は金谷門に連なる金谷出丸最南端の通路区域に接し、塀（土塀）ないし熨斗立で仕切られている。やや西寄りに南側に大きく突出する部分があるが、他は金谷出丸縁辺におおよそ平行する。北辺は表舞台との境界に出入りがあるが、その他はほぼ建物群北辺と平行する線で、大部分が南側と同じく塀ないし熨斗立で仕切られている。出入口は4か所見られ、いずれも二枚開きと考えられる。

絵図52-06（第126図原図）ではこの区画について名称がないが、以降の絵図では「外御庭」「御馬場」と記載され、特徴的な平面形は若干変動しつつもVI期の終わりまで引き継がれている。IV期の状況が不明であるが、V1期に「外御庭」が形成された可能性は高い。なおV3期以降の絵図に描かれる馬見所を欠いており、当初から馬場であった確証がないが、絵図作成の段階で未建設であったとも考えられる。

V2期

本期の庭園景観を直接伝える史料は、現在のところ確認できていない。前代の同題名絵図に後続する「金谷御殿絵図」（第32表・第102図52-07）は、御殿の表側を中心に描写しており、庭園に関する情報は認められない。

ただしV1期を特徴づける表舞台は、天明8年（1788）まで存在が確認できるが（「高島厚定職事日記」第26表51-10）、史料の内容は撤去に係る見積りであり、ほどなく廃絶したものと推測される。なお詳細は不明だが、同年に庭園の整備に係る記事もみられる。表舞台撤去に伴い、更に変容した可能性があり、V3期絵図に描かれた状況が遡ることも想定される。

V3期（第127図）

構成等

第11代藩主前田治脩の隠居に係る本期においては、池・流れ等、庭園の中心的な構成要素は不明であるが、殿舎敷地以南において、掛塀・熨斗立等で仕切られる区画が4箇所成立している点、このうちの一区画に亭（茶室）が設けられている点が注目される。

「金谷御殿并御広式惣御絵図」（第32表・第102図52-08）における殿舎の形状を見ると、V1期（52-06）・V2期（52-07）の大略を踏襲している点が明らかである。また敷地北側においても、形状

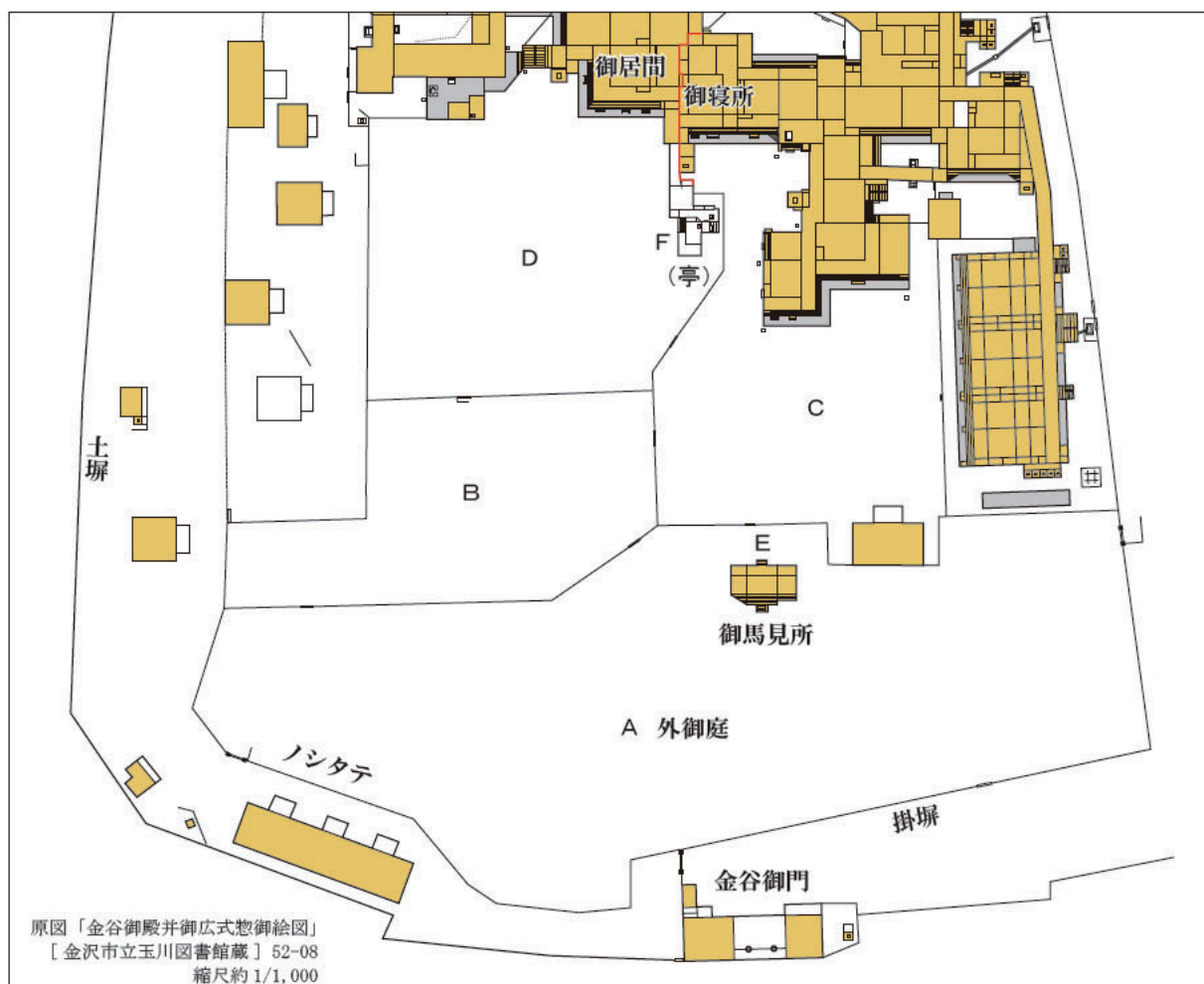
に差異はあるが、V1期段階の範囲をおおよそ引き継ぐ形で、4つの区画が認められる。

第127図は、上記絵図52-08を原図とし、その庭園想定部分を示している。敷地南端の「外御庭」(A)は、敷地の東西に亘る最も広い面積を有する。建物として「御馬見所」(E)が設けられており、馬場が主体であることが分かる。外(御)庭Aに関しては、文化2年(1805)に草鹿(射芸の一つ)が行われた記録(第26表51-14)があり、射場も伴っていたと見られる。なお外庭と明示したものではないが、寛政11・12年(1799・1800)にも金谷出丸の庭で草鹿や帯佩(51-13・12)が行われている。帯佩については未詳で、演武の一種かと思われるが、いずれにしろこれらについても外庭が舞台であった可能性が高く、儀礼性の高い武芸を披露する場としても利用されていたと見られる。

外庭Aの北西に接する区画(B)は、V1期の表舞台敷地に大部分が重複する箇所であり、区画南東の斜行する熨斗立ラインに旧地割の名残が見られる。後続するV4期の絵図には「御畑」と記載されている。Bの東側に位置する区画(C)は、金谷御殿奥向き(広式)の殿舎敷地と一連で、南面する部屋から縁・土縁伝いに降りることができる。広式に直接附属する庭園空間と判断されるが、本絵図ではその構成要素は表現されていない。C西側の区画(D)は、V1期に小型の池があった範囲と大部分が重複し、御殿表の奥側(居間)に直接付属する庭園空間と見られる。

亭

敷地北東には、主要殿舎から廊下を介し南へ突き出す形で、茶室のある亭(F)が描かれている。大部分の建物に黄色系の着色があるが、亭は線描のみで、あるいは絵図作成当時は未完成だったことを表現しているのかも知れないが、文化7年(1810)以後の景観年代を示す「金沢城内絵図」(第32表・



第127図 金谷出丸V3期庭園構成要素等配置図

第 103 図 52-09) では明示されており、実際に建造されたとみられる。

この亭については、別に指図が 2 種類(第 33 表 52-23、第 33 表・第 106 図 52-24)知られている。[池田 1998] では絵図 52-23 が掲載され、絵図 52-07 (第 106 図) の描写にも言及しつつ「滝見御亭を改変したような茶屋」との所見を示している (P271)。「滝見御亭」(夕顔亭) は蓮池庭 (兼六園) に現存する、安永 3 年 (1774) に建てられた亭で、[長山 2006b] では、同亭を描いた「蓮池瀧見之御茶家地指図」(『兼六園全史』収載) の書き込みから、第 11 代藩主前田治脩が隠居する際、この亭を退隠先の金谷御殿に復元する意図があったことを推測しており (P210)、[池田 1998] の所見と対応する。

池・流れ等

第 127 図に示した通り、絵図 52-08 では池・流れ等が描かれていないが、後述する V 4 期の絵図には、区画 A～D の配置状況はほぼ変わらない状態で、2 基の大型池とこれを結ぶ水路 (流れ) が描写されている。第 127 図の区画 D において亭 F が北東隅に偏在していることや、亭 F のモデルとなる滝見之御亭が、瓢池の中島に立地し、名前の通り滝の鑑賞に適していたことを考え合わせると、V 3 期の段階で、池・流れがすでに存在していた可能性は高いと思われる。

V 4 期 (第 128 図)

構成等

第 128 図は、文政 13 年 (1830) 作成の「御城中壺分碁絵図」(第 32 表・第 103 図 52-10) を原図とする。殿舎のうち、西側の表・居間部分は亭を含めて撤去されているが、殿舎敷地以南の区画配置については、3 期の状況がほぼ継承されており、「外御庭」(A)、「御畑」(B) の文字書き込みがある。ただし外庭 A の南縁の区画施設は、熨立から土堀に変容し、以後 VI 期まで存続する。

一方、広式の庭 (C)・居間の庭 (D) のそれぞれに池 (E・F) が大きな範囲を占め、これらを中心に水路・流れ (G・H・I・J) が廻っており、これが V 3 期絵図 (第 127 図) との描写上の大きな違いになっている。

池・流れ等

水路のうち給水路 G は、兼六園蓮池庭の長谷門付近から埋樋となる辰巳用水で、堂形馬場の脇を通り、金谷門中央を経て外庭 A を横断し、地表にでることなく、滝や流れを形成せずに池 E 南岸に取り付いている。文政 13 年 (1830) 段階では、木樋が用いられていたとみられる。

池 E は北西に出島を有する略円形の平面を呈し、推定規模 25 × 20 m を測る。出島を挟んで南北から二筋の流れ H・I が派生し、北側の I は西流して居間の庭 D に入る。南側の流れ H は畑 B に一度入った後緩やかに北流し、居間の庭 D の南西で I と合流、ほどなく池 F に達している。なお、広式の殿舎「梅之御間」等に近接する流れ I には、木製とみられる小規模な橋が 2 基架けられている。

池 F は略円形の平面を呈し、推定規模 30 × 20 m を測る。池中やや南寄りに中島を伴う。池 F の西縁南寄りに排水路 J があり、庭 D や表側敷地西辺を仕切る熨斗立を潜り、文庫土蔵の間を縫って敷地西縁を北流する。西北に至って東に折れ、七十間長屋における丹後屋敷との出入り口付近で描写が途切れるが、実態は北へ抜けて、金谷出丸・丹後屋敷間の堀に流入していたと考えられる。

導線

広式の殿舎である寝所や梅之間・鶴之間等は縁・土縁を伴い、庭・池 E に直接面していた。また流れ I には木橋が架っており、池と殿舎との密接な関係が窺い知れる。

一方表・居間側の敷地において、池 F の北側には、文政 8 年 (1825) に設置された綿羊小屋があるのみとなっている。また池 F 南東の流れ H・I にはともに橋が架かっていない。なお広式側から二枚開き (K) を通り居間側に入ったとしても、流れで仕切られた一角までしか通じていない。もっとも広式の庭 C には外庭 A・畑 B との出入り口となる二枚開きがあり、これらを経由すれば居間側へ進入できるが、いずれにしても広式側と池 F との関係は強くない。

池・流れの成立時期

池・流れは本期の絵図を特徴づける構成要素であるが、池Eと比較して、池Fは広式との連絡が十分ではない。建物撤去後に庭園空間が広がる事例（竹沢庭、後述）もあるが、広式のみで殿舎の残る本期に池Fが新造されたとは考え難く、本来、表・居間の殿舎に伴っていたとみるのが妥当と思われる。V3期の項で述べた通り、居間の庭に設けられていた茶室の存在とも整合し、池Eや流れともども、少なくともV3期には遡る可能性が高い。

V2期については、推測する材料に乏しいが、V1期を象徴する広大な表舞台が撤去されていること、また、検討すべき部分が多いものの、天明末年頃に辰巳用水埋樋による給水が堂形経由で行われるようになったとする文献（第26表51-09）があることから、池・流れの築造が、V2期まで遡る可能性も残されている。

導水経路の継承

池・流れを成り立たせる導水経路は、蓮池庭（兼六園）南西から埋樋の状態では堂形・金谷門・外庭を通り、広式庭で地表に出る（本期では埋樋のまま池に直結すると推定される）。その後居間庭を経由し、西流しつつ文庫土蔵敷地側に排出される形となっている。次のVI期には滝が築かれ、池・流れの形状等も変動するが、この導水経路とそのおおよその位置は、VI期を通じて継承される。

VI1期（第129図）

構成等

第129図は、13代藩主前田斉泰の弟・延之助の居住に際し造営された屋敷を描く「金沢御城内外



第128図 金谷出丸V4期庭園構成要素等配置図

御建物絵図」(金谷御屋敷兩御居間廻等 金谷外御庭辺) (第 32 表・第 103 図 52-11) を原図とする。殿舎の平面形状は、V 期までと異なっているが、「外御庭」(A)、「御畑」(B)は、区画施設も含め、V 4 期と大きく変わっていない。居間の庭 (D) 南辺の位置もあまり変わっていない。広式の庭 (C) のみは、東隣の部屋方建物が無くなったことを受け、東に拡張されている。

このように殿舎と異なり、庭園等の区画は概ね V 4 期以前を継承していることが分かるが、庭園の主要な構成要素は描かれていない。「金沢御城内外御建物絵図」は蓮池庭・竹沢庭を含む城内全域を対象とする組図で、二ノ丸・玉泉院丸・蓮池庭・竹沢庭では泉水(池・流れ)が表現されており、金谷出丸に見られない点は不審であるが、西側の文庫土蔵敷地に排水路(E)が認められるので、池・流れは存在しないのではなく、何らかの事情で描かれていないと考えられる。

本期の庭園景觀については推測の他はないが、V 4 期の広式の庭における池 E の位置は、V 1 期では南に延長した殿舎に重複する可能性がある。後述する VI 2 期では広式側の池がみられなくなっているので、VI 1 期の段階で既に消失していることも考えられる。また辰巳用水は、VI 2 期においては土蔵(F)の北東に滝となって地上に現れているが、本期の状況は不明である。

VI 2 期 (第 130・131 図)

成立・契機等

前藩主 12 代前田斉広の正室真龍院(鷹司隆子)の居住に際し、改めて普請が行われた。庭園についても、庭木上納に係る布達が指示される等、整備が進められている様子が窺える(「文政天保間諸事要用雑記」,[長山 2006b])が、VI 1 期との異同については明確ではない。



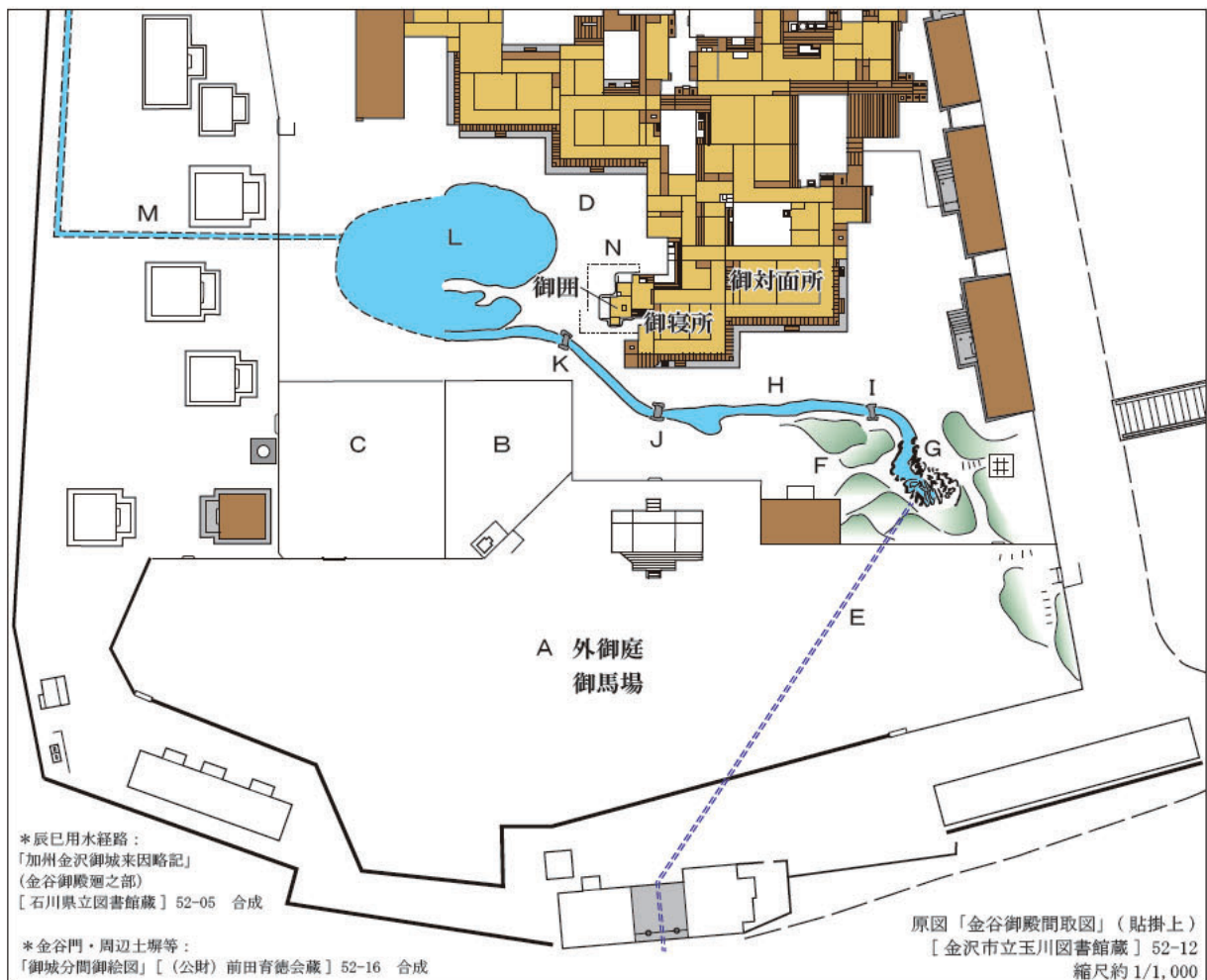
第 129 図 金谷出丸 VI 1 期庭園構成要素等配置図

構成等

第130図は、「金谷御殿間取図」(貼掛上)(第32表・第103図52-12)を原図とし、辰巳用水経路・金谷門周辺について別図(「加州金沢御城来因略記」(金谷御殿廻之部)第102図52-05、「御城分間御絵図」第104図52-16)に基づき合成したものである。「外御庭 御馬場」(A)は、北東部がやや縮小し、東側の出入口の位置が南に移ったが、全体はあまり変わっていない。一方、畑に相当する部分は熨斗立により東西に二分割されている(B・C)(但しVI3期の状況を示している可能性も残る)。また広式・居間間の熨斗立が取り払われ、庭園が一体化している(D)。

池・流れ等

辰巳用水の埋樋(E)は金谷門を通った後、V期の経路より東に大きく折れ、広式南端の土蔵東側に至っている。このことについて、天保12年(1841)には石樋が設置されていたことを示す史料がある(第27表51-17)。史料にみえる「源三郎」は別の箇所では岩黒村(越中西部・金屋岩黒村)の人であることが記されており、石樋は金屋石製であることが分かる。埋樋の先には築山(F)の表現があり、その中央に滝(G)がある。滝の南側一帯は、VI1期に比べ広がっており、滝の築造と関連する可能性がある。滝Gの前面はやや淵状となり、流れ(H)はやがて大きく曲がって西流する。広式側においてはV4期に存在した池は見られず、流れHには石橋が3基(I・J・K)架かっている。流れHは居間側に入って池(L)に取り付く。池Lは絵図では西半が描かれていない(第130図では破線で推定復元した)が、排水路(M、絵図に破線で描かれている)の位置・経路はV3期・VI1期と同様である。V3期の池と比べ、形状はやや変化しているようであるが、概ね踏襲していると判断



第130図 金谷出丸VI2期庭園構成要素等配置図

される。

なお新たに整備された金谷出丸（金谷御殿と呼称）に住まうことになった真龍院には、江戸から金沢までの道中を記した「越の山文」と題する紀行文があり、金谷庭の滝・池を歌に詠みこんでいる（第27表51-16）ので、以上の景観はVI2期当初には遡ると考えられる。

亭等（第130・131図）

広式の殿舎の南端、「御寝所」の西側に接し、「御囲」「御勝手」等（N）が造営されている（第130図）。第131図には各絵図の情報に基づき、「御囲」とその周辺の状況を示した。「御囲」は四畳半で、西側に土間庇の付く出入口があり、右手（南側）に床を設ける。御囲の北側に隣接して二畳の小間があり、これは北側に躰り口（「ニジリ上り」）を伴っていた。これらの東側に南北に長く御勝手が配されている。建物は土縁を伴い、更に外側には高さ五尺五寸（約167cm）の建仁寺垣を巡らせている。西側に食い違いの出入口が設けられ、ここを出ると10m程度で池Lに達する。このような茶室とその周辺の設えはVI4期までほとんど変化なく存続する。創建はVI2期当初と推測されるが、判然としない。

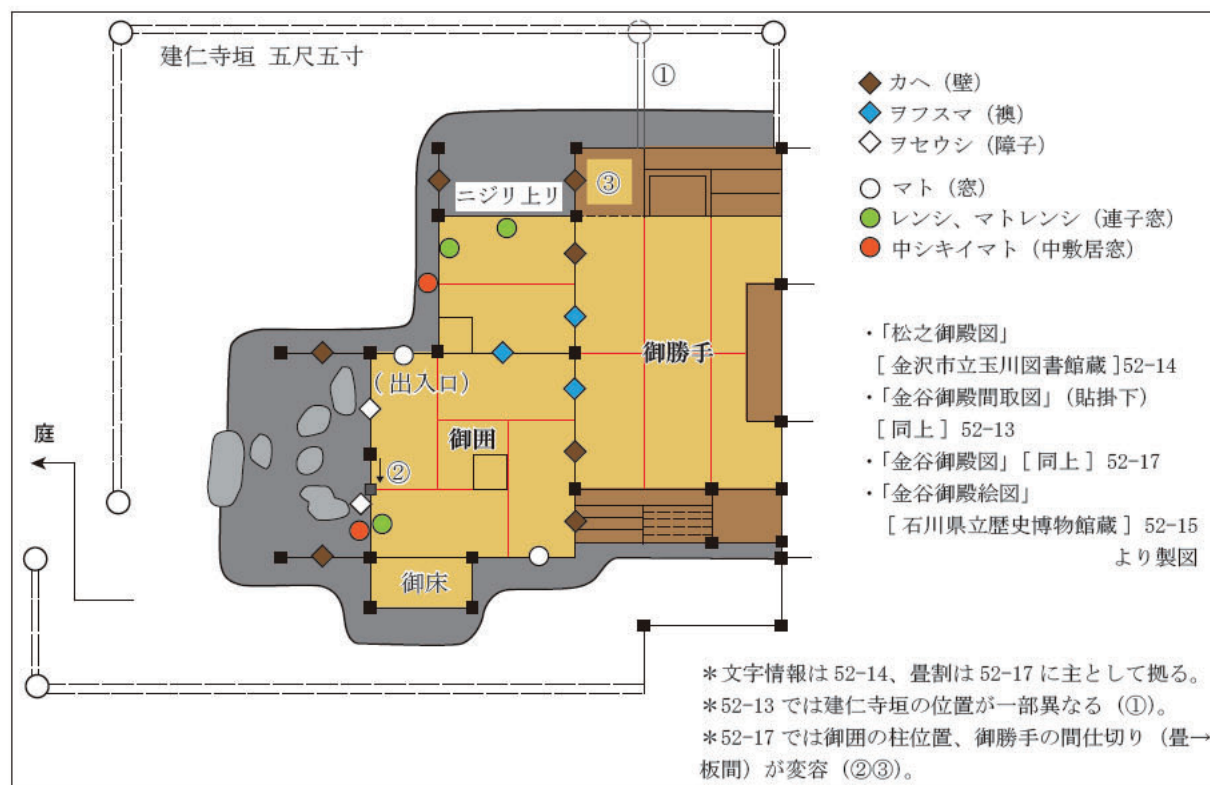
利用状況

上述の通り、真龍院入居時の詠歌には滝・池が読み込まれているが、利用を示す事例はあまり知られていない。文献51-18（第27表）は、天保13年（1842）、13代藩主前田斉泰が金谷御殿を訪ねた際の記録であるが（「官私随筆」）、庭園自体については、殿舎内部へ一旦入った後「無程御庭へ御出、丹後やしき（金谷出丸北側の一角）へも御出」とあるのみで、形状や意匠、あるいは鑑賞に係る具体的な事項には言及されていない。ただしその後、「御小間へ御入」、茶事を行っている。この「小間」は「御囲」もしくはこれに付随する二畳間と考えられる。

VI3期（第132・133図）

成立・契機等

弘化2年（1845）、のちに14代藩主となる前田慶寧が金谷に入る際、真龍院の住居に隣接して普請



第131図 金谷出丸VI期庭園「御囲」周辺

が行われ、併せて庭園も改められた。これについては「金谷御殿間取図」(第32表・第103～104図52-12・13)・「松之御殿図」(第104図52-14)・「金谷御殿絵図」(第104図52-15)等絵図の他、「世子御座所普請方御用主附一件」(第27表51-19～第28表51-31)においても窺うことができる。

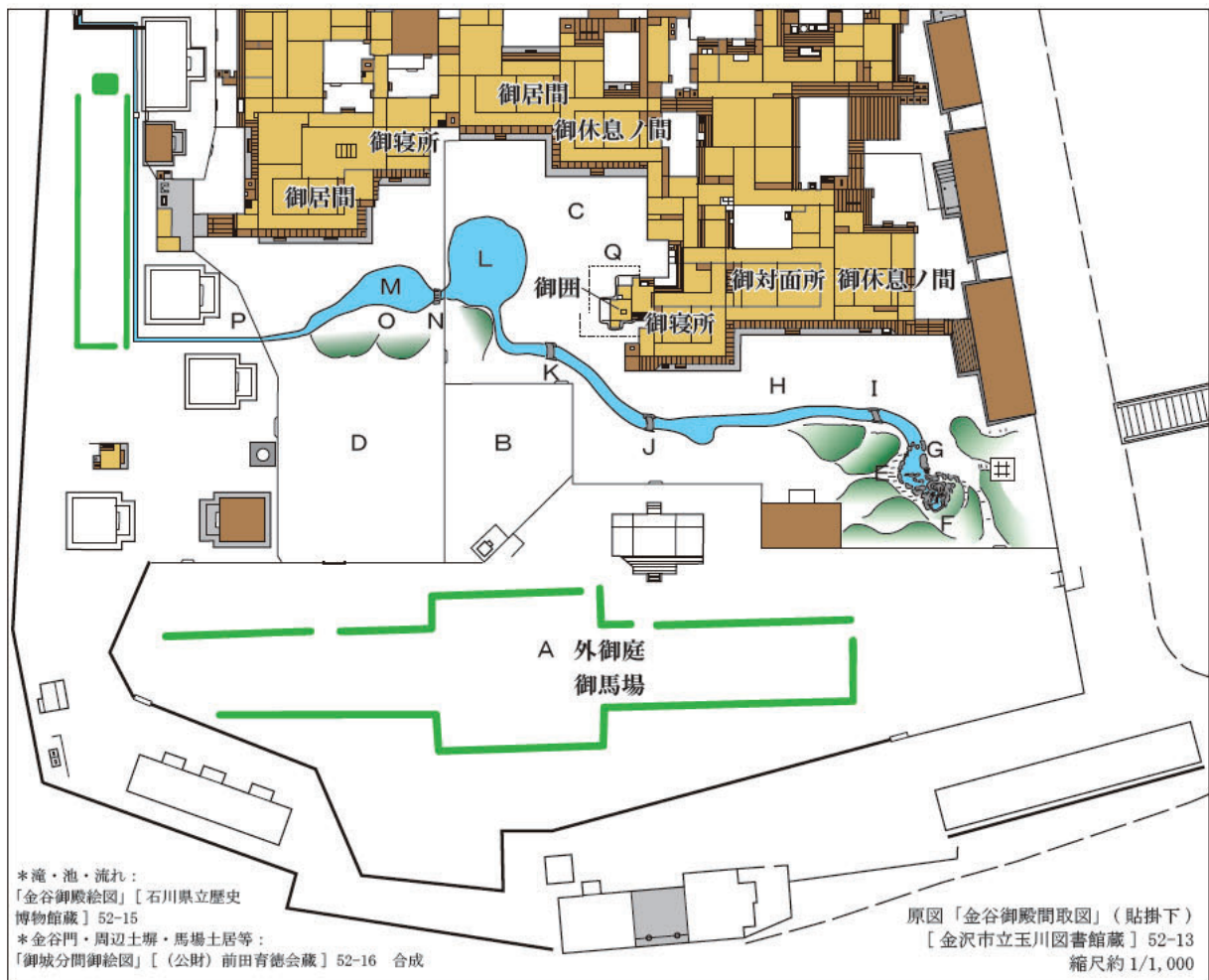
上記の絵図は、いずれも弘化2年(1845)普請後の状況を示すと考えられるが、殿舎や周辺の建物の描写に若干の違いがある。絵図52-15は、弘化2年(1845)普請後との年紀を記載するが、弘化4年(1847)に改めて整備した能舞台の姿²⁾が反映されており、やや時期の下る情報も主に貼掛の形で盛り込まれている。ただし他の二点も含め、細部の違いが前後関係を示すだけとも考えにくく、最終段階に近い指図等の可能性も考える必要がある。庭園部分についても全く同じとは言えないが、精粗の違いと考え得るものである。以上を踏まえ、庭園を主体とした基本図第132図の作成にあたっては、殿舎・全体形状は主として52-13、泉水(池・流れ等)は52-15を原図として合成した。

造営体制

本期については、庭園の築造を担当した三十人頭等の動向が断片的ながら窺える(第28表51-26・27・29他)。この時の普請では、三十人頭が主付として正式に任命されることはなかったのであるが、普請全体の責任者大野織人の裁量により、三十人頭筆頭の木村平六が詮議等に加えられた経緯があり、普請落着の際には褒賞に預かっている(51-29)。

構成等

敷地南縁の「外御庭 御馬場」(A)はVI2期と変化はない(第132図)。「御畑」(52-14では「内御畑」)(B)は、VI2期時点より半減した広さとなり、東半のみとなっている。またVI2期では一体だった居



第132図 金谷出丸VI3期庭園構成要素等配置図

間・広式の庭は、真龍院の御殿（旧広式側＝松之御殿）・世子慶寧の新御殿（旧居間側＝金谷御殿）と対応して、再び仕切られることとなった（C・D）。なお金谷御殿の庭Dは、VI 2期より南に延び、元の畑西半を吸収している。

流れ・池等

本期の流れはVI 2期と同じく、広式南端の土蔵東側において、築山・園路（E）に囲まれた滝（F）に端を発する。菱形の開口部から水が流れ落ちる様が表現され、滝壺付近には石灯籠（雪見燈籠、G）が描かれている（拡大第133図）。流れ（H）が緩やかな曲線を描きながら西流し、石橋が3基（I・J・K）架かっている点はVI 2期と同様である。しかしVI 2期では居間側に中島を有する大型の池があったが、松之御殿・金谷御殿の境界と重複することになり、本期では中型の池2基（L・M）に作り替えられ、それぞれの御殿敷地C・Dに取り込まれることとなった。池L・Mの境には木造らしき橋（N）が架かり、南側には滝F付近と同様に、築山（O）が設けられている。また排水路（P）の取り付きは、金谷御殿の建物増築に応じVI 2期の段階より南側に移っている。



「金谷御殿絵図」〔石川県立歴史博物館蔵〕52-15

第133図 絵図に描かれた滝・石燈籠

「世子御座所普請方御用主附一件」において、池は「金谷御庭御泉水」（第27表51-19）、「同所御表御居間先御泉水水溜」（51-20）等と呼ばれ、「中島之北方埋置」（51-19）、「御泉水埋立候図り書」（51-21）等の記載があって、池を埋め立てる計画であったことが分かる。なお弘化元年（1844）11月頃の時点では、藩主（13代齊泰）の意向は「山之際之流迄位」「御堀も六ヶ敷可有之、流レ而巳位之事ニ可有之哉」（51-20）とあり、改めて池を作り直すのではなく、流れ程度に留めるつもりであったようだが、実地見分の上判断する段取りであった（「御覧之上、御治定被 仰出候様」51-20）。

池（泉水）の形状についてはこの後具体的な記載はないが、弘化2年（1845）3月26日、13代藩主前田齊泰の見分に際し、史料の筆者で普請方御用主附の任にあった大野織人は、「御庭之御模様」を説明し指示を仰いでいる（51-23）。更に28日には、庭普請を直接担当した三十人頭（露地方奉行とも）と「御泉水之模様等」について相談をしている（51-24）。こうして7月11日の御殿竣工までに、小型の池2基（第132図L・M）という形に落ち着いたと見られる。

石組・景石等

第132図では滝周辺E～Gに石組（景石）が集中している様子が窺えるが、その他には描かれていない。文献51-19（第27表）には、改修中の池の辺りに岩石があったことが記されている。また弘化2年4月9日（第28表51-25）・同12日（51-28）の条では、玉泉院丸・堂形（いもり堀南側の藩用地）から景石を搬入するため、調整を図っている様子が窺える。この他、庭木・石燈籠等について、藩士の上納を示す記事もみられる（51-30・31）。

亭等

松之御殿に属する「御囲」等（Q）はVI 2期と変化なく存続しているようである。一方金谷御殿側には亭・茶室は設けられていない。

VI 4期

成立・契機等（第134図）

安政元年（1854）6月、真龍院が金谷出丸松之御殿から二ノ丸広式に移り、9月には13代藩主前

田齊泰の子、利行（慶寧弟）が金谷に入り、仮住居を南之御住居と称した（「御用方手留」他〔加賀藩史料藩末篇上巻〕）。これに伴い、庭園の形状も変化するとみられる。この時点では慶寧・利行の兄弟が隣接して居住している状況であるが、利行は翌年死去する。

構成等

第134図は、安政元年（1854）の普請以後の状況を示すとされる「金谷御殿図」（第33表・第105図・第108図52-17）を原図としている。前代に比べ、御殿建物には増築部分が認められるが、相殿形式は維持され、基本形状は踏襲されている。庭園についても、南東の滝から北西方向へ流れが導かれる骨格に変化はないが、VI3期にはあった池がなくなり、幅広ではあるが、流れのみとなっている。

外庭は馬場と内畑との境（A）がなくなっているが、絵図の表現の違いかも知れない。ただし、狭義の金谷御殿側（敷地西側）の南端（B）が外庭に取り込まれている。

流れ・橋・石組等

VI3期に池があった箇所（C・D）が幅の広い流れとなっており、塀を挟む両敷地側とも石橋が1箇所ずつ、全体で2基追加されている（E・F）。なおGの石橋は、VI3期と同じ位置にあるが、形状は亀甲形となっている。

景石・石組は、南東端の滝周辺（H）と、VI3期に池があったC・D一带に集中している。とくにCの流れの南側には、立石を中心とした豪放な石組が描写されている。一方Dの側には流れの護岸に石組がみられるが全体的に小ぶりで、対照的である。



第134図 金谷出丸VI4期庭園構成要素等配置図

築山・亭等

滝周辺を除くと、築山はすべて流れの南側にある。石組が目立たない敷地西側Dでは築山が連続し、園路が設けられている状況が詳細に描かれている。なお敷地東側の御囲（I）はわずかに間取に違いがあるが、ほぼVI 3期の状態が継承されている。

本期では、庭園の構成要素である石組や築山が、絵図の描写において敷地により明確に異なっている点が注目される。絵図の描写は精緻・写実的で、居住者の好み等を反映している可能性がある。

Ⅶ期（第135図）

成立・契機等

慶応2年（1866）の前田齊泰隠居に伴い、明治2年（1869）に至るまで、御殿建物のみならず地割にも大幅の改変が行われた。この時の齊泰の意図は「御庭を広く被遊度由御意に而」（「諸事留牒」第28表51-32）等史料に残る。現存庭園の遺構は、この時の普請によると判断される（本節5）。

造営体制

御殿普請については、金谷普請所が設けられ、作事方の主導で進められた。この間の経緯は「金谷御殿御普請諸事留」（第28表51-33～第29表51-43、第30表51-45～51-47）に詳しい。しかし造園そのものについては、御亭の建設見積等を除き、あまり言及されていない。一方、後述する滝の造営に関しては、「御普請諸事留」には見えず、広式（奥向き）の役職にあった赤井伝右衛門の手記「見聞袋群斗記」（第29表51-44）に記される。造園自体は広式が管轄し、齊泰の意向が一層反映される形で進められていた可能性がある。なお明治36年（1903）に刊行された『北国人物志』には、金沢市の時計商大田久太郎を紹介する中で、その父小兵衛について、明治13年（1880）造営の兼六園・日本武尊像の石積を担当し、旧藩時代には巽御殿・金谷御殿の築庭を手掛けたとの記述がある。

構成等

第135図は、慶応度御殿普請後の地割・建物配置を示した「金谷御殿図」（第33表・第105図52-19）を主たる原図とし、同絵図では空白となっている庭園部分に、現況測量図及び絵図52-21（第107図）の情報を合成し製図したものである。

Ⅶ期までの、外庭の主体を馬場とし、内庭の主体を泉水とする構成は大きく変容し、馬場は馬見所が解体される（第28表51-33、第29表51-34）とともに御殿敷地西側に移り、旧外庭に広大な池（A）、その南側に築山（B）が築かれる等、Ⅲ期－Ⅴ期間に次ぐ、大きな画期となった。なお現存している構成要素の詳細は本節3で触れたので、ここでは略述する。

庭園南側は、17世紀以来その位置にあった南土蔵が移転（第29表51-38、第30表51-46）し、外郭線がやや拡張された。築山南縁の土留めとなっている石垣（C）が外郭線に一致している。北側の御殿建物区域との境については、堀（I）が設けられていたとみられる。

滝・泉水等

辰巳用水による給水については、蓮池庭－堂形経由の経路に加え、城内本丸高石垣下（御花畑－稲荷屋敷）を通る導水路が新たに設けられた（第29表51-35・41）。前者については改修を示唆する記事がある（51-37）。また玉泉院丸の池からも導水工事が行われている（51-40）が、金谷出丸への取り込みについては史料に明記がなく、庭園に利用されたかどうか判然としない。

滝（D）については前述したが、外庭で普請していることが注目される（51-44）。池や雅楽に関わる楽器や装束を模った中島（E）については、滝や築山と同様、明治初期までの絵図・絵画史料（第106図52-25、第107図52-20・21）に描写されている。池岸・中島を結ぶ橋や園路の位置も現況と一致している。このうち本体が失われている池西端の木橋（F）については、絵画では意匠的な欄干を具えた刎橋として描写されている（上記他『加賀地誌略』（明治11年刊）挿図）。金沢藩の重職にあった横山政和による明治3年（1870）作の漢詩では、「懸山飛瀑掩寒練 架壑彫橋現彩霓」（『環翠樓詩鈔』

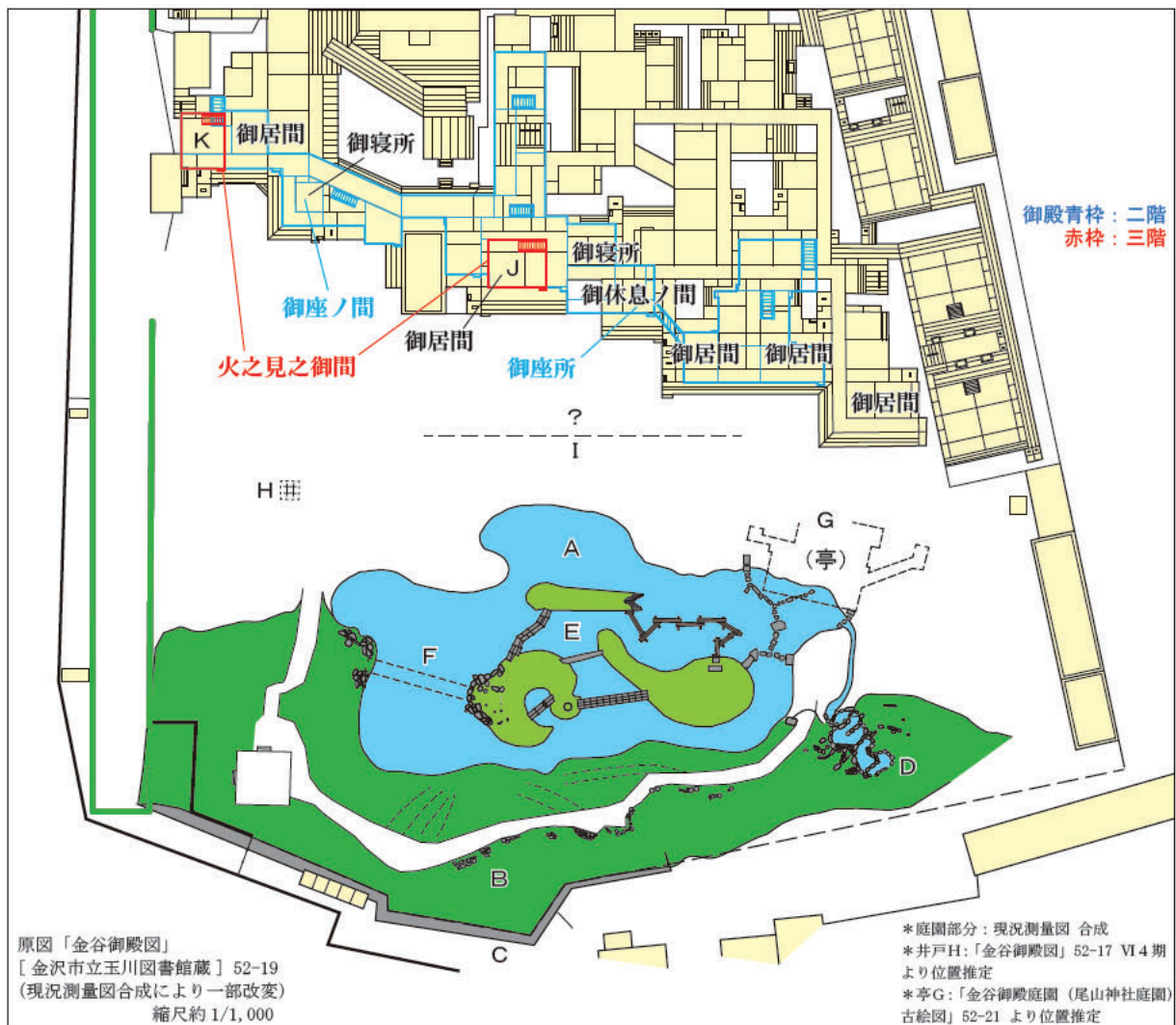
明治35年刊、第31表51-53)とあって、文飾はあるものの、滝とともにこの木橋を対象としている。明治10年代の状況を回顧した『金沢市街温故叢志 乾・坤』[氏家・八木田1999]では、「五彩ヲ施セシ芻橋」とあり、また『尾山神社誌』[尾山神社々務所1973]収載の謡曲「好文木」も「あけに緑を交へつつ。かざり粧ふ玉の橋」と表現しており(第31表51-56)、色彩も豊かであったとみられる。

なお、池北西の井戸(H)は、第135図の原図52-19(第105図)にはみられないが、絵画資料52-20(第107図)に描写されており、第135図ではVI4期絵図を参考におおよその位置を落とした。金谷文庫側にあった井戸を庭園側に取り込んだとする、文献51-45(第30表)の記述に対応すると思われる。

建物

文献51-42(第29表)・51-47(第30表)の内容は、外庭に「御亭」「御腰懸」を設ける計画があったことを示す。とくに51-47には建物基礎等に用いられた石種や部材名が多く見える。この他「成瀬正居日記」明治2年(1869)9月の条では、「御亭」「御書斎」「御二階」「御三階」等の建物が記され(第31表51-52)、先に挙げた横山政和の漢詩にも「同好亭」の名称が見える(51-53)。絵図・絵画52-20・21(第107図)には、池に張り出す建物(第135図G)があり、間取や外観から上記の亭(の一つ)と判断される。

「御三階」については、藩政末期の儒学者杏凡山の文章「岳秀楼(樓)記」(『凡山遺集』明治26年刊、第30表51-49)に、前藩主前田斉泰に命じられ、金谷御殿に設けられた高樓の名称を撰した経緯が記されており、「岳秀楼」と雅称されたことが推察される。ただし文字通り、白山を望むことが第一義



第135図 金谷出丸Ⅶ期庭園構成要素等配置図

とみなされているようである。絵図 52-19（第 135 図参照）には、御殿建物の南端二箇所三階建て表現（J・K）があり、ともに庭園はもとより、白山を遠望できた可能性があって、「御三階」「岳秀楼」の候補となるが、絵図の文字記載では「火之見之御間」とあり、より実用に即した役割も窺える。

利用状況

藩の重職であった成瀬正居の日記によると、明治 2 年（1869）7 月 4 日には赤井伝右衛門等とともに、出来した庭園を拝見する機会を得ている。ここでは齊泰に近侍するとみられる「こわ女」という女性を通じ、「今度御普請御庭等之義者彼是御起も仕候_ニ而うつくしう」との齊泰の庭園への思いが記されており、貴重な記録となっている（第 31 表 51-51）。

また同日記には、同年 9 月、版籍奉還後の新体制を担う金沢藩の重職と旧藩時代の家老職の隠居等、新旧の首脳が招かれ、庭園や御殿の一部が披露され、酒食が供されたことも記す（51-52）。前述の横山政和の漢詩にみる通り、同様の招宴は以後にもあった。

廃藩直前の明治 4 年（1871）7 月には、屋敷の主前田齊泰の還暦祝いが催され、「御庭之山之上にて」御囃子（「見聞袋群斗記」51-54）が行われた。現況の築山頂部は比較的広いので、このような催事があったことも首肯できる。

なお、慶応 3 年（1867）11～12 月、14 代藩主前田慶寧は、朝廷の命に応じ軍を率いて上洛したものの、王政復古の号令直後の混乱を避け、直ちに退去し金沢に帰還しているが、父齊泰は金谷御殿の庭園において人払い（縮）を行い、慶寧から仔細を聞いたことが「見聞袋群斗記」にみえる（第 30 表 51-48）。稀な事例であるが、藩主一族にとって、庭園がどのような空間であったのかを考える上で示唆的である。

5. 小結

（1）現存庭園の来歴

現存庭園については、神社創建当初の刷物（第 106 図 52-25）の描写から、遅くともその頃には成立していることが分かるが、金谷御殿期に遡るのかどうか明確でなかった。『石川の古庭園』[石川県教育委員会 1979] では、本庭園を金谷御殿に伴うとするが、拝殿からの眺望を意図したとの記述もあり、神社創建時に成立が下る可能性も考慮されている。また『金沢市史資料編 17』の庭園の章[石原 1998] でも、本庭園の進取性を評価しつつ、神社建設と密接な関係があると推定している。

今回の報告では以下の点から、本庭園は、慶応 2 年～明治 2 年（1866～1869）において、御殿と一体的に改修を受けたもので、藩末期の景観を留めていると判断した。

①「金谷御殿御普請諸事留」の解説により、Ⅶ期（慶応 2 年（1866）～）において、近世前期から継承されてきた地割の一部変更を伴う、大規模な改修があったことが明瞭になった（第 28～30 表）。同史料では、庭園について具体的な記述はほとんどないが、現存庭園の敷地に重複する前代建物（馬見所・南土蔵等）の解体・移転等の記事があり、庭園も大きく変容したことが窺える。

②「見聞袋群斗記」には、慶応 3 年（1867）に、以前は馬場であった「外御庭」に滝が造営されていることが記されている（第 29 表 51-44）。現存する滝は旧外庭に位置しており、史料と合致する。

③『環翠楼詩鈔』に記載されている明治庚午（3 年（1870））作の漢詩は、本庭園の滝と木橋を題材にしており（第 31 表 51-53）、とくに「架壑彫橋現彩霓」の詩句は注目される。前半の、深い谷（壑）に架かる装飾のある橋（彫橋）という表現は、絵図・絵画や現況遺構から復元される、橋の袂に石組を設けて峡谷に擬え、欄干に透かし彫りを施した刳橋が架かっていた状況に、さほど誇張なく合致する。後半の虹（彩霓）については、定型的な表現かも知れないが、橋は色彩豊かであったとみられるので、このことを踏まえている可能性も考えられる。いずれにせよこの漢詩は、明治 3 年の段階（金沢藩末期）で、上記の景観が成立していたことを示唆している。

④Ⅶ期御殿を示す絵図（第105図52-19）では、前述の通り、庭園部分は空白となっているが、南辺の区画線は、Ⅵ期以前より南へ張り出す形であり、これが現況の石垣ラインと類似している（第136図）。石垣は築山の土留めでもあり、築山については「見聞袋群斗記」にもみえる（「御庭之山」、第31表51-54）こと等を踏まえると、現存庭園の骨格は、Ⅶ期に成立したと考えるのが妥当である。

⑤庭園自体を描いた史料として、現在所在不明となっている52-21（第33表）がある。また52-20は、最近になって内容が明らかになった絵図で、52-21と酷似する景観を描いている。ともに作成年次は明らかでないが、神社創建当初（52-25）と比較すると、滝・池・中島・橋等についてはほぼ差異がない一方、後者にみえる茶屋や遙拝所がなく、逆に後者では描かれていない亭とみられる建物や、北側を仕切る塀が表現されている。以上から、これらは神社創建以前、Ⅶ期の金谷御殿（御住居）の庭園景観を描いたものと判断される。なお神社創建時に庭園が修繕されている記録がある（第31表51-55）が、社殿が竣工する1か月前の着手であり、大規模な改修だったとは考え難い。

（2）変遷過程（第137・138図）

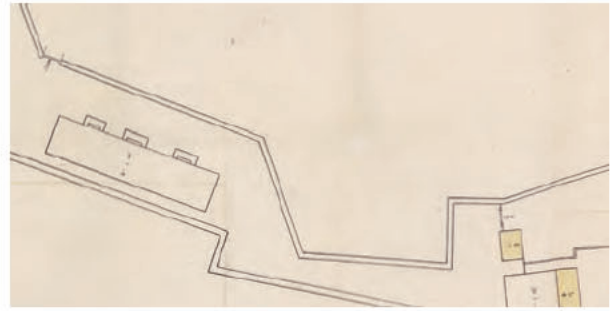
金谷出丸庭園（金谷庭）の変遷過程については、殿舎との関係、庭園敷地の地割という観点から、大別3段階、細別5段階に区分できる。

第1段階（17世紀後半）は、金谷Ⅱ期に該当する。万治期に馬場が設営された後、寛文・延宝頃に書院等を中心とした庭園が成立した。この段階は御殿（殿舎）から相対的に独立した、広義の庭園空間で、別邸・別所的な性格を有した。後述する蓮池庭（第6節）との共通性を重視し、次の段階と区分しておくこととする。

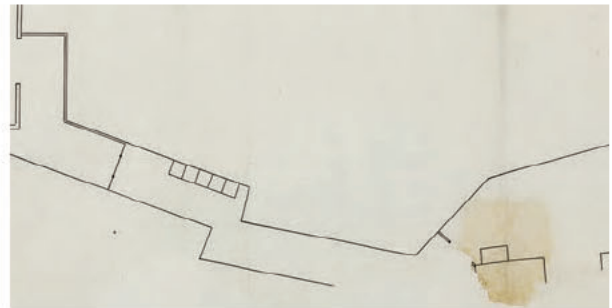
第2段階（17世紀末～18世紀前半）は、金谷Ⅲ期に該当する。元禄元年（1688）になると、藩主子女が居住する本格的な殿舎が整備された。この時、書院は殿舎に取り込まれたようであり、ほどなく亭も失われたとみられ、別邸的性格は減じたと考えられる。しかしⅢ期の絵図では、殿舎敷地が仕切られる一方、馬場・泉水（池・流れ）・文庫土蔵間に区画施設は見られない。隣接地に殿舎が整備された後も、庭園が付属する形にはまだ至っていない。

第3段階（18世紀後半～19世紀中葉）は、金谷Ⅳ～Ⅶ期に該当する。ただし金谷Ⅳ期の状況は推定に拠るところが多く、明確なところはⅤ期以降となる。この段階以後、庭園の主要構成要素である泉水（池）が殿舎敷地と一体的に区画され、内庭となった。

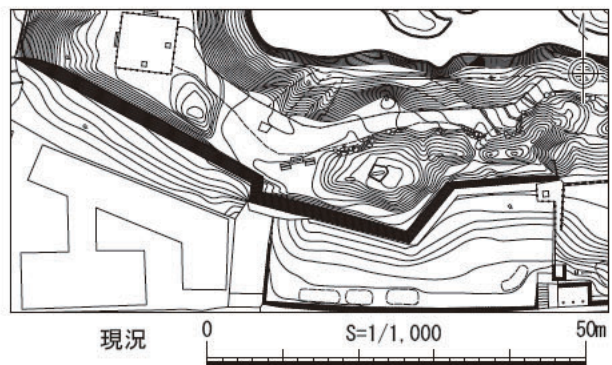
また、馬場・射場が「外庭（「外御庭）」となり、さらに畑（「御畑」「御内畑）」も加え、塀や熨斗立で仕切られた庭園に関連する敷地が3～4区画分成立した。この状況はⅥ期まで存続する（但し畑



Ⅵ 4 期 金谷御殿図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-17



Ⅶ期 金谷御殿図 [金沢市立玉川図書館蔵] 52-19



第136図 金谷出丸庭園南辺区画線の変化

はⅥ4期に外庭と一体化する)。これを**第3-1段階**とする。なおこの段階は、給水の在り方や、泉水(池、流れ等)の位置・形状等により、更に細別も可能である。

金谷Ⅶ期になると、各敷地を仕切っていた区画施設が撤去される。馬場は郭西端に移され、17世紀以来存続していた文庫土蔵群も撤去・移転となり、これに関連して庭園敷地の外郭ラインにも変動が生じた。こうして庭園敷地は一つとなり、大型の池を中心とするかたちに再生された。短期間ではあるが大きな画期であり、これを**第3-2段階**とする。

第1段階は、後の兼六園に繋がる蓮池庭の成立、初期の在り方と類似する。一方第3段階、とくに第3-1段階は、二ノ丸の状況と共通する。第3-2段階については、殿舎に伴う庭である点は前段階と同様であるが、屋敷地全体における庭園の比重が高まったと言える。

第3段階は、殿舎と庭園との関係が強く、殿舎自体もしくは主たる居住者の変化に応じて、庭園の造形も短期間で変容することが特徴である。おおよそ年代の特定が可能な金谷Ⅵ～Ⅶ期では、天保4年(1833)～明治4年(1871)までの39年間で、細別四段階の変化が見られることとなり、一段階は約10年程度となる。庭園の造形は、ここでは継承されることより、むしろ必要に応じ、積極的に更新されている傾向が看取される。

(3) 構成要素の特徴

金谷出丸の各段階では、それぞれ特徴的な庭園が展開したが、とくにⅦ期(3-2段階)には、特異な意匠をもった庭園が成立し、おおよそ現在まで維持されている。その特異性は、池の中島の形状等にみて取れる。いずれも雅楽に関わる楽器(琵琶・笙(鳳笙))や装束(鳥兜)を模っており、中島の意匠といえ、象徴的であっても、鶴島・亀島といった瑞祥物等に限られることが一般的であるのに対し、極めて珍しい事例となっている。

ただし雅楽に関わる意匠自体は、近世末期においては、祭礼の山車の飾り金具や、蒔絵や着物柄など、モチーフとして一般的であった³⁾。成巽閣が所蔵する加賀藩伝来の調度品の中にも、13代藩主前田齊泰の正室溶姫の持ち物で、父である11代将軍徳川家斉より贈られたという楽器尽しの扇が認められる[石川県立歴史博物館1995]。

中島はどれも低平で、とくに笙島(鳳笙島)・鳥兜島は水面から数十cmの高さでしかない。ほぼ同一面にある北岸(御殿側)からは、その特徴的な形状を明確に捉えることは難しい。これらの鑑賞には、ひとつには高所から眺める方法が想定される。南側の築山からも望むことができたと思われるが、鳥兜島の形からすると逆向きで、第一の視点場とは考え難い。北側にあたる御殿には、庭に近い箇所に「御三階」と呼ばれる高樓が設けられていて、中島の平面形状を捉えるのにふさわしい場所だったと推測される。また中島は多くの橋で連絡されており、逍遙による鑑賞が想定されていた筈で、小規模で低平であることから、中島の形をたどるのは容易だったと思われる。

このような庭園造営に際し、当地に隠居した前藩主前田齊泰の強い意向が働いていたことは、文献51-51(第31表)等に示される通りである。齊泰には、煎茶室三華亭の建設[中村1997]等に見られるように、新奇な意匠を好んだ一面もあった。作庭には町人身分の庭師が関与している可能性があるが、実態解明までの課題は多い。また齊泰は幼い子女とともに暮らしており、庭園を主に利用する居住者層の在り方と、庭園の構成要素との関連についても検討の余地がある。

註

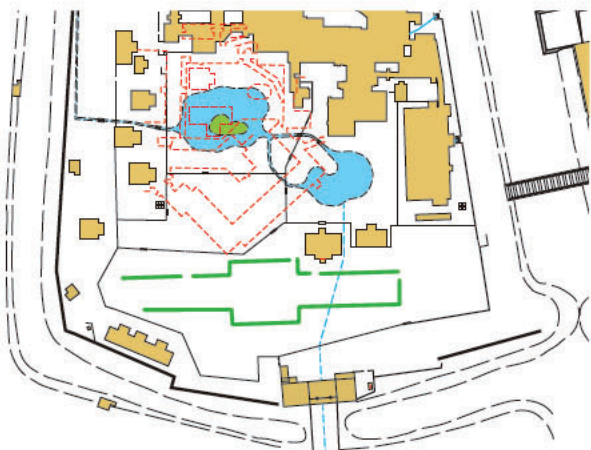
- 1) 平成13年10月、西井龍儀氏・宮本哲郎氏・楠正勝氏・景山和也氏・向井裕知氏・小阪大氏による実測作業が実施されており、計測値等を参考にさせて頂いた。
- 2) [長山・西村2005]によると、金沢市立玉川図書館藤本文庫所収の「加賀藩御能に関する日記及番組」のうち「御能番組」という史料から、弘化4年(1847)に松の御殿で舞台開き祝いがあったことがわかる(P283)。
- 3) 久保智康氏(金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会委員)の御教示による。



第1段階 II期



第3-1段階 V1期



V3期



V4期



VI1期



VI2期

第137図 金谷出丸庭園の変遷1



VI 3 期



VI 4 期



第 3 - 2 段階 VII 期



- *「御城分間御絵図」〔(公財) 前田育徳会蔵〕 52-16 による外郭・土蔵位置等を基準として、各時期の絵図トレース図における庭園・殿舎等の位置・形状細部に修正を加え、合成した(約 1/2,500)。
- *前段階の庭園・殿舎等について細破線(赤)で表示した。
- *V 3 ~ VI 2、VI 4 期の馬場土居は VI 3 期絵図の描写を表示した。
- *VI 1・VI 2・VI 4 期の辰巳用水経路は、VI 3 期絵図の描写を表示した。
- *V 3 期の泉水は、V 4 期絵図の描写を表示した。
- *VI 1 期の泉水は、VI 2 期絵図の描写を表示した。

内容原図

- II 期 「金沢古城図」(金谷屋敷之図)〔石川県立図書館蔵〕 52-01
- V 1 期 「金谷御殿絵図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕 52-06
- V 3 期 「金谷御殿并御広式惣御絵図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕 52-08
- V 4 期 「御城中宅分基絵図」〔横山隆昭氏蔵〕 52-10
- VI 1 期 「金沢御城内外御建物絵図」(金谷御屋敷両御居間廻等 金谷外御庭辺)〔(公財) 前田育徳会蔵〕 52-11
- VI 2 期 「金谷御殿間取図」(貼掛上)〔金沢市立玉川図書館蔵〕 52-12
- VI 3 期 「御城分間御絵図」〔(公財) 前田育徳会蔵〕 52-16
- VI 4 期 「金谷御殿図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕 52-17
- VII 期 「金谷御殿図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕 52-19
- 現況測量図(庭園)
- 「金谷御殿庭園(尾山神社庭園)古絵図」 52-21 (推定亭建物範囲)

第 138 図 金谷出丸庭園の変遷 2